

静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第115集

瀬名川遺跡

平成9・10年度 中吉田瀬名線重点街路整備事業(地方特定)工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

1999

財団法人 静岡県埋蔵文化財調査研究所

静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第115集

瀬名川遺跡

平成9・10年度 中吉田瀬名線重点街路整備事業(地方特定)工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

1999

財団法人 静岡県埋蔵文化財調査研究所

序

瀬名川遺跡は、平成9年度から10年度にかけて、確認調査から現地調査、資料整理・報告書作成まで実施された、静岡市の北東部に位置する、弥生時代および中世を中心とする遺跡である。

中世では、鎌倉幕府の駿路制に伴い、瀬名川に宿駅が置かれたことが文献上に見られる。しかし、これまでに瀬名川宿に関する資料や記録は少なく、瀬名川宿の持つ役割やその位置さえも推定でしかなかった。今回、瀬名川地内でのこの時期に相当する建物跡等の遺構が検出され、呪符木簡などの貴重な遺物が発見されたことは非常に学的に興味深いことであるとともに、宿や中世東海道に繋がる一つの手掛りになるものともみなされ、今後の新たな発見を大いに期待されるところである。

また、弥生時代では、昭和59年から平成3年までの静清バイパスの調査で、瀬名川遺跡に接する川合遺跡や瀬名遺跡・長崎遺跡より、集落跡や方形周溝墓群、および低地に広がる水田跡など非常に大きな成果が得られている。瀬名川遺跡の下層で発見された弥生時代の遺構は、沖積微高地上に築かれた弥生時代中期後半期の集落跡と、集落の廃絶後に広がった水田跡の2面がある。調査範囲の南端部で見つかった集落跡では、二間×四間の柱間を有する大型の掘立柱建物跡と柱穴群などが検出されており、さらに土器・木製品・石製品・金属製品など多量の遺物が出土している。第2遺構面で確認された水田跡は調査区全域に広がる。水田跡では、大畦畔とともに大量の建築廃材を使って打ち込まれた杭列・矢板列が見つかっている。これらは弥生時代の中期後半期から後期にかけて、静清平野北部で大規模な平野部の開発が展開していく様子を示すものとして注目される。

本書では、瀬名川遺跡で発見された、このような成果について報告している。

なお、調査の実施及び報告書の作成・刊行にあたっては、静岡県静岡土木事務所・静岡県教育委員会・静岡市教育委員会の各位、ならびに御多忙の中にも関わらず出土資料の鑑定・教示を頂いた静岡大学名誉教授・伊藤通玄、静岡大学教授・湯之上 隆一氏の多大な援助・協力に深く感謝の意を表すとともに、調査及び資料整理に従事した本所員ならびに作業に参加された多くの方々の労苦に感謝するものである。

1999年3月

財団法人 静岡県埋蔵文化財調査研究所

所長 斎 藤 忠

例 言

1. 本書は静岡県静岡市瀬名川に所在する瀬名川遺跡の発掘調査報告書である。
2. 調査は平成9・10年度中吉田瀬名線重点街路整備事業（地方特定）工事に伴う埋蔵文化財発掘調査業務として、静岡県静岡土木事務所の委託を受け、静岡県教育委員会文化課指導のもとに、財團法人静岡県埋蔵文化財調査研究所が実施した。
3. 現地調査は平成9年4月～5月に確認調査を行い、引き続き同年6月より平成10年5月まで本調査を実施した。資料整理は平成10年6月から9月まで行った。
4. 調査の体制は次のとおりである。

平成9年度

所長 斎藤 忠 副所長 池谷和三 常務理事 三村田昌昭 調査研究部長 石垣英夫
調査研究二課長 佐野五十三
調査研究員 中川律子 鈴木利明（確認調査） 勝又直人（6月～1月） 宮崎 覚（2月～3月）

平成10年度

所長 斎藤 忠 常務理事 伊藤友雄 調査研究部長 石垣英夫
調査研究二課長 羽生生 保
調査研究員 現地調査 中川律子 武田寛生（4月）
資料整理 中川律子

5. 本書は、調査にあたった職員の所見をもとに、調査研究員中川律子が執筆し、編集を行った。遺構の空中写真撮影は、一部、（株）イビソクに委託した。なお、遺物の写真撮影は、楠華堂 内田真紀子（4×5判）、技術職員杉山すず代（6×7判）が行った。

6. 現地での基準点測量は、（株）I Cに委託した。

7. 発掘調査資料はすべて財團法人静岡県埋蔵文化財調査研究所が保管している。

8. 資料整理・本書作成にあたり、出土遺構・資料に関して、次の方々に御教示及び御指導を頂いた。記して厚く御礼申し上げる。（五十音順、敬称略）

伊藤通玄、加藤芳朗、原 茂光、向坂銅二、湯之上 隆

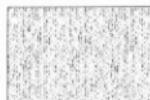
凡 例



漆



炭 化



樹 皮



压 痕

目 次

序文	
例言	
凡例	
はじめに	1
第Ⅰ章 位置と環境	
第1節 地理的環境	2
第2節 歴史的環境	4
第Ⅱ章 調査の概要	
第1節 確認調査の方法	8
第2節 本調査の方法	10
第3節 調査の経過	12
第4節 土層と遺構面について	16
第5節 資料整理の方法	17
第Ⅲ章 中世の遺構・遺物	
第1節 概要	19
第2節 中世の遺構	22
第3節 中世の遺物	32
第Ⅳ章 弥生時代の遺構・遺物	
第1節 概要	46
第2節 弥生時代の遺構	48
第3節 弥生時代の遺物	78
第Ⅴ章 考察	110
写真図版	
報告書抄録	

挿図目次

第1図 遺跡位置図 (1: 25,000)	
第2図 遺跡周辺地形図 (1: 25,000)	
第3図 周辺遺跡分布図	
第4図 確認調査坑配置図	
第5図 年度別調査区配置図	
第6図 調査面・掘削断面模式図	
第7図 グリッド配置図	
第8図 土層柱状図	
第9図 1区中世上面全体図	
第10図 1区中世下面全体図	
第11図 中世据立柱建物 (SH01)	

- 第12図 中世掘立柱建物（SH05）
- 第13図 中世掘立柱建物出土木製品（2:SH01・3～5:SH02・6:SH05）
- 第14図 中世柱穴出土木製品（7:SP51・8:SP42・9:SP33・10:SP96・11-1:SP125・11-2:SP132・12:SP163・13:SP162・14・15:SP60）
- 第15図 中世土坑（SX03・SX04・SX06・SX07・SX08）
- 第16図 中世土坑（SX07）及び出土遺物
- 第17図 中世土坑（SX05・SX09）及び出土遺物
- 第18図 中世土坑出土木製品（57～59:SX05・60～63:SX07・64:SX08・65～71:SX09・72～74:SX06）
- 第19図 中世出土土器
- 第20図 中世出土木製品1
- 第21図 中世出土木製品2
- 第22図 中世出土石製品・金属製品1（鉄鍋？・鉄釘）
- 第23図 中世出土金属製品2（銅鏡）
- 第24図 ⑧層出土木製品
- 第25図 1区Ⅱ層水田全体図
- 第26図 1区Ⅱ層水田・大畦畔（SK01）出土木製品
- 第27図 1区大畦畔（SK02）
- 第28図 1区大畦畔（SK02）出土木製品
- 第29図 2区Ⅱ層水田全体図・大畦畔（SK03）
- 第30図 2区Ⅱ層水田・大畦畔（SK03）出土木製品
- 第31図 3区Ⅱ層水田全体図・大畦畔（SK04・05）
- 第32図 3区大畦畔（SK04・05）出土木製品1
- 第33図 3区大畦畔（SK04・05）出土木製品2
- 第34図 3区大畦畔（SK04・05）出土木製品3
- 第35図 6区Ⅱ層水田全体図・大畦畔（SK06）、Ⅱ層水田出土土器
- 第36図 6区Ⅱ層水田・大畦畔（SK06）出土木製品
- 第37図 Ⅱ層水田全体図
- 第38図 1区VI層集落面全体図・自然流路（SR02）土層断面図
- 第39図 弥生時代掘立柱建物（SH03・04）
- 第40図 弥生時代掘立柱建物（SH03）出土木製品1
- 第41図 弥生時代掘立柱建物（SH03）出土木製品2
- 第42図 1区VI層集落面出土木製品1
- 第43図 1区VI層集落面出土木製品2
- 第44図 弥生時代出土土器1
- 第45図 弥生時代出土土器2
- 第46図 弥生時代出土土器3
- 第47図 弥生時代出土土器4
- 第48図 弥生時代出土土器5
- 第49図 弥生時代出土土器6
- 第50図 弥生時代出土土製品・その他
- 第51図 弥生時代出土木製品

- 第52図 弥生時代出土石製品1
 第53図 弥生時代出土石製品2
 第54図 弥生時代出土石製品3
 第55図 弥生時代出土石製品4
 第56図 弥生時代出土石製品5
 第57図 弥生時代出土石製品6
 第58図 遺跡周辺の表層地割（明治期地籍図）と旧小字名（出典：矢田 勝 1997）
 第59図 中世遺構と旧道（中世）推定ライン

掲表目次

第1表 周辺遺跡地名表	第16表 自然流露（SR）一覧表〔弥生〕
第2表 確認調査工程表	第17表 掘立柱建物跡（SH）一覧表〔弥生〕
第3表 本調査・資料整理作業工程表	第18表 弥生時代出土土器一覧表1
第4表 溝状遺構（SD）一覧表〔中世〕	第19表 弥生時代出土土器一覧表2
第5表 杭列（SA）一覧表〔中世〕	第20表 弥生時代出土土器一覧表3
第6表 掘立柱建物跡（SH）一覧表〔中世〕	第21表 弥生時代出土土器一覧表4
第7表 中世出土土器一覧表1	第22表 弥生時代出土木製品一覧表1
第8表 中世出土土器一覧表2	第23表 弥生時代出土木製品一覧表2
第9表 中世出土木製品一覧表1	第24表 弥生時代出土石製品一覧表
第10表 中世出土木製品一覧表2	第25表 自然遺物一覧表1
第11表 中世出土銅錢一覧表	第26表 自然遺物一覧表2
第12表 大畦畔（SK）一覧表〔弥生〕	第27表 自然遺物一覧表3
第13表 杭列（SA）一覧表〔弥生〕	第28表 自然遺物一覧表4
第14表 溝状遺構（SD）一覧表〔弥生〕	第29表 自然遺物一覧表5
第15表 水田（ST）一覧表〔弥生〕	

図版目次

- 図版 1 遺跡遠景
 図版 2 1 1区中世上面検出状況（北西より）
 2 1区中世下面全景（北西より）
 3 1区掘立柱建物SH01検出状況（東より）
 図版 3 1 1区SP96～98完掘（南より）
 2 1区SP87完掘（西より）
 3 1区SP53礎板出土状況（西より）
 4 1区SP124完掘（東より）
 5 1区SX06内柄杓出土状況（南西より）
 6 1区SX06完掘（西より）
 図版 4 1 1区SX07覆土内呪符木簡出土状況（南より）
 2 1区SX07完掘（南より）
 3 1区SX07遺物出土状況（南より）
 4 1区SX08遺物、礎出土状況（北より）

- 図版 5 1 2区SK03・SD08・小畦畔検出状況（南西より）
2 1区II層水田SK01内ねずみ返し出土状況（北西より）
3 3区大畦畔SK04・05検出状況（南東より）
4 3区II層水田全景（南東より）
5 6区SD13・畦畔検出状況（北東より）
6 6区II層水田全景（南東より）
- 図版 6 1 1区大畦畔SK02検出状況（南西より）
2 1区VI層集落面全景（南東より）
3 1区弥生時代掘立柱建物SH03・04検出状況（南西より）
4 1区木製品（櫛）出土状況（西より）
5 1区装飾品（簪）出土状況（南より）
- 図版 7 中世土器1
- 図版 8 中世土器2・石製品・金属製品
- 図版 9 中世木製品1（SX05・SX09）
- 図版10 中世木製品2
- 図版11 中世木製品3
- 図版12 中世木製品4（SH01・SH02・SH03）
- 図版13 中世木製品5・金属製品2
- 図版14 弥生時代土器1
- 図版15 弥生時代土器2
- 図版16 弥生時代土器3
- 図版17 弥生時代土器4・土製品・金属製品・骨角製品
- 図版18 弥生～古墳時代木製品
- 図版19 弥生時代木製品1
- 図版20 弥生時代木製品2
- 図版21 弥生時代木製品3
- 図版22 弥生時代木製品4
- 図版23 弥生時代木製品5
- 図版24 弥生時代木製品6
- 図版25 弥生時代木製品7
- 図版26 弥生時代石製品1
- 図版27 弥生時代石製品2
- 図版28 弥生時代石製品3
- 図版29 瀬名川遺跡出土木製品顕微鏡写真
- 図版30 瀬名川遺跡出土木製品顕微鏡写真
- 図版31 瀬名川遺跡出土木製品顕微鏡写真
- 図版32 瀬名川遺跡出土木製品顕微鏡写真

はじめに

平成9年の3月、静岡県静岡土木事務所都市計画課より、都市計画街路中吉田瀬名線の工事計画が示された。かねてより、静岡平山・草薙停車場線、通称竜爪街道の瀬名川交差点から国道1号線までの区間が慢性的な交通渋滞を起こしていたことから、その代替線として、国道1号線静清バイパスの瀬名インターから旧国道1号線中吉田の南北を結ぶ幹線道路が計画され、今回の重点街路整備が行われることとなった。

工事計画の策定が公表されたことにより、静岡県教育委員会文化課では工事箇所の埋蔵文化財の有無の照会がなされた。その結果、今回の工事予定地には既に周知となっている遺跡がかかることが確認された。まず北側は瀬名遺跡（註1）の1区南端に近接していること、一方、北街道を挟んで南側は瀬名川遺跡の東端にあたる位置であることがわかった。瀬名遺跡の1区では弥生時代から近世に至るまでの水田面や木棺墓など多くの遺構や遺物が発見された。瀬名川遺跡は、静岡市教育委員会より、以前、静岡市で工事予定地南側の近辺で工事を行った際、地表下約3mほどのところで弥生土器が出土したことがあるとの情報を得ていた。

のことから文化課ではこの予定地内に遺跡の存在する可能性が高いと判断された。しかし事前に確認調査を行い、遺跡の有無を確認する必要があることから、同年3月に静岡土木事務所都市計画課と調査の実施についての協議を行った。協議の結果、平成9年度に文化課の調査指導のもと、財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所が確認調査を実施し、その調査結果をもとに埋蔵文化財の取り扱いについて再度協議を行うことになった。

平成9年度に入り、前年度の経過を受けて、4月10日に静岡土木事務所・文化課・財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所の三者により確認調査の実施に関する事前協議が行われた。協議のなかで、県静岡土木事務所より、現地への立ち入りおよび掘削の許可を得たため、4月14日から5月2日、6月2・3日にかけて道路工事予定地内の確認調査を実施することとなった。

註1 瀬名遺跡の調査は、昭和61年度国道1号線静清バイパス（瀬名地区）埋蔵文化財発掘調査業務として建設省中部地方建設局からの委託を受け、昭和61年度～平成2年度にわたって財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所が調査を実施した。

第Ⅰ章 位置と環境

第1節 地理的環境

静清平野は安倍川下流域に広がる沖積平野である。静岡市街地の西側を流れる安倍川は、安部峰一体に水源を持つ急勾配の東海型河川である。安倍川は上流からの送流作用が強く、下流においては堆積作用が旺盛である。この安倍川が流露変遷を繰り返しながら形成した扇状地は分厚い砂礫層となり、現在の静岡市街地をのせている。

一方、静清平野北東部には、竜爪山脈に水源を持つ長尾川と麻機低湿地を水源とする巴川と、二つの代表的な河川がある。河川は静岡市北東部を南下し、清水市内を東流し折戸湾に注いでいる。長尾川は北側の竜爪山に源を発する巴川の支流で、県の管理下にある二級河川である。麻機丘陵と瀬名丘陵の間を南下し、さらに約1kmほど南下した瀬名川地区で大きく蛇行し巴川と合流している。河床が約1/300の急勾配で、平素はほとんど伏流しているが、上流域が山崩れや地滑りの起きやすい地質であり、これまでにも洪水の度に多量の土砂が流れ出しており、現在では高い堤防を持つ天井川である。その流域は活発な冲積化が進み、現地表面が標高約9~10m前後であるのに対し、弥生時代の集落遺構面は標高約5.1m付近で検出されている。しかし一方で、この地域に居住に適した自然堤防状微高地を形成し、周辺に生産域となる水田に適した後背湿地を生み出している。

周辺の低地部分の地形は、長尾川の押し出した多量の土砂が厚く堆積し、それによって形成された自然堤防帶が各所に発達し、複合的な扇状地地形となっている。遺跡の存在する瀬名川地区を含む静清平野北東部には低湿地が広がり、常に長尾川や巴川といった河川の氾濫の影響を受ける地域でもあった。現地調査でも何本もの旧河道が発見されている。また瀬名川以南の地域では、扇状地の被圧地下水が瀬名自噴帶を形成している地帯である。しかし一方では河川の形成した自然堤防状微高地に弥生時代の集落遺構は立地する。その周辺では水田に適した肥沃な土壌が残る後背湿地が形成されている。

瀬名川遺跡付近は長尾川扇状地の最南端部にあたり、湧き水が豊富で付近の生活用水、灌漑用水として利用されてきた（註1）。昭和40年代前半まで周辺はほとんどが水田であったが、40年代後半に宅地化が進み、現在では水田がほとんど見られなくなった。

瀬名川遺跡はこの静清平野北東部の沖積微高地上に立地する。今回、調査原因となった都市計画街路中吉田瀬名線予定用地は静岡市瀬名川2丁目地内に所在する。静岡市瀬名川は静岡市北東部の清水市と隣接する地域にある。遺跡周辺の景観は、北側に竜爪山（りゅうそうざん）が聳え、北東方向には庵原山系から派生する瀬名丘陵（通称、梶原山）の南端部が張り出している。一方、南東方向には北西侧に緩やかに傾斜する有度丘陵が見られる。また天候に恵まれた日には、北東方向に雄大な富士山をのぞむことができる。遺跡は長尾川の形成した瀬名丘陵端部の細長い扇状地のほぼ末端にあり、旧道（註2）に沿うように南東側へ500mほど続き、さらに南側へと広がる。調査区の南端は中世東海道と言われる道に接する。さらに南下すると長尾川と巴川の合流する地点に至る。遺跡周辺の現在は、宅地化が進み、水田や畑がごく僅かに残っている。調査地は水田として利用されていたところに盛土し、宅地や駐車場用地となっていた。

註1 調査区内にも昭和に作られた掘り抜き井戸跡が2ヶ所検出された。

註2 現在の県道平山草薙停車場線より西側の道路。通称、旧竜爪街道と呼ばれる道路はこの旧長尾川の支脈が形成した自然堤防上を通っている。

第2節 歴史的環境

静清地区では弥生時代中期以来、こうした自然堤防状微高地上に集落や墓域が発見されている。また後背湿地には水田が繰り返し営まれている。静清地区には第3図、第1表に示したように縄文時代以降、数多くの遺跡が分布している。これらのうち、瀬名川遺跡とほぼ同時期の遺跡は、静岡市川合遺跡、瀬名遺跡、有東遺跡、駿府城内遺跡などが挙げられる。

遺跡の周辺では縄文時代にまで遡る遺跡はこれまでのところ確認されていない。

静清地区では弥生時代中期初頭より弥生土器が確認されている。安倍川西岸の丸子セイゾウ山、佐渡遺跡や、有度丘陵西麓の清水天王山遺跡などに代表される丘陵地に存在するものや、低地に存在する遺跡は数少なく、いまだ不明な点が多い。中期後半期になると平野部に遺跡が拡大し、微高地上に集落跡や方形周溝墓群が発見されている。今回の調査地区のすぐ北側は、国道1号線静清バイパス建設工事に伴って発掘調査された瀬名遺跡に近接している。この調査では低地に弥生時代中期から中・近世にいたるまでの水田跡、微高地上には弥生時代中期の方形周溝墓群が検出された。遺物は方形周溝墓の周溝から弥生土器が出土したほか、打製石斧や木製農具などが出土している。繰り返し営まれた水田畔には大量の建築材などの木製品が転用され杭として打ち込まれたり、横木として埋め込まれていた状態で出土している。さらに平安時代の条里型水田の検出とともに、弥生時代中期～近世に至るまでの各期にわたる水田跡が検出され。水田経営の変遷や農耕具などの変化を追うことができる。さらに長尾川を挟んだ西側には、同じく国道1号線静清バイパス建設工事に伴って発掘調査された川合遺跡が存在する。川合遺跡では弥生時代中期後半期～古墳時代の水田跡や集落跡、弥生時代中期の方形周溝墓が発見されている。遺物は集落面に伴って大量の土器が出土した。また大陸系磨製石斧とその未製品、工具も出土している。すでに周知化されている瀬名川遺跡からは弥生時代後期の土器が出土しており（註1）、集落が



第1図 遺跡位置図 (1 : 25,000)

存在する可能性も指摘されていた。

古墳時代では北側の瀬名丘陵尾根上に瀬名古墳群がある。古墳は前方後円墳3基、円墳3基、方墳1基の7基がある。また西側約1.8kmの麻機丘陵の南端上には円墳5基の南沼上古墳群があり、このほか周辺の支丘の南斜面に群衆墳が形成されている。古墳時代の集落跡は川合遺跡、川合遺跡八反田地区で確認されている。

古代では、長尾川の西にある宮下遺跡で平安地代の集落跡が、さらに川合遺跡の西に所在する内荒遺跡からは掘立柱建物群とともに「造大神印」の銅印が出土し、安倍郡の官衙関連施設と考えられる。

中世には旧北街道が中世東海道となり、交通の要所として瀬名川村が宿場駅として発展し、室町時代中期まで継続していたと言われている。瀬名川宿が文献上に登場してくることは非常に少ない。また現在では、瀬名川宿の存在した場所は不明となっている。宿の推定地をめぐっては瀬名川地内に存在すると言う見解が有力視されている（註2）。「瀬名川」「瀬無川」の地名は中世の紀行文などに見られる。瀬名丘陵の南端は「梶原山」と呼ばれ、鎌倉幕府の初期に源頼朝の腹臣梶原景時が京都へ逃れる途中、この辺りで在地の武士團吉香（きっかわ）氏に追い詰められ、この山中で最後をとげたと伝えられる。

戦国時代初期には、瀬名地域一帯は今川範将の所領で、範将の死後、室町幕府の御料所となった。のちに範将の孫、掘越一秀がこの地に住んで瀬名氏を称し、瀬名氏累代相続の地となった。今川氏滅亡の後は、甲斐の武田氏、徳川氏、豊臣氏の家臣中村一氏と領主が交替した。

江戸時代には、東海道が南へ移り、北街道は脇街道となり、文字通り「東海道の北の街道」となった。

昭和初期まで瀬名地区には水田が広がり、集落は街道筋に点在していた（第2図 註3）。しかし現在では街道も整備され、市街地化が進んでいる。

註1 瀬名川地区内の防災倉庫の設置時の地盤調査で、地表面から3mほど下より、弥生土器が出土したとの情報が得られている。

註2 瀬名川宿については静岡大学教授 湯之上 隆氏より御教示いただいた。詳細は第V章に考察としてまとめた。

註3 第2図は大日本帝国陸地測量部による明治21～25年製版の二万分一之尺地形図をもとに作成。

〈引用・参考文献〉

山田成洋他 『川合遺跡（遺構編）』（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所 1990.3.30

木下智章他 『池ヶ谷遺跡II（自然科学編）』（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所 1993.10.30



第2図 遺跡周辺地形図 (1 : 25,000)



第3図 周辺遺跡分布図

第1表 周辺遺跡地名表

番号	遺跡名	時代	遺構・遺物	番号	遺跡名	時代	遺構・遺物
1	廣田遺跡	弥生（中～後）、中世	水田跡、弥生土器、木製品、石器	48	福川遺跡	古代	土耕跡、灰陶器、灰釉陶器
2	マルブコク遺跡	古墳	横穴式石室	49	ケイセイ丸跡	古代	灰陶器
3	時ヶ谷遺跡	縄文（早）、弥生	縄文土器、石器、打製石斧、石器	50	八幡山丁目遺跡	古墳	土耕跡、石材
4	菅原古墳群	古墳（後）	横穴式石室、石槨、埴輪器	51	女子学校遺跡	弥生（後）	稻作、弥生土器
5	梅ヶ谷古墳	古墳（後）	横穴式石室	52	有東遺跡	弥生（中～後）、中世	住居跡、水田跡、方形周溝墓
6	梅ヶ谷遺跡	弥生（後）～近世	水田跡	53	豊ノ辻遺跡	弥生（中～後）、古墳	方形周溝墓、水田跡
7	弓削遺跡	平安	水田跡	54	南川遺跡内古墳群	弥生、古墳	水田跡、土器片、田下墓、矢狀
8	氷ヶ島遺跡	弥生、平安	水田跡	55	磐野遺跡	弥生（後）、古墳	住居跡、高床倉庫跡、弥生土器
9	上土遺跡	弥生、平安、中世	水田跡	56	天神鼻遺跡	古墳	土耕跡
10	長崎鼻遺跡	縄文（中）	縄文土器	57	水洗遺跡	古墳（前）	土耕跡、碇石
11	有原上古墳群	古墳	土葬器	58	沙入遺跡	弥生、古墳、中世	住居跡、高床倉庫跡、弥生土器
12	内荒遺跡	弥生～平安、近世	海立柱埴輪器、水田跡、銅印	59	安富川神明湖遺跡	縄文～中世	住居跡、高床倉庫跡、祭祀遺物
13	月合八反田遺跡	古墳～平安、中世	住居跡、水田跡、木製品	60	轟ノ内人塚跡	縄文（中）	石器、石核、縄文土器、石椎
14	月合遺跡	弥生（中）～近世	住居跡、水田跡、方毛泥漬窯	61	小坂古墳群	古墳	横穴式石室
15	宮下遺跡	縄文～平安、近世	住居跡、水田跡、稻穀土坑群	62	轟ノ内日暮遺跡	弥生	弥生土器
16	轟北遺跡	弥生（中）～近世	水田跡、方形周溝墓	63	轟ノ内人塚跡	弥生	弥生土器、石器
17	東下遺跡	古墳	土葬器、假土器	64	大段I遺跡	印石器	ブレーブ
18	轟名古墳群	古墳	前方後円墳、円墳、木炭標、大刀	65	大段II遺跡	縄文	縄文土器、石鎧
19	石井掘	中世		66	大段III遺跡	縄文（中）	縄文土器、石塊、石鎧、石點
20	轟岡高校付内遺跡	弥生		67	轟岡大学構内古墳群	古墳	横穴式石室、結合堆形石棺
21	西千代田遺跡	弥生（後）	弥生土器、火鉢等、木製品	68	片山遺跡	弥生（後）、古墳、近世	土器、弥生土器、石器、土耕跡
22	轟城内遺跡	弥生（中）～古代	住居跡、塹、弥生土器、土葬器	69	片山魔守跡	古代	全食、講堂、瓦、唐物器、土葬器
23	轟廢墟	中世～近世	石垣、土塁、海沿器、土葬器	70	白山神社（山神）古墳	古墳	横穴式石室
24	谷津山遺跡	古墳（前、中、後）	前方後円墳、横穴式石室、円墳	71	宮川（小段）遺跡	印石器～古代、近世	土坑、円形周溝墓、ナイフ形石器
25	千代田遺跡	弥生（後）	弥生土器	72	宮川古墳群	古墳（後）	横穴式石室、束形、組合堆形石棺
26	井上柴山遺跡	古墳（後）	横穴式石室、火壇、埴輪器	73	轟與守保屋塚跡	古代	麻布、平安、瓦
27	愛宕山城跡	中世	垂輪器、土基、窓、鐵器	74	轟與守佐渡跡	縄文	縄文土器、蓋置器、石器
28	萬吉吉城（長沼城）新	中世		75	井住遺跡	縄文、弥生	住居跡、謝飯石器、純文土器
29	轟田山古墳	古墳（後）		76	井住般古墳群	古墳（後）	横穴式石室、埴輪、須恵器、勾玉
30	轟木庭遺跡	古代	平瓦	77	上ノ山古墳群	古墳（後）	高床倉庫、周壁基、住居跡
31	舌ノ口坪遺跡	弥生	弥生土器	78	上ノ山古墳群	古墳（後）	横穴式石室、須恵器、大刀、勾玉
32	轟高ノ山遺跡	弥生		79	轟大谷古墳群	古墳（後）	横穴式石室
33	轟屋根山遺跡	弥生		80	轟大谷遺跡、古墳群	縄文（前）、古墳（末）	縄文土器、黒縞文フレイク、横穴式石室
34	轟田丸山古墳	古墳（後）		81	さそりく段古墳	古墳（後）	大刀、須恵器
35	不覺令寺遺跡	縄文	縄文土器、打製石斧、石器	82	石原佐古墳群	古墳（後）	須恵器
36	轟北遺跡	弥生（中）～古代	水田跡、古代墓道跡	83	片山古跡	古墳（後）	須恵器
37	轟金日遺跡	古墳、古代	住居跡、井戸跡、土器群、須恵器	84	伊佐谷横穴群（北谷）	古墳（後）	須恵器、土葬器、金環、大刀
38	轟金八遺跡	弥生、古墳	弥生土器、土葬器	85	伊佐谷横穴群（東谷）	古墳（後）	九玉、铁錐、須恵器、土葬器、骨
39	小浜形山古墳群	平安	井戸跡、水田跡	86	大蛇製罐廠南遺跡	弥生	弥生土器、土葬器
40	小堀形山組合堆形石室遺跡	平安～中世	水田跡	87	移田古墳群	古墳	横穴式石室、石棺、井戸、須恵器
41	三箇工場内遺跡	古墳、古代	土葬器、須恵器	88	宮ノ段遺跡	縄文	縄文土器
42	豊田遺跡	弥生、古墳	住居跡、溝、弥生土器、土葬器	89	上中林遺跡	縄文	縄文土器、石器
43	小馬遺跡	弥生（末）、古墳（初）	住居跡、高床倉庫跡、弥生土器	90	轟諭寺前遺跡	弥生（後）	弥生土器
44	八幡山古墳群	古墳（後）	横穴式石室	91	寺ノ内保遺跡	弥生、古墳、中世	住居跡、溝、獨立柱、弥生土器
45	八幡山城跡	中世	垂輪器、窓、土基、豈段、窓跡	92	五輪平遺跡	縄文	縄文土器、打製石斧、石器
46	有明塙跡	弥生（後）	弥生土器	93	轟田山古墳群	古墳	横穴式石室、馬具
47	東脛跡	中世	豈段、土基、土塙	94	門也坪古墳	古墳	横穴式石室、大刀、鉢、玉類

第Ⅱ章 調査の概要

第1節 確認調査の方法

前章の第1節でも述べたとおり、道路工事予定地は北側を瀬名遺跡と接し、南側を周知の瀬名川遺跡に含まれていたことから、埋蔵文化財の確認調査は、この範囲にあたる約10,000m²を対象に実施することとなった。掘削は北側に隣接する瀬名遺跡の調査結果報告書より、現地表面から約4～5mの深度で掘削する必要があると想定された。そのため、今回は現在の北街道より北側の地区には10m×10mの調査坑を5ヵ所、北街道を挟んで南側の地区には6m×6mの調査坑を4ヵ所と、さらに中世東海道に沿った最南端には合計70mのトレンチを設定した。調査坑は北からNo1、No2、No3、No4-1、No4-2、No5、No6、No7、No8とした（第4図）。以下、確認調査の経過とともに概要をまとめた。

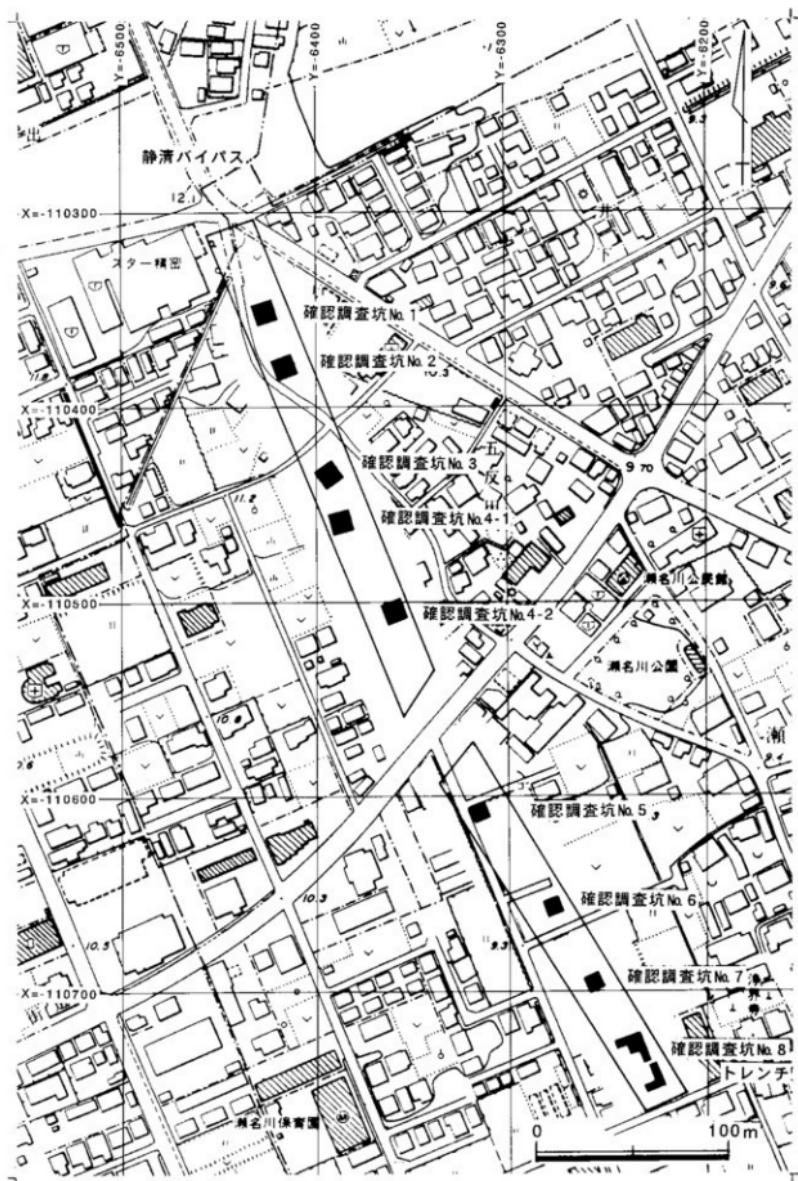
北側地区の調査坑No 1から調査坑No 3では、標高10mから7.5m付近まではすべて旧長尾川の支脈と思われる礫層が厚く堆積していた。調査坑No 4-1では、標高7m付近の粘土層で攪拌されたような痕跡が確認されたが遺構及び遺物は発見されなかった。しかし、追加調査したNo 4-2では腐植土層下の標高6.8m付近より二列の杭列を伴う畦畔が確認された。杭列や畦畔の規模から大畦畔である可能性が高いと思われた。また黄灰色粘土層中より弥生土器の小片も出土した。

一方、南側地区では、調査坑No 6の南壁面で、標高5.8m付近から畦畔の横木と思われる木製品が出土した。取り上げ作業中に杭列も見つかったことから畦畔に伴う杭列の可能性がある。同一面の東壁側にはごく緩やかな高まりがあり、大畦畔である可能性も考えられた。調査坑No 7では、標高5.6m付近の暗灰色粘土層上面に小畦畔と思われる高まりが確認できた。

中世東海道に沿った最南端地点では、旧街道筋に近接しているため中世の遺構が検出される可能性が高いと想定されることから、トレンチによる確認調査を行った。トレンチはおよそ東西南北方向に沿

第2表 確認調査工程表

月	4月					5月				6月
	1週	2週	3週	4週	5週・1週	2週	3週	4週	5週	1週
確認調査準備工										
No1		—								
No2		—								
No3		—								
No4-1			—							
No7			—							
No6			—							
トレンチ				—	—					
No8				—	—					
堆積工					—					
本調査準備工									—	
No4-2										—
No5										—



第4図 確認調査坑配置図

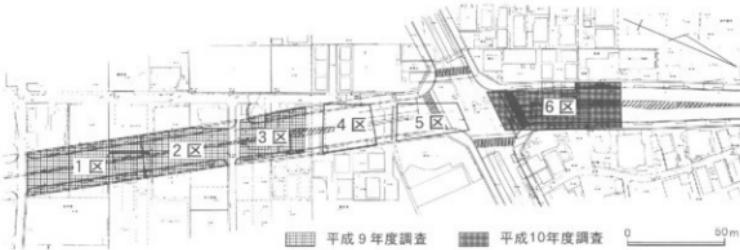
ってコの字形に設定し、深さ1.5～2.0mほど掘削した。トレーニング北半部では淡黄褐色粘土層より陶磁器の小片が数点出土したのみであったが、南半部では横木を伴う杭列を検出した。さらに、淡黄褐色粘土層の下面まで下げるところ、トレーニングの南西隅に炭化物混じりの薄い層があり、東側には茶褐色砂層が広がっていた。炭化物混じり暗灰色粘土層の広がりは南半部のごく一部に限られており、北半部では炭化物は粘土層中にわずかに散在しているような状況でほとんど確認できなかった。炭化物混じり粘土層の上面では直径30cmほどの円形曲物底板と、これに張り付くように古銭（元豊通宝他）が3枚出土した。またすぐ西側には柱根と思われる直径10～12cmの丸木や糸巻具の一部と思われる木製品も出土している。南東隅ではやはり柱根と思われる丸木が灰色の砂層に及ぶ深さまで打ち込まれていた。

調査坑No.8は先に掘削したトレーニングの北隅のコーナー部分を使って、さらに標高4m付近まで掘り下げる。標高5.5m付近の黄褐色粘土層の精査を開始してまもなく、黄褐色粘土層中より大陸系磨製石斧の未製品が出土した。また同層からは土器片も数十点見つかった。さらに黄褐色粘土層下面から2本の杭と種子数点、弥生土器片が集中して出土した。さらに下層では、東壁断面に柱穴と思われるピットが2カ所確認された。擾土には上層の黄褐色粘土が落ち込んでいることから、集落構造面である可能性が高いと考えられた。

確認調査の成果をもとに協議した結果、北側地区のNo.1～No.4-1については本調査対応から除外し、No.4-2については杭列を伴う畦畔と水田面の調査を実施することとなった。南側地区については、上層のトレーニング調査で出土した遺物は生活用具が多いという状況や炭化物混じり粘土層の広がり方から、南側寄りに中世の集落跡が存在する可能性が高いと考えられた。下層では、麻植土層の下面に杭列を伴う畦畔と水田面が全面に広がると考えられた。さらに調査坑No.8の標高5.1m付近で出土した土器片は弥生時代中期後半期の壺や甕の破片であった。また同じく包含層より出土した石斧未製品は、弥生時代中期後半期に盛行する偏平片刃石斧の未製品である。このことから黄褐色粘土層は弥生時代中期以降の遺物包含層と考えられる。さらにその包含層下面には柱穴と思われる遺構も検出されたことから弥生時代の集落跡が存在する可能性が高い。弥生時代には中期末に集落が存在し、集落が廃絶したあと湿地化し水田となり、横木を伴う杭列畦畔がつくられたことも考えられる。以上の点から、No.4-2～No.8の区間で、合計3面が本調査対応となった。

第2節 本調査の方法

確認調査の結果を受け、本調査はNo.4-2～No.8およびトレーニング調査の範囲を行うこととなった。調査区は用地内の公道を境として6区画に分割し、南から1区、2区、3区・・・6区とした（第5図）。1区から3区までの調査は確認調査後の平成9年度6月から翌年2月まで、6区については平成10年度の4～5月に実施



第5図 年度別調査区配図



第6図 調査面・掘削断面模式図

した。なお、4区と5区については協議を重ねた結果、まとまった調査面積を確保できず、掘削不可能なため、今回の調査対象からは除外することとした。

調査にあたっては、位置関係を明確にするため10m×10mの正方形グリッドを設定している。グリッドは国土方眼の座標を用い、南西隅を起点として南北からA・B・C…のアルファベット、西から東に1・2・3…の数字を付した。遺跡は南北方向へも広がる可能性を考慮して、グリッド方眼は静清バイパスから長尾川までの区間がすべて網羅されるよう広域に設定した。A0の座標値は、X=111000、Y=6500である(第7図)。これらのグリッド及びレベル基準杭の設定は、測量業者に委託した。

調査対象地は公道や進入路によって分割されており、調査区の周囲は4m幅道路であったため、建設重機の搬入路が確保できるかが問題となつた。また、排土は場外へ搬出せず用地内に仮り置きし、調査終了後はこの土で埋め戻すことになつた。重機による掘削と排土運搬を効率良く行うため、南側の調査区から掘削を始めていく方法を選択した。掘削の技術的方法については、調査はオープンカット工法で行うこととし、約45度の法面角度をつけて掘削した。掘削深度が3mを超えることから安全のため法面の途中に小段を設けた(第6図)。低湿地で地下水位が高いため、多量の湧き水や降雨による冠水・水没の危険性も考えられることから、調査区内に集水樹を設けて水中ポンプによる24時間強制排水を行つた。調査区の周辺は住宅地化が進み、近隣に保育園や小学校の通学路もあったことから、各区をフェンスバリケードで囲い作業区域の安全に努めた。また、掘削した法面は水を含んだ砂層や水の湧き出している場所もあったため、法面の崩れやすい部分には土嚢袋を積み上げ、その上からブルーシートで覆い養生した。表土及び中間層の除去は重機で行い、その後はベルトコンベアで土を排出しながら人力で包含層を掘り下げ、遺構の精査を行つた。

調査では調査区ごとに基本土層を計測した。土層堆積は地点によって違いがあり、各調査区に共通したものではない。調査時に検出した遺構や遺物をもとに検討し、同一と思われる堆積層を実線でつなげた(第8図)。

検出した遺構の登録は各調査区ごとに完結する形をとり、遺構の種類別に分類した上で、検出順に通し番号を付けて登録した。本書では現地調査において登録した遺構番号をそのまま使用することを原則とした。出土した遺物はグリッドごとに層位・遺構別に取り上げた。遺物は土器・土製品・木製品・石製品・金属製品・自然遺物等に分けて台帳に登録している。登録番号は各調査区ごとに完結している。

記録図、いわゆる遺構平面図・土層断面図、及び遺物出土状況図は1:20縮尺で作成した。遺物出土状況図は必要に応じて1:2、1:10縮尺の実測図も作成した。本遺跡では遺構実測と遺物の取り上げ等、

測量全般にトータルステーション（光波距離計）を使用した。

写真は6×7判・35mmモノクロ、35mmカラー・カラーリバーサルの組合せで記録した。全景写真についてはローリングタワーから斜方向の写真撮影を行ったほか、一部、ラジコンヘリによる空中写真撮影も業者に委託して行った。調査の成果については第Ⅲ章から第Ⅳ章にかけて報告する。

第3節 調査の経過

瀬名川遺跡の発掘調査は、平成9年度の4月から6月上旬にかけて確認調査を行い、平成9年度に1区・2区・3区、平成10年度の4・5月に6区の本調査を実施した。ここでは調査の経過をまとめておく。

1 平成9年度の調査

〈確認調査〉

4月2日～14日 準備工。発掘器材搬入。調査地点の縄張り。テント設営。

4月15日 調査坑No1、No2 重機による掘削、調査、埋め戻し。

4月16日 調査坑No3 重機による掘削、調査、埋め戻し。調査坑No4-1の掘削一部開始。周囲にガードフェンス設置。

4月17日 調査坑No4-1 重機による掘削、調査、埋め戻し。

4月21日 調査坑No7 重機による掘削、調査、埋め戻し。トレーンチ設定予定地へガードフェンス設置。

4月23日 調査坑No6 重機による掘削、調査、埋め戻し。

4月24日～30日 トレーンチ 重機による掘削、調査。

5月1日 調査坑No8 重機による掘削、調査、埋め戻し。

5月2日 撤去工。器材・テント片付け。

5月6日～30日 出土遺物整理。確認調査報告書の作成。本調査準備。

6月2日 調査坑No4-2 重機による掘削、調査、埋め戻し。

6月3日 調査坑No5 重機による掘削、調査、埋め戻し。

〈1区〉

6月4日～13日 準備工。発掘器材搬入。ガードフェンス設置。

6月16日～19日 重機による表土除去、排水溝掘削、集水樹、ガードフェンス設置。

6月24日～26日 重機による表土除去、排水溝掘削。

6月30日～7月4日 重機による表土除去終了（1日）。淡黄褐色粘土層掘り下げ。概略図作成。

7月7日～11日 排水溝土層断面観察。確認調査時のトレーンチ掘削。室内整理作業。

第3表 本調査・資料整理作業工程表

年度	作業内容	...作業												...重機			
		6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月
	準備工	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---
9	1区	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---
	2区	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---
	3区	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---
	資料整理	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---
10	6区	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---
	撤去工	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---
	資料整理	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---

7月14日～18日 遺構検出作業。基準杭設置。グリッド配置図・平面図作成。

7月22日～25日 遺構検出作業。土層断面図作成。

25日に静岡県教育委員会・研究所共催の埋蔵文化財発掘体験教室を開催した。

7月28日～8月1日 淡黄褐色粘土層～暗灰色粘土層精査。砂利層面を検出したため砂利を残しながら精査を行う。土坑・柱穴等検出、写真撮影、計測作業。

この間、7月29日～8月7日まで、静岡県教育委員会文化課主催の養成講座が開かれ、教職員3名が発掘調査の方法について実務研修を行った。

8月4日～12日 砂利層面精査。写真撮影後、平面図計測と地形測量作業を行う。

8月18日～22日 砂利層面解体。暗灰色粘土層精査・掘り下げ。

8月25日～29日 青灰色シルト層上面検出、柱穴完掘作業。遺構全景写真撮影。

9月1日～5日 遺構個別写真撮影。杭列断ち割り・横断面計測。遺物取り上げ作業。遺構面解体。重機による中間層除去開始（3日から）・排土運搬。南側集水井設置。

9月10日～19日 重機による中間層除去。排水溝掘削。グリッド杭打設。

9月22日～26日 グリッドラインにトレーナー設定・掘削。室内整理作業。北側集水井設置。

9月29日～10月3日 調査区周囲養生。1区南半分、重機による埋め戻し（1～3日）。

10月6日～9日 腐植土掘り下げ。第2遺構面検出作業。東壁土層断面分層・計測。自然流路（SR01）完掘・計測・写真撮影。

10月13日～17日 第2遺構面検出作業。空中写真撮影（14日）。平面図作成・地形測量。遺構面解体。

10月20日～24日 包含層掘削。杭列（SK02）解体、出土状況写真撮影、平面図作成、遺物取り上げ作業。第3遺構面検出作業。

10月27日～31日 第3遺構面検出作業。ピット検出・掘削。遺構平面図作成。遺構個別写真撮影。

11月4日～7日 第3遺構面精査。ピット検出・掘削。出土遺物取り上げ。

11月10日～14日 遺構全景写真撮影。掘立柱建物跡柱穴断面断ち落とし・断面計測。柱根取り上げ、柱穴完掘。遺構面解体。

11月18日～20日 重機による排土運搬、1区埋め戻し。

〈2区〉

11月21日～28日 重機による表土除去・排土運搬。北側集水井設置。

12月1日～5日 重機による表土除去・排土運搬。

12月9日～12日 重機による表土除去・排土運搬（9日まで）。基準点測量。排水溝掘削。南側集水井設置。グリッドラインにトレーナー設定・掘削。

12月15日～19日 第2遺構面検出作業。空中写真撮影（16日）。遺構面平面計測。

12月22日～26日 東壁土層断面分層・計測。木製品出土状況計測・取り上げ。遺構面解体。土壤サンプル採取。重機による排土運搬（25日から）。

1月5日～14日 重機による排土運搬、2区埋め戻し。

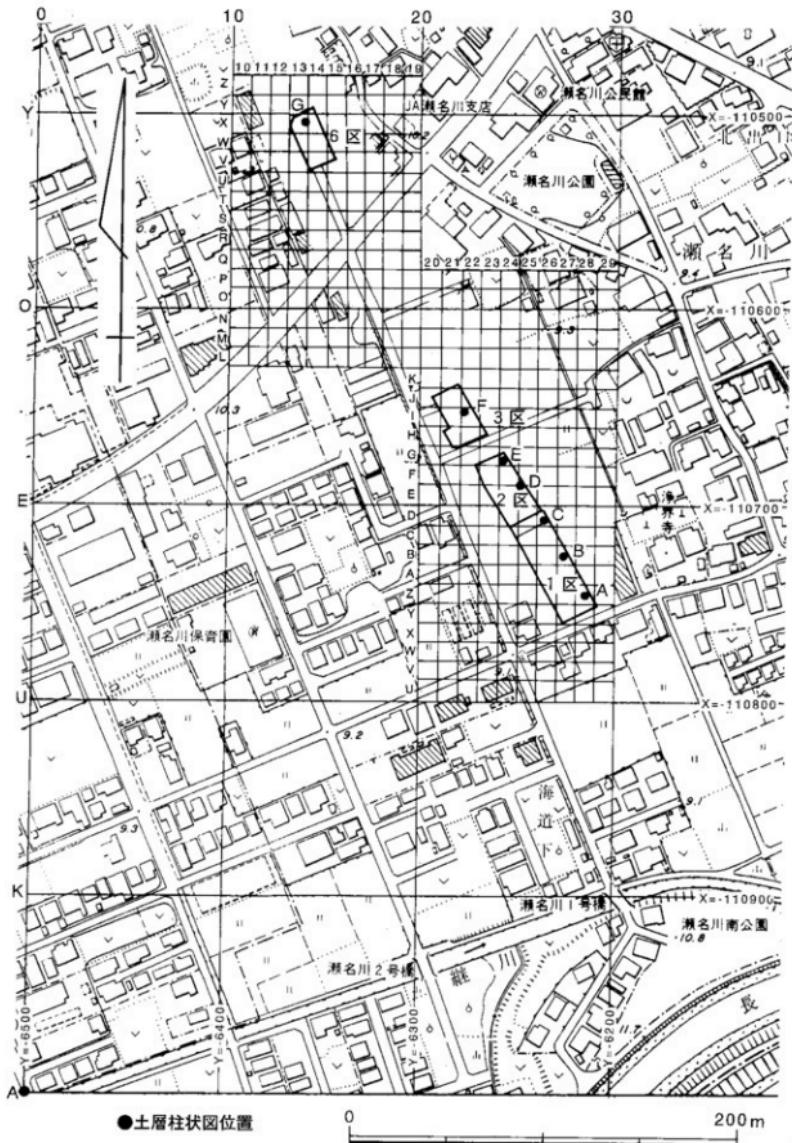
〈3区〉

1月16日～23日 重機による表土除去・排土運搬。

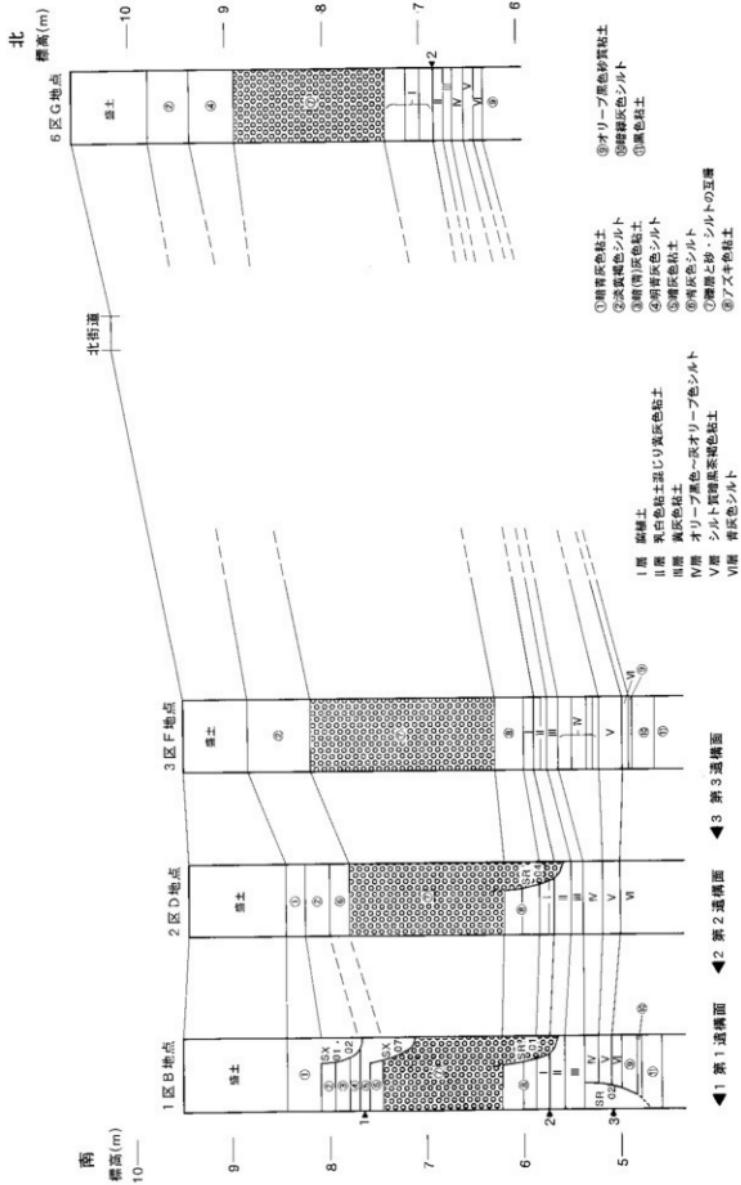
1月26日～30日 重機による表土除去・排土運搬。北側集水井設置（28日まで）。基準点測量。排水溝掘削。グリッドラインにトレーナー設定・掘削。

2月2日～6日 第2遺構面検出作業。大畦畔と溝状遺構を検出す。溝状遺構は土層観察後、完掘。遺構全景写真撮影（6日）。

2月9日～13日 第2遺構面平面計測。大畦畔解体作業・断面計測。木製品出土状況計測。遺構面解体。



第7図 グリッド配置図



第8図 土層柱状図

2月16日～18日 東壁土層断面分層・計測。出土木製品取り上げ作業。土壤サンプル採取。

2月19日 重機による拡張部掘削。

2月23日～26日 遺構面検出作業。遺構全景写真撮影。

3月2日～6日 遺構面平面計測。大畦畔解体作業・断面計測。木製品出土状況計測。遺構面解体。

3月9日～13日 重機による排土運搬、3区埋め戻し。

3月16日～18日 調査終了区間、重機による整地。

3月19日～31日 室内整理作業。

2 平成10年度の調査

(6区)

4月6日～10日 準備工。調査区周囲にガードフェンス設置。

4月13日～24日 重機による表土除去・排土運搬。室内整理作業。

4月27日～5月1日 重機による表土除去・排土運搬（28日まで）。排水溝掘削、集水樹設置。

5月6日～8日 基準点測量、グリッドラインにトレーナーを設定し掘削。土層断面観察。腐植土掘り下げ。

5月11日～15日 第2遺構面検出作業。小畦畔・溝状遺構を検出。土層観察と状況写真撮影後、完掘。

5月18日～22日 遺構全景写真撮影。

5月25日～29日 土壤サンプル採取。撤去工。

第4節 土層と遺構面について

本調査は各調査区単位に確認調査で得た基本土層に従って上層から順次分層発掘を行った。1区では3面、2～6区では1面の遺構面を検出した。本調査の結果得られた各調査区における基本土層と、遺構検出面の関係は第8図に示すとおりである。確認した遺構面は上面から順に第1遺構面・第2遺構面…と呼称し、そのまま本書でも使用した。各遺構面の年代観は、第1遺構面は鎌倉時代後期～室町時代前期、第2遺構面は弥生時代中期後半～後期、第3遺構面は弥生時代中期後半期である。このうち複数の調査区にわたって遺構の広がりを確認できるのは第2遺構面のみである。

基本土層は各区によって多少異なるもののほぼ同じような堆積状況がみられた。瀬名川地内は昭和40年代までは水田や畑地が多く見られたが、近年急速に宅地化が進み、現在は調査範囲周辺も宅地や駐車場になっている。今回の調査地点も碎石が厚さ1.0mほど盛土されていた。盛土下の粘土層は近・現代の水田であったと思われる。各区で共通している⑦層は長尾川の洪水堆積と思われる礫層と砂・シルトの互層で、各区とも1m以上厚く堆積している。2区では第2遺構面の一部がこの礫層によって削られている（第IV章第25図）。⑧層は粘質度が高い粘土層である。⑧層の下面是次のⅠ層とともにやや乱れている。Ⅰ層は植物依存体を多量に含む腐植土層である。Ⅰ層は各区に共通して見られ、同一遺構面を決定する時のキー層となる。そのため腐植土層以下、弥生時代に相当する土層名をⅠ層・Ⅱ層・Ⅲ層…とした。本書中の層位名もこれにならっている。

第1遺構面は1区南半部の⑤層で検出された。遺構は南西寄りに集中し北半部では検出されなかった。

第2遺構面は腐植土層を除去したⅡ層上面で確認された。南端の1区と北端の6区までは約250mほどの距離があるが、第2遺構面は北から南までは約1.2mの比高差がある。Ⅲ～Ⅳ層間では、1区で大畦畔（SK02）が検出された。しかし杭列と畦畔の盛土は確認したものと遺構面として捉えることはできなかった。

第3遺構面は1区のⅥ層上面で検出した。弥生時代中期後半期の土器や石器は大半がこのⅥ層を被覆するⅤ層より出土している。弥生時代の遺物を包含するのはⅥ層までであり、以下の⑨～⑪層は無遺物層

である。また各層とも乱れた痕跡はなくほぼ水平堆積をしていることから、遺構の存在する可能性は低いと思われる。

各遺構面の概要は各章の冒頭で解説する。

第5節 資料整理の方法

瀬名川遺跡の資料整理は、平成9年度に一部現地調査と並行して実施し、本調査終了後、平成10年度の6月から9月まで整理作業を行った。ここでは資料整理の概要をまとめておく。

1 平成9年度の資料整理

平成9年度は現地調査と並行して一部の資料整理を進めた。遺構については、全体図とともに等高線図や各遺構の断面図を作成した。集落面については建物の配列などの検討を行い、水田面については各水田の面積の計測を行った。各遺構面の全体図と遺構引き出し図は版下図を作成した。

遺物については、遺物番号の登録から洗浄・注記までの基礎整理を中心に進めた。土器・土製品は現地で洗浄・注記をした後、接合作業を行い、引き続いて実測・拓本まで行った。石製品も同様に基礎整理を進め、砥石・敲打石の実測を現地の室内整理作業で行った。木製品は洗浄後、乾燥を避けるためにシールパックを行い、調査区分に器種ごとに分けて仮収納し、その収納台帳を作成した。実測は曲物・漆塗など小型のものから進め、中世の木器の実測は現地でほぼ終了した。金属製品はエタノールで簡単なクリーニングをした後、拓本・実測を行った。種子などの自然遺物は計測後、10%のアルコール溶液に入れ、その後徐々に濃度を変えながら60%アルコール溶液まで置換した。

2 平成10年度の資料整理

4月・5月は引き続き現地調査と並行して作業を進めた結果、土器・土製品、金属製品、骨角製品、及び石製品と木製品の一部までの図化作業を終了した。

5月末に現地調査が終わり、6月より本格的に資料整理と報告書の作成を開始した。まず遺構については遺跡地図やグリッド配置図の作成と土層柱状図、及び遺構引き出し図の土層注記を進めた。遺構写真図版は巻末に掲載した。

遺物は残る石製品と木製品の図化を優先的に進めた。石製品は一部の実測図・トレースの作成を業者へ委託した。木製品は弥生時代の木器実測から始め、7月末までに約150点の図化を完了した。原図は基本的に原寸大で作成しているが、一部70cmを超える大型木製遺物は1/2縮尺の原図を作成した。

原則として、図化した遺物はすべてカード化している。遺物カードに記載されたデータはパソコンでカード式ソフトへ入力し、当研究所の情報処理で作成した遺物のデータベースに組み込まれ、必要に応じていつでも検索が出来るようになっている。

遺物の写真是4×5判サイズで撮影した。4×5判の遺物写真撮影は楠華堂に委託した。土器以外は集合写真を多用している。また補足的に6×7判も使用している。

木製遺物については、本書に掲載した木器の標本プレラートを作成して樹種同定を行っている。樹種同定は当研究所の主任調査研究員 西尾太加二が行った。樹種同定の結果と標本プレラート番号は遺物観察表に掲載し、巻末に標本の顕微鏡写真図版がある（註1）。金属製品については記録後、脱塩処理等を行っている。金属製品の処理は当研究所の調査研究員 青木 修が行った。その他、柄杓やかんざし等の脆弱遺物は、一部先行して保存処理まで行った。木製品と金属製品については最終的にすべて当研究所で保存処理まで行っている。

報告書の作成にあたっては、遺構挿図図版は各区分全体図が1/200縮尺、掘立柱建物の引き出し図が1/50縮尺、個別引き出し図を1/40縮尺で掲載した。遺物挿図図版は土器1/3縮尺（土製品は1/2）、石製品

1/2縮尺、木製品1/4又は1/8縮尺、金属製品は1/2縮尺（銅錢は1/1）を基本としている。一部大型木製品については1/10縮尺で掲載した。法量は基本的に最大値を計測し、一覧表に掲載している。挿図に使用した漆、炭化、樹皮、圧痕・装着痕などの表記はスクリーントーンを使用した。凡例を参照されたい。なお、挿図図版番号は通し番号で、文中で使用する番号や写真図版番号及び一覧表と連動している。

註1 標本プレバラートの作成と標本の顕微鏡写真、及びその写真図版の作成については、当研究所の主任調査研究員 西尾太加二と技術職員 森田直美、整理作業員 伊藤純子があたった。作成された標本プレバラートと顕微鏡写真は（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所の保存処理で保管している。

第Ⅲ章 中世の遺構・遺物

第1節 概要

平成10年度4月の確認調査当初の結果では、南北方向のトレーニング杭列、東西トレーニングの西寄りでは炭化物層が見つかり、青磁器をはじめとする土器片、銅錢、曲物・糸巻き具などの生活用具や、建物の柱根と思われる痕跡が出土したことから、中世の遺構面が存在する可能性が期待された。同年6月末から開始された本調査の結果、1区の⑤層中で中世の集落跡を検出した（第1遺構面）。

第1遺構面は上面と下面とに分けている。調査では、はじめに中世上面を検出した（第9図）。この面では確認調査で見つかった杭列と、その西側の範囲より礫面が検出された。礫は一部密に集中している箇所（集石1～3）があったが、全体的にはまばらに散在している状態であった。礫の大きさは径1～3cm前後である。礫面は杭列よりも東側の南東部分でも検出されたが、多くは杭列以西に片寄っていた。礫面の間には炭化物の集中している箇所や、柱穴と見られるビットも十数ヶ所見つかっている。また調査区の南東、杭列のすぐ東側には細かい砂が入った極く浅い溝が検出された。記録作業後、この礫をはずしたところ、礫下より柱穴群が検出された（第10図 中世下面）。杭列は最終的に二列見つかり、柱穴群はZ列以南に集中していた。その他溝状遺構や土坑も新たに見つかった。やはり炭化物が集中した箇所が多く見られた。

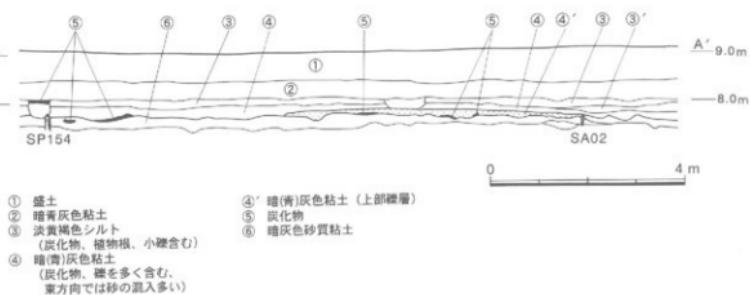
調査の結果、遺構の検出された範囲は1区の南東側に片寄っており、北はB列以北、西はSA01・02以東はほとんど遺構が検出されなかった。遺構の種類は、最終的に掘立柱建物跡が3棟、溝状遺構（SD01～07）、杭列、土坑7基が確認された。同遺構面にはその他にも建物の柱穴と思われるビットが約140ヶ所あった。各遺構別の詳細は次節で紹介する。

遺構の配列は、東側で検出された杭列SA01・02の方向に概ね沿っている。杭列の方向は南東方向から北西方向へ向かって伸びて行き、土坑SX07・08辺りからは杭もまばらになり、SX09の横辺りで途切れるような状態である。3棟の掘立柱建物跡や溝状遺構は杭列とほぼ同じ方向か又は直交している。杭列は居住区を区切るための施設と考えると、これらの遺構はさらに南～南西方向に続くものと思われる。

第1遺構面に伴って出土した遺物は、土器・木製品・石製品・金属製品、その他種子等の自然遺物もある。遺物は礫中や包含層、及び柱穴や土坑より出土した。土器は陶磁器や青磁器、灰釉陶器・山茶碗、かわらけなど、約400点が出土している。ほとんどが包含層より出土した小片で、図化した土器は全体の約11%、全面復原できたものは図版7に掲載した12点のみである。木製品は約4,666点ある。このうち今回掲載したものは102点である。中世面で出土した木製品は農具・容器・食事具・装飾具・祭祀具・建築土木材など身の回りにある生活用具の出土が多かった。なかでも食事具に含まれる箸状木製品は約4000点を超え、全体の8.7割を占める。通常の集落跡にしては突出した出土量である。またそのほとんどが土坑SX05・09に集中している点が注目される。今回はその一部を第17図に掲載している。石製品は硯石・玉など5点である。金属製品は鉄製品と銅製品が58点出土している。鉄製品は鉄鍋・鉄釘のほか、鉄滓も18点ある。銅製品は銅錢が35枚出土した。石製品・鉄製品はまとめて第22図へ、銅製品は拓影図を第23図に掲載した。種子等の自然遺物は190点ほどある。種子は大半がモモと思われるが、クルミ・マツ・ドングリも少數含まれている。自然遺物については巻末に一覧表を掲載した（第25～29表）。中世の遺物については、遺構から出土したものは第2節、包含層より出土したものは第3節にまとめた。



第9図 1区中世上面全体図



第10図 1区中世下面全体図

第2節 中世の遺構

1 挖立柱建物

中世遺構面では掘立柱建物跡3棟を検出した。

A SH01（第11図）

掘立柱建物跡SH01は中世下面で検出した。建物跡の中では一番北側に位置し、これより北側に建物の柱穴などの痕跡は見られない。建物の規模は3間×2間の総柱の建物だが、調査区のさらに西側へ続く可能性もあることから、さらに大型であることも考えられる。柱間は2mを超える。柱穴はSP84・127の位置が若干ずれるものの、ほぼ合っている。礎板を伴う柱穴と礎石を伴う柱穴、及び礎板・礎石を伴わない柱穴が混在している。必ずしも統一されているわけではないようである。礎石は自然の河原石に見られるような扁平な円礎が使われている。他の柱穴と近接した位置で切り合っていることから、建て替えが行われた可能性もある。

本遺構に伴う遺物は第13・14図に掲載した。2はSP69底部より出土した礎板である。10はヘラ状木製品。柱穴SP69覆土中より出土した。柄と思われる上部は欠損している。下端部には櫛皮の痕跡があることから、曲物の底板を使ってつくられた転用品である可能性がある。SP96と切り合っているSP97からは、片口鉢（106）と山茶碗の小皿（79）が出土している。14・15は柱穴SP60より出土した。14は柱穴の底部より出土した礎板で下端部には切断痕がある。15は柱穴覆土内より出土した楔と思われる木製品である。

B SH02（第10図）

掘立柱建物跡SH02は1区の南西隅、西側の排水溝内で検出した。そのため柱穴の掘りかたは検出できず、桁行き方向のみで建物の規模も不明。3～5の柱根のみ出土した。いずれも柱根上部は風化して劣化している。下端部の刃物による切断痕は顕著に残っている。すぐ東側で検出した溝はSH02に平行していることから、これに伴うものと考えられる。

C SH05（第12図）

掘立柱建物跡SH05は1区の南側中央、掘立柱建物跡SH01のすぐ南側で検出した。復元図は2間×2間だが、やはりこれ以上の建物になる可能性もある。柱間は2mを超える。SP27・53は礎板を伴う。SP53は礎板が十字形に二枚重ねて敷かれていた（図版3-3）。6-2は木表が上、6-1は木裏が上であった。SP124は柱を礎で支え裏込めされていたと思われる柱穴である。SP54・120にも握り拳大の礎が数点出土している。

SP27・53より出土した礎板は接合関係にある（6-1～3）。厚さが約10cmほどのスギの板目材が三等分に切断されている。切断時の手斧痕が各断面に見られる。側面に切り込み痕が残っていることから、建築廃材からの転用である可能性もある。

D その他の柱穴

同遺構面では、これ以外にも建物の柱穴と思われるビットが約140ヶ所見つかっている。これらの柱穴は前節でも述べた通り、調査区の南西方向（杭列以西）に集中している。柱穴のなかには、礎板や礎石を伴うものや、柱根が残存しているもの、礎の詰まっているものなど、様々なタイプのビットがある。礎板を伴う柱穴では底部にかなり厚みのある板材を敷いている。礎石は扁平な円礎が多い。柱根の残存している柱穴は数少ない。掘りかたのなかに残る柱の跡から、柱の直径は約10cm強程度であったであろう。礎の詰まっている柱穴は、もともと柱の位置を固定するために礎を周囲に入れて支え、裏込めされ

たか、あるいは礎石として使われていたものと考えられる。SP58には柱の周囲に拳大の礎を並べてある。柱は引き抜かれたと見られ樹皮のみが残存している。SP55は礎石の上に礎板が敷かれている。

今回、掘立柱建物跡は3棟としたが、実際にはこれだけの柱穴が見つかっていることから、もう数棟あるものと思われる。もしくは存続した期間に何度も建て替わられている可能性がある。

以下、柱穴より出土した遺物について紹介する。第14図に出土した木製品をまとめた。7はSP51底部より出土した漆椀の小皿である。小皿はほぼ完形で底を上にした状態で見つかった。小皿の直径は9.4cm、無高台で、クリ材が使われている。黒漆は厚く塗られているが、回転轆轤削りの痕跡は顕著に残っている。8・9はスギ材の礎板。8はSP42の掘りかた付近より出土した。表面には柱根が当たっていたと思われる圧痕があり炭化している。炭化の範囲は径9~10cm前後である。裏面には成形時の加工痕がある。9はSP33底面より出土した。表面は上部寄りに溝が切り込まれ無数の刃物痕がある。下端部は鋸状の工具で切断されたような痕跡がある。SP33にはこの他にも9より上部覆土から潰れた状態の薄い板状の木片があった。

11~13はマツ材の柱根。いずれも樹皮の残っていない芯持ち材である。11-1はSP125、11-2はSP132と別々の柱穴から出土したものだが、資料整理段階で合わせたところ、丸太の切断時に折り取った部分で接合した。どちらも上下を斧で切断されており、刃物痕が顕著に残っている。出土状況は両方とも柱穴の底部に横たわっていた状態であった。遺物同士は接合したが柱穴との位置関係では、それぞれの距離が離れており同一建物跡である関連は薄いと思われる。12と13は柱根のみ出土したもので、ピットの掘りかたは確認できなかったが、12はSP163、13はSP162とそれぞれに柱穴番号を付けている。12の下端部は斧によって二方向から切断されている。13も同様に切断痕があり、さらに樹幹部分に1ヶ所大きく切り込まれた痕がある。

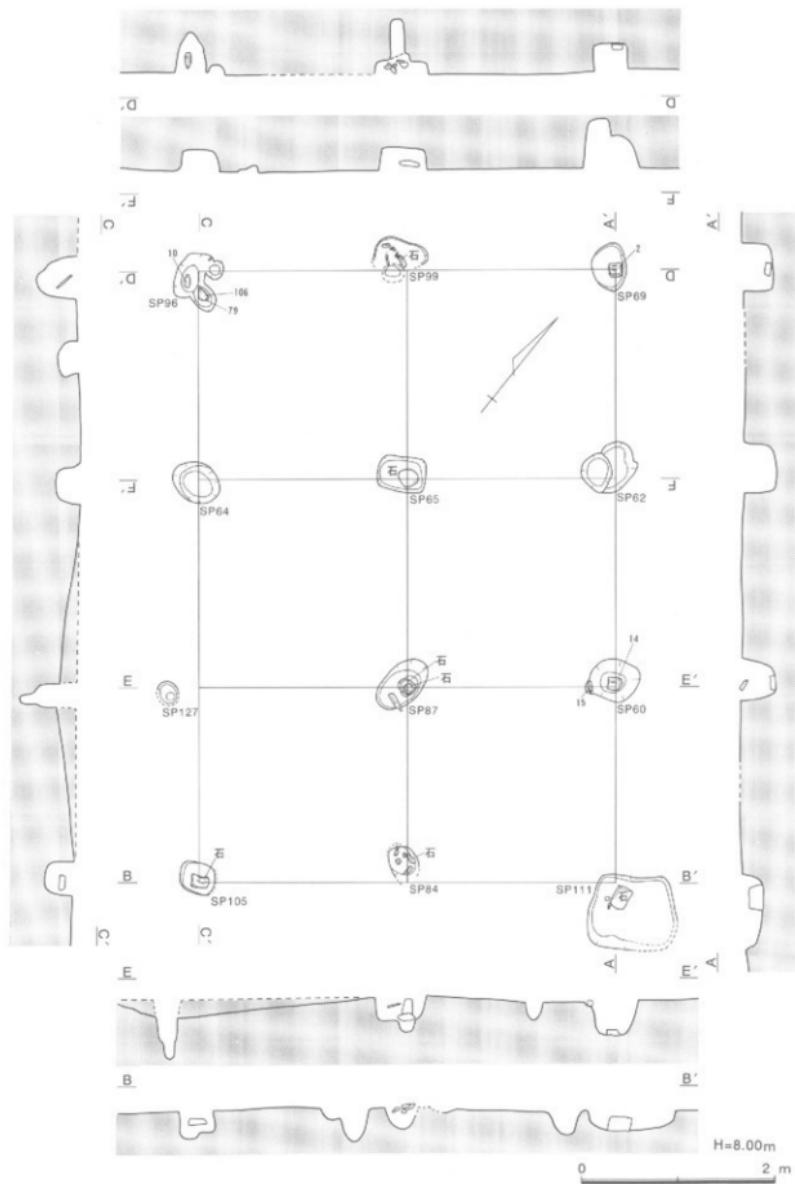
2 土坑状遺構

第4表 溝状遺構（SD）一覧表〔中世〕

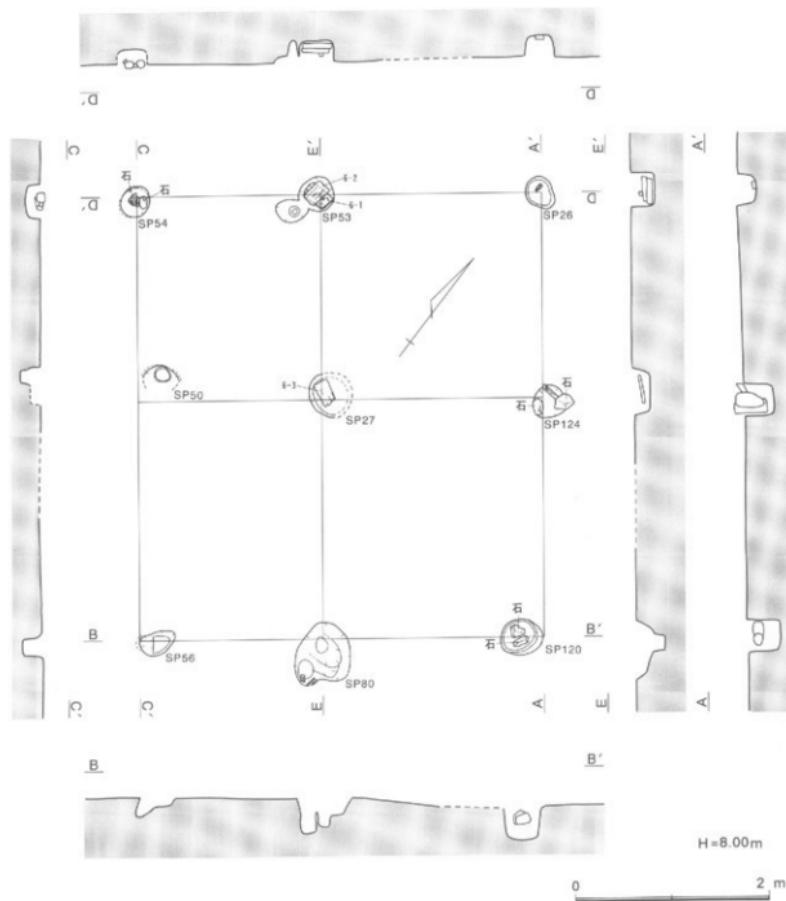
遺構番号	調査区	検出層位	グリッド	検出長（m）	検出幅（m）	深さ（cm）	方向	遺物	備考
SD01	1区	中世上面	Y28N Z27S Z28S	(7.85) 6.45	40~75 15~43	4~8	N43° W		北端でSD02に結合
SD02	1区	中世上面	Y28N Z27S Z28S	(8.70) 7.15	32~95 10~50	5~12	N39° W		北端でSD01に結合
SD03	1区	中世上面	Y28N	1.90	23~50 8~20	3~4	N36° W		
SD04	1区	中世下面	Y27S	1.65	30~45 15~28	3~5	N51° E (N309° W)		西端でSD05に結合
SD05	1区	中世下面	Y27N S	3.55	50~145 25~100	3~8	N44° W		南北部は市街になる
SD06	1区	中世下面	Y27S	3.10	60~95 8~25	8~13	N37° W		
SD07	1区	中世下面	Z27S Y27N	6.60	140~200 40~140	5~13	N51° E (N309° W)		東側に延びていることを確認 SD→SX?

第5表 杭列（SA）一覧表〔中世〕

遺構番号	調査区	検出面	グリッド	検出長(m)	検出幅(m)	方向	杭本数	杭密度(本/m)	杭の種類	桿木等	出土遺物	備考
SA01	1区	中世下面	A26 Z27	16.00		N50° W	91	5.69	針・直面 広葉樹が多い	なし		
SA02	1区	中世下面	Y28 Z28 Z27 A27 A26	29.30		N46° W 北端(A26)で はN53° W	97	3.81	針・直面 広葉樹が多い 横板のある部分は 針葉樹が多い	Y28, Z 27, A27" ラット で横板		



第11図 中世掘立柱建物 (SH01)



第12図 中世掘立柱建物 (SH05)

第6表 掘立柱建物跡 (SH) 一覧表 [中世]

遺構名	調査区	Y (m)	検出面	寸 厘		主軸方位	被出面 標高(m)	遺 物	備 考
				間×奥	折行(m)				
SH01	1区	Z26 Z27 Y27N	中板下面	3×2 梅円	6.45 2.15	4.30 2.15	N 39° W 7.75	SP160(櫛板14), (図)150-SP162-SP164- SP165(櫛木製品)W 15% SP166(櫛板)Z SP167(柱脚)Z SP87-SP96(両端 不明木製品)10, 柱W 12%, SP99(用漆 不明木製品)143, 錫瓶 W 130, 自然 漆物N-94; SP105(土器)P 231, 自然漆 物N 88.9%; SP111-SP127	柱列(SA01・02), 檻 SD05・06)とは逆方 向
SH02	1区	Y27S	中板下面	2以上×一 梅円	3.90 1.95	—	N 33° W —	SP150(柱脚)4; SP153(柱脚)3-SP154 (柱脚)	SD06は区画塗か? トレンチ内で柱脚のみ検出
SH05	1区	Y27N	中板下面	2×2	4.56 2.28	4.16 2.08	N 38° W 7.72	SP177(櫛板)6-3; SF153(櫛板)6-1, 6-2	

中世の遺構面に伴う土坑状遺構は7基検出した。いずれも遺構の性格は特定できない。

A SX03

西側を排水溝に切られ、約1/2ほど残存している。非常に浅く、断面はレンズ状の形状である。底面が赤色化しており、土坑が燃焼を受けた可能性がある。炭化物は見られず、遺物も出土していない。

B SX04

袋状を呈する土坑。SP111と切り合っている。覆土は柔らかく粘質度が高い。底部近くで径が約15cmほどの円碟が出土している。円碟には特に加工痕などは見られない。

C SX05・09

調査区の北西隅で検出された、SX05は溝状、SX09は土坑状の遺構である。SX05は1区の西側排水溝に沿って東肩のみ検出した。幅は排水溝の中に掛かっていることから、それ程広い溝ではなかったと思われる。覆土は砂を多く含み、極く浅いレンズ状の断面を呈する。SX05からは箸状木製品（23～32）や曲物底板・漆椀（57～59）、箸状木製品、用途不明木片、陶磁器片、銅鏡1点などの遺物が出土している。箸状木製品は57本出土した（23～32）。

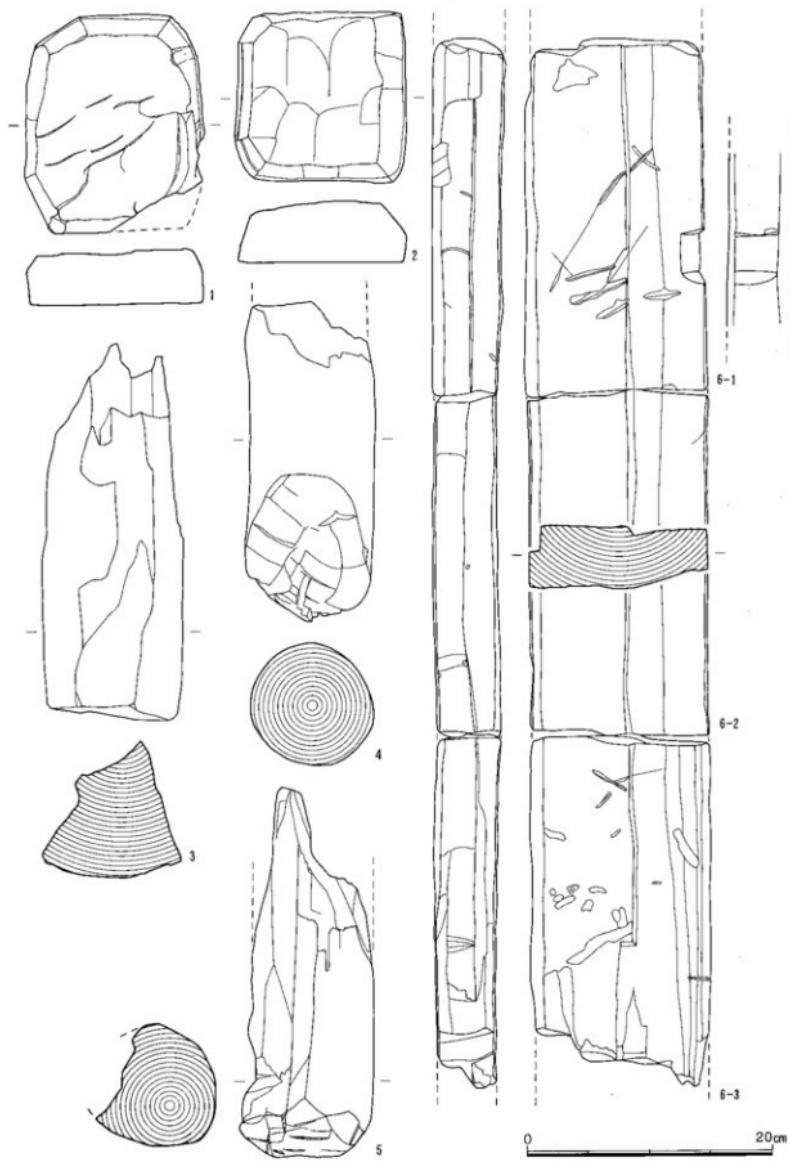
SX05のすぐ北側で検出したSX09は広範囲に一段低くなっている。さらに一部楕円形の土坑状に窪んでいる部分があり、下層の青灰色シルト層まで掘り込まれている。覆土は砂を多く含む粘質度の高いシルト層で、腐蝕物を多量に含んでいる。調査区の西縁に掛かっているため全形は検出されていない。このSX09では夥しい量の箸状木製品が出土した。総数は4,071本（註1）を数える。箸状木製品は多量の木の葉などの腐蝕物と折り重なるように堆積していた。SX09より出土した箸状木製品には強く挟まれたような圧痕が必ず付いているのが特徴である。しかしながらこのような圧痕が付いているのかは不明である。SX09からは箸状木製品のほかに、漆椀の小片・木簡状木製品・横櫛・部材・ヘラ状木製品・用途不明木製品（65～71）、陶磁器片・かわらけ（22）、銅鏡（182・183）、鉄釘（149）、種子などが出土している。65は木簡状木製品。下端にいくほど細くなる板状。墨痕は見られない（註2）。横櫛はイスノキで作られている。約1/2ほど良好に残存している。欠損面には櫛目を刻んだ時の痕跡がある。69は桙型田下駄の部材と思われる。67・68・70・71は用途不明木製品。いずれもスギ材。67は穿孔が2ヶ所あり上端部が摩滅している。68はヘラ状木製品。一部使用痕らしき摩滅はあるが使い込まれた様子はない。70は先端を尖らせた板状製品。剣形のようにも見える。71は上部が欠損している。頭部は方形にづくり出されており、軸も方形を呈し面取りされている。

調査時にはSX05が切り合うと考えたが、SX05とSX09は繋がっていたとも考えられる。またSX05・SX09は、遺構の形状から井戸または池のような性格も考えられたが、箸状木製品が廃棄されたような状態で大量に出土していることからも、排水溝と集水施設のような用途で使われた可能性もある。

D SX06

SX06は掘立柱建物SH01と杭列SA01・02の間で検出した不定形の土坑である。断面形も不定形ではつきりしない。SX06からは板状木製品や用途不明木製品・柄杓（72～74）や木片、陶磁器片、鉄滓など出土している。また30cm大の礫や拳大の礫も数点伴っている。これらの遺物は覆土の上部で出土している。72は薄い板状木製品。表面には数十カ所刃物がある。2ヶ所に棒皮の綴じ痕があることから曲物と思われる。73は用途不明木製品。上部に1ヶ所貫通していない穿孔がある。断面形は楕円形を呈す。削ったところに何か装着して使用するものか。金属工具の柄であろうか。74は曲物柄杓。出土時は口側が下に向き压し潰れた状態であった。実測図は保存処理後に計測したものである。曲物部分は棒皮綴じ部分が1ヶ所残存。側板は二重になっていたと思われる。内面にはケビキ痕も見られる。柄には側板と接する部分に圧痕がある。

E SX07



第13図 中世掘立柱建物出土木製品 (2:SH01・3~5:SH02・6:SH05)

遺構群の北端、柱穴群とは5~6mほど離れたところで検出された（第16図）。SX08と切り合っている。平面形は直径1.7mの円形の遺構で、断面は彫り鉢状を呈し、深さは1.0mほどある。このSX07からは、碗・小皿など6点のかわらけ（16~21）やかわらけの小片、呪符木簡・漆椀・曲物・横槌・部材・箸状木製品（60~63）ほか、用途の特定できない木片、種子などが出土している。

かわらけは碗が2点、小皿が4点、小片が数点出土している。すべて轆轤成形で、底部はいずれも回転糸切り痕がある。底部には乾燥時に置かれた台の痕跡と見られる段差がある。極めて粗雑なつくりであり丁寧に作られたものではないことを伺わせる。碗は口径約12cmほど、小皿は口径約7.4~7.7cmである。かわらけの色調は黄灰色~灰色で、通常のにぶい黄橙色のかわらけとは異なった色調であるのが特徴として見られる。17は意図的に口縁部だけ打ち欠かれたような状態である。

呪符木簡（60）は薄い板状の完形品で、下方に向かってやや幅が狭くなる形状を呈する（註3）。上部左角が削り落とされている。下端部は裏面側から利器で切断されている。また両面には成形時の削り痕が残っている。墨痕はところどころ薄くなっているが、肉眼でも観察できる。表裏両面に符籜が読みとれる。表面は中央の墨痕を中心に「鬼」が四文字いずれも中央を天にして異なる方向で書かれ、そのすぐ下にも一文字墨痕がある。裏面の符籜もほぼ同じスタイルで文字が配されていたと思われるが、「鬼」の下に二文字観察できる。中央の墨痕は梵字のように見えるが、解読はできない。漆椀（61）は残存状態が極めて悪い。62は横槌と思われる形状の木製品だが、敲打部には樹皮が残っており使用した痕跡もないことから実用品である可能性は低い。63は棒型田下駄の部材と思われる。覆土上部より出土した。

SX07は当初素掘りの井戸と思われたが、多量に遺物を含むことや、出土した遺物が祭祀的な意味を持つものであることなどから用途の断定は避けた。出土した呪符木簡をはじめ、かわらけ、使われた形跡のない横槌など、日常的に使われた道具ではないことが遺構の性格を裏付けるものとなるであろう。

F SX08

SX08はSX07上部に切り合っている。楕円形のごく浅い窪み状になっている部分に躰や木片が多く溜まっており、それに混じって木製品も出土している。64は直径17cmほどになる曲物底板。その他箸状木製品も出土している。

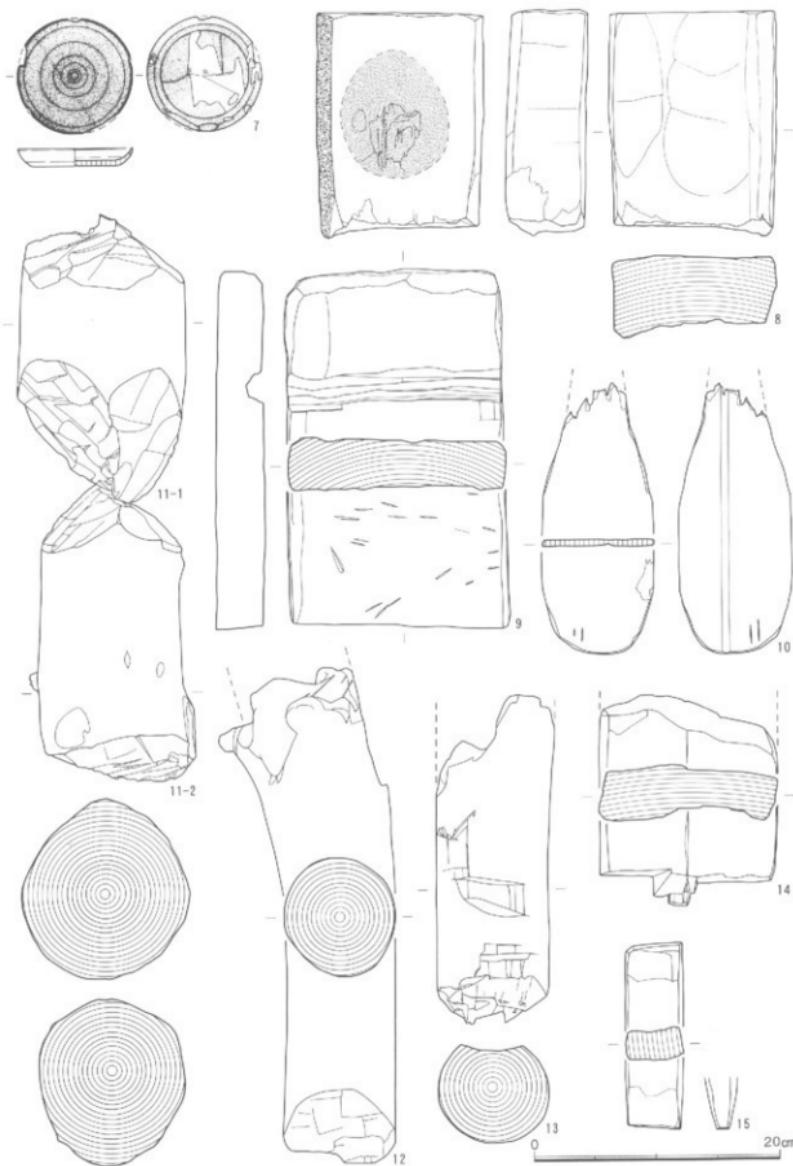
3 溝状遺構

溝状遺構は上面・下面でSD01~SD07までを検出した。いずれも深さ3~12cmとごく浅いもので、断面形はレンズ状である。覆土は細かい砂で、一部の溝には炭化物が固まって出土していた（第4表）。SD01~03は上面で検出した。溝内からは礫のほか、拳大よりもやや小さな礫や灰釉陶器片などが出土している。下面で検出したSD04~SD07も浅い溝である。SD04はSD05と直交しているが東端は途中で途切れている。SD05は北側までは続いていないが南方向には続くと思われる。SD06はSD05とほぼ平行している。また西側の排水溝内で検出した掘立柱建物跡SH02とも同一方向である。炭化物が溝の底部分から縁全体に貼り付くように固まっていた。SD07も掘立柱建物跡SH01・SH03の梁行に平行した方向である。不定形で幅も広く、建物の際まで及んでいる。

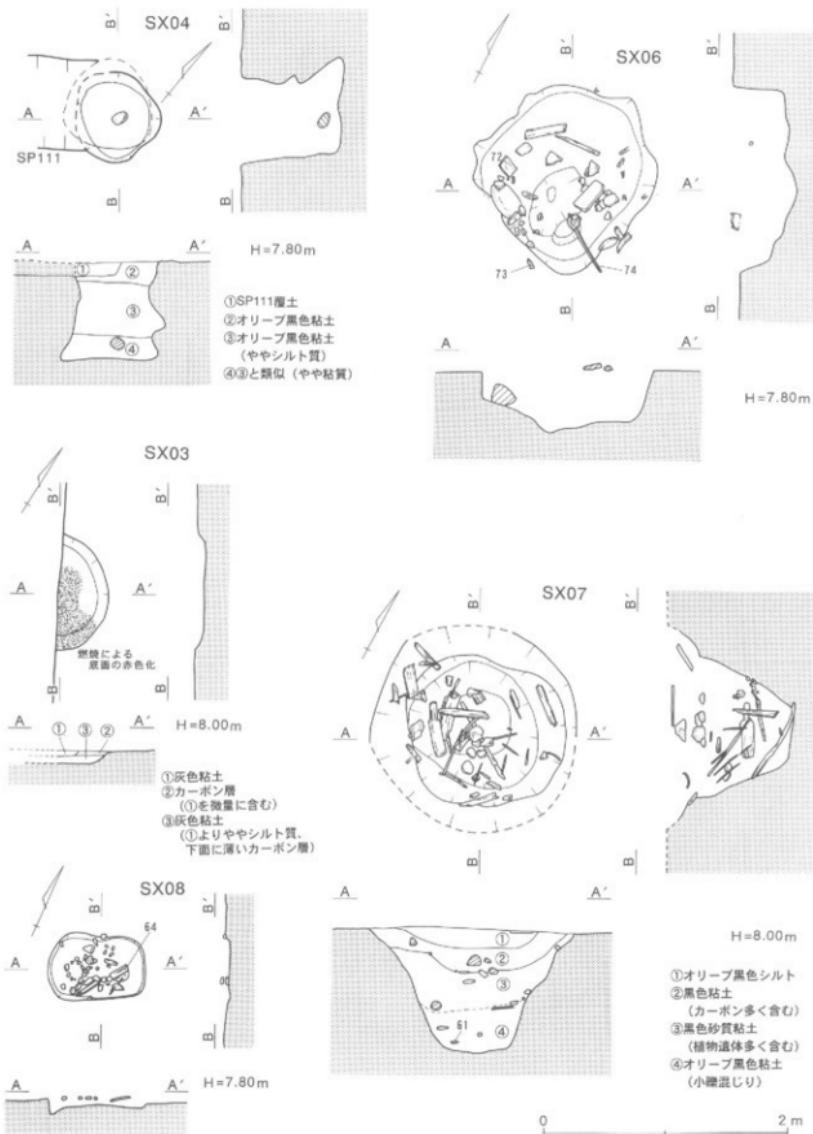
溝状遺構は掘立柱建物跡にほぼ平行していたことから、当初、建物の間を区画する溝と思われたが、精査の結果、人為的に掘削されたような痕跡ではなく、また場所によっては不定形で規格性を持たない。建物からやや離れたところに平行してあることから、長期間に建物の屋根から繰り返し落ちた雨などでできた雨落ち溝と考えられる。また溝内に固まっていた炭化物は火災に合った建物の灰や炭を窪みに掃き始めたものと思われる。

4 杭列

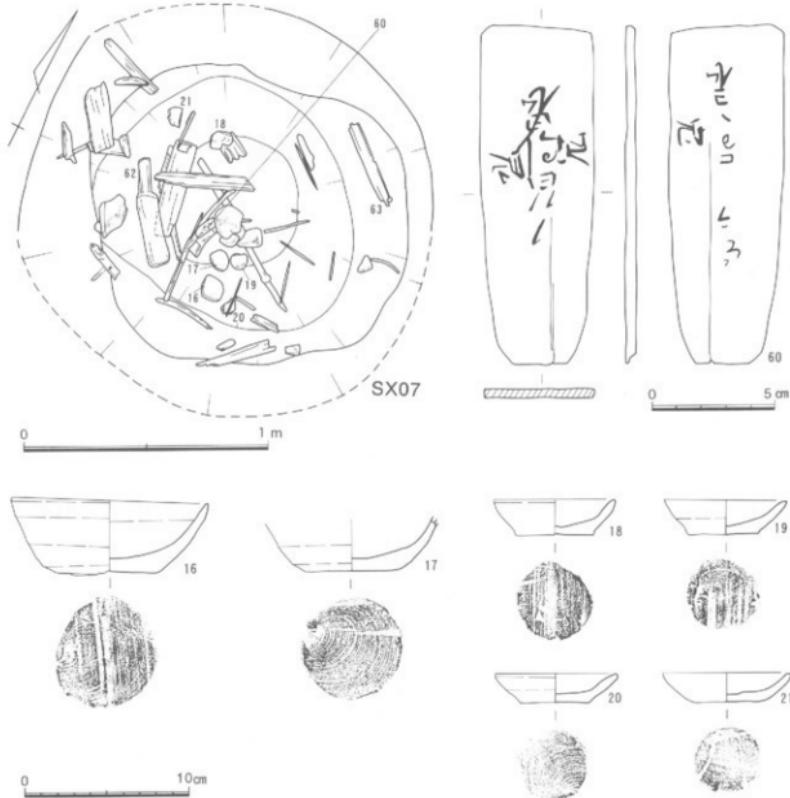
杭列はSA01・SA02が検出された。両者とも北西から南東方向へとほぼ同じ方向に打ち込まれている。杭に使われている樹種は針葉樹の割り材や広葉樹の芯持ち材であるが特に規則性は見られない。大きく



第14図 中世柱穴出土木製品 (7:SP51・8:SP42・9:SP33・10:SP96・11-1:SP125・11-2:SP132・
12:SP163・13:SP162・14・15:SP60)



第15図 中世土坑 (SX03・SX04・SX06・SX07・SX08)



第16図 中世土坑（SX07）及び出土遺物

分けて二列の杭列が存在するのは時期差であろうと考えられる。SA01の後、さらに建て替えた時もしくは整地時に、SA01よりも東側にSA02を打ち込んで補強したと思われる。SA01では杭もまばらで横板も見られないが、SA02では杭の間隔が密になり、さらに横板で土留めしている。杭列は南東方向へはまだ続くものと思われるが、北西方向へ行くほどまばらで整然としない。北西方向は居住域のはずれになるか。

今回、検出された中世の遺構面は、検出した工程から便宜上、上面と下面に分けているが、実際には同一遺構面であったと考えられる。下面で検出した柱穴群は上面の礫層の段階では確認出来なかったが、おそらく礫層上面より掘り込まれていたと考えられる。上面で検出した礫層は、遺構の集中している範囲に限られていることから、建物を建てる居住部分の地盤を固めるために人为的に敷き込まれた整地層と考えられる。上面で礫が部分的に集中していたのは、地盤が低く窪んだところに礫を集中的に入れた

結果、集石状になったものと思われる。整地した杭列から西側は東側よりもやや高くなっている。一帯は地盤が低く、常に長尾川の氾濫の影響を受けていた地域であったため、居住域は地盤を固め安定させる必要があったと考えられる。杭列は居住域を区画するために打ち込まれた境界であり、杭列以西は礫などによって整地された居住域と考えられる。杭列を居住域の境界とすると、杭列は建物跡の裏手にあたり、建物跡の正面は南東方向か、または南西方向にあると想定される。

本遺構面は居住域であることは間違いないと思われるが、どのような性格を持つものかは特定できない。非常に狭い範囲での調査であり、生活面の極く一部が検出されたにすぎないため、集落の全容が掴めていないのが現状である。ただ、中世の社会的な背景を考慮した場合、一般的な集落にしては大型の建物跡が存在することや、出土した陶磁器の種類や銅銭の量、生活用具などから、一般庶民のものとは考え難いと考えられる。

註1 箸状木製品のカウント方法は、原則として完形品を1本と数え、さらに折損している製品も1本として数えた。第17図にはそのごく一部の24本を掲載した（33～56）。

註2 呪符木簡や木簡状木製品についてはすべて赤外線照射して観察している。しかし肉眼で見える以上の成果は得られなかった。

註3 呪符木簡の表裏は、便宜的に実測図の正面側を表面とした。

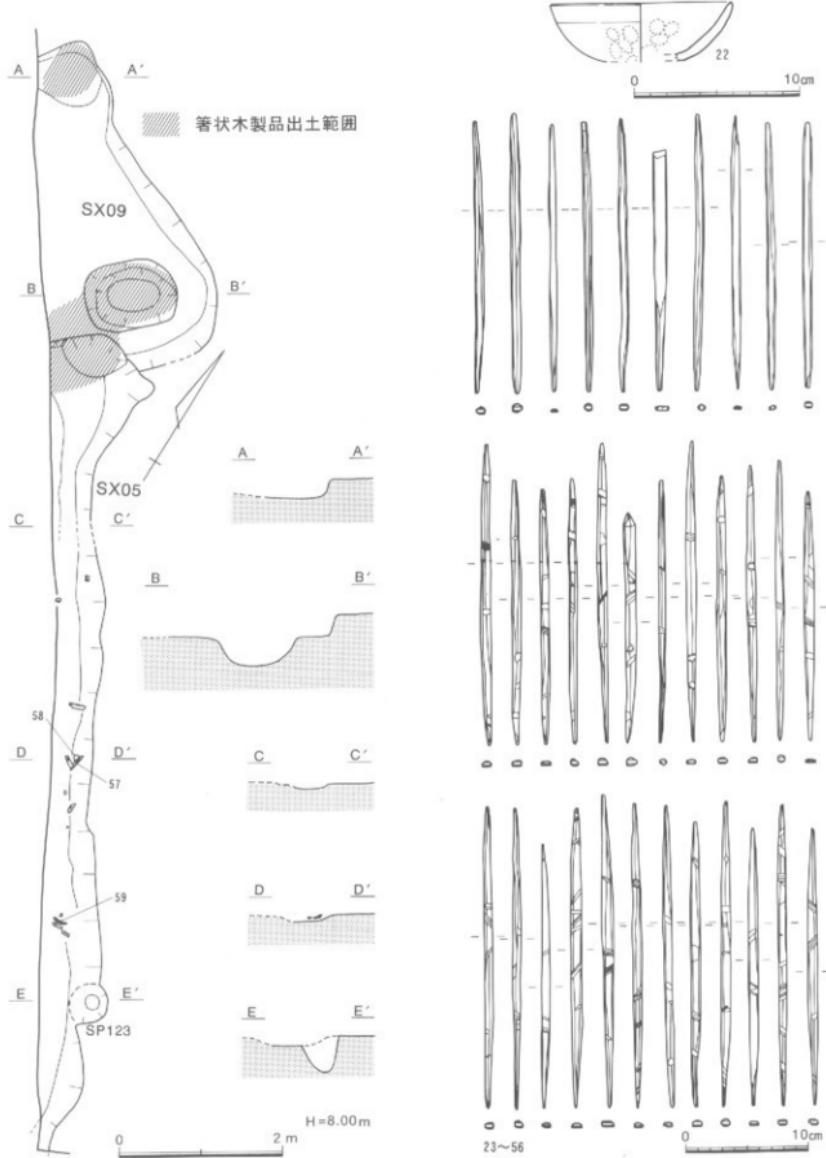
第3節 中世の遺物

主要遺構から出土した遺物については前節で紹介した。本節では中世遺構面に伴う柱穴や包含層より出土した遺物についてまとめた。

1 土器（第19図75～112）

中世遺構面のSX07・09以外の遺構および包含層より出土した土器は、陶磁器、青磁器、灰釉・山茶碗、かわらけ、土師器などがある。中世の土器は淡黄褐色シルト層（③層）～暗（青）灰色粘土層（上部疊層）（④～層）、および炭化物層（⑤層）より出土している。完形で出土したものは無く、ほとんどが破片・小片の状態で出土している。出土した中世の土器は登録点数だけでも390点を超える。各土器の比率は、青磁器11.6%、陶磁器・灰釉・山茶碗39%、かわらけ25.7%、その他23.7%である。このうち、図化できた土器は全体の出土量の約11%に過ぎない。図化の可能であったものの第19図にまとめ、調整方法については第7・8表に記載した。

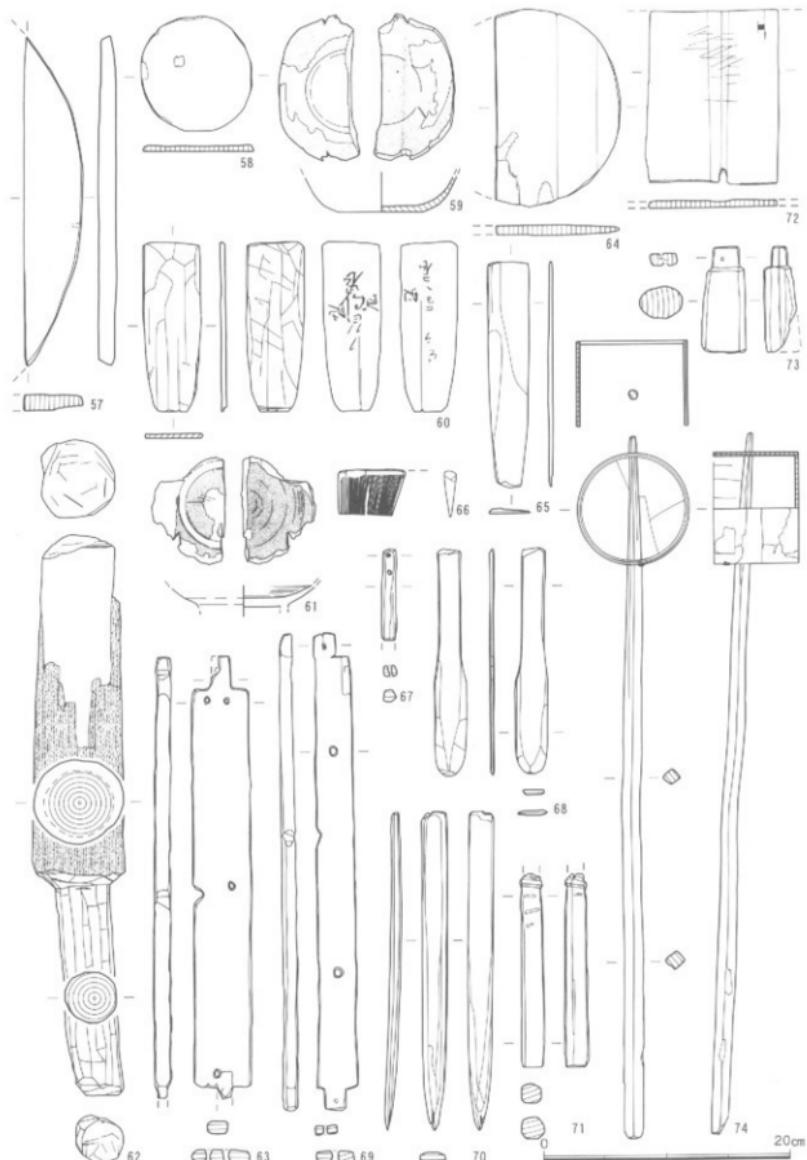
75は単頭壺の口縁部。産地は渥美・湖西と思われる。76～84は灰釉・山茶碗の碗・小皿。81～84は東遠系のものである。85～89はかわらけ。90～99の青磁器はすべて舶載品である。龍泉窯系蓮弁文などが含まれる。91の「国」のような印文は珍しく、浮き出ているので型作りとも考えられる。ほとんどが碗であることから生活雑器のなかに入る。静岡県内庵野山町の北条氏邸より出土するもの（13世紀前半）はあまり彫りが粗くないのに対し、陰刻が荒い印象を受ける。そのことから瀬名川遺跡から出土した青磁器は13世紀後半が中心と思われる。出土した青磁器から想定される遺跡の性格は、一般の民衆の集落にしては青磁器の割合が多いことから、街道筋に面したやや豊かな宿屋ではないかと考えられる。合子や袋もの、青白磁が出土していないことから見ると身分の高い人や豪族の住まいではないであろう（註1）。100は白磁。器種は不明。101～103は鍋の口縁部である。104は羽釜。いずれも小片であるため、実際の個体数はカウントできない。105～108は大鉢である。106は片口鉢。かなり歪んでいる。109～112は常滑焼きの大甕。109～111は口縁部。口唇部の作りから13世紀後半～14世紀中頃のものと思われる。112



第17図 中世土坑（SX05・SX09）及び出土遺物

第7表 中世出土土器一覧表1

器種 登録番号	器形	出土地点	口径	法量 (cm)	底質	胎土	焼成	色調	手法の特徴	備考	
14 PNa.4-1	瓶	SK07	12.00	8.80	4.10	灰・褐色微粒子、1~2mm灰白色	良	黄褐色	口縁~底部1/2焼存 内外面ナガ 口縁部 はヨコナガ 底部み切り直	口縁部	
17 PNa.4-2	瓶	SK07		6.30	(3.10)	灰・茶色微粒子、1~2mm小球	良	灰黄色	底部~环状焼存 内外面ナガ 底部み切り直		
18 PNa.5-2	小瓶	SK07		(7.40)	4.80	2.20	微粒子、4mm灰白色微含有	良	にふい黄色	口縁~底部焼存 内外面ナガ 底部み切り直	
19 PNa.5-1	小瓶	SK07		7.80	4.20	2.10	微粒子、1~2mm灰・茶色粒子、良	灰白色	ほぼ完形 口縁部1/4焼存 内外面ナガ 底部み切り直		
20 PNa.4-3	小瓶	SK07		(7.40)	4.20	1.80	灰・茶色微粒子、1mm以下茶色 微粒子含有	良	灰白色	口縁~底部焼存 内外面ナガ 底部み切り直	
21 PNa.4-4	小瓶	SK07		(7.70)	8.40	1.80	灰・茶色微粒子、1mm以下灰 色微粒子、墨色含有	良	にふい黄色	口縁~底部焼存 内外面ナガ 底部み切り直 灰・指ナガ	
22 PNa.2	瓶	SK09		(11.00)		(3.50)	灰・茶色微粒子、3mm灰褐色、墨 色含有	良	黄褐色	口縁~环状1/4焼存 内外面ナガ 手鏡による鑑定 腹型 外面口縁ナガ 手鏡による鑑定	
23 PNa.15	壺	無石下層		(11.00)		(3.90)	灰・茶色微粒子、1mm灰・灰 色微含有	良	黄褐色	口縁~底部焼存 内外面ナガ 脊先・通	
24 PNa.8-1	瓶	Ⅱ層		6.30	2.10	2~3mm灰白色微粒子含有	良	にふい黄色	口縁~底部焼存 内外面ナガ 貼り付け萬 古		
27 PNa.8-4	瓶	無石下層		(6.60)		(1.40)	1~2mm灰石、白色砂粒含有	良	灰白色	底部1/3焼存 内外面ナガヨコナガ	
28 PNa.7-2	瓶	SP24-1瓶				(1.40)	1mm長石、黑色粒子、灰褐色 微粒子含有	良	黄褐色	底部一部焼存 内外面ナガ 口縫部凹凸切 り直 粘り付け萬古	
29 PNa.7-1	小瓶	SP97-P241の中 から出土		(8.40)	(6.40)	1.40	灰・茶褐色微粒子、灰色微粒 子含有	良	灰白色	口縁~底部1/2焼存 内外面ナガ 底部凹 凸切	
30 PNa.7-4	小瓶			(7.20)	(3.80)	2.10	灰褐色長石微粒子、2mm黑 色微含有	良	灰白色	口縁~底部1/4焼存 内外面ナガ 底部底 部微粒子外付ナガ 口縫部凹凸切	
31 PNa.8-5	瓶	礫頭化け縦灰色 地土層				1mm以下~4mm長石、2mm茶色 石含有	良	黄褐色	底部~軽焼存 内外面ナガ 外面ヨコナガ 東洋系 貼り付け萬古		
32 PNa.7-5	瓶	無石下層		(6.80)		(1.70)	1mm灰・茶褐色微粒子、長石微 粒子含有	良	灰白色	底部~軽焼存 内外面ナガ 貼り付け萬古 東洋系	
33 PNa.8-2	瓶	無石下層		(7.00)			白色砂粒、墨色含有	良	黄褐色	底部1/6焼存 内外面ナガ 貼り付け萬古 東洋系	
34 PNa.8-3	瓶	クリッパー層		(5.00)		(1.90)	蒸石、白色微粒子含有	良	灰色	环状~底部一部焼存 内外面ヨコナガ 東洋系	
35 PNa.5-3	瓶	無石下層		(12.00)		(3.30)	灰・茶色微粒子、1mm以下灰色 ・茶色粒子含有	良	にふい黄色	口縁~環状1/4焼存 内外面ナガか 墓葬者 しい	
36 PNa.3-1	瓶	Ⅱ層		(11.30)	(7.40)	3.90	蒸石、白色微粒子含有	良	にふい黄色	口縁~底部1/3焼存 内外面ナガ 貼り付け萬古	
37 PNa.3-2	瓶	無石下層				(3.60)	灰・茶色微粒子、1mm以下茶 色粒子含有	良	煙色	底部~環状1/3焼存 内外面ナガ 貼り込み切	
38 PNa.5-6	小瓶	無石下層		(8.00)		(1.50)	灰・茶褐色微粒子、墨色含有	良	灰白色	口縁~底部1/5焼存 内外面ナガ 貼り付け萬古	
39 PNa.5-4	小瓶	無石下層		(7.60)	(5.00)	1.70	灰褐色微粒子、1mm以下茶色粒子含 有	良	にふい黄色	口縁~底部1/4焼存 内外面ナガ 底部承 り直	
40 PNa.9-1	瓶	鉄製灰化地土層 等(茶褐色地土層 上層)		6.00		(2.60)	長石微粒子含有	良	灰オリーブ色	底部1/4焼存 鉄瓶工具による削り痕焼存 青磁	
91 PNa.9-2	瓶	Ⅱ層				(1.60)	長石微粒子含有	良		底部焼存 底部回転ヘアリ	青磁
92 PNa.10-4	瓶	灰褐色地土層		(16.80)		(4.80)	蒸石、灰色微粒子含有	良		底部1/1焼存	青磁
93 PNa.71-1	瓶	TP9349474-17 等の内鉄製青色 地土層				(16.00)	白色微粒子含有	良	オリーブ灰色	底部1/12焼存	青磁 磁器調 合
94 PNa.10-6	瓶	無石下層		(18.00)		(2.50)	蒸石、灰褐色微粒子含有	良		口縁部1/10焼存	青磁
95 PNa.10-1	瓶	炭化物混じり暗 灰褐色地土層				(5.80)	長石、灰色微粒子含有	良	綠灰色	底部1/3焼存 底部削り	青磁
96 PNa.10-2	瓶	Ⅱ層				(4.50)	長石、灰褐色微粒子、1mm灰色 粒子含有	良	オリーブ灰色	底部1/10焼存 底部削り	えぐり 入り青 磁?
97 PNa.10-3	瓶	灰褐色地土層				(1.00)	長石、灰褐色微粒子含有	良	綠灰色	底部一部焼存	青磁
98 PNa.11-2	瓶	難波中北		(10.00)		(2.00)	1~2mm長石、長石微粒子含有	良		口縁部1/6焼存 内外面ナガ 開鋸 ズリーナガ口唇部	青磁
99 PNa.11-1	壺	難波褐色地土層		(5.50)	(4.80)	1.90	長石、灰・茶褐色微粒子含有	良	灰白色	口縁~环状1/4焼存 内外面 ハラケ 開鋸 ズリーナガ口唇部	
100 PNa.11-3	SP24			(3.30)		(1.60)	長石、灰・茶褐色微粒子、黒・茶褐色 良 微粒子含有	良	白色	底部焼存 内外面ナガ 口縫部 白磁 底部承け切	
101 PNa.63-1	瓶	炭化物混じり暗 茶灰色地土					1mm強砂粒、黒・白色粒子含有	良	灰白色	口縫部焼存 内外面ナガ 外面スス付	
102 PNa.63-2	瓶	炭化物混じり暗 灰色					白・黑色粒子、墨色含有	良	内・浅黄褐色 外・墨色	口縫部焼存 内外面ナガ 外面スス付	
103 PNa.63-3	瓶	灰褐色地土層					白色粒子、砂粒、墨色含有	良	内・にふい黄色 外・墨色	底部焼存 内外面ナガ 口縫部 白磁 底部承け切	
104 PNa.15	瓶	灰褐色地土層					1mm以下灰石、1~2mm灰石、墨 色含有	良	灰白色	開鋸~底部焼存 口面ナガ 外面ケズリ →ナガ 貼り付け萬古 スス付	
105 PNa.13-1	瓶	SP45		(15.00)	(9.20)	1cm強 4mm灰褐色蒸石・灰茶褐色 1cm灰褐色蒸石・灰褐色 1cm灰褐色蒸石含有	良	灰白色	開鋸~底部焼存 口面ナガ 外面ケズリ →ナガ 貼り付け萬古 口面ナガ スス付		
106 PNa.12	瓶	SP97		22.50	11.00	9.00	1~2mm長石、6~7mm含有	良	灰白色	口縫~底部1/2焼存 外面ケズリ→ヨコナ ガ 底部強焼存 貼り付け萬古 白磁 底部強焼存	



第18図 中世土坑出土木製品 (57~59:SX05・60~63:SX07・64:SX08・65~71:SX09・72~74:SX06)

第8表 中世出土土器一覧表2

図番	登録番号	鉢種	出土地点	口径	底径	法量 (cm)	基質	胎土	焼成	色調	手法の特徴		備考
											底面	表面	
107 PNo.14		鉢	淡黄褐色粘土層				灰・薄茶色微粒子、1mm系・唐 茶色粒子、露合有	良	良	白	口縁残存	口唇延ナダ	
108 PNo.13-2		鉢	集石内	(13.20)	(43.50)	3~4mm黒色・灰茶・瓦石・石英 種、1mm系・灰茶・瓦石・石英 粒子、灰茶・灰茶微粒子含有	良	灰白色	底部一部残存 内面:表墨有落 外面:ケズ リ→ナダ 貼り付け高台				
109 PNo.67-1		壺	淡黄褐色粘土下				白色粒子、3mm小石含有、黑色 吹出	良	褐灰色	口縁部残存 内外面ナダ 口唇部ナダ	常滑燒	一部自然崩	
110 PNo.67-2		壺	炭化物風化り青 灰色粘土(青斑 色粘合)				白色粒子、黑色粒子、3mm小石 含有、黑色吹出	良	褐灰色	口縁部残存 内外面ナダ 一部自然崩	常滑燒		
111 PNo.67-3		壺	集石下				長石、白色粒子含有、黑色吹き 出し	良	内灰褐色 外:褐灰色	口縁部残存 内面ナダ 一部自然崩	常滑燒		
112 PNo.68		壺	淡黄褐色粘土層	(21.70)			1~5mm小石、砂粒含有	良	内褐灰色 外:灰褐色	底部・体部残存 外面工具痕残存	常滑燒		

は大壺の底部である。

2 木製品

中世面に伴う木製品は、遺構出土以外にも包含層より出土した木製品が多数ある。多くは用途の特定できないものが大半を占める。そのなかでも製品として加工されているものを中心に図化した。それらを第20図～第21図にまとめた。樹種はスギ・ヒノキ材が多用されている。各製品の樹種は第9・10表に掲載している。

A 容器

第20図113～119は漆椀。樹種は113～115はシオジ、116～119はケヤキ材である。木取りは横木取り柾目。いずれも黒漆が全面に塗られ、復原口径はどれも14～15cmほどの大きさの椀である。113は全体の残存度は低いが、内外面に回転轆轤削りの痕跡が顕著に残っている。底部高台内側には轆轤の爪痕と思われる刺突痕が見られる。114は内外面に朱漆のスタンプ紋がある。スタンプ紋は6枚の花弁を持つ花の紋様で、花弁の欠損位置より同一のスタンプで連続して押印されていることが分かる。内湾面の底部に6ヶ所、側面の2方向に數カ所スタンプ紋が見られる。外湾面にも2ヶ所あったものと思われる。口縁部が欠損しているため全体の紋様構成は不明。底部高台内側には圧痕や底部を調整したノミ痕、および爪痕が見られる。115は曲物の底板とともに出土したが、土圧でかなり歪んでいる。内外面には回転轆轤削りの痕跡が残っている。116は比較的の残存状況が良好な漆椀である。内外面にはやはり回転轆轤削りの痕跡が残っているが外面の一部にノミ痕も数カ所ある。底部には轆轤形成時の爪痕が傷状に見られる。117～119も内外面に回転轆轤削りの痕跡が顕著に残る。

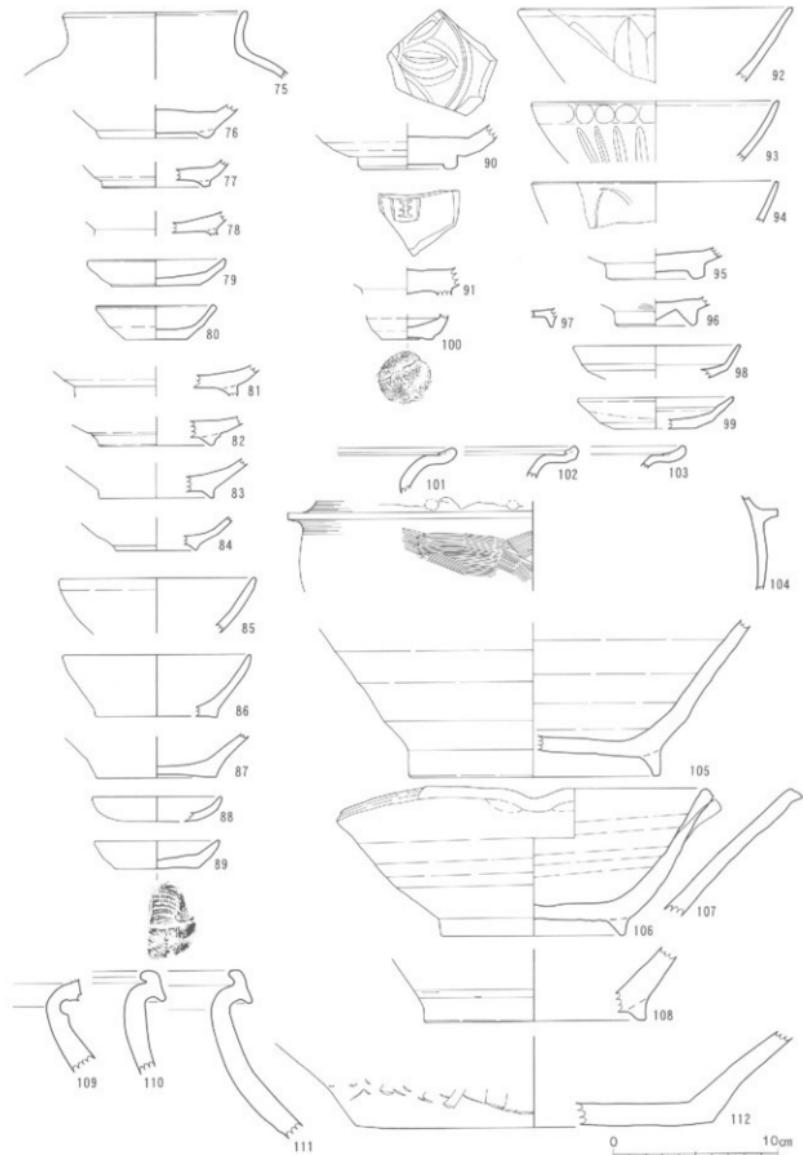
120は用途不明品だが表面に漆が塗布されている。カシ材。破片のみで全体の形状は分からぬが、幅0.5cmほどの切り込みが入っている。

121～123は栓と思われる木製品である。121・123は円板状で、それ以外の成形は特に見られない。122は復元すると下方に向かってやや細くなる円柱状の形状を呈するものと思われる。上下に幅0.3～0.5cmほどの浅い切り込みがあり、中心部は部分的に削り貫かれ中空になっている。裏面側は一部深く削り貫かれている所があるが孔にはなっていない。木取りは柾目。

124・125はスギ材の円形曲物底板。124は確認調査時のトレンチより出土した。取り上げ時には銅銭(184～186)が器面に貼り付くように伴って出土した。復原直径は36.8cmとなる。残存状態は全体に風化し、もうくなっている。側板は2cmほどの高さが残り、木釘が打ち込まれた孔が數カ所残っている。木釘痕は8ヶ所ほど認められる。この内1ヶ所木釘が残存している。木釘は長さが約3cmほどある。底板自体はかなり風化している。この125の周辺からは4～5枚の銅銭が相次いで出土した。

B 紡織具

第21図126・127は糸巻き具の部材である。いずれもヒノキ材でつくられている。一般的には糸枠と呼



第19図 中世出土土器

ばれる組み合わせ式の糸巻き具で、腕木と支え木の部材とからなる。126・127は糸巻き具の腕木部分である。124は全体に細身で、丁寧に面取りされ磨かれている。上下の端部は共に摩滅している。腕木の上下に支え木が差し込まれる約1cmほどの円形孔が2ヶ所開いているが貫通はしていない。円形孔の底中央部にはさらに直径0.1cmほどの小孔がある。上の円形孔には左側に木釘が残存している。釘頭は幅0.4cm、長さは0.5cmほどある。下の円形孔にも右側に木釘痕がある。125は124よりもやや大振りの腕木である。また支え木の一部も残存している。支え木が差し込まれる孔は下の孔で3.1cm×1.5cmの方形孔で、2.55cmほどの深さがある。支え木も断面が長方形の板材である。木釘孔は4ヶ所残っていて、そのうち3ヶ所に木釘がある。

C 農具

128～131は枠型田下駄の部材と思われる木製品である。全てスギの板目材である。部材は枠型田下駄の横桟部分と考えられる。128・129は半分ほど折損している。130・131はほぼ完全な形状を残している。長さ2cm、幅1.6cmの出納が作り出され、右側面には小さな切り込みがある。129も半折している。やはり突起が作られ、器面には穿孔痕が2ヶ所ある。孔の外径は約0.8～1.0cmである。130は上下（註2）の形態が若干異なる。上部には小さな出納が作られ、やや下方には1ヶ所穿孔があり、さらにその下の両脇に切り込みが入りくびれている。下部は出納が作られ、その中央に穿孔がある。右側面の中央にはV字状の切り込みがあり、ちょうど反対の左側には何か当っていたような圧痕がある。上下にある穿孔の周辺はかなりすり減っている。縦枠に差し込まれていた部分が使い込まれた結果、摩滅したと考えられる。131もほぼ同型の横桟であろう。上下の作りは対象でやはり出納部分には穿孔が1ヶ所ずつある。さらに本体にも3ヶ所の穿孔がある。左側面の中央には浅い切り込みがある。出納周辺はやはり表面がすり減っている。

D 祭祀具

呪符木簡（60）や木簡状木製品（65）の他に、墨書のある木片が1点出土している。132は板目のスギ材で薄い板状を呈する木片である。上部は利器により切断された痕跡がある。両側面は欠損している。表面の上部には塗り潰されたような墨痕やカタカナの「口」の字のような墨書痕が僅かに残っているが解読はできない。やはり木簡の一部と考えられる。

E 装身具

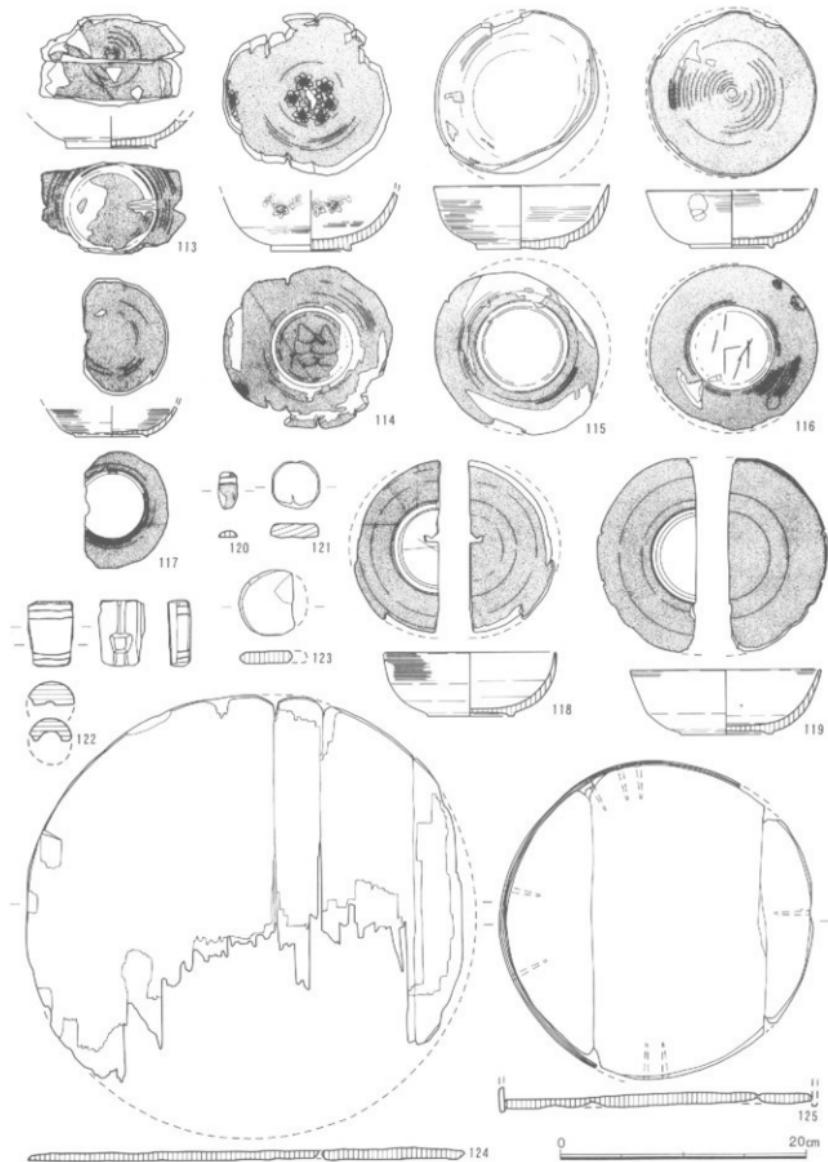
中世面から出土した横桟は2点である。そのうちの133は横桟の破片である。残存状態は悪く、両脇は欠損し上からの土圧で押しつぶされている。前出の66と同様に材はイスノキを使用している。

F 用途不明木製品

134～145は用途が特定できない木製品である。樹種は136がヒサカキである以外は、全てスギ材である。

134はSP67より出土した板状木製品である。礎板のように柱穴の底部ではなく、覆土中に縦に突き刺さった状態で出土している。両面とも割り面で下部には粗い切断痕がある。165はSP159より出土した。柱穴の堀りかたは明確に掘めなかつたが、やはり縦に突き刺さった状態で出土した。左側面には大きくV字に切り込みが入っている。136は確認調査時に青灰色シルト層（⑥層）にくい込んでいる状態で出土した。径9cmほどの芯持ち丸太材で、上部は欠損している。2cmほどの幅で周囲を切り込まれている。また下端部は斧により切断された痕跡がそのまま残っている。137は方形孔のある板状木製品。上下は切断され、左側面には何かが当たっていたような圧痕がある。

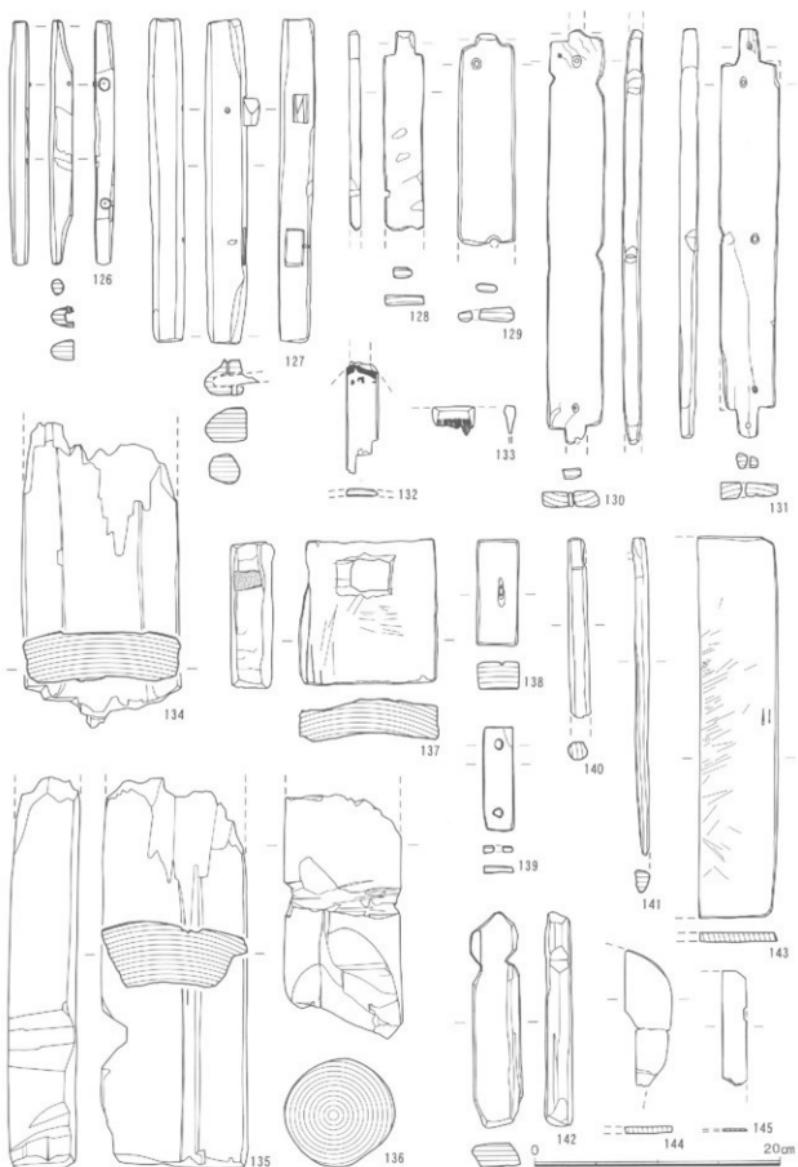
138は長方形でやや厚みのある小型の木製品である。角が面取りされ丁寧なつくりである。ほぼ中央に小穴が2ヶ所あるが、貫通はしていない。139は薄い板状の製品。上下2ヶ所に径0.8cmの穿孔がある。左右側面には浅い溝状の切り込みが入っている。かなり使用されたためか、全体にすり減っている。



第20図 中世出土木製品1

第9表 中世出土木製品一覧表1

器番	大項目	中項目	小項目	年代	遺構・部位	本取り	樹種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	備考	登録番号
1	建築材	檜板		中世	SP128	板目	スギ	17.80	14.80	4.80		W1-184
2	建築材	檜板		中世	SH01 SP69	板目	スギ	16.00	14.00	5.00		W1-168
3	建築材	柱		中世	SH02 SP163	板目	スギ	30.60	11.40	11.30		W1-200
4	建築材	柱		中世	SH02 SP168	芯持	マツ	26.30	10.30	10.00		W1-199
5	建築材	柱		中世	SH02 SP163	芯持	クリ	30.20	10.40	9.90		W1-201
6.1					SH06 SP63							W1-151
6.2	建築材	檜板		中世	SH06 SP63	板目	スギ	36.00	15.40	9.80		W1-160
6.3					SH06 SP27							W1-149
7	舟舟	挽物	茎	中世	SP61直轄(覆土)	櫛木取り板目	クリ	9.40	7.10	1.45	漆喰	W1-108
8	建築材	檜板		中世	ST42	板目	スギ	18.50	13.50	6.50		W1-156
9	建築材	檜板		中世	SP55	板目	スギ	29.40	17.80	4.20		W1-175
10	用途不明木製品			中世	SK01 SP95	板目	スギ	22.20	9.10	0.60	へら状	W1-122
11	建築材	柱	柱板	中世	SP135	芯持	マツ	23.50	13.70	14.80		W1-197
					SP132							W1-210
12	建築材	柱		中世	SP163	芯持	マツ	40.40	9.10	9.70		W1-196
13	建築材	柱		中世	SP162	芯持	マツ	26.80	9.20	8.90		W1-195
14	建築材	柱		中世	SP60	板目	スギ	17.20	14.60	4.70		W1-148
15	工具	櫛?		中世	SP60	板目	スギ	16.30	4.80	2.80		W1-124
16	食事具	箸		中世	SX07	板目		22.40	0.80	0.60		W1-256-1
17	食事具	箸		中世	SX07	板目		23.00	0.90	0.70		W1-256-2
18	食事具	箸		中世	SX07	板目		22.00	0.60	0.30		W1-255-3
19	食事具	箸		中世	SX07	板目		22.20	0.70	0.60		W1-256-4
20	食事具	箸		中世	SX07	板目		22.50	0.80	0.60		W1-255-5
21	食事具	箸		中世	SX07	板目		19.80	1.10	0.60		W1-264-1
22	食事具	箸		中世	SX07	板目		22.70	0.90	0.60		W1-254-2
23	食事具	箸		中世	SX07	板目		22.80	0.70	0.30		W1-254-3
24	食事具	箸		中世	SX07	板目		22.00	0.70	0.40		W1-254-4
25	食事具	箸		中世	SX07	板目		31.80	0.80	0.60		W1-264-6
26	食事具	箸		中世	SX09	板目		24.80	0.90	0.60		W1-221-1
27	食事具	箸		中世	SX09	板目		21.80	0.80	0.60		W1-221-2
28	食事具	箸		中世	SX09	板目		21.00	0.80	0.40		W1-221-3
29	食事具	箸		中世	SX09	板目		21.80	0.70	0.60		W1-221-4
30	食事具	箸		中世	SX09	板目		24.70	0.80	0.60		W1-221-5
31	食事具	箸		中世	SX07	板目		21.60	0.60	0.50		W1-233-2
32	食事具	箸		中世	SX07	板目		24.70	0.80	0.40		W1-233-3
33	食事具	箸		中世	SX09	板目		21.80	0.80	0.60		W1-233-4
34	食事具	箸		中世	SX09	板目		21.00	0.80	0.40		W1-233-5
35	食事具	箸		中世	SX09	板目		22.70	0.80	0.60		W1-233-6
36	食事具	箸		中世	SX09	板目		23.00	0.70	0.60		W1-234-1
37	食事具	箸		中世	SX09	板目		20.50	0.90	0.30		W1-234-2
38	食事具	箸		中世	SX09	板目		19.00	1.00	0.70		W1-235-1
39	食事具	箸		中世	SX09	板目		21.60	0.60	0.50		W1-235-2
40	食事具	箸		中世	SX09	板目		24.70	0.80	0.40		W1-235-3
41	食事具	箸		中世	SX09	板目		21.80	0.80	0.50		W1-235-4
42	食事具	箸		中世	SX09	板目		22.70	0.80	0.60		W1-235-5
43	食事具	箸		中世	SX09	板目		23.00	0.70	0.60		W1-234-1
44	食事具	箸		中世	SX09	板目		20.50	0.90	0.30		W1-234-2
45	食事具	箸		中世	SX09	板目		24.80	0.70	0.80		W1-234-3
46	食事具	箸		中世	SX09	板目		24.70	0.80	0.60		W1-234-4
47	食事具	箸		中世	SX09	板目		21.60	0.70	0.40		W1-234-6
48	食事具	箸		中世	SX09	板目		24.60	0.90	0.40		W1-235-1
49	食事具	箸		中世	SX09	板目		25.70	1.00	0.60		W1-235-2
50	食事具	箸		中世	SX09	板目		25.00	0.80	0.40		W1-235-3
51	食事具	箸		中世	SX09	板目		24.80	0.80	0.40		W1-235-4
52	食事具	箸		中世	SX09	板目		23.40	0.80	0.60		W1-235-6
53	食事具	箸		中世	SX09	板目		26.00	0.80	0.60		W1-235-1
54	食事具	箸		中世	SX09	板目		22.70	0.80	0.40		W1-235-2
55	食事具	箸		中世	SX09	板目		24.70	0.80	0.60		W1-235-3
56	食事具	箸		中世	SX09	板目		22.70	0.80	0.60		W1-235-4
57	容器	曲物	円形曲物	中世	SX05	板目	スギ	26.80	4.80	1.60		W1-116
58	容器	曲物	円形曲物	中世	SX05	板目	スギ	9.40	9.10	0.60		W1-118
59	容器	浅物		中世	SX05	櫛木取り板目	シオジ		6.80		漆喰	W1-118
60	祭祀具			中世	SX07	板目	スギ	13.00	4.70	0.40	祝呪木盤	W1-218
61	祭祀具	浅物	正 扇	中世	SX07	芯持?	ケヤキ		7.50			W1-224
62	器具	櫛		中世	SX07	芯持?	スギ	45.80	7.20	7.30		W1-223
63	器具			中世	SX07	板目	スギ	36.00	4.30	1.30	神型?	W1-207
64	容器	曲物	円形曲物	中世	SX08	板目	スギ	16.00	12.00	0.90		W1-218
65	祭祀具			中世	SX09	板目	スギ	18.40	3.50	0.40	木箱	W1-247
66	祭祀具	漆	横柵	中世	SX09	板目	イスノキ	3.70	1.40	1.00		W1-220
67	用途不明木製品			中世	SX09	板目	スギ	7.50	1.20	1.10		W1-252
68	用途不明木製品			中世	SX06	板目	スギ	18.60	2.60	0.40		W1-230
69	農具			中世	SX06	板目	スギ	19.10	3.30	1.20	神型?	W1-222
70	祭祀具?	鉢形?		中世	SX09	板目	スギ	26.10	2.05	0.80		W1-226
71	用途不明木製品			中世	SX09	板目	スギ	16.08	2.90	1.80		W1-249
72	用途不明木製品			中世	SX06	板目	スギ	14.00	10.5	0.60		W1-209
73	用途不明木製品			中世	SX06周辺	板目	カシ	8.80	3.80	2.70		W1-211



第21図 中世出土木製品2

第10表 中世出土木製品一覧表2

器番	大項目	中項目	小項目	年代	遺跡・墓位	木取り	樹種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	備考	登錄番号
74	春谷	舟物	船物柄杓	中世	SX04 魚石下 土坑?	板目	シオジ	9.10	7.00			W1-183
113	春谷	挽物	杖	中世	魚石下層	板目	シオジ	7.40			漆夷	W1-84
114	春谷	挽物	杖	中世	魚石下層	板目	シオジ	6.60			漆夷	W1-76
115	春谷	挽物	杖	中世	灰土物層下層	横木取り板目	シオジ	11.00	7.60	(5.20)	漆夷	W1-52
116	春谷	挽物	杖	中世	魚石下層	板目	ケヤキ	14.00	7.10	4.80	漆夷	W1-81
117	春谷	挽物	杖	中世	塗装遺構内	横木取り板目	ケヤキ	6.00			漆夷	W1-67
118	春谷	挽物	杖	中世	魚石下層	横木取り板目	ケヤキ	14.30	7.30	5.50	漆夷	W1-78
119	春谷	挽物	杖	中世	魚石下層	板目	ケヤキ	15.60	7.80	5.40	漆夷	W1-131
120	用途不明木製品			中世	グリッド魚石下	板目	カシ	3.00	1.60	0.55		W1-92-3
121	用途不明木製品			中世	旗竹一筋	板目	スギ	3.80	3.80	1.10	検?	W1-261
122	用途不明木製品			中世	グリッド・括木魚石下	板目	スギ	5.30	3.20	1.80	検?	W1-93-3
123	用途不明木製品			中世	灰黄褐色粘土層	板目?	ヒノキ	6.40	4.30	1.00	検?	W1-7
124	春谷	由物	円形曲物	中世	魚石	板目	スギ	24.10		1.00		W1-49
125	春谷	由物	円形曲物	中世	魚石下	板目	スギ	26.80	25.20	1.00		W1-109
126	軋挽具			中世	東洋トレンチ塗灰褐色粘土層	板目	ヒノキ	20.00	1.50	1.90	亀巣具材	W1-52
127	軋挽具			中世	灰化物層下竹土層	板目	ヒノキ	26.65	2.80	3.40	亀巣具材	W1-60
128	馬具			中世	暗灰色粘土層	板目	スギ	14.20	3.20	0.50	鉤部?	W1-71
129	馬具			中世	暗灰黑色粘土層	板目	スギ	17.30	4.70	1.20	鉤部?	W1-10
130	馬具			中世	暗灰褐色粘土層	板目	スギ	33.80	4.20	1.50	鉤部?	W1-8
131	馬具			中世		板目	スギ	53.30	4.80	1.80	鉤部?	W1-162
132	鞍記具			中世	灰黃褐色シルト層	板目	スギ	9.25	2.60	1.60	木履?	W1-13
133	被具	圓	檻蓋	中世	魚石下層	板目	イヌク	3.40	3.40	1.00		W1-99
134	漆刷材	柱		中世	SP-87	板目	スギ	24.90	13.10	4.20		W1-147
135	漆刷材	柱		中世	SP-159	板目	スギ	31.90	17.00	8.80		W1-189
136	漆刷材	柱		中世		芯棒	ヒノキ	18.00	9.00	8.80		W1-9
137	用途不明木製品			中世	魚石遺構/底部	板目?	スギ	11.50	11.30	2.80		W1-78
138	用途不明木製品	角材		中世	SP-159 W227と一筋	板目	スギ	8.70	3.40	2.30		W1-260
139	用途不明木製品			中世	魚石下	板目	スギ	8.60	3.00	0.60		W1-80
140	用途不明木製品			中世		板目	スギ	14.70	1.70	1.40		W1-179
141	用途不明木製品			中世	青灰色シルト～暗灰色砂層	板目	スギ	25.50	1.10	1.80		W1-161-2
142	用途不明木製品			中世		板目	スギ	17.50	3.90	2.20		W1-193
143	春谷	舟物		中世		板目	スギ	31.20	6.80	0.80		W1-229
144	用途不明木製品			中世		板目	スギ	11.20	3.90	0.60		W1-91-2
145	用途不明木製品			中世	淡黃褐色粘土層	板目	スギ	9.40	2.00	0.20		W1-36

140・141は棒状木製品。140の上部には圧痕、141は上部に約0.5cmの穿孔痕がある。142は上部両脇に切り込みがあり頭状になっている。形状はこれで完結しているがつくりは非常に粗い。143は折損しているが方形曲物の底板の可能性がある製品。角は面取りされ、右寄り中央には棒皮痕、さらに表面には無数の刃物痕がある。144はヘラ状の木製品か。145は柾目の薄板。角が利器で落とされている。

3 石製品

中世遺構面に伴って出土した石製品は5点のみである。その内訳は硯石が1点、丸玉2点、軽石が2点がある。SP77より出土した151以外は全て包含層より出土している。軽石は小片で特に加工した痕跡は見られない。

A 砥石

④「層より硯石が1点出土した。第22図146は黒色粘板岩製の硯石で半分ほど折損している。残存長11.35cm、幅11.2cm、最大厚1.2cm、重量は56.5gをかかる。あまり丁寧に研磨されておらず、必ずしも良質品とはいえないつくりである。硯石の表裏には自然面や剥離面が残っている。海の部分には弧を描くような無数の使用痕が付き、かなりすり減って底部の厚さはわずか0.8mmまで薄くなっている。かなり使い込まれたために、底が抜けた使用出来なくなってしまったものと思われる。

B 丸玉

丸玉は2点ある。いずれも水晶製と思われる。151は柱穴SP77内の覆土より出土した小玉で、径0.65cm、重量は0.3gをかかる。表面はやや細かい傷があり曇っている。孔には穿孔時のものと思われる剥離が見られる。152は径0.85cm、重量0.7gの小玉でトレンチ掘削時に出土している。表面は非常にきれいで傷も見られない。穿孔部分は両側とも彫り鉢状に研磨されている。

4 金属製品

第22図に鉄製品、第23図には銅製品をまとめた。銅銭は拓影図を掲載した。なお、金属製品の約4割を占める鉄滓は、今回紙面上の都合により掲載していない。

A 鉄製品

147は疊混じりの暗灰色粘土層（⑤層）より出土した鉄鍋の口縁部と思われる製品で、鋳造品と考えられる。口唇部は幅4.3cmほど残存し、0.6cmほど厚みがある。口径は不明。表面には不純物が付着し、更に小片のため定かではないが、口唇部から2cmほど下が屈曲して段になっている。

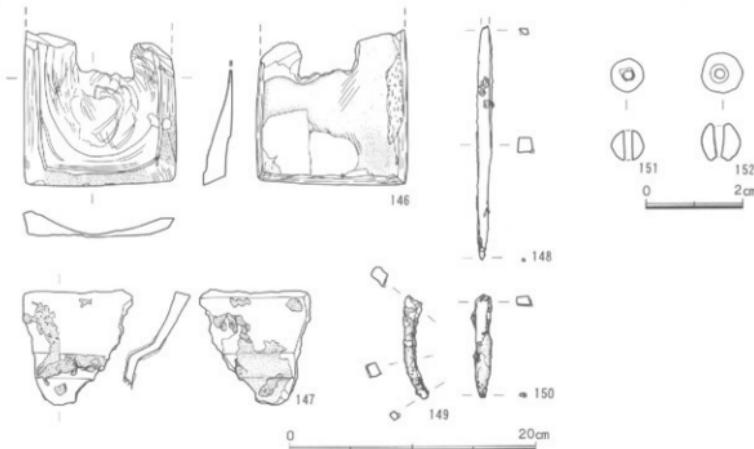
148～150は鉄釘と思われる鉄製品である。表面が鏽で覆われているが、いずれも角釘と思われる。148は残存長さ9.55cm、幅0.6cmで、柱穴SP89の底面より出土した。上部は欠損しているが先端部は残存し尖っている。149は残存長4.25cm、幅・厚みがいずれも0.6cmをはかる。出土遺構はSX09の覆土である。全体に曲がっている。150は長さ4.2cm、幅0.5cm、厚さ0.4cmで、断面形はやや扁平である。欠損したような痕跡は見られず元の形状は不明。

鉄製品はこの他に鉄滓（スラッグ）が18点、集落域より出土している。いずれも③～⑤層までの包含層より出土している。大半が5cm以下の小片ばかりであるが、なかには碗形滓も1点見つかっている。

B 銅製品

銅銭が計35枚出土している。銭名・書体・初鋲年代については第11表にまとめた。出土した銅銭は全て渡来銭である。残存状態は極めて良い。銅銭は一部SX09より2点ほど出土しているが、その他は中世包含層（③～⑤層）より出土している。出土範囲は杭列（SA01・02）以西、SH01以南の極めて狭い範囲の中に限られている。にもかかわらず、約100m²前後の範囲に合計35枚の銅銭が集中して出土していることは極めて稀なことである。

153～183は本調査時に出土した。なかには包含層より出土した曲物の底板（125）や板状木製品の周辺から相次いで見つかっているものもある。169のようなあまり良質ではない鰐銭も含まれている。179は裏面に文字のある銅銭。



第22図 中世出土石製品・金属製品1（鉄鍋？・鉄釘）

184~187は確認調査時に出土した。184~186は4枚とも曲物の底板（124）に付着した状態で出土している。

註1 青磁器については、韮山町教育委員会 原 茂光氏に御教示いただいた。

註2 図面上では上下だが、実際の用途に当てはめれば左右となる。文中では図面での方向を指す。

参考文献

上原真人『木器集成図録（近畿原始篇）』奈良国立文化財研究所 1993.3.30

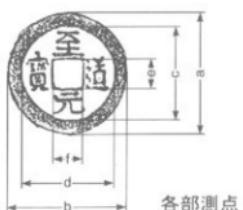
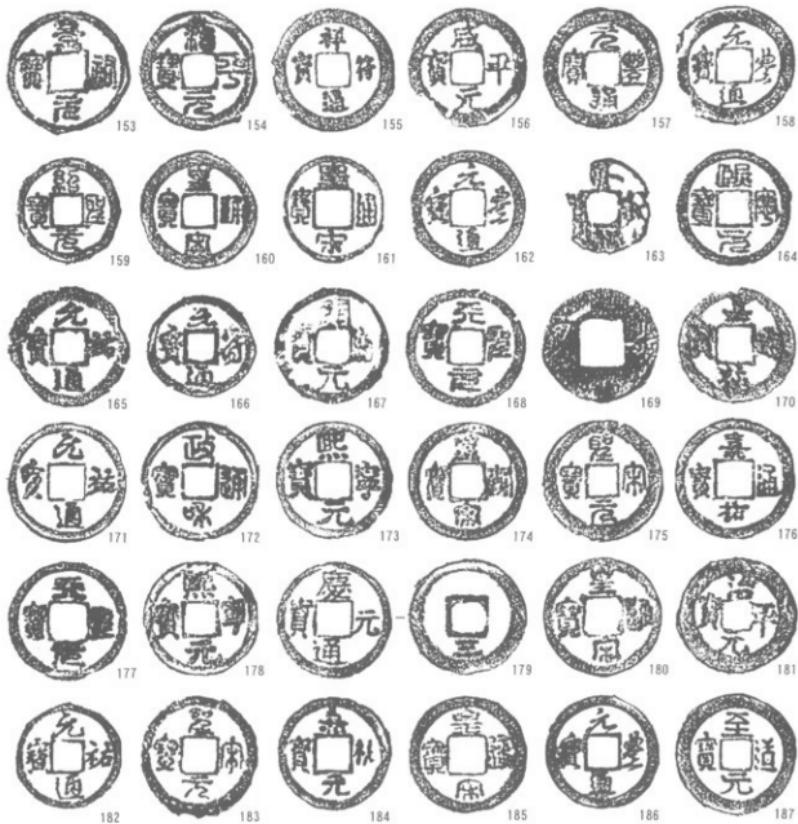
永井久美男 編『中世の出土銭・出土鉄の調査と分類』兵庫県立歴史博物館調査会 1994.10.22

第11表 中世出土銅錢一覧表

中世出土銅錢一覧表															
番号	銘文	書体	折目	年代	グリット	遺構名	層位名	外径 (mm)	内径 (mm)	鉢孔 (mm)	鉄孔 (mm)	鉄厚 (mm)	重量 (g)	備考	
184	新助元寶	真書	1056年	Y275	178.7~182.4	西側	浜文化層(?)より疊灰白色粘土層	2.35	2.31	1.87	1.92	0.63	0.69	0.10	3.30
185	新助通寶	真書	1058年	Y275	178.7~182.4	西側	浜文化層(?)より疊灰白色粘土層	2.38	2.39	1.90	1.90	0.72	0.73	0.08	2.40
186	新助元寶	行書	1078年	Y275	178.7~182.4	西側	浜文化層(?)より疊灰白色粘土層	2.34	2.34	1.85	1.85	0.59	0.61	0.14	3.90
187	新助元寶	真書	995年	Y275	178.7~182.4	西側	浜文化層(?)	2.46	2.47	1.84	1.85	0.57	0.57	0.10	2.80

本調査出土

番号	銘文	書体	折目	年代	グリット	遺構名	層位名	外径 (mm)	内径 (mm)	鉢孔 (mm)	鉄孔 (mm)	鉄厚 (mm)	重量 (g)	備考	
153	新助元寶	真書	1054年	Y275	178.7~182.4	西側	浜文化層(?)より疊灰白色粘土層	2.48	2.50	2.13	2.13	0.75	0.68	0.13	3.70
154	新助元寶	真書	1064年	Y275	178.7~182.4	西側	疊灰白色粘土層	2.45	2.40	1.92	1.92	0.64	0.62	0.11	3.30
155	新助通寶	真書	1069年	Y275	178.7~182.4	西側	疊灰白色粘土層	2.54	2.54	2.00	1.96	0.62	0.62	0.11	3.10
156	新助元寶	真書	998年	Y275	178.7~182.4	西側	浜文化層(?)より疊灰白色粘土層	2.44	2.42	1.91	1.91	0.63	0.59	0.07	2.00
157	新助通寶	真書	1072年	Y275	178.7~182.4	西側	疊灰白色粘土層	2.48	2.44	1.92	1.88	0.63	0.65	0.12	3.60
158	元助元寶	行書	1078年	Y275	178.7~182.4	西側	疊灰白色粘土層	2.42	2.41	1.87	1.90	0.68	0.70	0.12	3.10
159	元助元寶	真書	1094年	Y275	178.7~182.4	西側	疊灰白色粘土層	2.17	2.05	1.80	1.77	0.62	0.55	0.12	2.50
160	元助通寶	真書	1098年	Y275	178.7~182.4	西側	疊灰白色粘土層	2.44	2.41	1.88	1.91	0.68	0.66	0.11	3.10
161	元助通寶	真書	1098年	Y275	178.7~182.4	西側	疊灰白色粘土層	2.20	2.11	1.91	1.94	0.74	0.74	0.09	1.80
162	元助通寶	行書	1078年	Y275	178.7~182.4	西側	疊灰白色粘土層	2.37	2.38	1.88	1.98	0.71	0.71	0.11	3.00
163	元助元寶	真書	998年	Y275	178.7~182.4	西側	疊灰白色粘土層	1.69	1.92	1.80	1.80	0.65	0.59	0.09	1.00
164	元助元寶	真書	1068年	Y275	178.7~182.4	西側	疊灰白色粘土層	2.36	2.38	1.94	1.94	0.67	0.62	0.13	3.80
165	元助通寶	行書	1068年	Y275	178.7~182.4	西側	浜文化層(?)より疊灰白色粘土層	2.46	2.45	1.97	2.00	0.71	0.71	0.10	2.60
166	元助通寶	行書	1068年	Y275	178.7~182.4	西側	鰐石上層	2.07	2.11	1.84	1.86	0.57	0.52	0.10	2.70
167	元助通寶	行書	1021年	Y275	178.7~182.4	西側	鰐石上層	2.35	2.37	2.06	1.99	0.71	0.71	0.09	1.70
168	元助通寶	真書	1063年	Y275	178.7~182.4	西側	鰐石下層	2.44	2.45	2.12	2.07	0.63	0.60	0.13	3.50
169	元助	不明			Y275		鰐石下層	2.34	2.30			0.91	0.91	0.06	1.40
170	新助通寶	真書	1069年	Y275	178.7~182.4	西側	鰐石下層	2.41	2.39			0.70	0.65	0.11	3.00
171	元助通寶	行書	1069年	Y275	178.7~182.4	西側	鰐石上層	2.47	2.47	2.14	2.14	0.68	0.70	0.13	3.30
172	新助	不明			Y275		鰐石上層	2.45	2.44	2.12	2.14	0.63	0.62	0.15	3.90
173	新助通寶	真書	1068年	Y275	178.7~182.4	西側	鰐石上層	2.42	2.41	2.11	2.11	0.72	0.72	0.15	3.80
174	新助通寶	真書	1058年	Y275	178.7~182.4	西側	鰐石下層	2.48	2.48	2.04	2.06	0.68	0.66	0.18	4.70
175	新助通寶	真書	1101年	Z275	178.7~182.4	西側	鰐石下層	2.50	2.51	1.81	1.91	0.59	0.56	0.14	3.90
176	新助通寶	真書	1066年	Y275	178.7~182.4	西側	鰐石下層	2.47	2.47	2.14	2.14	0.68	0.70	0.13	3.30
177	新助元寶	真書	1023年	Y275	178.7~182.4	西側	鰐石下層	0.44	0.44	2.05	2.14	0.71	0.71	0.14	3.10
178	新助元寶	真書	1075年	Y275	178.7~182.4	西側	鰐石下層	2.40	2.39	1.95	2.09	0.59	0.54	0.14	3.20
179	新助通寶	真書	1105年	Y275	178.7~182.4	西側	鰐石下層	2.42	2.41	2.12	2.13	0.65	0.65	0.13	3.00
180	新助通寶	真書	1058年	Y275	178.7~182.4	西側	鰐石下層	2.46	2.44	2.10	2.19	0.75	0.68	0.14	3.80
181	新助通寶	真書	1064年	Y275	178.7~182.4	西側	鰐石下層	2.42	2.40	1.74	1.74	0.61	0.58	0.13	3.20
182	新助元寶	行書	1066年	A265	5X09			3.12	3.23	1.88	1.91	0.63	0.62	0.11	2.50
183	新助元寶	真書	1101年	A265	5X09			3.44	3.40	2.06	2.06	0.69	0.67	0.18	2.00



第23図 中世出土金属製品2（銅錢）

第Ⅳ章 弥生時代の遺構・遺物

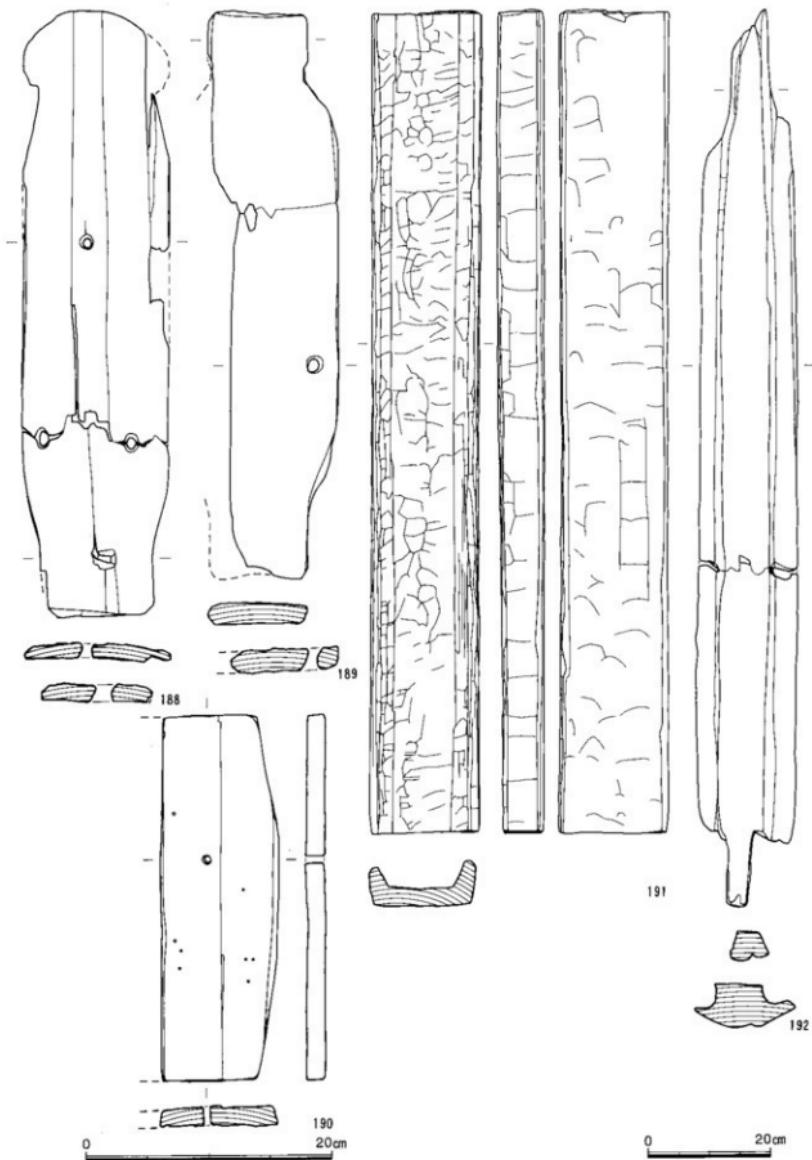
第1節 概 要

弥生時代の遺構面は、第2遺構面と第3遺構面がある。

第2遺構面はⅡ層上面で検出された水田面である。水田面の時期はわずかに出土した土器小片の時期から、弥生時代中期後半～後期初頭にかけて使われていた水田であったと考えられる。本遺構面は今回調査となった1～6区のほぼ全域に広がる（註1）。水田面では大畦畔や小畦畔に伴って、杭列や溝なども検出された。大畦畔は1～6区までの各区で確認されたが、いずれも杭・矢板・横木などで補強されたもので、大量の木製品が出土している。特に3区では杭列を伴う大畦畔と矢板列を伴う畦畔との交点が確認された。出土した遺物は木製品が中心で、土器など時期の決め手になる遺物はごく少量しか確認されなかった。第2～3遺構面の中間で検出された大畦畔（SK02）付近で出土した銅製の金属片（394）は注目される出土遺物である。

第3遺構面はVI層上面で検出された集落遺構面である。集落の存続した時期は、出土した土器が弥生時代中期後半期（有東式）の土器を中心で、後期に属する土器はほとんど見られないことから、ほぼ弥生時代中期後半期に限定できると思われる。集落面の広がりは1区の極く一部に限られている。C列以北では柱穴などの遺構は杭列より北では確認されていない。そのため検出された遺構は集落域の北端にあたり、集落の中心域は南に位置するものと思われる。集落面では掘立柱建物2棟と柱穴群が見つかっている。また詳細な調査を行うことはできなかったが、東壁で自然流路の跡を確認した（第38図）。流路は幅が約5～6mほどあり、北東から南西方向に位置すると思われる。流路内より弥生時代中期後半期の土器片が多量に出土しているが、それ以降の土器が見られないことから、中期後半期までに埋没した河川であると考えられる。柱穴群の周辺でも規模は小さいものの流路跡（SR03）が検出されている。遺構面に伴って出土した遺物は、掘立柱建物跡の柱穴より大型の柱根、柱穴群では礎板などがある。出土遺物の大半は遺構面を覆うV層より出土したもので、弥生土器や木製農耕具、磨製石斧とその未製品、石製工具などがある。なかでも注目されるのは鹿角で作られたと思われるかんざしが出土していることである。

第24図の木製品は、第2遺構面の調査のため2区・3区および6区の表土～中間層除去中に出土したものである。188は6区⑦層～Ⅰ層、189～191は2区⑧層、192は3区⑦層より出土している。188・189は輪カジキ型田下駄の足板と思われる。輪カジキ型田下駄は、静清バイパス建設に伴う発掘調査で池ヶ谷、岳美、上土、川合、瀬名、長崎の各遺跡で普遍的に出土した木製品の一つで、それまでの板状田下駄に変わって、奈良時代以降に揃って登場してくる。こうした傾向が静清平野の北東部で見られることから、瀬名川遺跡で出土した輪カジキ型田下駄も同時期のものと考えられる。190は板状の用途不明木製品。鋭い利器による穿孔が1ヶ所見られ、その周辺にも貫通していない孔が8ヶ所ある。孔の位置から、あるいは田下駄にするための未製品で、孔は位置を決めるための試し孔とも考えられる。191は木樋状木製品。全長は134.5cmある。全面に成形時の加工痕が顕著に見られる。192は全体にかなり風化しているが意図的に加工された木製品である。単独で出土し用途も特定できない。



第24図 ⑧層出土木製品

註1 ただし、1区の南側については、中間層の除去後、第2遺構面の調査に入る前に法面の一部が崩落し危険な状態であったため、協議の結果、安全の確保を第一優先に考え、危険箇所部分の埋め戻しを早急に行うこととなった。埋め戻しを行う前に東壁土層断面図の作成と大畦畔・杭列の位置、大畦畔の一部解体までの記録のみとることができた。しかし結果的に、1区の南側約半分は第2～3遺構面まで未調査のままとなってしまった。痛恨の極みである。

第2節 弥生時代の遺構

本節では弥生時代の第2遺構面と第3遺構面について各遺構の詳細を解説する。まず、1～6区まで確認された第2遺構面は範囲が広いため各区ごとに紹介し、その全体図を第37図に模式図として作成した。出土遺物は各区ごと遺構出土別にまとめた。第3遺構面は第38図以降に掲載した。遺構出土遺物は第40～43図にまとめ、包含層より出土した遺物については器種ごとに第44図以降に掲載した。

大畦畔・杭列・溝状遺構・水田・自然流路・掘立柱建物について、各遺構ごとに計測値などを一覧表にまとめた（第12～17表）。

第2遺構面

1 大畦畔

A SK01（第25図）

II層上面で検出した北東～南北方向へ延びる杭列を伴う大畦畔である。畦畔盛土はほとんど見られなかった。I層（腐植土）を検出した段階すでに杭や横板の上端が露出していた状態であった。横断面でも畦畔の盛土ははっきりしない。杭列に使われていた材は針葉樹の割材、横板は針葉樹の板材であった。杭はほぼ20～50cm間隔で2列打ち込まれ、断面ではハの字状を呈し、杭の下端はVI層の深さまで達していた。横板はこの2列の杭の間に多量に投入されていた。一部解体まで行った東端では杭列の内側にさらに矢板が密に打ち込まれていた。横板や矢板には建築廃材が多く見られる。

195は杭列の補強材として打ち込まれていた鼠返しである。約1/2ほど残存し、畦畔上に露出していた面は風化している。全長を復原すると長さ約93cm×幅78cmほどになるかなりの大型品である。中央部分には一辺が約16cmの方形孔があり、孔の周辺がやや隆起して5.6cmの厚みを持っている。中央から縁辺部に向かって加工された痕跡が両面に顕著に残っている。縁辺にも加工痕がある。加工痕の幅から使われていた工具は刃部が約5cmほどある手斧であることが想定される。スギの板目材を使って作られている製品だが、これだけの材を取るために必要なスギの立ち木は直径1mを超えるであろう。196・197もSK01の補強材の一部である。196は矢板として使用されていた。建築材からの転用品と考えられる。下端部の加工は、もともと出納が作り出されていた建築材の角を落として尖らせ、打ち込みやすくしたと思われる。197は横板に使用された板状木製品である。

B SK02（第27図）

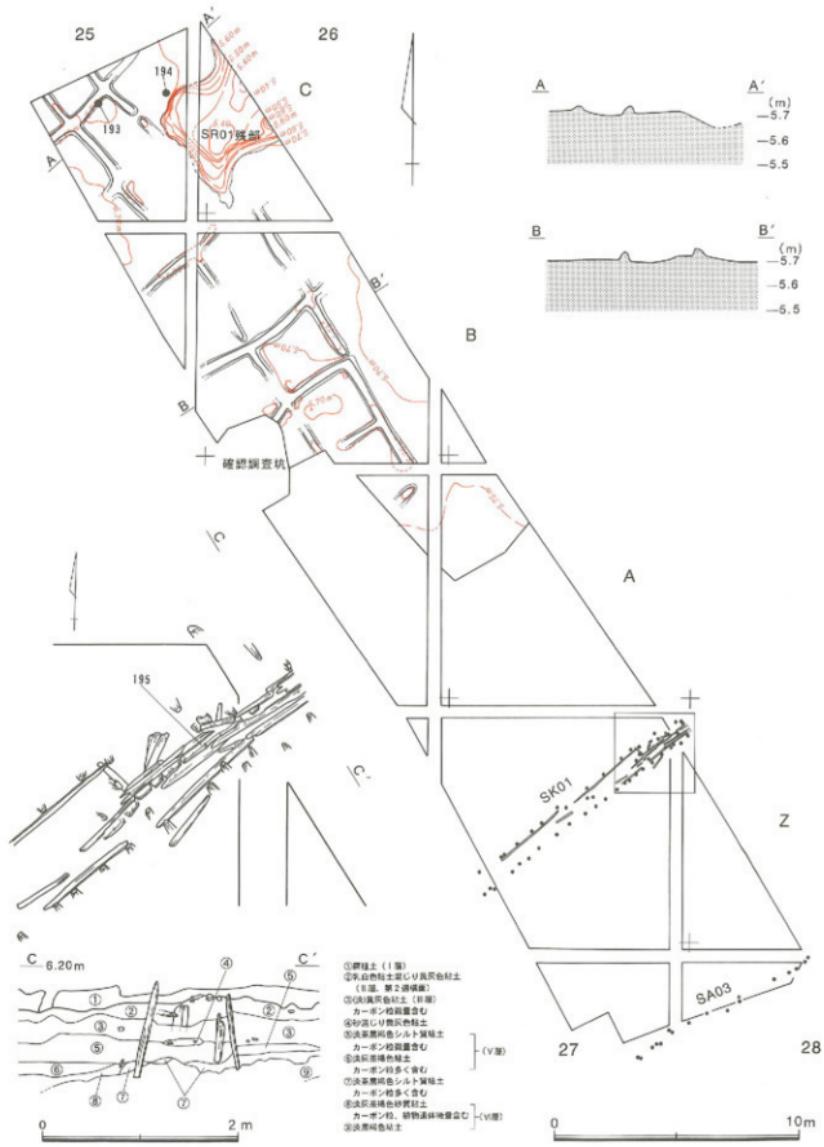
SK02は第2遺構面の解体後に検出された大畦畔である。水田面として捉えることはできず、畦畔のみ検出した。II層水田よりも以前の段階の水田畦畔と考えられる。畦畔盛土はほとんど確認できなかった。ただし横断面では何時期かにわたる盛土がある。杭列にも3～4列ほどあり、レベル差がある。杭列に使われていた材は針葉樹の割材が多く、一部芯持ちの広葉樹杭も見られた。横板は針葉樹の板材や広葉樹の丸木材などであった。杭は断面ではほぼ垂直に打ち込まれ、杭の下端は深いものでVI層まで達していた。横板は杭の間に多量に投入されていた。矢板列は見られない。横板には建築廃材が多く見られる。おそらく水田は一時期のものではなく、下層（VI層上面）で確認された集落の廃絶後、かなり長い期間、

第12表 大畦畔（SK）一覧表〔弥生〕

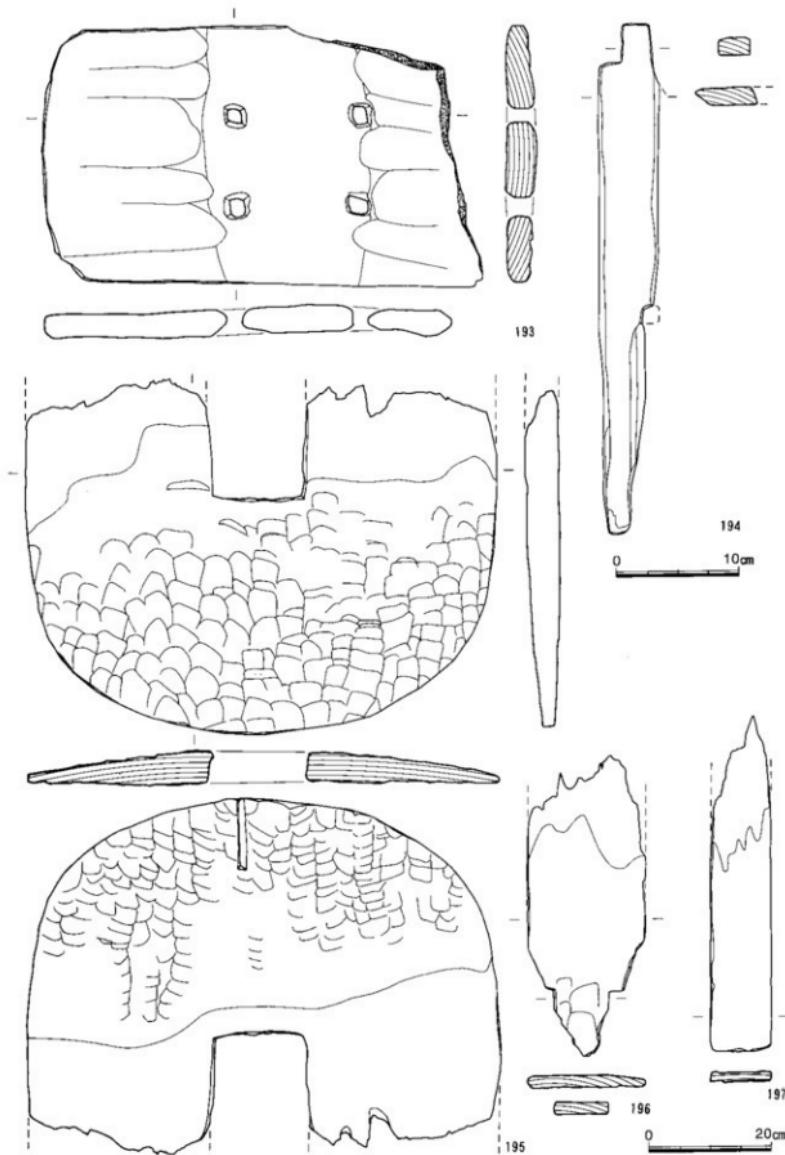
遺構名	調査区	検出面	グリッド	検出長 (m)	検出幅 (m)	高さ (cm)	方向	補強状況	盛土状況	遺物	備考
SK01	1区	第2面	Z27	(11.00)	1.3	16	N51° E (N309° W)	北列17本(1.55/m) 南列24本(2.18/m) 横版(197)、風呂釜 (196)、佐農具		壺(312), 石器(S-69, 70, 72, 73) ・自然遺物(N-113), 風呂釜(195), 矢板(196), 横板 (197), 壺(W-316, 317, 330), 用途 不明木製品(W-313, 319, 335, 344, 348, 351, 365, 369)	範略、断面の み図下 検出巾、高さ は土層断面 図より
SK02	1区	V層 (第2面)	B25 B26 C25 C26					杭、横木(時期差 あり)	ほとんど 確認出来 ず	壺(379, 379, 478, 497), 斧 (359, 366), 土器(P-378, 425, 435, 479, 480, 481, 498, 530), 鋼打石 (S-201), 砥石(92), 石器(S-94, 96, 203), 金属製品(M-52), 銅(198) 様板(200), 構子(206), 矢板(207) 杭(201, 202-1~3, 204, 206, W- 411, 415, 416, 428, 471, 472, 484), 用途不明木製品(199-W-410, 424, 443)様板(W-422, 425, 426, 427, 429, 430, 431, 432, 435, 437, 446, 447), 杖(W-433)	
SK03	2区	第2面	F23S F24S	3.65			N65° E (N295° W)	2列の杭(針葉樹)、 横板、椎葉材	確認出来 ず	田下駆(201), 杖(211), 風呂釜(212 -W-48), 用途不明木製品(210-W- 7, 9, 11, 15, 29, 32, 33, 37), 杖 (W-8, 12, 17, 18, 19, 49, 50, 51, 52, 53)	東側法面土 層断面図4/4
SK04	3区	第2面	H21 H22	6.65	1.2		N54° E (N366° W)	SK05との交点の 南側よりに矢板		田下駆(209, 240, 241-1, 241-2, 横板駆(312, 216-W-13, 22, 26, 103 -105, 107, 109, 110), 横木(214- W-26, 25, 27, 37, 76, 82, 87, 94, 100), 植板(230), 矢板(17, 21, 218, 219, 226, 228, 227-228-W-20, 46, 49, 59, 60, 63, 64, 67, 133), 杖 (216, 220, 221, 222, 224-W-16, 29 -36, 38~44, 48, 50, 51, 54, 58, 61, 62, 65, 66, 68~74, 112, 115~123, 125~128, 130~132 134, 135, 137, 138, 141~144, 168~171, 173, 176, 177, 178, 180~182, 188, 191, 198, 199, 204), 用途不明木製品(223, 229 -W-28, 95, 104, 172, 179, 201), 土 器(1, 2, 3, 13, 4, 46, 47), 石器(S- 2, 7), 自然遺物(N-1)	SK05とはば 直交
SK05	3区	第2面	H21 H22	1.60			N38° W(N322° E)	2列の杭、横板 SK04との交点(南 側)では矢板	ほとんど 残ってい ない	田下駆(238), 杖(231, 232, 233, 234-W-14, 16, 161, 162), 杭(235-W-111, 146, 147, 150~ 155, 157~159, 164~166, 183, 185~187, 192~197, 203, 205), 用途不明木製品(236, 237-W-79 -86), 横木(W-78, 80, 81, 83, 84, 85 -90, 91, 113)	SK04とはば 直交
SK06	6区	第2面	X13	1.00	0.55~0.65 1.05~1.15	7	N67° E (N293° W)	2列の杭の間に埋 椎葉材少し		杭(258), 用途不明木製品(250, 251, 252-W-14, 46, 47, 50, 65, 66, 72, 植板(W-57, 29, 31, 32, 47, 48), 杭(254, 256-W-42, 43, 46, 49, 75, 77, 78, 植板(W-33~40, 42, 44, 45), 矢板(W-36, 67, 68, 69, 70, 71, 74, 植 板(W-46), 土器(P-36, 40))	

第13表 杭列（SA）一覧表〔弥生〕

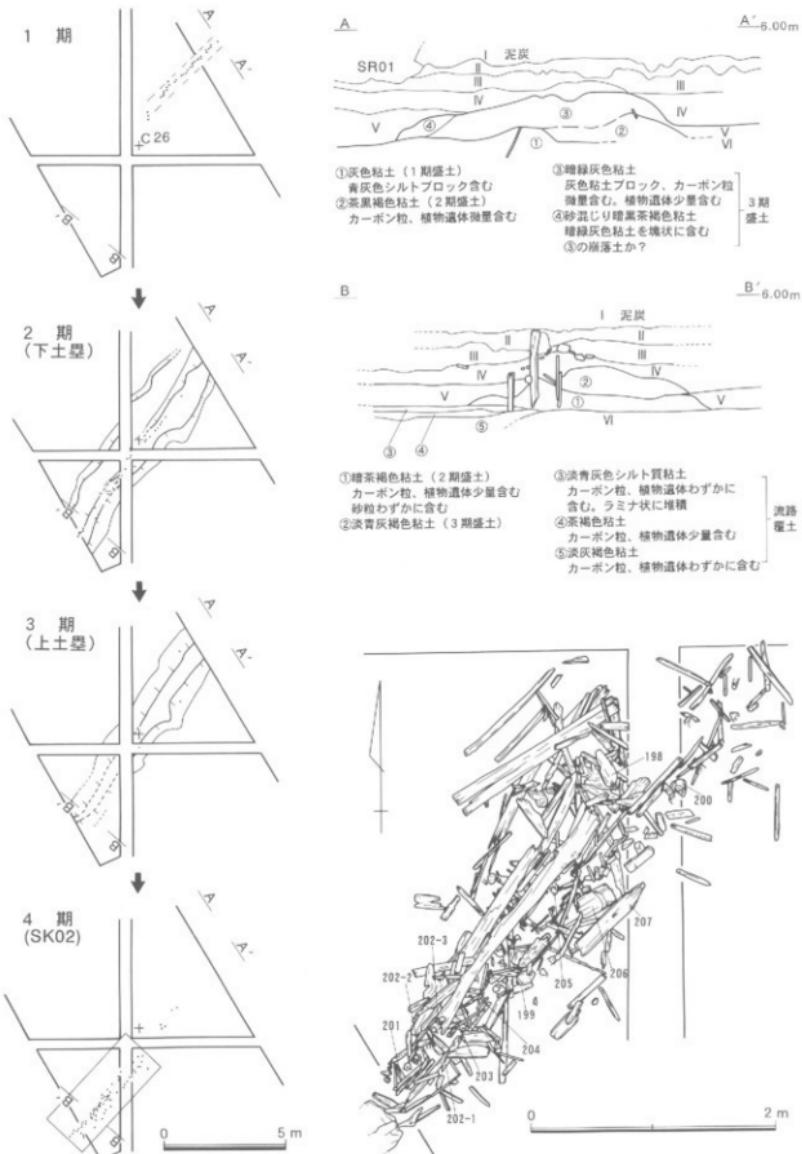
遺構名	調査区	検出面	グリッド	検出長 (m)	検出幅 (m)	方向	杭本数	杭密度 (本/m)	杭の種類	桿本等	出土遺物	備考
SA03	1区	第2水田面	Y27 Y28	8.30		N60° E (N300° E)	17	2.05	針葉樹・柏材	なし	壺(292) 石器(S-12, 13)	傍窓図(一部)のみ作成の 実際の本数はもっと 多い SA→SK?



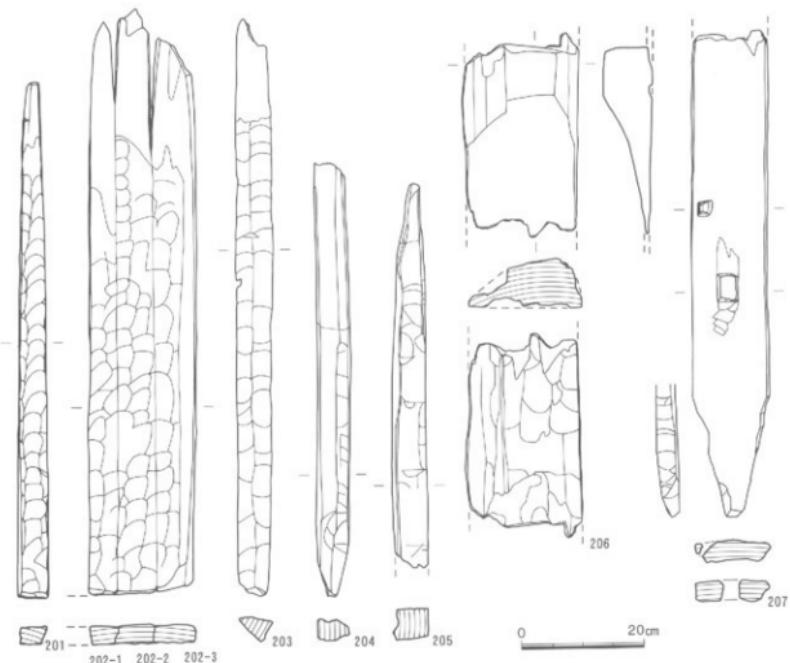
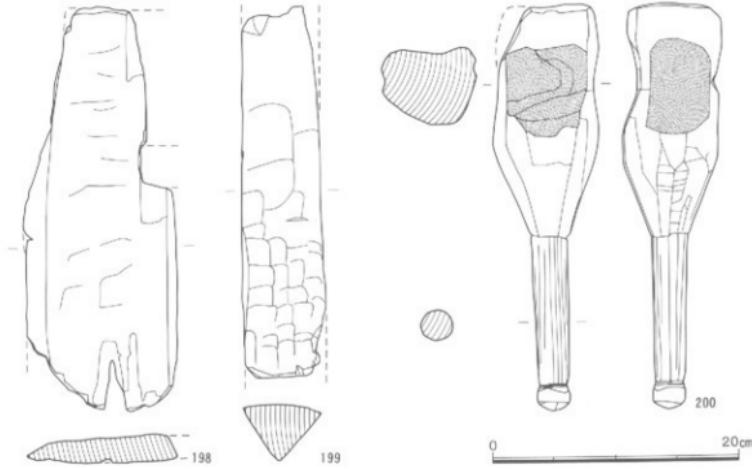
第25図 1区Ⅱ層水田全体図



第26図 1区Ⅱ層水田・大畦畔 (SK01) 出土木製品



第27図 1区大畦畔 (SK02)



第28図 1区大畦畔 (SK02) 出土木製品

水田として利用されていたと考えられる。Ⅱ層水田以前はこの杭列の位置に、ある程度の期間、大畦畔が存在していたものと思われる。土層断面観察より畦畔の推移を第27図にまとめた。特に4期畦畔の杭列内側には建築廃材などの木材が多量に埋め込まれていた。

198～207は大畦畔SK02の杭と横木である。198・199は用途不明木製品。加工痕が顕著に見られる。200は杭の横に突き刺さるように出土した横樋である。ほぼ完形品。カシの割材からつくられている。敲打部は3面使用痕があり、正面側が特に使用により凹んでいる。柄の部分は長さ14.2cmほどある丸柄で、グリップエンドは有頭状につくり出されている。器面には成形時の加工痕がある。201～205は杭である。いずれも針葉樹の割材である。201～202は同一材から分割された杭で、出土状況は列の南西側に集中して打ち込まれていた（4期畦畔）。図化時に接合を試みたところ、202-1～3が接合した。もともとは大型の板材であったと思われる。両面には面調整したときの手斧痕が明瞭に残っている。杭に特徴的な先端の加工はあまり見られない。206・207は横板の一部であった。206は梯子の一部で、裏面には加工痕がある。207は建築廃材から杭に転用されたと考えられる木製品である。中央には長方形の枘孔があり、その左上には斜めに穿られた小孔がある。下端部は両脇から削り杭状に先端を尖らせている。

C SK03（第29図）

大畦畔SK03は2区北側で検出した。後世の洪水流で畦畔の大部分が削り取られている。畦畔盛土はほとんど残っておらず、2列の杭列と横木の一部が残存していた。杭列は断面ではハの字状に打ち込まれていた。横木の一部は流されて散在しているような状態であった。杭列には建築廃材や農耕具が杭や横木として使われていた。

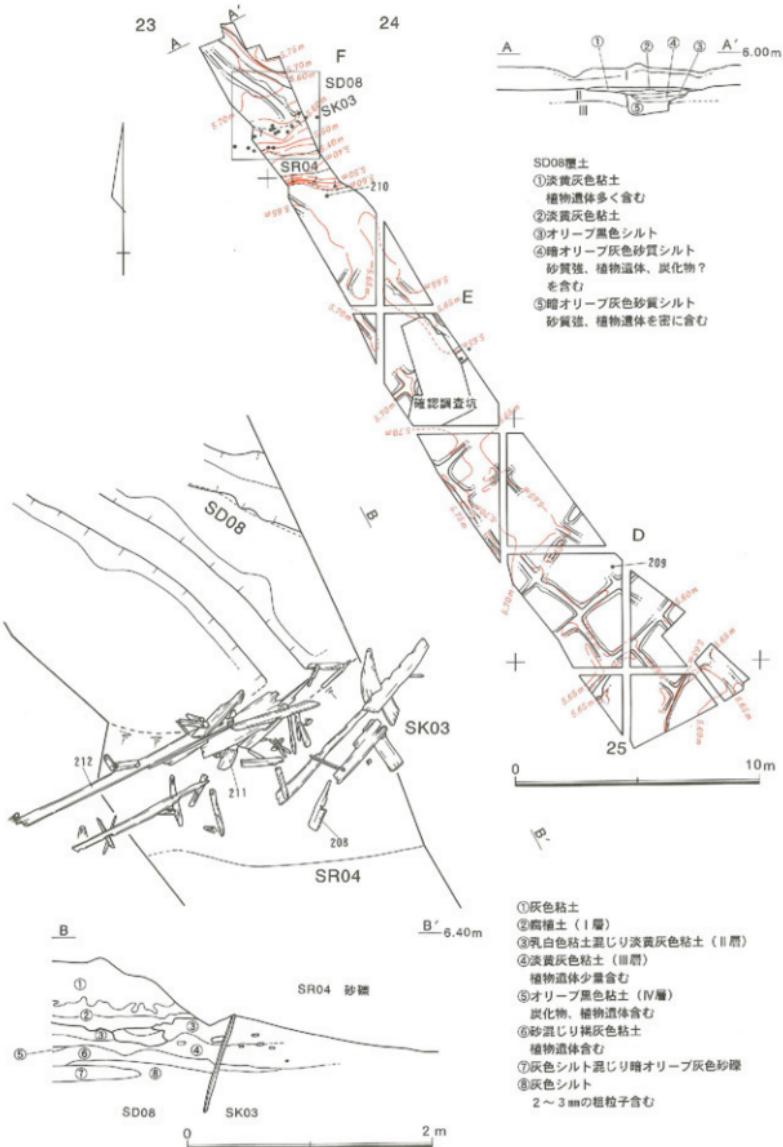
SK03より出土した木製品は第30図に掲載した。208は田下駄。四穴の小判型であったと思われる。両面に加工痕が残っている。穿孔箇所が2ヶ所ある。210～212は杭や横木に利用された建築廃材である。210・212は畦畔横木。210は3面に加工痕があり上部には方形の穿孔が1ヶ所ある。下端部は切断された痕跡が残る。212は壁板材であったと思われる。上端部には出抜がつくり出され、下端部は方形孔の痕跡がある。器面には一辺が約4cmほどの方形孔が2ヶ所あり、その間隔は74cmほどである。右側面側は縁辺部が斜めに面落としされている。さらにそこへ小孔が3ヶ所穿かれている。壁板と壁板を繋ぎ合わせる際の緊縛孔と思われる。裏は全面虫喰い跡がある。211は杭に利用されていた。正面と左側面は手斧により面調整されている。加工痕からは約4cm幅の工具が想定される。柱材であった可能性もある。

D SK04・05（第31図）

3区の南端で検出した。3区は調査途中で、当初計画に加えて、大畦畔の南西側延長を拡張することになった。その結果、SK04の延長部分とともに北東から南西方向に延びる大畦畔にほぼ直交する方向の畦畔が検出された（SK05）。SK04の杭列は概ね2列あり、杭と矢板を伴う列で、ハの字状に打ち込まれていた。杭列の間に大量の建築廃材が埋め込まれていた。SK05も杭列と矢板を伴う杭列であった。やはりハの字状に打ち込まれている。矢板列は隙間なくかなり密に入っている。

SK04・05は杭列を伴う大畦畔であるが、それ以前は水路であった可能性がある。水路であったと想定される部分はSK04の東側からSK05にかけてのL字型の部分である。畦畔と重なり合っていたため、平面での検出はできなかったが、その土層断面を観察すると杭列又は矢板列の間に浅い溝状の落ち込みがある。溝の覆土は上層が粗い砂層で、間に植物遺体の薄い堆積を挟んで、下層は小礫混じりの粗い砂層となっている。土層断面で観察した限りでは、洪水などで一気に削り取られたようなものではなく、むしろ、ある程度の期間、水が流れる溝としての機能を持っていた遺構と考えられる。粗い小礫が沈殿したり、植物遺体が堆積していることから、かなり緩やかな水流であったと思われる。

SK04・05は同じ場所に繰り返し遺構が構築されていることから、かなり複雑に重複している。そのためSD09・10、およびSD11、SD12との新旧関係が不明確になっている。しかし土層断面の観察から、



第29図 2区Ⅱ層水田全体図・大畦畔 (SK03)

当初は杭や矢板列を打ち込んで水路としたが、その後、杭・矢板列に補強材を埋め込み、その上に客土して大畦畔につくり変えられた可能性がある。SK04の西側には溝や砂層は見られない。

出土した木製品は約200点に及び、その中でも加工の顕著な木製品を第32～34図にまとめた。第32図はSK04より出土した杭・横木・矢板である。そのほとんどはもともと建築材であったものである。面調整された加工痕や枘孔、欠き込み痕などが各所に残っている。215・229は壁板材の一部と考えられる。228は矢板状に杭列に打ち込まれていた木製品だが、厚みや幅のある板材であることから扉板や鼠返しのような用途が考えられる。230は横板になっていた長さ2mを超大型品。途中に幅21.2cmの削り込みがある。第33図はSK05より出土した矢板等である。231～234は大型の矢板である。いずれも約30cm幅を持つ。面調整のあるものは少ないが、なかには234のような壁板材からの転用品もある。表面・裏面のそれぞれの左側面側が面落としされている。左右近くにある穿孔は壁板どうしを繋ぐための孔と考えられる。下端部には方形の圧痕が正面側のみ見られる。235～237は棒状又は有頭状木製品。235は削材から加工されたもので先端が尖り摩滅している。237は芯持材に切り込みが入っている。いずれも用途は特定できない。238は四穴田下駄。中央部分がやや隆起している。第34図はSK04より出土した農耕具である。239～241は田下駄である。239は1/2ほど欠損しているが他と同じく四穴田下駄と思われる。242は上部に圧痕があり縫んでいる。

E SK06 (第35図)

大畦畔SK06は6区北端で検出した。杭列は2列あり、補強材に建築廃材や木片が少量入っていた。盛土は僅かに残っている。杭の南列は幅の広い矢板状木製品が等間隔で打ち込まれている。横板は木片のほか壁板と思われる建築材が埋め込まれていた。建築材は法面に深くい込んでいたため、取り上げが不可能であった。建築材は幅20cmほどの板材で先端付近に方形の枘穴がある。

250～255は大畦畔SK06より出土した木製品である。やはり建築廃材を転用したものであろう。枘孔や加工痕、出枘などの痕跡がある。250は上端近くに突起部がある。左右両側面には手斧痕が残る。253は削材からつくられた棒状木製品。

2 杭列

A SA01 (第25図)

1区最南端の排水溝で検出された遺構で、大畦畔SK01から南側に約10mほど離れた位置にある。大畦畔SK01とほぼ並行した方向性を持ち、杭列のみで横木を伴っていない。杭に使われている樹種は針葉樹の削材であった。大畦畔である可能性も考えられるが、大畦畔SK01との距離があまり離れていない点で疑問がある。いずれにしても、詳細を欠くため本遺構は杭列としている。周辺では弥生土器が多数出土した。

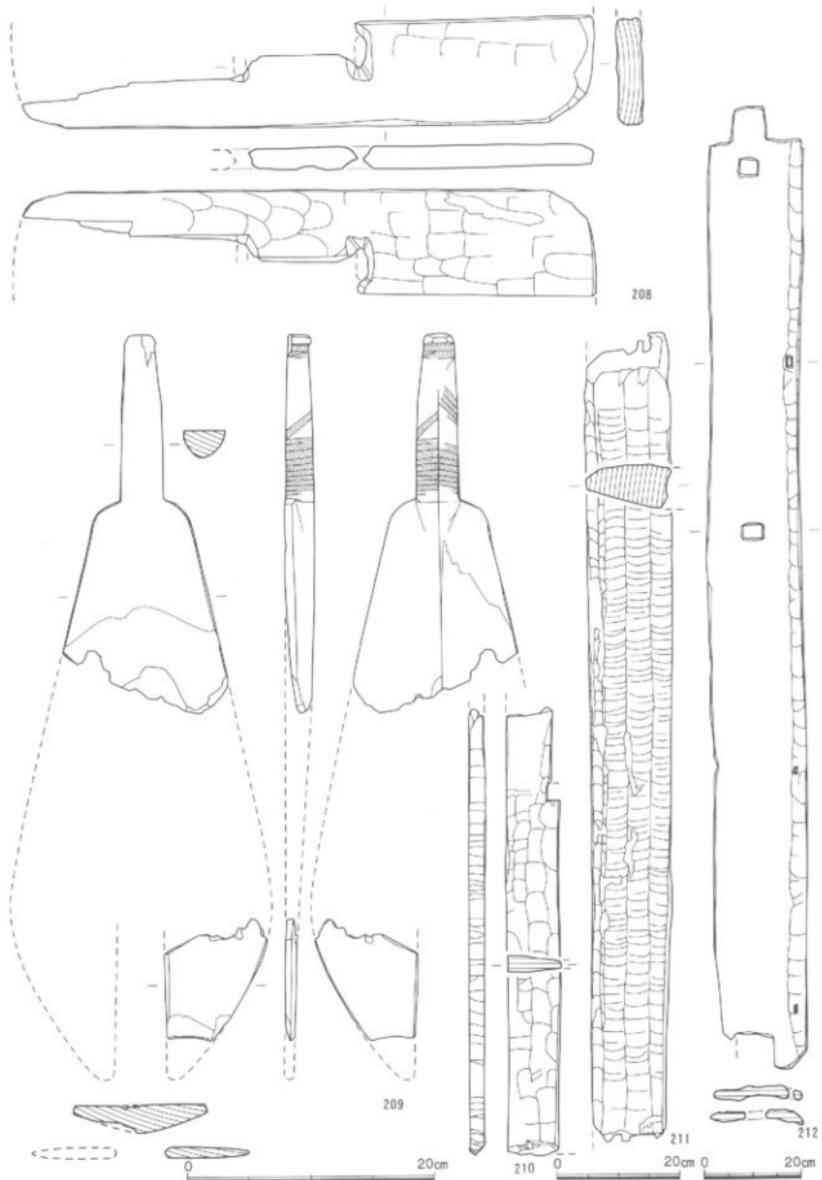
3 水田

水田については第15表に計測値をまとめた。水田面については各区ごとに紹介する。

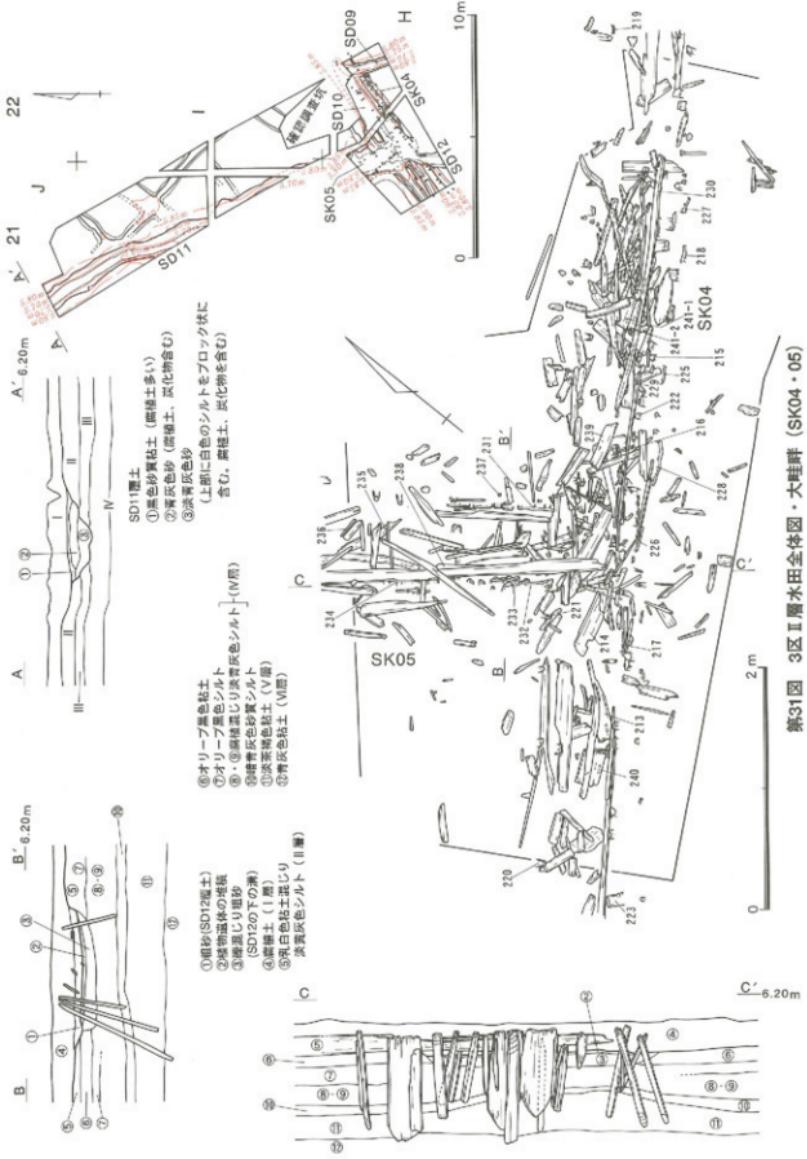
1区

1区での調査は前節で述べたように北半部のみ行った。その結果、南側では大畦畔SK01・杭列SA01、さらに北側に広がる水田面を検出した。南半部は前節による原因で、詳細な調査は行われていない。但し、露出していた大畦畔と南側の排水溝にかかった杭列については、その位置と断面のみ記録を計測した。北半部はⅠ層（腐植土）を除去したⅡ層上面で小畦畔のある田面を検出した。小畦畔は南側で検出した大畦畔とほぼ一致する方向性を持つ。1区の田面は2区で検出したⅡ層水田の南側と繋がる（第37図）。なお、1区の北隅は後世に起こったと思われる洪水によって一部遺構面が削られている。SR01はⅡ層水田面に伴うものではない。

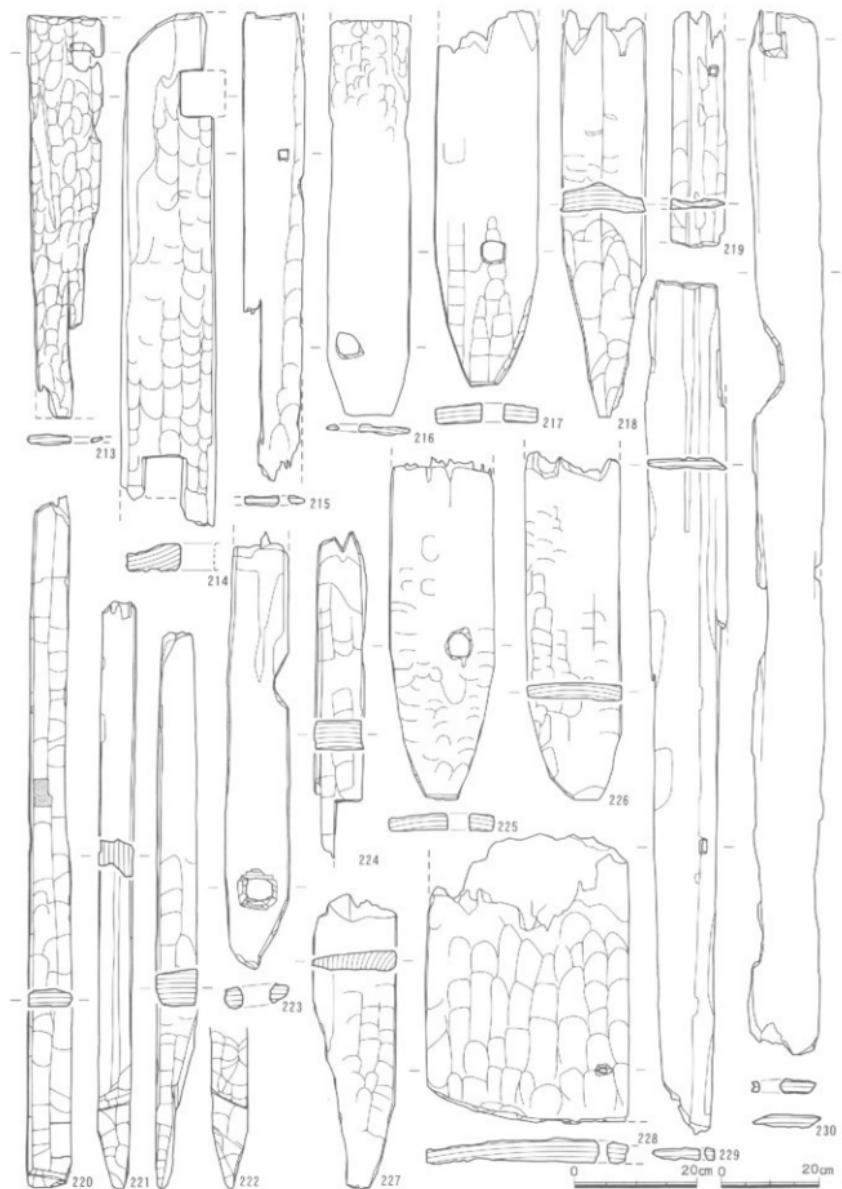
Ⅱ層水田面に伴って出土した遺物は極端に少ない。1区では、大畦畔に打ち込まれた杭・横木の他に、



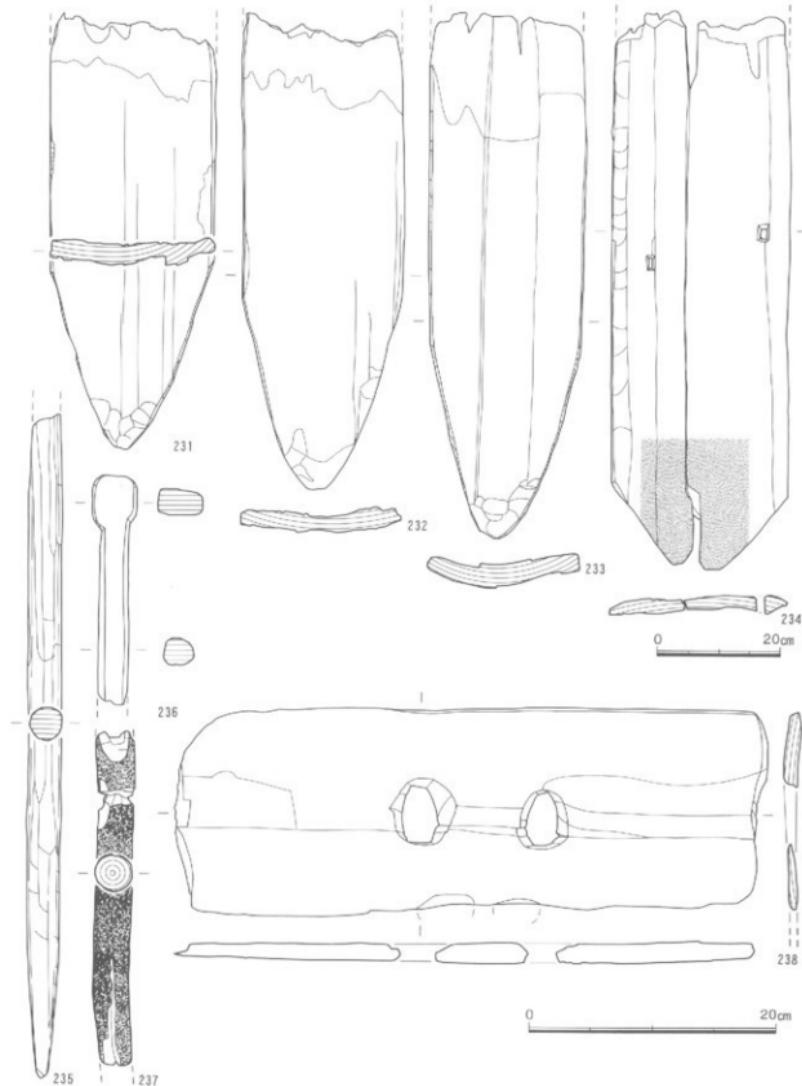
第30図 2区Ⅱ層水田・大畦畔 (SK03) 出土木製品



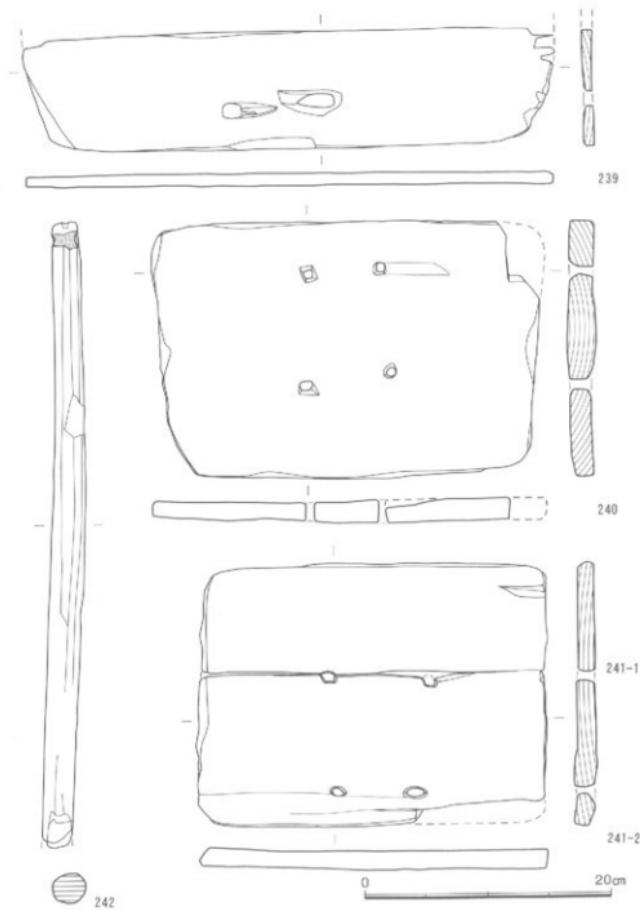
第31図 3区Ⅱ層水田全体図・大畦畔 (SK04・05)



第32図 3区大畦畔（SK04・05）出土木製品1



第33図 3区大畦畔（SK04・05）出土木製品2



第34図 3区大畦畔 (SK04・05) 出土木製品3

小畦畔の上より田下駄が出土している。田下駄(193)は四穴田下駄である。右側面が炭化により欠損している。形状は小判型で木裏面が正面である。左右に向かって削られた加工痕が残り、そのために中央部分がやや隆起している。穿孔はいずれも方形で両面から穿たれている。194は部材と思われる木製品でⅡ層水田面より出土した。出柄がつくり出され中央部分に方形の穿孔がある。

2区

2区で検出された水田も1区とほぼ同一の方向性を持っている。南側は1区のⅡ層水田と繋がる。調査区分のほぼ中央で検出した小畦畔では広葉樹材の杭が1例確認されている。

2区でも水田面上の出土遺物はほとんど見られない。209はⅡ層水田面より出土した曲柄二又鉢である。

膝柄が装着される緊縛部から刃部にかけての部分と刀先の一節が出土した。カシの斜め柾目材を使い、非常に丁寧な作りである。緊縛部には膝柄を固定した時の緊縛痕が明瞭に残っている。同様の二又鉄は瀬名遺跡の弥生時代後期後半～古墳時代前期の水田から完形品などが出土しており、それを参考に全長を復原すると約61cm、幅30cmほどになる。

3区

調査範囲が狭く田面として捉えられなかったが、小畦畔跡を確認した。畦畔の高まりははっきりとしたものではない。畦畔に打ち込まれた杭・横木以外に田面に伴う遺物は、南側の大畦畔周辺で水田耕作土中より弥生土器の小片が出土している。土器は壺・甕の小片である。

6区

調査範囲が狭く田面として捉えられなかったが、小畦畔跡を確認した。調査区のほぼ中央で検出した小畦畔では広葉樹材の杭が1例確認されている（第35図）。検出した小畦畔は大畦畔とほぼ同一の方向性を持つ。

6区水田耕作土層では土器片が数点出土している。ほとんどが小片の状態であったが、図化の可能な5点を第35図に掲載した。243は口縁部破片で口縁部の外面に粘土紐を貼り付け、焼成前に穿孔している。244・245は壺である。同一個体の可能性がある。244は口縁部破片で口唇部に櫛描波状文が施文されている。245は底部破片。底部は木葉痕。246・247は甕の口縁部破片。口唇部にキザミを持つ。その他にも田面より、加工のある木製品が数点出土したが、小片のため用途は特定できない。

4 溝状遺構

溝については第14表に計測値をまとめた。

A SD08（第29図）

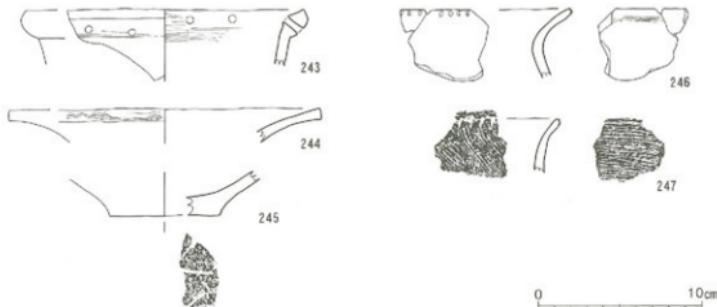
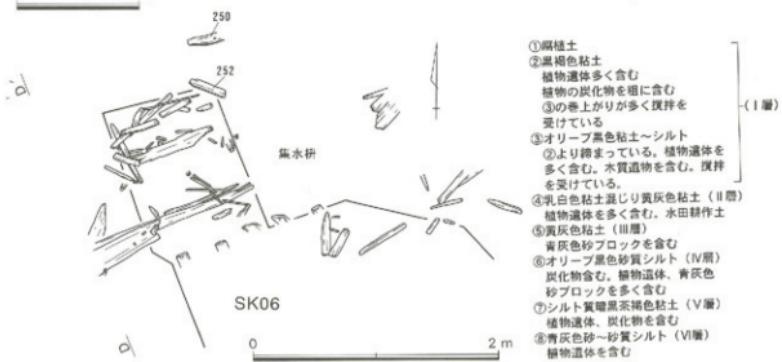
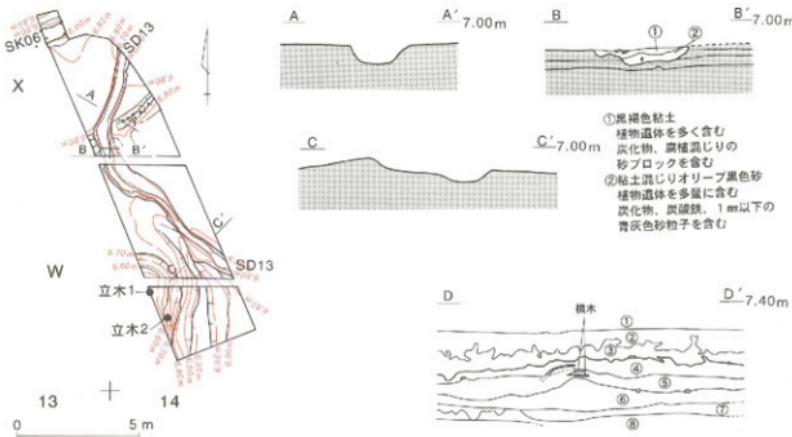
2区大畦畔SK03の北側で検出された。溝は南北方向の小畦畔の方向にほぼ沿うような方向性を持つ。水流方向は南東から北西方向になる。覆土は砂質の強いシルト層である。SK04・05の項で前述したような粗い砂を多量に含む。上層の砂粒子よりも下層の砂粒子のほうがより粗い。また覆土にはどの層にも植物遺体を多量に含んでいる。溝の断面形は逆台形状を呈する。遺物は出土していない。覆土の堆積状況から見て、溝は洪水などで一気に削り取られたようなものではなく、むしろ、ある程度の期間、水が流れる溝としての機能を持っていた遺構と考えられる。粗い砂が沈殿したり、植物遺体が堆積していることから、かなり緩やかな水流であったと思われる。水田が存続した期間とほぼ同時に溝も存在し、水田の廃絶と同じ頃に埋没し、機能を失っていたものと思われる。

B SD09・10（第31図）

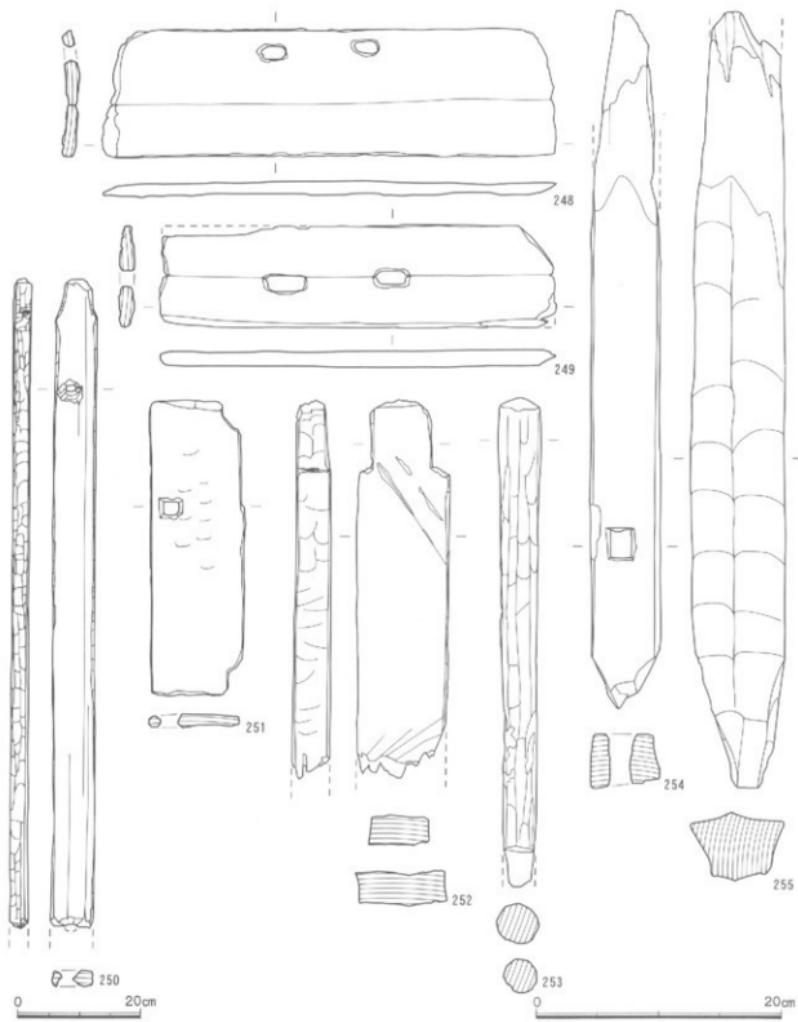
3区大畦畔SK04周辺で検出された。SD10は畦畔のすぐ北側に並行する溝である。一方、SD09はこのSD10に直交するように繋がっている溝である。大畦畔SD04はSD09に切られている。溝は他の調査区で検出されたものと比べて底がレンズ状で深さ約10cm前後の浅い溝である。水流方向はSD09が南方向になる。覆土は砂質の強いシルト層で粗い砂を多量に含む。覆土には植物遺体が多量に含まれている。遺物は少量の木片以外は出土していない。SD09・10は大畦畔SK04とほぼ同時期の遺構と考えられる。

C SD11（第31図）

3区の西側排水溝にほぼ並行するように検出された溝である。底がレンズ状で浅い溝である。水流方向は南方向になる。覆土は砂層で上層は粒子の細かい砂で、下層は粗い砂を多量に含む。覆土には植物遺体や炭化物、炭酸鉄が多量に含まれている。SD10やSD12との接点は不明である。溝の底部より弥生土器の小片が出土している。土器は摩滅しているが甕の破片と思われる。覆土の堆積状況から見て、溝は洪水などで一気に削り取られたようなものではなく、ある程度の期間、水が流れる溝としての機能を持っていた遺構と考えられる。粗い砂が沈殿したり、植物遺体が堆積していることから、かなり緩やかな水流である。



第35図 6区Ⅱ層水田全体図・大畦畔（SK06）、Ⅱ層水田出土土器



第36図 6区Ⅱ層水田・大畦畔 (SK06) 出土木製品

な水流であったと思われる。水田畦畔の方向とは若干異なるが、水田が存続した期間とほぼ同時期に溝も存在し、水田の廃絶と同じ頃に埋没し、機能を失っていたものと思われる。

D SD12 (第31図)

3区大畦畔の西端の南側で検出した。畦畔との新旧関係は今一つはつきりしない。溝は他の調査区で検出されたものと比べて底がレンズ状で深さ約10cm前後の浅い溝である。水流方向は南方向になる。覆土は砂質の強いシルト層で粗い砂を多量に含む。覆土には植物遺体が多量に含まれている。遺物は弥生土器の小片と小さな木片が出土している。

E SD13 (第35図)

6区内を大きくくの字に曲がるように検出された。溝は畦畔の方向性とは一致しない。水流方向は東から西方向に流れ、途中大きく蛇行し北方向へとほぼ90°変わる。覆土は砂質の強いシルト層である。下層は粗い砂を多量に含む。上層の砂粒子よりも下層の砂粒子のほうがより粗い。また覆土にはどの層にも植物遺体や炭化物、炭酸鉄を多量に含んでいる。溝の断面形は北側で逆台形状、南側で浅いレンズ状を呈する。遺物は溝の覆土から底部より木片が出土している。248・249は溝の北側の覆土より出土した田下駄と思われる木製品である。248は四穴田下駄であろう。覆土の堆積状況から見て、溝は洪水などで一気に削り取られたようなものではなく、むしろ、ある程度の期間、水が流れる溝としての機能を持っていた遺構と考えられる。粗い砂が沈殿したり、植物遺体が堆積していることから、かなり緩やかな水流であったと思われる。水田が存続した期間とほぼ同時期に溝も存在し、水田の廃絶と同じ頃に埋没し、機能を失っていたものと思われる。

5 自然流路

A SR01 (第25図)

1区で検出された後世に起こったと思われる洪水流である。Ⅰ層が切られていることから、腐植土が堆積して以降に起こったものであろう。覆土は砂を多量に含んだ粘土層で、木の葉などの腐植物も多く混じっている。遺物は木片以外出土しなかった。

B SR04 (第29図)

SR01と同様、後世に起こった洪水流でできた流路と思われる。覆土は砂礫層で地下水が多量に流れ出している。この流路によりⅡ層水田の大畦畔SK03の大半が削り取られている。このような洪水流は上層でも見られることから、かなり強い力で繰り返し押し流された洪水流があったと考えられる。

第14表 溝状遺構（SD）一覧表〔弥生〕

遺構番号	調査区	検出層位	グリッド	検出長 (m)	検出幅 (m)	深さ (cm)	方向	遺物	備考
SD08	2区	第2面	F23	3.50	35~66	15~20	N54° W	石器(S2)	やや南面に劣化
			F24		22~31				
SD09	3区	第2面	H22N	1.75	40~50	4~11	N16° W	用途不明木製品(W-12,18,19) 土器(P-6,7,8)	SK04を切る
					18~31				
SD10	3区	第2面	H22N	3.10	98~115	10~13	N65° E (N305° W)	鐵(N-10)、馬具(N-21)、 用途不明木製品(W-7,8,9,11) 土器(P-15,31)	
					68~82				
SD11	3区	第2面	J21S	12.10	60~88	13~23	N27° W	用途不明木製品(W-1~6) 土器(P-9~12)	南便は調査区外 (SD12に連絡か?)
			J21		25~40				
SD12	3区	第2面	H21N	3.60	40~70	8~14	N10° W	土器(P-29,30,49,93)	SD11と連絡か? SK04-05を切る
			H22N		28~40				
SD13	6区	第2面	W14	10.9	0.40~0.95	6~18	N27° E N44° W	田下駄(248,249)、用途不明木 製品(W-52,53,55,61,63,64)、 土器(P-23,24)、石器(S-1)、自然 遺物(N-2)	X-14付近で弯曲する 流れの方向は南→北
			X13-14		0.10~0.45				

第15表 水田(ST)一覧表〔弥生〕

地積名	調査区	グリッド	形状	面積 (m ²)		平均標高 (m)	遺物	備考
				検出面	復元			
ST01	1区	B26S A26N		1.76		5.71		
ST02	1区	B25-26S		7.03		5.71		
ST03	1区	B25-26N-S		9.18		5.71		
ST04	1区	C25S B25N		6.20		5.71		
ST05	1区	C25S		3.09		5.72		
ST06	1区	C25S		0.80		5.72		
ST07	1区	B26A A26N		4.79		5.73		
ST08	1区	B26S	正方形		5.81	5.71		
ST09	1区	B26N-S	正方形		5.48	5.70		
ST10	1区	B26N-S B25N C26S	長方形	11.08		5.72		
ST11	1区	B25-26M C25-26S	(長方形)	7.36		5.71		
ST12	1区	C25S	長方形	4.92		5.71	田下駆(193)	
ST13	1区	C25N-S	(長方形)	1.63	7.16	5.71		水田18 (2区) と同一区面か?
ST14	1区	B26N-S				5.70		南側畦畔が未検出の為面積計測不可
ST15	1区	C26S B26N		8.20		5.71		
ST16	1区	C25N				5.71		SR01で南側畦畔削平の為面積計測不可
ST17	1区	C25N		0.32		5.71		
ST18	2区	C25N	(長方形)	0.33	7.16	5.67		水田13 (1区) と同一区面か?
ST19	2区	D25S C25N	(不整形)		5.06	5.64		
ST20	2区	D25S C25N		2.27		5.65		
ST21	2区	D25S		1.84		5.66		
ST22	2区	D24N-S D25S		1.39		5.70		
ST23	2区	C25N		3.19		5.60		
ST24	2区	D25S C25N	長方形	2.11	2.65	5.63		
ST25	2区	D25S	台形		3.67	5.61		
ST26	2区	D25S	台形		3.52	5.63		
ST27	2区	D24-25N-S	不要形		6.30	5.64		
ST28	2区	D24N	台形		1.89	5.69		
ST29	2区	E24S D24N	(長方形)	2.42	4.13	5.69		
ST30	2区	E24S		0.85		5.70		
ST31	2区	D28S C25N		0.52		5.61		
ST32	2区	D25S		0.29		5.60		
ST33	2区	D25S		1.97		5.60		
ST34	2区	D25N-S		1.43		5.58		
ST35	2区	D25N		3.27		5.62		
ST36	2区	E24S		5.92		5.65		
ST37	2区	E24N-S	(不整形)	5.18	7.77	5.64		
ST38	2区	E24N		1.77		5.66		
ST39	2区	E24S E24N-S		7.65		5.63		
ST40	2区	F23-24N-S		2.58		5.70		
ST41	2区	F23-24N-S		1.77		5.70		水田42 (2区) と同一区面か?
ST42	2区	F23-24N-S		1.00		5.72		水田41 (2区) と同一区面か?
ST43	3区	H21N-S		0.21		5.76		水田44-45 (3区) と同一区面か?
ST44	3区	H22N		2.85		5.79		水田43-45 (3区) と同一区面か?
ST45	3区	H22N		0.65		5.81		水田43-44 (3区) と同一区面か?
ST46	3区	H21N		1.83		5.83		
ST47	3区	I22S H22N		1.88		5.86		
ST48	3区	I21-22S		6.75		5.88		
ST49	3区	I21N-S		3.71		5.87		
ST50	3区	I21N		0.79		5.85		
ST51	3区	I21S I21N		1.77		5.82		
ST52	3区	I21-22N		0.89		5.86		
ST53	3区	I21N		2.16		5.88		
ST54	3区	J21S I21N		3.20		5.85		
ST55	6区	W13-14N X14S		0.29		6.77		
ST56	6区	X14S W14N		2.59		6.76	用途不明木製品(W-57.62)	
ST57	6区	X14S		1.52		6.81		
ST58	6区	X13-14S		6.91		6.82		
ST59	6区	X13N		0.28		6.86		

6 その他の遺構

第2遺構面と第3遺構面との間で土壙状の高まりを検出した。大畠畔SK02同様、遺構面として捉えることはできなかった。大畠畔SK02とほぼ平行した方向であり、土壙も大畠畔である可能性がある。しかし特に杭列などで補強されている状況は見られなかった。土壙上では壺・甕などの弥生土器片のほか、ノミ型石斧(420)も出土している。

1区から6区までのⅡ層水田面全体を概略図にしてまとめた(第37図)。

大畠畔の方向性は、東西方向は各区ともほぼ一致したものとなっている。東西方向の杭列は4ヶ所検出しているが、特に規則性があるようには見られない。今回南北方向の杭列が確認されたのは3区で拡張した部分で検出した一部のみである。小畠畔は大畠畔の間を埋めるように検出されている。

調査の結果、水田は調査区全体に広がっていることが確認された。今回の調査区は北街道を挟んで約150mほどの距離が離れているが、同一時期の水田面は周辺一帯にも広がっていると考えられる。北西方向にある瀬名遺跡とは約300mほど離れていることから関連性は薄いと思われるが、瀬名遺跡1区22層でほぼ同時期の水田跡が検出されている。今回検出した大畠畔には特に等間隔である様子は見られず、水路と思われる溝も水流方向は必ずしも一致しない。規格性を持ち整然と並んだ水田というよりも、むしろ、自然の地形を上手く利用してつくられた水田であったと考えられる。

調査区の幅が狭く、十分な調査となり得なかつたが、この時期に静岡平野の北東部で、統一した方向性を持つ大畠畔を伴った水田がかなり広い範囲でつくられていたことが想定される。

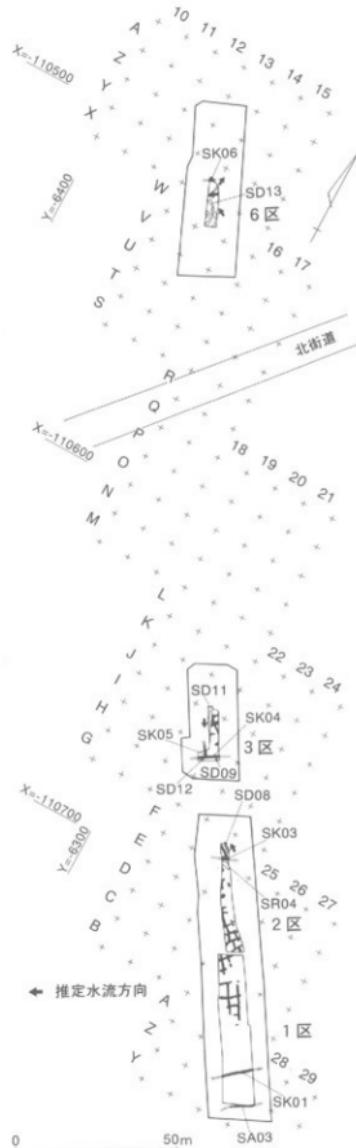
第3遺構面

1 挖立柱建物跡

第3遺構面では2棟の掘立柱建物が検出された。建物の計測値や出土遺物などは第17表にまとめた。

A SH03(第39図)

掘立柱建物跡SH03はVI層上面で検出した。建物のなかでは最北端に位置し、これより北側に建物



第37図 Ⅱ層水田全体図

の柱穴跡は見られない。掘立柱建物の規模は4間×1(2)間と思われる。桁行は4.0mで、柱間は1.0mである。梁行方向には間柱の痕跡が見られない。東側の桁行が排水溝から掘削法面に掛かっており、これより以東の状況は不明である。柱穴は楕円形を呈し、10ヶ所ある各柱穴には柱根を伴う。このすべての柱根が北東方向（直立から約22°）に傾いている。柱根下に礎板などの施設はない。柱根以外の遺物は出土していない。柱穴の掘りかたは平面では必ずしも明瞭ではなく分かりにくい。断面では柱根近くに下層の青黒色粘土が混じり合っている状況が確認できる。しかし④層以下の堆積土に乱れが見られることから、柱根は掘りかたよりも沈んでいる可能性がある。

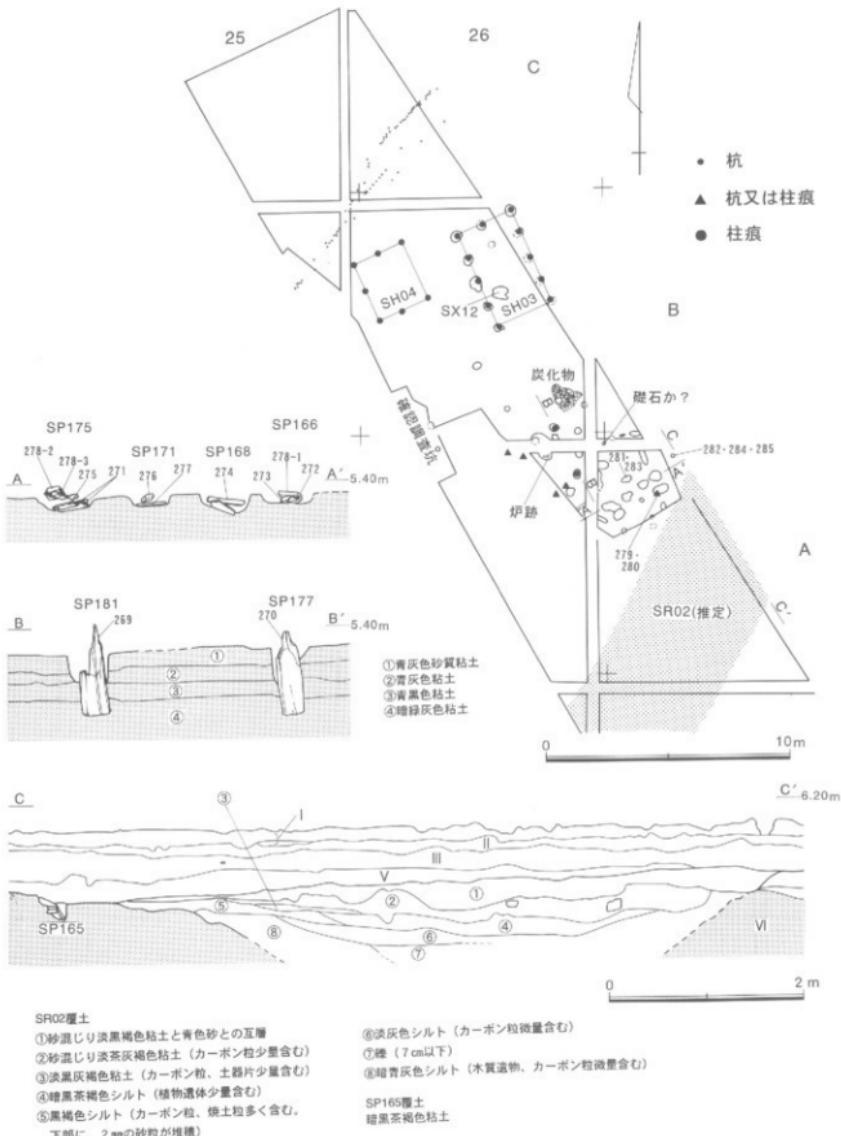
柱根は第40・41図256～268に1/10縮尺で掲載した。柱根の平均直径は約20cmである。10本中、8本がスギ材、2本がタブノキ材であった。また10本のうち6本が芯持ち材、4本が割材を使っている。梁行方向に相対する柱根ごとに形状が異なる。SP189・194の柱根は下端部より20cmほど上の周囲が切り込まれている（263・264）。SP188・193の柱根は267・268のように下方を二股につくっている。268には股部分に265が差し込まれていた。SP187・192は丸太材を使っている（260・262）。262はタブノキ材で樹皮が残っている。SP186の柱根（259）には添木（257・258）が両脇に伴って出土した。258は上部が欠損しているため全体形は不明だが別の用途に使われていた製品からの転用と思われる。SP191はスギの芯持ち材である。全体に著しく風化している。SP185・190の柱根はいずれも割材を使っている。256は左右両側面が手斧で面調整されている。下端部は切断痕がある。266は全面に加工面がある。上下の端部は風化している。

B SH04（第39図）

掘立柱建物跡SH04はVII層上面で検出した。遺構面調査時にはSP197・198・199のみ確認できたが、遺構解体時にさらに4ヶ所の柱根が出土し、2間×2間の掘立柱建物であることが分かった。桁行は2.5mで、柱間は1.25m、梁行は2.2mで、柱間は1.1mである。東側の桁行方向には柱の痕跡が見られなかった。柱根はすべて芯持ちの広葉樹材で、直径は約6~8cm前後であった。出土時にはすでにかなり脆くなってしまっており、図化には堪えられなかった。SH03と同様に全体が北東方向に傾いている。柱根下に礎板などの施設はない。また本遺構に伴って出土した遺物はない。主軸方位が掘立柱建物SH03とほぼ一致していることから、同時期の建物跡と考えられる。

第16表 自然流路（SR）一覧表〔弥生〕

流路名	調査区	検出面	ダクト	横出長 (m)	横出幅 (m)	深さ (cm)	方向	覆土	遺物	備考
SR01	1区	第2面 (下剥面 は上層)	C25 C26	4.0	3.6~5.6 2.1~3.3	最大45	北東→南西	東側下層土層 5/5参照	用途不明木製品(W-383) 土器(P-346,360)	自然流路のヨドミ状 第2水田面を削平 後出土、深さは第2 面上面での数値
SR02	1区	V層	A27	—	6.8 4.6	8.0以上 底まで 確認出来ず	—	1区東側下層土 層5/2,5/3,5参 照	土器(P-345,377)	東側法面断面のみ (圖下)
SR03	1区	V層	C26 B26 B27	6.7	0.6~2.1 0.8~0.9	10~15	(南西→北東) ほとんど高 低差なし	1区東側下層土 層5/3,5参照	鉛(407), 横(410), 用途不明木製品(W- 387,483,521), 立木(W-434)、石斧 (438), 鉄打石(466), 刃片(467), 石器(S- 114,132,133,134,142,154,155,157, 184,185,186,187), 瓦部 (371,370,382,383) (289,432,470,287,302,474,382), 漆 (296), 土器(P-426,469,531), 自然遺 物(N-125,139,140,142,143,149)	土器(?)に伴う北側 の拂か?
SR04	2区	第2面 (下剥面 は上層)	E24 F24	2.5	2.0~3.0 0.8~0.9	20~25	西→東 東浦で窓下 か?		土器(P-1,2,3,4,5,6,7,11,14)	第2水田面(大蛇坪S X03)を削平 後出土、深さは第2 面上面での数値



第38図 1区VI層集落面全体図・自然流路（SR02）土層断面図

C その他の柱穴（第38図）

第3遺構面で検出した柱穴は、確認調査で出土した柱穴跡も含め約40ヶ所以上あった。掘立柱建物跡以外には約25ヶ所の柱穴がある。柱穴の覆土には2種類の堆積土が見られた。上層のV層（シルト質暗茶褐色粘土）が含まれる柱穴と、青灰色砂質粘土が覆土となる柱穴がある。覆土の違いが時期差に繋がるかどうかは、いずれも同一面で検出された遺構であり、覆土内から出土した遺物も少なかったことから、結論に結びつけることは難しい。しかし南側で検出した柱穴群は密集度が高いことから建物の建て替えがあったことは充分に想定できる。

建物跡として確定できなかったが、関連性が高いと思われる柱穴列について、第38図に掲載した。SP166・168・171・175は礎板を伴う柱穴列で、方位58°、柱間は約80~90cmと狭いが直線状に並んでいる。柱穴の覆土はやや砂混じりの暗茶黒褐色粘土で少量の炭化物を含む。第42図に掲載した木製品が柱穴列より出土した礎板である。関連性が高い要因はSP166とSP175から出土した礎板が接合したことである。271は梯子から礎板へ転用されている木製品。表面が一部炭化している。梯子の下端部と思われる。272・273は278-1の下に2つ並んだ状態で出土した。全面加工痕で上下切断された痕跡がある。275・276は田下駄を礎板に転用している。いずれも四穴田下駄。276は中央部分が隆起している。裏面は柱圧のためか凹んでいる。277も加工によって中央部が隆起している木製品で、田下駄の未製品とも考えられる。278-1~3は板状木製品である。278-1はSP166、278-2・3はSP175より出土した接合例である。厚さ4.6cmの板材で右側面側は手斧により削られてやや薄くなっている。板材の用途は不明。中央に両面から切断された痕跡が残っている。

SP177・181は同じような板材が出土した柱穴である。269と270は幅24cm前後、残存長は約86~96cmの板状木製品であるが、柱根であるとは考えにくい。また矢板列状に並ぶ様子も見られない。269は全面に手斧痕が残り下端部に切断痕がある。270も下端部に切断された痕跡があり、表面は炭化している。遺構の掘りかたは非常に分かりづらく断面でも板の下端部までの底は確認できなかった。掘立柱建物SH03と同様の状況が見られる。

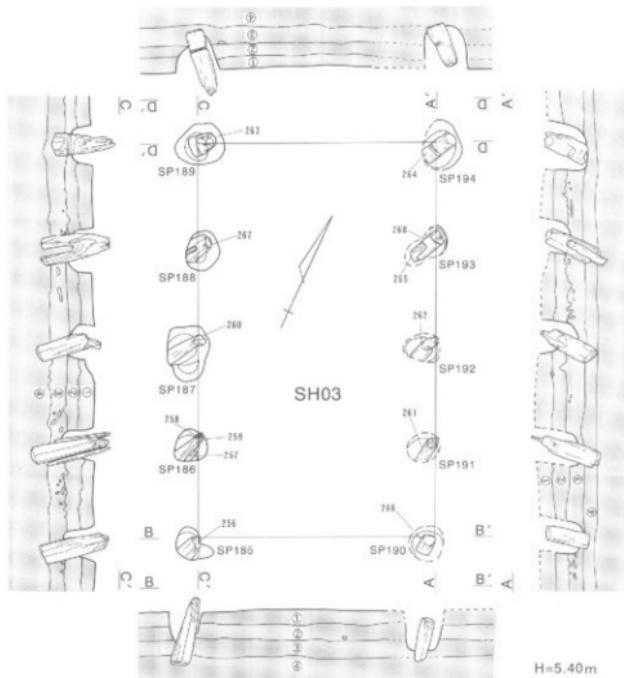
その他、A列東西トレーンチで出土した礎は台石・砥石である。SP167では279・280が出土している。280は梯子の一部か。SP170では281・283が出土した。281は裏面全体が炭化し全形が不明となっている。中央は柱の圧痕と思われる凹みがある。東壁断面でかかったSP165にも礎板（282・284・285）が出土している。284は四穴田下駄である。半分以上炭化している。中央部分にはやはり柱の圧痕と思われる凹みがある。

2 自然流路

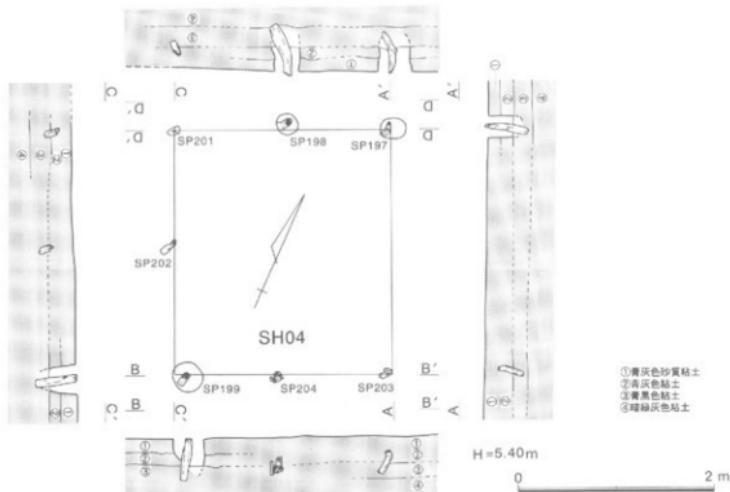
A SR02（第38図）

第17表 掘立柱建物跡（SH）一覧表〔弥生〕

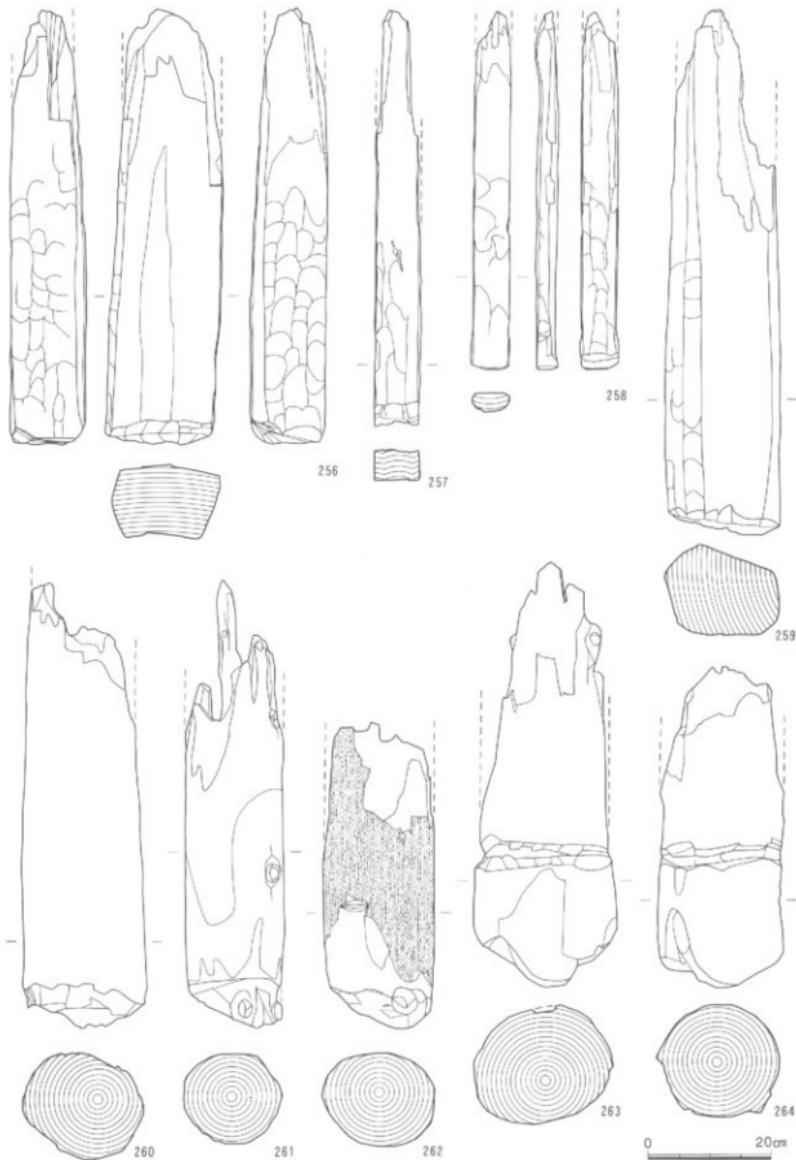
遺構番号 SH	調査区 1区	グリッド B26	横断面 第3遺構面	規 模			主軸方位 N 25° W	検出面 標高(m)	遺 物	備 考
				間×奥 4×1(2) 横円	朽行(m) 4.00 1.00	梁行(m) 2.40 2.40(1.20)				
SH03	1区	B26	第3遺構面	4×1(2) 横円	4.00 1.00	2.40 2.40(1.20)	N 25° W	5.14	SP186(柱根256); SP187(柱根260, 深さ257-258); SP187(柱根260, 深さ304); SP188(柱根267); SP189(柱根263); SP190(柱根266); SP191(柱根261); SP192(柱根262); SP193(柱根268, 深さ265, 土器P-527); SP194(柱根294)	すべての柱根が北東方向(直立から約22°)に傾く 柱根列はトレーンチ内
SH04	1区	B25 B26	第3遺構面	2×2 横円	2.50 1.25	2.20 1.10	N 24° W	5.10	SP197(柱根W-491); SP198(柱根W-490); SP199(柱根W-489); SP201(柱根W-509); SP202(柱根W-510); SP203(柱根W-511); SP204(柱根W-512, 木片W-513)	



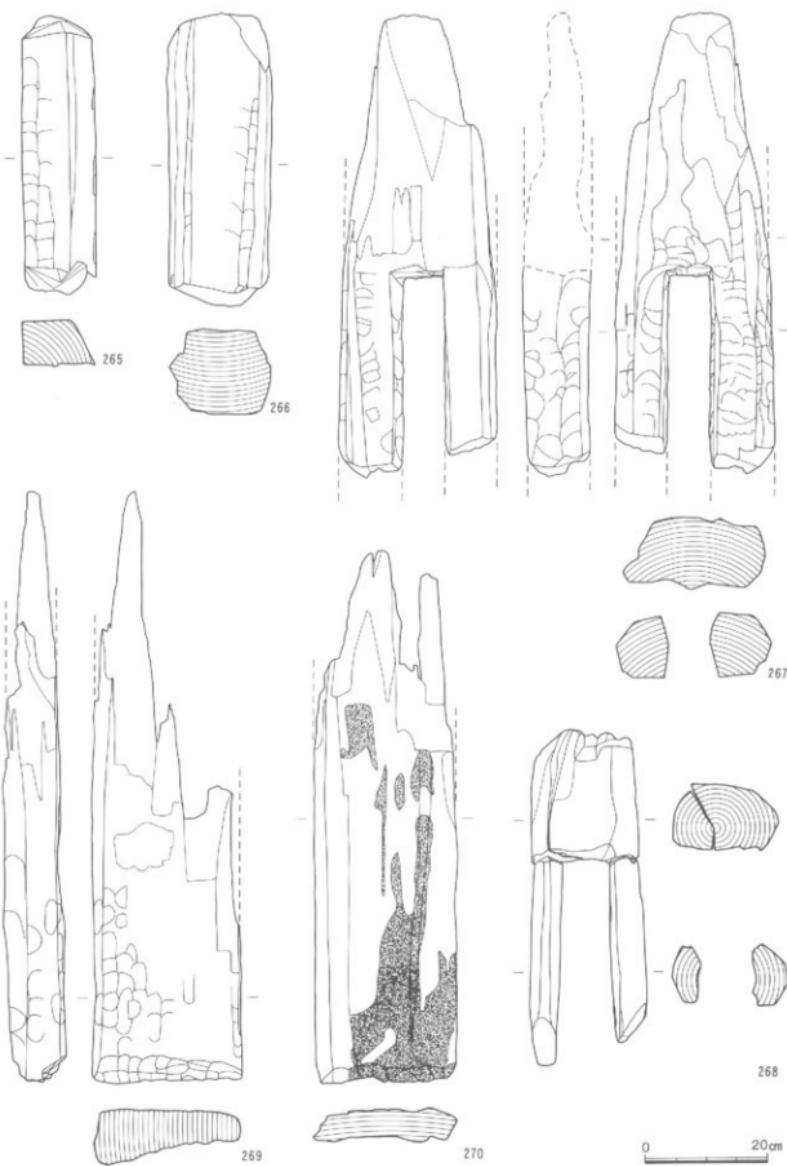
H = 5.40m



第39図 弥生時代掘立柱建物 (SH03・04)



第40図 弥生時代掘立柱建物（SH03）出土木製品1



第41図 弥生時代掘立柱建物（SH03）出土木製品2

東壁面で自然流路の跡を確認した。断面調査のみで平面調査は行っていない。断面による調査結果、流路は幅が約5~6mほどあり、柱穴群の南側、北東から南西方向に位置すると思われる。排水溝内であったため流路の底面までの確認はできていない。流路内上層より弥生時代中期後半期の土器片が多量に出土しているが、それ以降の土器が見られないことから、弥生時代中期後半期までに埋没した河川と考えられる。集落面があった時期にも流路は存在していたと思われるが、V層に被覆されていることから、埋没が進んで浅くなり、かなり早い時期にその機能を失っていると考えられる。底に近い覆土は礫層で地下水が通っている。

B SR03

柱穴群の周辺でも規模は小さいものの流路跡（SR03）と思われる遺構が検出されている。上層で検出した土壙状の高まりの北側に沿うように通っていたことから、検出面は本遺構面よりも前の時期と考えられる。遺構はごく浅い溝状で、柱穴群のすぐ北側、北東～南西の方向性を持つ。覆土は植物遺体を多く含む砂質シルト層である。人為的なものではなく自然のものであろう。SR03内からは土器や石製品、木製品、木片が多く出土している。代表的なものは、又鋤（407）や槽（410）、石斧未製品（438）、敲打石（455）、土器では壺・甕などが出土している。一覧表には含めなかったが、櫛（409）もSR03内より出土した遺物である。

3 杭列（第27図）

第3遺構面に伴う杭列は北東～南西方向で2列確認された。この杭列は幅10cm以内、長さが30cmにも満たない薄い板状木製品が打ち込まれていただけの貧弱なものであり、土留めや補強にはどうてい向きなものである。概ね2列の杭列があるが、どちらも中央辺りで重なり途切れている。あまり重要な意味を持つ遺構ではないと考えられる。しかしこれより以北で集落などの遺構が全く検出されていないことから、集落区を区画する意味を持つ杭列の可能性もある。北側に並ぶ杭列を区画とすれば、集落の北端域であるとも考えられる。

4 その他の遺構

A SX12

浅い窪み状を呈する。覆土は砂質シルト層。不定形で人為的な遺構とは考えにくい。自然の窪みであった可能性もある。弥生土器の壺口縁部が1点（309）出土している。

B 炉跡

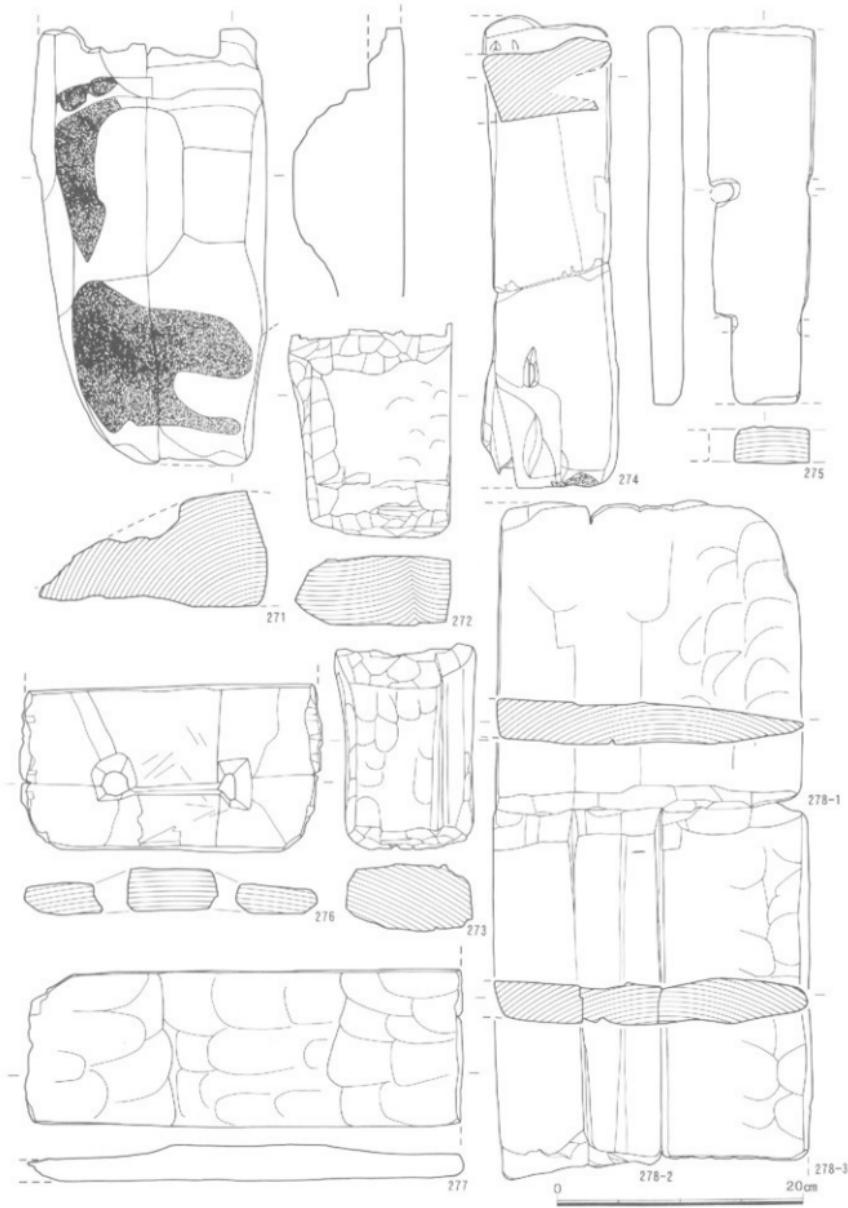
B列のトレンチに掛かる位置で検出した。炉石と思われる楕円形礫が2点並ぶ。礫は自然礫でやや被熱している。覆土には焼土が多量に混じっている。遺物は出土していない。周辺には炭化物も固まっていた。

C その他

1区南北部は、第2遺構面と同様に前節による原因で詳細な調査は行われていない。但し、東壁土層断面については記録図を作成した。この中ではSR02以南でも集落遺構面が広がっていることを示す柱穴や土坑などの断面がかかっていた。また排水溝内では礫板と思われる板状木製品が出土した（411）。いずれもVI層上面であることから第3遺構面は自然流路の対岸でも広がる可能性が高い。

1区VI層上面で検出した遺構は弥生時代中期の集落跡と考えられる。弥生時代中期の集落はこれまでに静清平野では、静岡市有東遺跡や同市川合遺跡、同市駿府城内遺跡などの集落遺跡が見つかっているが数少ない。今回、瀬名川遺跡の調査で新たな集落遺跡の発見となった。

今回の調査で見つかった遺構は主に掘立柱建物跡などの倉庫群であり、直接住居に結びつくような遺構は検出されなかった。しかし土器などの遺物は南側に行くほど出土量が多く、検出した遺構の密度な



第42図 1区VI層集落面出土木製品1

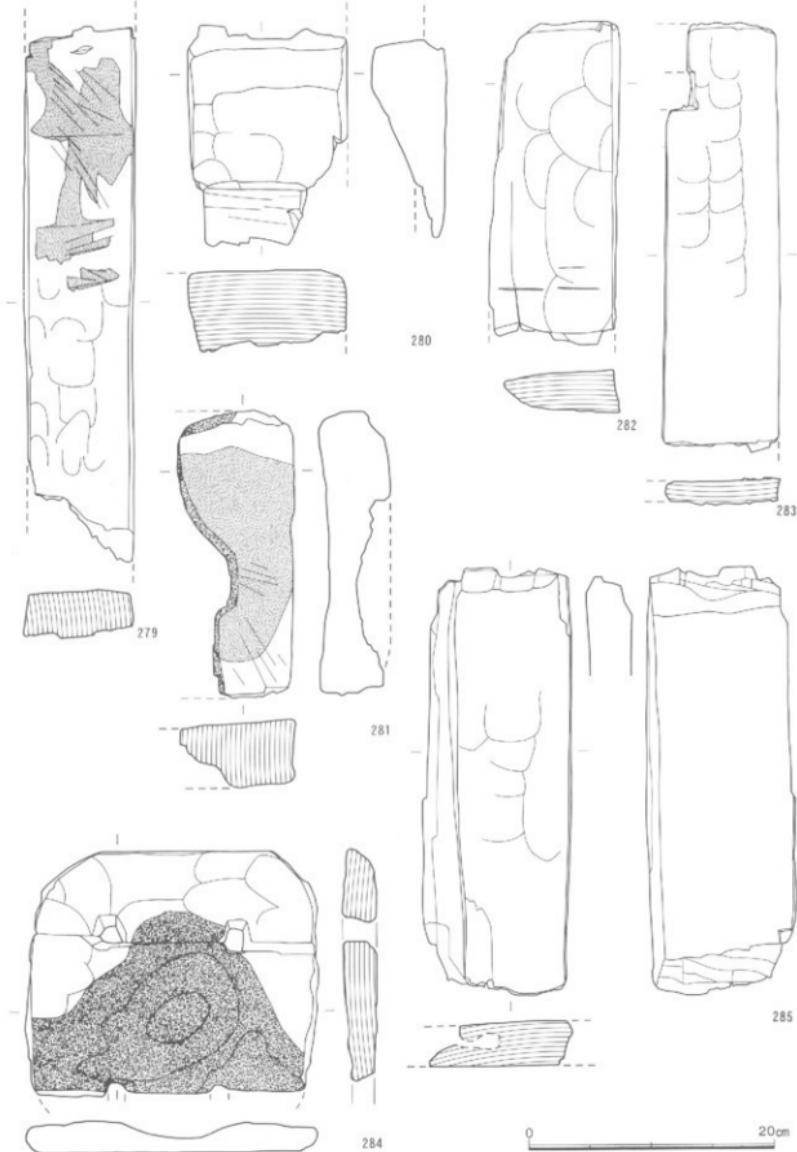
どから、集落の中心城はさらに南側にあるものと思われる。今後の調査が期待される。

この瀬名川地区を含む静清平野北東部には低湿地が広がり、常に長尾川や巴川といった河川の氾濫の影響を受ける地域でもあった。また瀬名川以南の地域では、扇状地の被圧地下水が瀬名自噴帶を形成している地帯である（註1）。しかし一方では河川の形成した自然堤防状微高地が各所に発達し、その周辺では水田に適した肥沃な土壤が残る後背湿地が形成されている。集落遺構はこうした長尾川沿いに発達した自然堤防状微高地上に立地するものと考えられる。

註1 VI層上面の調査では、平成9年10月はほとんど雨天がなかったにも関わらず、遺構面は常に水がしみ出している状態であった。調査中に遺構面が乾くことはなかった。

参考文献

- 小林孝誌『瀬名遺跡Ⅱ（遺構編Ⅱ）』（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所 1993.3.31
中山正典他『瀬名遺跡Ⅲ（遺物編Ⅰ）』（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所 1994.3.29



第43図 1区VI層集落面出土木製品2

第3節 弥生時代の遺物

1 土器

弥生時代の土器は、中期後半期の壺・甕・高坏のほか、鉢などが出土した。完形で出土した土器はなく、すべて破片の状態であった。土器の出土量はテン箱にして約21箱ほどになる。遺構に伴う土器是非常に少なく、大半が包含層より出土した。出土層位はⅡ～VI層まであるが、中心はV層である。土器は器種ごとにまとめ（第44～49図）、出土層位や計測値・調整痕などについてでは第18～21表に掲載した。

A 壺

壺は第44・46～48図286～291、298～350である。土器の時期年代は弥生時代中期後半期（有東式）を中心であるが、時期幅ではやや古いタイプのものから後期に属する破片も若干量含まれている。

286は条痕状の調整痕があり、胎土には雲母が入っている。287は無文の壺。底部から口縁部まで復元できた壺は288の1点のみであった。288は広口の壺で、頸部には焼成前に穿孔された痕跡がある。施文は頸部から胴部上半にかけて櫛描横線文と波状文が連続している。全体に赤味を帯びており、赤彩されていた可能性もある。これ以外は、基本的には單頭で単純口縁の壺が主流である。289・290は繩文を帶状と、そこから垂下するハの字状に施し、沈線で区画した文様が施されている。同様の文様は311・312にも見られ、同じ手法を用いたものでは310の王字文がある。291は表面に赤彩がある。298～309は壺の口縁部である。310～350は胴部の文様片。櫛描文や箆描文、繩文などが多く見られる。櫛描横線文と波状文を組み合わせたり、繩文を籠または棒状工具による沈線で区画するなど複合的な文様も見られる。313～316は鉢文。317・318は長頸壺の破片か。

B 甕

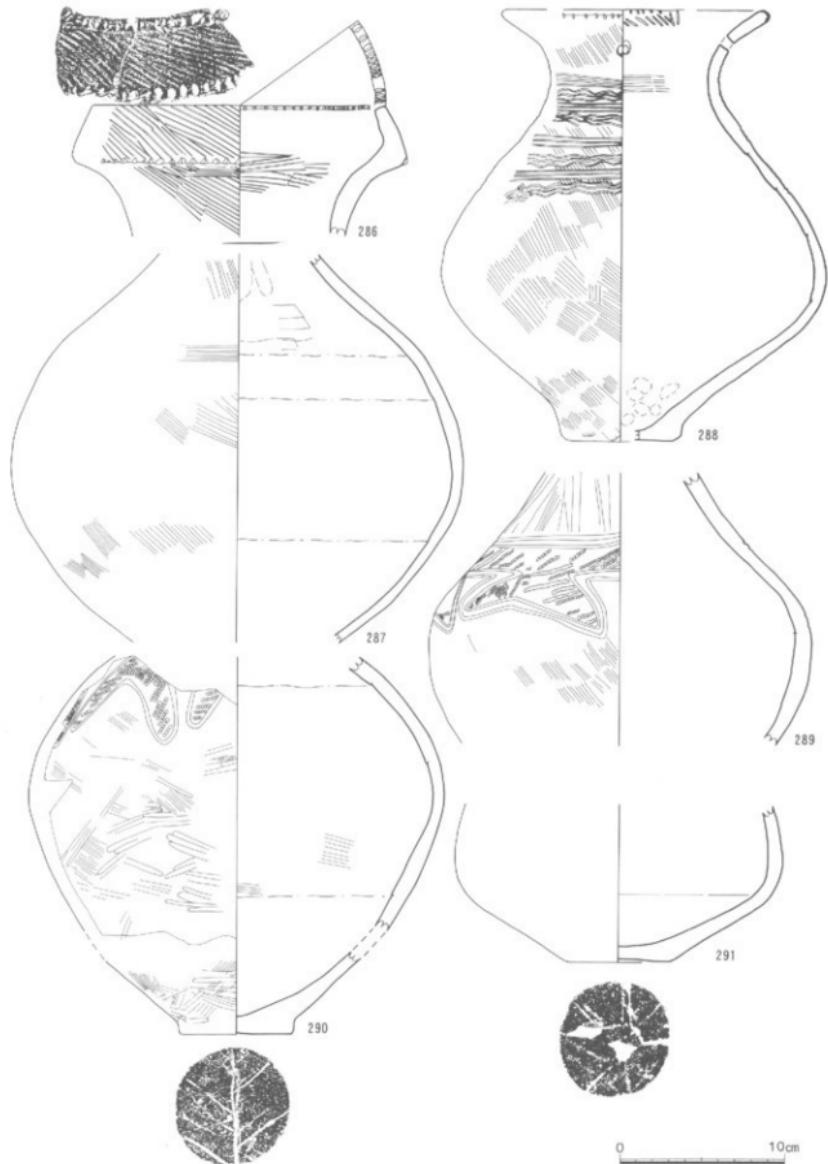
甕は第45・48図292～297、354～369、一部386～389も含まれる。甕の時期も壺と同様に弥生時代中期後半期（有東式）を中心であるが、時期幅ではやや古いタイプのものから後期に属する破片も若干量含まれている。形態の特徴は平底甕と台付き甕がある。

平底甕は調整や施文によりいくつかの特徴を持っている。まず、横位羽状文甕が多く見られる（292・293・354～362）。割合では甕全体の約半数強を占める。横位羽状文は多条・多段タイプのもの（293・354・359）と、1条1段タイプのもの（292・355～358・360～362）とがある。293には胎土中に雲母が見られる。横位羽状文甕の場合、主体は1条1段タイプのものである。次に多く見られるのは無文の刷毛調整甕である（294～297・363～369）。297は大型の甕で表面に多量のススが付着している。出土地点が大畠畔SK02付近であることから、やや時期が下る可能性がある。口縁部は指頭押捺と工具による刻みの2種類がある。少數ではあるが条痕調整と思われる甕がある（351・352）。通常の刷毛状工具の痕跡とは異なる調整痕である。352は口縁部内面側にもある。資料中に磨消線文甕と思われる小片が数点見られたが、確実なものであるか判然としない。

386～389は台付き甕の底部である。386は明らかに後期の台付き甕の特徴を持つ。387～389は台付き甕のなかでも古い時期に属するタイプのものである。387の底部は焼成前に穿孔されている。

C その他

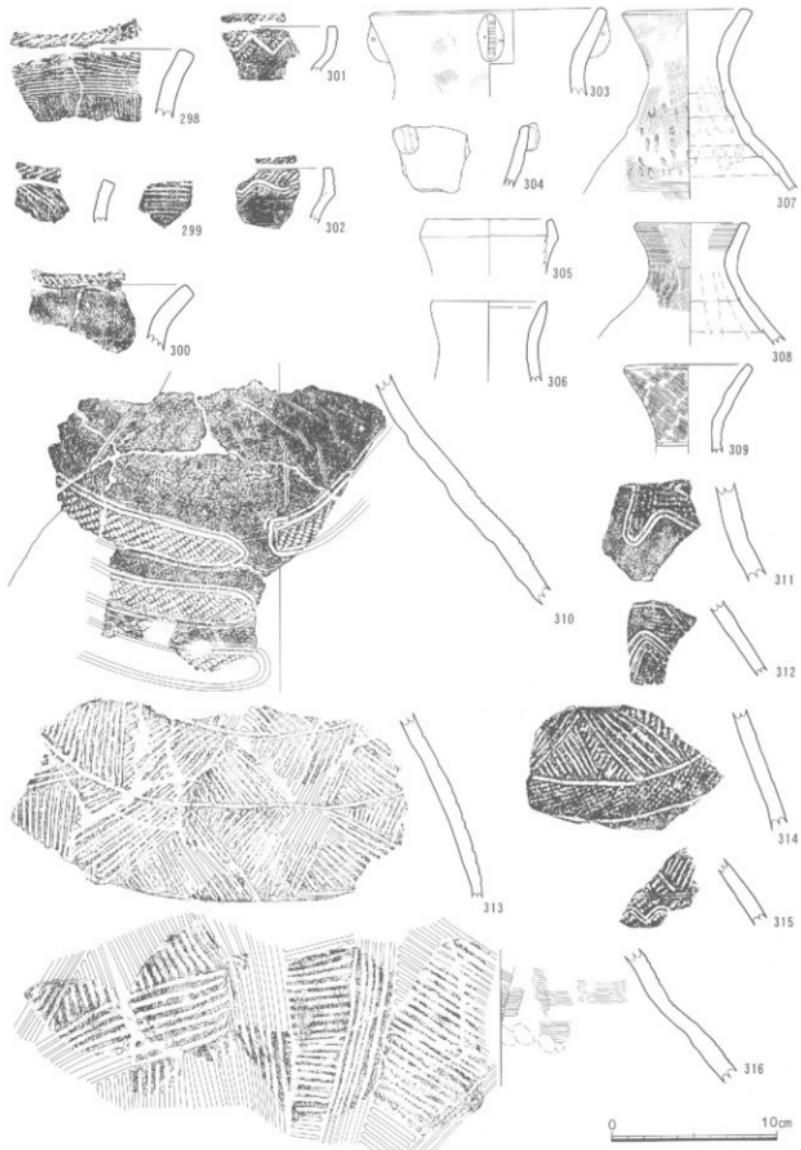
第49図の370～385は土器底部である。中期後半期の壺・甕の底部はいずれも平底が主流であり、台付き甕以外はどちらの底部であるか判断が付け難い。そのため土器の底部は一括して掲載した。土器底部は底部面により4つのタイプに分けられる。底部が無文のもの（370～375）、木葉痕があるもの（290・291、376～379）、網代痕があるもの（288、380～383）、凹み底のもの（385）などがある。全体の割合からすると、無文が圧倒的に多く、次いで木葉痕、網代痕、凹み底の順となる。凹み底には植物の茎状



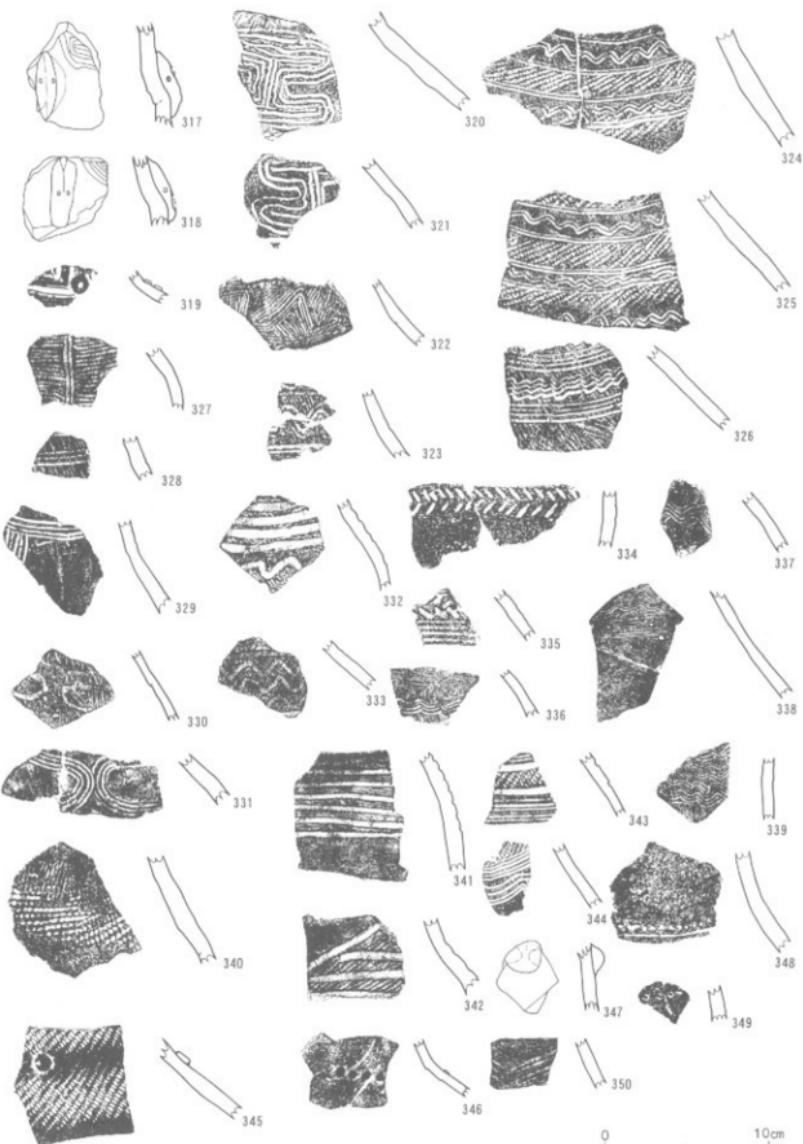
第44図 弥生時代出土土器1



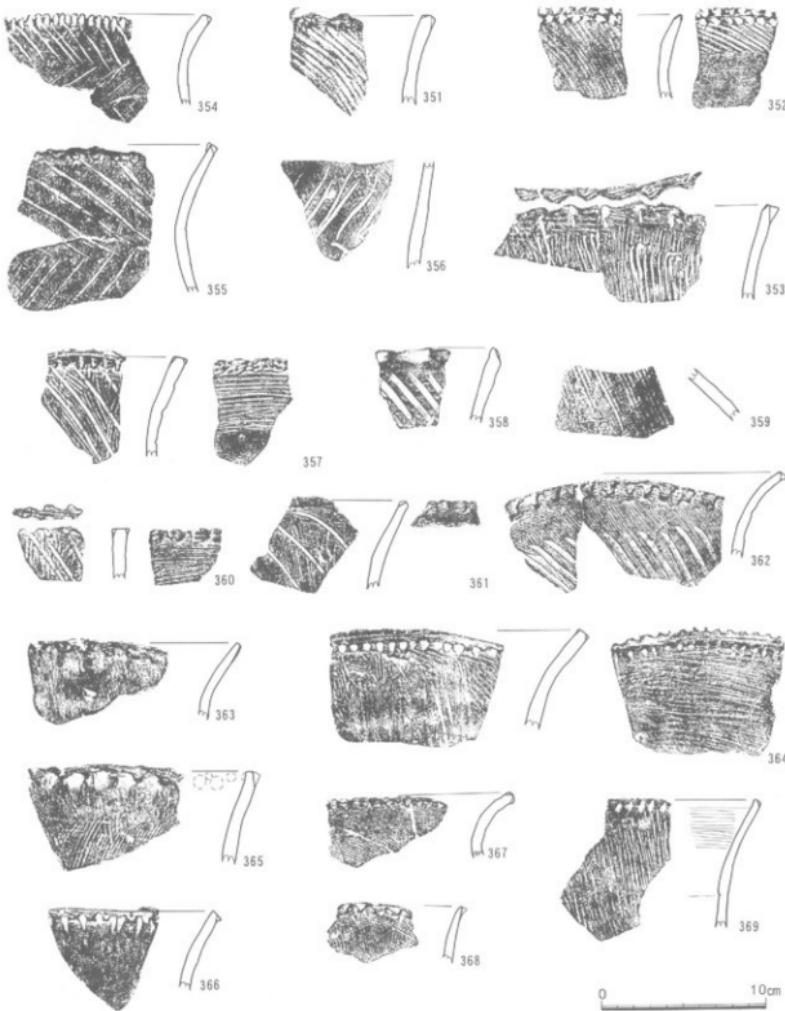
第45図 赤生時代出土土器2



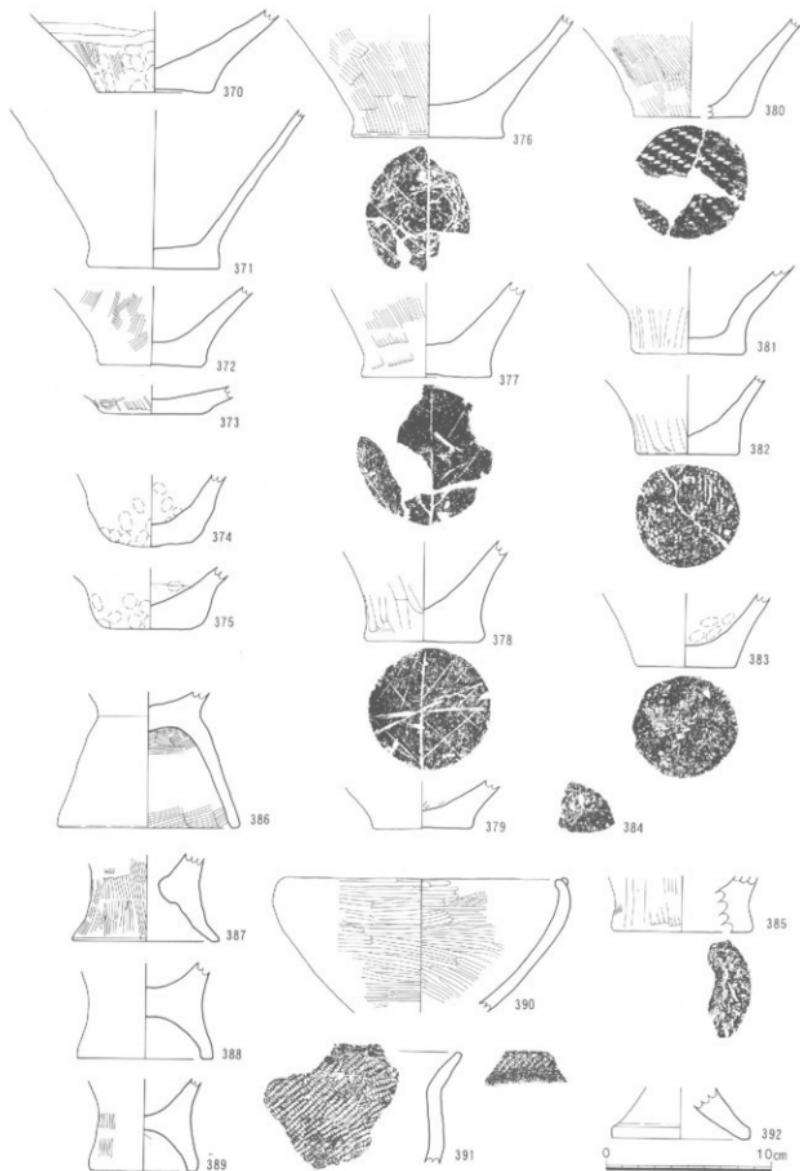
第46図 弥生時代出土土器3



第47図 弥生時代出土土器4



第48図 弥生時代出土土器5



第49図 弥生時代出土土器6

第18表 弥生時代出土土器一覽表1

図書	登録番号	器種	出土地点	口径	高さ	法量 (cm)		手法の特徴	備考
						底面	側面		
286	PNo.21-1	瓶	直筒	横浜市	(17.80)	高石, 1段以上 下灰, 雪松子合 有	及 及	内: 黄褐色 外: 黄褐色	口縁一筋の切削痕 底面は斜面 側面は直線 内面は口縁底面に 凹部がある
287	PNo.31	瓶	S803			1~2段灰石, 壁 灰石, 雪松子合 有	及	内: 黄褐色 外: 及び黄褐色	口縁一筋の切削痕 内面は上部傾斜 底面は斜面 側面は直線
288	PNo.18	瓶	南街トレンチ	(15.50)	(6.30)	2段灰石, 下灰, 雪 松子合有	及	灰 灰褐色	口縁一筋の切削痕 内面は上部傾斜 底面は斜面 側面は直線
289	PNo.33	瓶	S803			1~4段灰石, 灰褐色 被有	及	内: 黄褐色 外: 及び黄褐色	肩部上部直線 内面: 口縁底面 外: 口縁底面
290	PNo.32	瓶	南街トレンチ		6.00	(23.00) 1段灰石, 小 灰石, 雪松子合 有	及	内: 黄褐色	肩部上部直線 内面: 口縁底面 外: 口縁底面
291	PNo.72	瓶	V型		6.00	荷物, 白~灰色粒子 合有	及	灰 灰褐色	肩部中央直線 内面: 口縁底面 外: 口縁底面
292	PNo.22	甕	S403			1段灰石, 灰褐色 被有	及	内: 黄褐色 外: 黄褐色	口縁一筋の切削痕 内面: 口縁底面 外: 口縁底面
293	PNo.23	甕	南街トレンチ	(26.00)		(15.60) 1段灰石, 1段厚 灰石被有	及	内: 黄褐色 外: 黄褐色	口縁一筋の切削痕 内面: 口縁底面 外: 口縁底面
294	PNo.24	甕	新井	(31.40)		(25.30) 1~3段灰石, 灰褐色 被有, 本漆皮 被有	及	红 褐色	口縁一筋の切削痕 内面: 口縁底面 外: 口縁底面
295	PNo.25	甕	V型下部	(30.00)		1段灰石, 1段灰褐色 被有	及	红 褐色	口縁破片 (1段灰石) 内面: 口縁底面 外: 口縁底面
296	PNo.21-2	甕	S803	(20.00)		1段石, 石英, 1段以 下灰石, 灰褐色 被有	及	内: 黄褐色 外: 黄褐色	口縁破片 (1段灰石) 内面: 口縁底面 外: 口縁底面
297	PNo.37	甕	V型	(30.40)		2~3段灰褐色 被有, 1段灰褐色 被有, 1段灰褐色 被有	及	内: 及び黄褐色 外: 灰褐色	口縁一筋の切削痕 内面: 口縁底面 外: 口縁底面
298	PNo.28-2	瓶	V型				及		口縁破片 口縁底面 内面: 口縁底面 外: 口縁底面
299	PNo.70-1	瓶	日一割, 横北, レンゲ町新丸			1~2段小灰, 白色 粒子合有	及	内: 黄褐色 外: 灰褐色	口縁破片 口縁底面 内面: 口縁底面 外: 口縁底面
300	PNo.29-2	瓶	V型			1~2段灰褐色 被有, 灰褐色 被有	及	内: 及び黄褐色	口縁破片 口縁底面 内面: 口縁底面 外: 口縁底面
301	PNo.28-4	瓶	赤坂P			1段石, 灰褐色 被有	及	红 褐色	口縁破片 口縁底面 内面: 口縁底面 外: 口縁底面
302	PNo.28-3	甕	S803			1段石, 雪松子 被有	及	黑 黑色	口縁破片 口縁底面 内面: 口縁底面 外: 口縁底面
303	PNo.47-2	甕	南街トレンチ	(14.00)		1段石, 3段灰褐 色, 1~2段 灰褐色被有	及	内: 及び黄褐色	口縁破片 口縁底面 内面: 口縁底面 外: 口縁底面
304	PNo.59-3	瓶	SP187			1~2段灰褐色 被有	及	红 褐色	口縁破片 口縁底面 内面: 口縁底面 外: 口縁底面
305	PNo.70-2	瓶	Bラングリッド トレンジ	(7.80)		荷物, 白色粒子合 有	及	内: 及び黄褐色	口縁破片 口縁底面 内面: 口縁底面 外: 口縁底面
306	PNo.20-2	甕	V型下部	(5.80)		革, 灰褐色被有, 1 段灰褐色 被有	及	淡 淡褐色	口縁破片 口縁底面 内面: 口縁底面 外: 口縁底面
307	PNo.19	甕	西御茶水溝	(5.80)		(11.00) 雪松子, 1~2段 灰褐色 被有	及		口縁一筋の切削痕 内面: 口縁底面 外: 口縁底面
308	PNo.20-1	甕	海津下	6.30		(7.20) 1段以下灰, 灰褐色 被有, 1~2段灰 褐色 被有	及	深 深褐色	口縁破片 口縁底面 内面: 口縁底面 外: 口縁底面
309	PNo.55-2	甕	S812	(7.60)		(5.50) 1段石, 灰褐色 被有	及	内: 黑褐色 外: 及び黄褐色	口縁破片 口縁底面 内面: 口縁底面 外: 口縁底面
310	PNo.34	甕	V型			2~4段灰石, 灰石 被有	及	黑 黑色	口縁一筋の切削痕 内面: 口縁底面 外: 口縁底面
311	PNo.38-2	甕	南街トレンチ 京 より上			1~2段灰褐色 被有	及	内: 及び黄褐色	口縁破片 口縁底面 内面: 口縁底面 外: 口縁底面
312	PNo.41-4	甕	S803			1段石, 1~2段灰 褐色 被有	及	内: 及び黄褐色	口縁破片 口縁底面 内面: 口縁底面 外: 口縁底面
313	PNo.35	甕	V型			1~3段灰褐色 被有	及	黑 黑色	口縁破片 口縁底面 内面: 口縁底面 外: 口縁底面

第19表 弥生時代出土土器一覧表2

器名	登録番号	鉢種	出土地点	口径	底径	高さ	形状	構成	色調	手法の特徴		備考
										(cm)		
314 PNNo.6-1	盃	直筒					1~2cm底付、表石、及 内側褐色帶子有	良	にぶい黄褐色	輪郭線片	内面削り底、外面削り底偏頭文下の圓 文を模範文で区画	
315 PNNo.40-5	盃	神北トレンチ(西 群)東京港木戸					灰白色帶子 灰白色粒子、1~2 mm灰白色子有	良	にぶい黄褐色	輪郭線片	内面ナデ、外面削り底偏頭文を基底、2 本埋頭文で区画、焼文に単位2本埋頭文状文	
316 PNNo.35	盃	SB03					1~2cm底付、弧曲・長 石付、灰白色 灰白色帶子有	良	灰褐色	輪郭線片	内面ヨコハケ削頭底、外面削頭底 文	
317 PNNo.59-1	盃	V型					1cm底付石突、1~2 mm灰白色、1cm底付 帶子有	良	灰褐色	輪郭線片	内面ヨコナデ削頭底、外面削頭底 文 丸の有る棒状浮文貼り付け	
318 PNNo.59-2	盃	N型					1cm底付石突、1~2 mm灰白色、1cm底付 帶子有	良	灰褐色	輪郭線片	内面ヨコナデ削頭底、外面削頭底 文 丸の有る棒状浮文貼り付け	
319 PNNo.41-7	盃	グリッドトレンチ					斜石、石英、灰・茶 色帶子有	良	内・外黄褐色	輪郭線片	内面ナデ、外面削頭底文の上に円形浮 文	
320 PNNo.41-1	盃	ヨウイングリッド トレンチ					斜石、1cm底付 粒子、帶子有	良	黑褐色	輪郭線片	内面削頭底、外面削頭底文	
321 PNNo.39-1	盃	V型					1cm底付・石突・斜 石付、帶子有	良	褐褐色	輪郭線片	内面ナデ、外面削頭底文	
322 PNNo.44-1	盃	V型					1~2cm底 帶子有	良	にぶい褐色	輪郭線片	内面削り底、輪郭底、外面削頭底文 斜石を模範文で区画	
323 PNNo.41-3	盃	ヨウイングリッド トレンチ					1~2cm底・茶色粒 子有	良	黄褐色	輪郭線片	内面ナデ、外面ハケ削頭底文の 上下に棒頭底文で区画	
324 PNNo.42-1	盃	SB03 実測ト レンチ					1~2cm底・茶褐色 融合有	良	にぶい黄褐色	輪郭線片	内面ナデ削頭底、外面削頭底文 斜文、棒状文、横頭文、焼文、模範文、 模範文、棒状文、横頭文、焼文	
325 PNNo.43-2	盃	27イングリッド トレンチ					1~2cm底、灰・灰・長 石付、灰・茶褐色 色帶子有	良	にぶい黄褐色	輪郭線片	内面ヨコハケ削頭底、外面削 頭底文、墨の2本埋頭文、斜文、棒状文、横頭文、 模範文、棒状文、横頭文、焼文、模範文	
326 PNNo.46-4	盃	SB02					1~2cm底・小突、3 ~6mm灰白色 帶子有	良	にぶい黄褐色	輪郭線片	内面削頭底、外面ハケ 単位4本埋頭底 状文、横頭文、斜状文、横頭文	
327 PNNo.44-2	盃	V型					1cm下砂付、盤母 帶子有	良	褐褐色	輪郭線片	内面ナデ削頭底、外面 単位3本? 橫 頭文	
328 PNNo.45-3	盃	V型					斜石、灰色粒子、盤 母有	良	黑褐色	輪郭線片	内面ナデ 外面ハケ 単位1本埋頭底 横頭文	
329 PNNo.75-2	盃	V型					斜石、白色粒子、盤 母有	良	内・外褐褐色 斜石有	輪郭線片	内面ナデ削頭底、輪郭底、外面ハケ →ハケ 単位4本埋頭文、スヌバ有	
330 PNNo.39-3	盃	ヨウグリッドルベ ルト					1cm底付、灰褐色 斜石、盤母有	良	褐褐色	輪郭線片	内面削頭底、外面ハケ 削頭文	
331 PNNo.40-3	盃	SB03					斜石、灰色融點子 有	良	にぶい黄褐色	輪郭線片	内面ナデ 单位4本埋頭底文	
332 PNNo.40-7	盃	V型下部					斜石、灰・灰・灰 色融點子、盤 母有	良	棕狀黃褐色	輪郭線片	内面ナデ (燒滅の為詳細不明) 外面 ハケ 削頭底文、棒状文	
333 PNNo.45-3	盃	V型					1cm底付、茶褐色 斜石、盤母有 斜石有	良	黑褐色	輪郭線片	内面ナデ 外面ハケナデ 削頭底 状文、斜状文、横頭文	
334 PNNo.42-2	盃	SB02					1~2cm底褐色、盤 母有	良	美灰褐色	輪郭線片	内面削底、内面詳細不明 外面 美状工 具による利き部位焼文	
335 PNNo.40-4	盃	相原上・V型					2cm底、灰褐色 斜石有	良	内・深褐色 外・深褐色	輪郭線片	内面削頭底、外面、盤母 4本? 削頭底 状文、盤底文による利き部位焼文、横頭文	
336 PNNo.39-2	盃	V型					1~2cm底・灰・灰 色融點子、盤 母有	良	内・深褐色 外・にぶい褐色	輪郭線片	内面ナデ 外面ハケ 単位4本埋頭底 状文	
337 PNNo.42-5	盃	V型たたき					1~2cm底褐色、1cm 茶褐色斜石有	良	美灰褐色	輪郭線片	内面ナデ 外面ハケ 単位3本埋頭底 状文	
338 PNNo.39-5	盃	SB03-1番					1cm底付・灰褐色 斜石、盤母有	良	にぶい褐色	輪郭線片	内面ナデ 外面ハケ 単位6本埋 頭底状文/横・横頭文	
339 PNNo.43-4	盃	SB02					斜石、灰・灰・褐色 斜石有	良	にぶい褐色	輪郭線片	内面削り底 外面削頭底文状文	
340 PNNo.43-1	盃	神北トレンチ					1cm底付・灰褐色 斜石、盤母有	良	にぶい黄褐色	輪郭線片	内面削頭底、外面削頭底削り底 刻削ヨコハケ、 削頭底、外面ハケ 棒状文	
341 PNNo.45-5	盃	神北トレンチ(西 群)東京港木戸					0.5~1cm茶褐色 斜石、灰褐色斜石、盤 母有	良	黑褐色	輪郭線片	内面・盤底の為詳細不明 外面ハケ→ ナデ 削頭底文	
342 PNNo.45-4	盃	T2					1cm底付・茶褐色 斜石有	良	内・褐色 外・にぶい褐色	輪郭線片	内面ナデ 外面ナデ 横文を模範文で 区画	
343 PNNo.39-4	盃	グリッドトレンチ					1cm底付・茶褐色 斜石有	良	褐色	輪郭線片	内面ナデ・削頭底、外面 削頭底文 文を模範文で区画	
344 PNNo.41-2	盃	西京港木戸					石突、0.5~1cm灰 色斜石有	良	にぶい黄褐色 斜石有	輪郭線片	内面ナデ 外面・純文、単位4本埋頭底 状文、単位4本埋頭底文	

第20表 弥生時代出土土器一覧表3

器種 登録番号	時期	出土地点	口径	底面	跡痕	土色	焼成	色調	手法の特徴			備考
									[cm]	形状	内面	
345 PNo.46-5	後	SM2				良石、銀白色粒子 銀白色有	良	黄褐色	剥離破片 内面剥離度 フタ 外面ナフ電風・丹別厚文			
346 PNo.40-1	後	II~III層				長石、灰色微粒子 有石	良	灰白色	剥離破片 内面剥離度 フタ 外面ハケテ円割厚文			
347 PNo.59-4	後	II~IV層				1~2mm灰色燒含有 含石	良	灰黃褐色	剥離破片 内面ナフ 外面ハケテ円割厚文 (剥離度有り)			
348 PNo.47-1	後	TF				1mm以下砂粒、銀石 含石	良	灰黃褐色	剥離破片 内面燒減の為詳細不明 外面ナフ剥離厚文・輕微燒風文			
349 PNo.41-5	後	II層				長石、灰・灰褐色微粒子 有石	良	褐色	剥離破片 内面ナフ 外面剥離文			
350 PNo.45-6	後	Bライングリッド				柔軟粒子、銀石 有石	良	灰褐色	剥離破片 内面ナフ 外面ハケ 塗装文?			
351 PNo.26-2	後	V層				1mm燒含有	良	内 雪灰色 外 黄褐色	口縫部破片 口縫部はヨコナフ後削離厚文 内面: ヨコナフ 外面薄底			
352 PNo.26-3	後	V層				長石、1mm以下砂粒 有石	良	内 雪灰色 外 黑褐色	口縫部破片 口縫部は表面キザミ 内面:口縫部ナ ラ系底 外面薄底			
353 PNo.26-1	後	Bライングリッド PNo.30-2				1~2mm黑色微粒子 長石、黑色粒子有 有石	良	黑褐色	口縫部破片 口縫部はヨコハケ 口縫部は表面剥離厚 文 油河 内面ヨコハケ 外面上面ヨコハケ 下部 タテハケ			
354 PNo.27-3	後	東南トレンチ				長石、黑色微粒子 有石	良	内 雪灰色 外 黑褐色	口縫部破片 口縫部はヨコハケ 外 面タテハケ・輕微燒厚文			
355 PNo.28-1	後	グリッドトレンチ PNo.27-1				長石、灰色微粒子 有石	良	灰褐色	口縫部破片 口縫部はキザミ 内面ヨコナフ 外面タテハケ 剥離厚文			
356 PNo.46-1	後	南面トレンチ				長石、灰色微粒子 有石 1~3mm灰褐色小砾 含石	良	内 雪白色 外 黄褐色	剥離破片 内面ナフ 外面ハケナフ後燒厚狀 文			
357 PNo.27-2	後	V層壁上				長石、長石微粒子 有石 黑色微粒子小砾 含石	良	黑褐色	口縫部破片 口縫部はヨコハケ 口縫部は表面キザ ミ 内面ナフ・ヨコハケ 外面ハケ・輕微燒厚位 置状文			
358 PNo.27-1	後	V層たたき				長石、銀白色有	良	内 にぶい黄褐色 外 黑褐色	口縫部破片 口縫部は表面剥離厚文 内面ナフ 外面黑色燒厚位 剥離文			
359 PNo.46-2	後	SM2				長石、銀白色有	良	黑色	剥離破片 内面ナフ 外面ハケナフ 剥離厚文			
360 PNo.28-5	後	V層				1~2mm灰褐色、長 石、黑色微粒子 含石	良	黑褐色	口縫部破片 口縫部はヨコハケ 口縫部は表面キザ ミ 内面ヨコハケ 外面ハケ・輕微燒厚文			
361 PNo.40-2	後	SM2床 V層				長石、黑色微粒子 有石	良	黑色	口縫部破片 口縫部はヨコハケ 口縫部は表面キザ ミ(厚底の為詳細不明) 外面ハケ・輕微燒厚狀 文			
362 PNo.29-1	後	月井北丘層				1~3mm灰褐色、黑 色微粒子 含石	良	内 にぶい褐色 外 黑褐色	口縫部破片 口縫部は表面剥離厚文 内面ナフ 外面黑色燒厚位 剥離文			
363 PNo.25-4	後	トレンチAライン				1~3mm長石、1~2 mm灰褐色 含石	良	内 にぶい褐色	口縫部破片 口縫部は表面剥離厚文 内面ヨコハ ケ 外面タテハケ			
364 PNo.27-4	後	グリッドトレンチ PNo.27-1				長石、銀白色 有石	良	褐色	口縫部破片 口縫部はヨコハケ 表面ヨコハ ケ 内面ヨコハケ 外面ハケ			
365 PNo.25-6	後	SP16				1~3mm灰褐色小砾、長 石、黑色微粒子 含石	良	内 雪白色 外 黑褐色	口縫部破片 口縫部はヨコハケ 表面剥離厚文 内面ヨコハケ 外面ハケ			
366 PNo.30-3	後	V層				1~2mm長石、黑 色微粒子 含石	良	褐色	口縫部破片 口縫部はヨコハケ 口縫部は表面にキ ザミ 内面ナフ 外面ハケ			
367 PNo.51-1	後	桔梗原跡中 (第2 回取土)				長石微粒子、2~3mm 灰褐色小砾 含石	良	内 にぶい赤褐色	口縫部破片 口縫部はキザミ 内面ヨコハケ 外 面ハケ			
368 PNo.25-5	後	明辨(土壠)上				1~3mm黑色燒含有	良	灰褐色	口縫部破片 口縫部はキザミ 内面ヨコハケ 外 面ハケ			
369 PNo.30-1	後	明辨北 II層				1~2mm灰褐色、灰 色微粒子、黑・白 色微粒子 含石	良	黑褐色	口縫部破片 口縫部はキザミ 内面剥離部は ヨコハケナフ・輪底厚 外面タテハケ			
370 PNo.51-2	SM2		(6.80)			1~3mm灰褐色長石含 有石	良	褐褐色	剥離厚文 内面剥離厚文・剥離厚ナフ 外面ハ ケ・輪底厚 依テナフ? 色斑はナフ			
371 PNo.50-1	SM2	V層上・ 下室	(7.95)			1mm銀白色、5mm 石含有	良	白色	剥離厚文 内面燒減の為詳細不明 外面ナフ 剥離厚文・基盤			
372 PNo.52-1		V層	(6.00)			(4.70) 1~2mm長石、1~2 mm灰褐色微粒子 含石	良	灰白色	剥離厚文 内面燒減の為詳細不明 外面ハケ 剥離厚ナフ? 基盤			
373 PNo.53-2	後	V層上加 D~4層	(6.00)			1mm白色粒子、銀粒 有石	良	内 雪白色・灰褐色 外 褐褐色 灰褐色	剥離厚文 内面ナフス付厚文 外面ハケ 基盤 はナフ			
374 PNo.46-1		V層	(6.00)			長石、灰色微粒子 有石	良	内 にぶい褐色	剥離厚文 内面剥離厚文			
375 PNo.46-2	西側排水溝		(5.50)			2~3mm長石、灰褐色 微粒子、黑・白 色微粒子 含石	良	内 にぶい褐色	剥離厚文 内面輪底厚・輪底厚、外面剥離厚 (厚底の為詳細不明) 基盤剥離厚 文			

第21表 弥生時代出土器一覧表4

目録	登録番号	器種	出土地点	口径	法量 [cm] 底面 周長	胎土	焼成	色調	手法の特徴	備考	
376 PNo.31-1		V型		(9.20)	1~2mm赤色含む、灰 色石英含有	良	内・外に赤い變色 外・端灰褐色	底面焼存 底部は木炭灰	内面ハケ・ナデ 外面ハケ	直角は 底面は木炭灰	
377 PNo.49-2	3802	V型		(7.50)	長石、1~2mm灰 色粒、1~2mm黑色 粒等含有	良	内に赤い變色	底面焼存 底部は木炭灰 ヨコナデ	内面・底面の為詳細不明 外面ハケ→ ヨコナデ	直角は木炭灰	
378 PNo.53-1		実底トレンチ		(6.60)	(5.50) 1mm灰石、1~2mm灰 色粒、赤色粒、母貝 等含有	良		底面焼存 内面ナデ?	(縦誠の為詳細不明) 外 面ハケ→無削り?	底部は木炭灰	
379 PNo.52-3		V型		(6.00)	(2.60) 1~2mm石英、灰 色粒、赤色粒	良	内に赤い變色	底面焼存 内・外共ハケ?	(縦誠の為詳細不明) 底部は木炭灰		
380 PNo.49-3		V型		(7.00)	灰化物粒子、1~2mm 白色粒、母貝、白 色石英含有	良	内に赤い變色	底面焼存 内・外共の為詳細不明	外面ハケ→ ヨコナデ 底部は木炭灰		
381 PNo.52-4		Bウイントレンチ		(6.60)	(3.50) 1mm石英、砂粒、長 石、赤色粒子含有	良	内に赤い變色 外・端灰褐色	底面焼存 底面ナデ?	(縦誠の為詳細不明) 外 面ハケ→無削り?		
382 PNo.52-2	3803			(6.00)	(4.90) 1~2mm灰石、1~3 mm灰褐色含有	良	灰褐色	底面焼存 内面・外共の為詳細不明	外 面ハケ→無削り? 底部は木炭灰		
383 PNo.49-1		V型		(6.00)	長石、赤色粒子 含有、1mm灰 色石英、2~3mm 灰色小石含有	良	灰褐色	底面焼存 内面・底面ハケ→ナデ	外面ハケ→ナデ 底部は木炭灰		
384 PNo.75-1	3805					良		底面焼片	底部は黒灰		
385 PNo.73-3	3803			(8.40)	砂粒、赤色粒子含 有	良	内・外灰褐色 外・端灰褐色	底面焼存 内面ナデ 底部は黒灰、底面			
386 PNo.54-1	便	S302 V型		(10.60)	(8.30) 1~4mm灰 色粒、黑色 粒等含有	良	内に赤い變色	台面焼存 内面ナデ	外面ハケ→ナデ (縦誠の 為詳細不明)	外 面ハケ→無削り?	
387 PNo.53-2	便	V型		(8.80)	(5.00) 1mm長石、1~2mm灰 色石英含有	良	灰褐色	台面焼存 内面ナデ 外面ハケ	台面削 日コ ナデ	底部は木炭灰	
388 PNo.69-2	便	方型		(8.10)	1~3mm小石、白色 粒子、赤色粒子含 有	良	灰白色、一部に赤い變色	台面焼存 内面ナデスリス付等	内面ナデスリ ス付等	外面ハケ→ナデ	
389 PNo.54-2	便	V型		6.40	(5.40) 1~3mm灰 色粒、黑色 粒等含有	良	明灰褐色	台面焼存 内面ナデ	外 面ハケ→ナデ (縦誠の為詳 細不明)	台面内三枚ナデ?→指ナデ	
390 PNo.57	鉢	V型		(18.80)	(5.60) 1mm石英、長石粒子 含有、石英、母貝 等含有	良	灰褐色	口縁焼片 内面ニギキ、外面ニギキ 口縁部は円形文、表影	口縁焼片 内面ニギキ、外 面ニギキ	口縁部は円形文、表影 口縁に一部にスス付等	
391 PNo.30-4	Bライングリッド トレンチ				1~2mm長石、石英、 赤色粒子、母貝 等含有	良	黑褐色	口縫一筋の繩片 内面ナデ口縫側縁文	外面黒 鉢	外 面ナデ	
392 PNo.59-1	高坏	V型		(8.40)	1~2mm石英、白色 粒子、母貝等含有	良	灰白色、一部に赤い變色	脚部焼片 内・外ナデ			
393 PNo.58	鉢	グリットトレンチ			黑、白、赤色含有	良		脚部焼片 内面斜り底、外 面・ハケ	圓錐形 脚部焼片	底 部	
395 PNo.62-3	鉢	日型		4.70	4.55	0.75 黑、赤色粒子、母貝 等含有	良	褐色	土器を用いて作られた円形土製品	外面ハ ケ	土器を用いて作られた円形土製品 内面ナデ
396 PNo.62-2	鉢	V型		2.95	2.80	0.80 赤色砂粒含有	良	黑褐色	土器を用いて作られた円形土製品 内面ナデ	外 面ハ ケ	土器を用いて作られた円形土製品 内面ナデ
397 PNo.62-4	鉢	Cライントレンチ		4.13	4.10	0.80 長石、石英、赤 色粒子、母貝等含有	良	内・外に赤い變色	土器を用いて作られた円形土製品 内面ナデ	外 面ハ ケ	土器を用いて作られた円形土製品 内面ナデ
398 PNo.62-1	鉢	正型		3.60	3.70	0.95 黑、白色粒子、沙粒 等含有	良	内・外灰褐色 外に赤い變色	土器を用いて作られた円形土製品	外 面ハ ケ	土器を用いて作られた円形土製品 内面ハ ケ

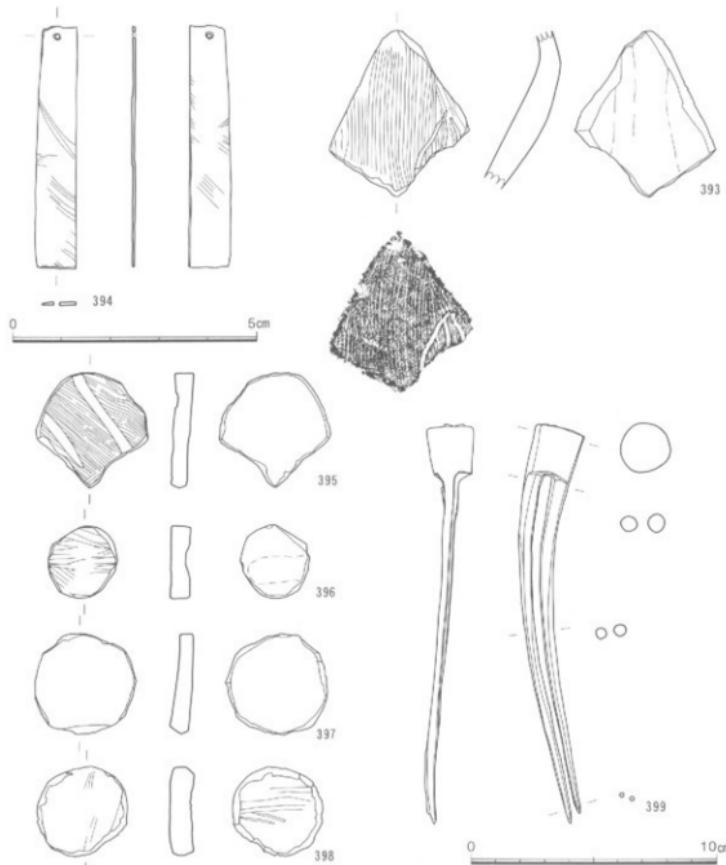
の圧痕がある。371は径1mm強の小石を多量に含む灰白色の土器で、他の土器とは胎土の面で異なる。384は底部面に粗痕がある（註1）。

390は鉢。全面赤色で、口唇部に円形浮文がある。同型のものは静岡市川合遺跡でも出土している。391は器種不明。外面は全面繩文、内面の口縁部にも繩文がある。小型の鉢であろうか。392は高坏の脚部である。脚部の下端が面取りされている。高坏と思われる破片は脚部片以外に見当たらなかった。高坏の割合は土器全体の総量から見ても1%にも満たない。

D 繪画土器

絵画土器が1点出土している（393）。1区第3遺構面のトレンチ調査で出土した一括土器の中に含まれており、土器の洗浄・注記作業中に見つかったものである。その後、すべての弥生土器を丁寧に探したが、これ以外の線刻画土器は見つからなかった。

393（図版17）は弥生時代中期後半期（有東式）の壺形土器の頭部である。線刻画は3本の線によって



第50図 弥生時代出土土製品・その他

構成されており、線はいずれも同じ上部の場所を起点に始まっている。線は直線的ではなく、まず、左右の線が両側に膨らみを持つように描かれ、次に真中の線がそ壺の中央を区切るようにほぼ真っすぐ描かれている。線刻画の絵画種類は特定できないが、393は抽象的な記号というよりは、むしろなんらかの形を表現しているのではないかと思われる。復元すると木の葉形になり得ないだろうか。

静清平野の弥生時代の遺跡ではこれまでにも線刻土器は数点出土している。静岡市有東遺跡では鹿、静岡市川合遺跡では鹿や記号などがある。線刻画は壺形土器の頸部や胴部に描かれているものが多く、ごく稀に壺の口縁部に描かれた例も存在する。瀬名川遺跡から出土した例もこれらの遺跡とはほぼ同時期と考えられることから、線刻土器は弥生時代中期後半期の集落には普遍的に見られるものと思われる。

一般に木の葉形に描かれた線画は船の櫂を表現していると言われる。瀬名川遺跡の例は奈良県唐古・

縫跡や清水風遺跡から出土した絵画土器に船とともに描かれた櫂に類似していると思われる。いずれも櫂の先端が木の葉形に表現され、3本の線で描かれている。特に清水風遺跡の例では櫂の先端が上方に向いていることからも、瀬名川遺跡の例と同一視できるだろうか。また瀬名川遺跡ではほぼ同じ時期の遺構面から実物の櫂も1点（樹種はサカキ）出土している。しかし一方では、描かれた位置が頭部の比較的の上部であることや、櫂が小型であるわりに線刻画が大きすぎることから櫂のモチーフとは言いたいなど、同一視できない面もある。

瀬名川遺跡の集落遺構面に伴って出土した土器は、全般的には弥生時代中期後半期（有東式）の土器群の時期に限定されると考えられる。しかしながら、長頸壺と思われる破片や胎土に雲母が多量に混入する土器、条痕を有する甕、横位羽状文が多条・多段タイプである甕など、中期後半期よりもや古い時期に属すると思われる土器も含まれている。同様の土器群は静清平野ではこれまでに、静岡市有東遺跡や同市川合遺跡、清水市天王山遺跡でも出土している。県内では、東部地域の清水町矢崎遺跡や三島市長伏遺跡、函南町向原遺跡で出土した土器群のタイプと酷似している。今回瀬名川遺跡で出土した土器は、これまでに静清平野で出土した中期の土器群のなかでも、中期中葉期から後半期にかけての過渡的な土器群となり得るだろうか。

2 金属製品

弥生時代の金属製品は1点出土している。第50図394（図版17）は1区の大畠畔SK02の解体中に出土した。銅製の薄い板状の製品で長方形を呈する。残存状態は良好である。長さは4.95cm、幅0.85cm、厚さは最大0.09cmある。上部には穿孔痕があり、穿孔径は1mm前後ある。上端部は切断された痕跡を残している。下部は全体に叩きしめられたように両面とも凹凸している。製品の用途は、銅鏡もしくは銅環などが考えられるが、いずれの形状にも当てはまらない。再加工を受けているか転用された可能性もある。製造方法は左右側面の厚みが異なることから、鋳型でつくられた鋳造品の可能性がある。しかし、穿孔部を持つことから鍛造品の可能性も考えられる。

3 土製品

土器片を利用した円形土製品が4点出土している（第50図395～398、図版17）。395・398はⅢ層、396はV層より出土している。395は不定形な製品。表面はハケ調整後に浅い沈線が施されている。396はやや小ぶりの径3cmほどの円形を呈する。裏面に指頭圧痕が見られる。397・398も円形を呈し、縁辺部は摩滅している。

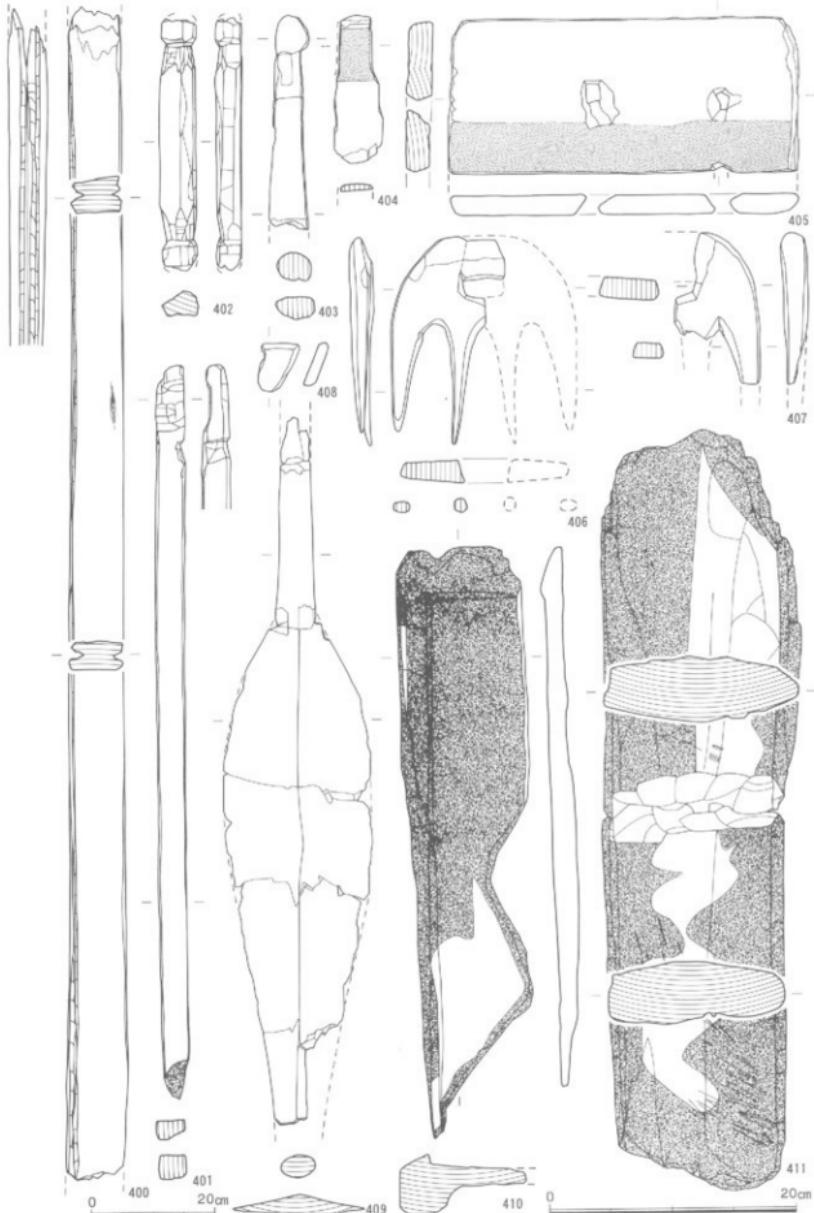
4 骨角製品

鹿角製のかんざしがV層下面より出土した。399は長さ16.3cmでほぼ完全な形状を残している。材は鹿角の先端部分を使っている。先端から二又に削り、2本の脚をつくり出している。頭部は長さ2.5cm、径2.0cmの円柱形を呈し、2本の脚は削り込まれ先端に行くに従って細く尖っている。全体に緩く彎曲しているのは、鹿角のカーブをそのまま利用したものであろう。特に装飾などは施されていないが、表面全体は丁寧に磨かれている。

現地での出土時は脆弱で、原形を留めた状態での取り上げが不可能であったため、ウレタン工法により土ごと取り上げた（註2）。写真は保存処理後のものである（図版17）。

かんざしの時期年代については、出土したV層に共伴する土器が弥生時代中期後半期に限られ、後期の土器をほとんど含まないことから、弥生時代中期後半期のものと考えられる。

県内の類例資料は見られないが、神奈川県逗子市の池子遺跡より出土したかんざしとほぼ同型である。かんざしは弥生時代の出土例は稀で、縄文時代の出土例が多いことから、瀬名川遺跡で出土した資料も縄文時代からの伝統を引き継いだものと考えられる。



第51図 弥生時代出土木製品

第22表 弥生時代出土木製品一覧表1

番号	大項目	中項目	小項目	年代	遺構・着位	木取り	樹種	厚木番号	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	備考	登録番号
185	農具	田下款	縄文土器類	③縦(よどみ)	板目	スギ	6376	49.50	12.00	1.80		W6-69	
189	農具	田下款	縄文土器類	④横	板目	スギ	6377	46.40	10.80	1.80		W2-2	
190	用途不明木製品			④横	板目				29.70	9.70	1.80		W2-5
191	木材	木棧		④縦	板目	スギ	6417	134.50	18.20	7.80		W2-4	
192	用途不明木製品	板状木製品		④縦	板目				146.80	16.80	7.30		W2-1
193	農具	田下款 四穴田下款	弥生 水田耕作		板目	スギ	6388	21.60	36.00	2.70		W1-385	
194	用途不明木製品	板状木製品	弥生 I-E 帶		板目				41.90	5.00	1.80		W1-382
195	建築材	屋造	弥生 SK01		板目	スギ	6419	88.80	77.40	8.80		W1-302	
196	木材	矢板	弥生 SK01		板目				49.10	19.50	2.20		W1-334
197	木材	横板	弥生 SK01		板目				58.00	10.00	1.70		W1-380
198	用途不明木製品	板状木製品	弥生 SK02		板目				33.10	12.60	2.40		W1-404
199	用途不明木製品	板状木製品	弥生 SK02		板目				30.30	5.80	4.80		W1-438
200	農具	横檻	弥生 SK02		板目	カシ	6366	38.20	8.80	8.10		W1-406	
201	木材	杭	弥生 SK02		板目				84.20	5.20	3.00	202-1.2.3と同一物	W1-412
202-1													W1-413
202-2	木材	杭	弥生 SK02		板目				98.80	18.00	3.60		W1-418
202-3													W1-483
203	木材	杭	弥生 SK02		板目				94.20	6.80	4.00		W1-414
204	木材	杭	弥生 SK02		板目				70.80	6.00	3.60		W1-417
205	木材	杭	弥生 SK02		板目				63.00	6.00	5.00		W1-481
206	建築材	梯子	弥生 SK02		板目	スギ	6418	33.20	19.10	8.40		W1-407	
207	木材	矢板	弥生 SK02		板目				81.40	14.80	3.80		W1-408
208	農具	田下款	弥生 SK03		板目	スギ	6386	46.70	8.80	2.00		W2-10	
209	農具	杭	曲柄又歛	弥生 水田耕作	板目	カシ	6367	31.10	15.40	2.40	復元想定61.2 復元想定解説30.1	W2-6	
210	用途不明木製品	板状木製品	弥生 SK03		板目				72.80	9.00	2.70		W2-47
211	建築材	柱	弥生 SK03		板目	スギ	6386	131.80	14.40	7.00	杭に軸用	W2-44	
212	建築材	檻板	弥生 SK03		板目				196.40	20.70	2.50	檻板に軸用	W2-46
213	木材	横板?	弥生 SK04 南側斜羽		板目				65.30	12.70	1.90		W3-101
214	木材	横板	弥生 SK04		板目				83.80	15.60	5.00		W3-58
215	建築材	檻板?	弥生 SK04		板目				76.10	10.30	1.60	檻板に軸用?	W3-62
216	木材	横板?	弥生 SK04		板目				64.60	13.80	2.00		W3-200
217	木材	矢板	弥生 SK04		板目				61.80	17.80	3.00		W3-124
218	木材	矢板	弥生 SK04		板目				66.70	13.80	5.00		W3-47
219	木材	矢板	弥生 SK04		板目				58.30	9.10	1.70		W3-88
220	木材	杭	弥生 SK04		板目				112.20	7.40	2.80		W3-145
221	木材	杭	弥生 SK04		板目				96.60	6.60	6.00		W3-140
222	木材	杭	弥生 SK04		板目				90.40	6.80	5.80		W3-139
223	用途不明木製品	板状木製品	弥生 SK04		板目				71.20	10.50	4.50	杭に軸用	W3-174
224	木材	杭	弥生 SK04		板目				62.30	8.70	4.90		W3-202
225	木材	矢板	弥生 SK04 南側斜羽		板目				56.30	17.10	3.10		W3-63
226	木材	矢板	弥生 SK04		板目				67.00	16.70	2.80		W3-129
227	木材	矢板	弥生 SK04		板目				47.80	13.70	3.50		W3-46
228	木材	矢板	弥生 SK04		板目				47.30	33.10	4.40		W3-136
229	木材	檻板	弥生 SK04 南側斜羽		板目				139.40	13.80	2.30	檻板から軸用?	W3-105
230	建築材	檻板	弥生 SK04		板目				213.60	16.30	2.90	檻板に軸用	W3-24
231	木材	矢板	弥生 SK05		板目				71.80	27.20	3.70		W3-167
232	木材	矢板	弥生 SK05		板目				79.10	26.80	4.30		W3-176
233	木材	矢板	弥生 SK05		板目				85.60	26.80	5.90		W3-156
234	木材	矢板	弥生 SK05		板目				91.60	29.00	3.40		W3-148
235	木材	杭	弥生 SK05		板目				84.20	2.90	3.30		W3-184
236	用途不明木製品	縄状木製品	弥生 SK05		板目				18.70	3.70	2.30	柄?	W3-77
237	用途不明木製品	縄状木製品	弥生 SK05		板目				27.30	3.00	3.10		W3-163
238	農具	田下款	四穴田下款	弥生 SK05	板目	スギ	6382	18.30	48.30	1.90		W3-206	
239	農具	田下款	弥生 SK04		板目	スギ	6380	43.30	9.80	1.00		W3-89	
240	農具	田下款	四穴田下款	弥生 SK04	板目	スギ	6384	21.10	31.00	2.50		W3-102	
241-1	農具	田下款	四穴田下款	弥生 SK04	板目	スギ	6387	21.80	28.60	1.90		W3-14	
241-2													W3-15
242	用途不明木製品	縄状木製品	弥生 SK05		板目				51.10	2.80	2.60		W3-99
243	農具	田下款	四穴田下款	弥生 SD13	板目	スギ	6379	10.60	37.00	1.30		W3-54	
249	農具	田下款?		弥生 SD13	板目	スギ	6378	8.80	32.30	1.40		W6-86	
250	用途不明木製品	縄状木製品	弥生 SK05		板目				105.40	7.20	2.70	縄状材か?	W6-79
251	用途不明木製品	板状木製品	弥生 SK05		板目				24.20	7.90	1.10		W6-30
252	用途不明木製品	板状木製品	弥生 SK05		板目				30.90	7.60	3.80		W6-78
253	農具	柄	弥生 SK05		板目	スギ	6373	46.00	3.50	3.30		W6-40	
254	木材	杭	針葉樹舟材	弥生 SK05	板目				57.40	5.80	4.50		W6-43
255	木材	杭	針葉樹舟材	弥生 SK05	板目				63.90	7.80	5.70		W6-41
256	建築材	柱	弥生 SH03 SP185		板目	スギ	6410	70.80	19.00	12.50		W1-492	
257	建築材	柱	弥生 SH03 SP186		板目	スギ	6406	67.90	7.70	5.00	圓木	W1-506	

第23表 弥生時代出土木製品一覧表2

図番	大項目	中項目	小項目	年代	遺構・層位	木取り	樹種	標本番号	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	備考	登録番号
258	建築材	柱	弥生 SH03 SP186	板目	スギ	6408	88.00	6.50	3.50	漆木		W1-607	
259	建築材	柱	弥生 SH03 SP187	板目	スギ	6411	85.70	19.20	14.90			W1-493	
260	建築材	柱	弥生 SH03 SP191	芯持ち	スギ	6406	72.80	20.90	17.90			W1-494	
261	建築材	柱	弥生 SH03 SP192	芯持ち	タブノキ	6418	88.00	18.30	18.30			W1-499	
262	建築材	柱	弥生 SH03 SP189	芯持ち	スギ	6402	88.80	23.60	19.40			W1-496	
263	建築材	柱	弥生 SH03 SP194	芯持ち	スギ	6413	82.50	20.60	9.20			W1-501	
264	建築材	柱	弥生 SH03 SP193	板目	スギ	6407	45.50	12.10	7.70	漆木		W1-608	
265	建築材	柱	弥生 SH03 SP190	板目	スギ	6405	47.90	17.10	13.90			W1-497	
266	建築材	柱	弥生 SH03 SP188	板目	スギ	6403	74.80	24.80	11.80			W1-495	
267	建築材	柱	弥生 SH03 SP193	芯持ち	タブノキ	6416	55.00	17.40	10.80			W1-500	
268	建築材	柱	弥生 SP181	板目	スギ	6401	96.40	24.80	10.60			W1-488	
269	建築材	柱	弥生 SP177	板目	スギ	6400	86.80	23.80	5.60			W1-487	
270	建築材	柱	弥生 SP178	板目	スギ	6414	35.90	19.20	9.30			W1-483	
271	建築材	梯子	弥生 SP178	板目	スギ	6414	17.70	13.40	3.80			W1-469	
272	建築材	檻板	弥生 SP166	板目								W1-461	
273	建築材	檻板	弥生 SP166	板目								W1-450	
274	建築材	檻板	弥生 SP168	板目								W1-486	
275	農具	田下鉢?	弥生 SP176	板目	スギ	6385	39.00	8.90	3.00			W1-464	
276	農具	田下鉢	四穴田下鉢	弥生 SP171	板目	スギ	6374	24.80	13.80	3.80			W1-489
277	建築材	檻板	弥生 SP176	板目								W1-460	
278-1	建築材	檻板	弥生 SP175	板目								W1-449	
278-2	建築材	檻板	弥生 SP176	板目								W1-451	
278-3	建築材	檻板	弥生 SP178	板目								W1-462	
279	建築材	檻板	弥生 SP167	板目								W1-467	
280	建築材	檻板	弥生 SP167	板目								W1-453	
281	建築材	檻板	弥生 SP170	板目								W1-458	
282	建築材	檻板	弥生 SP165	板目								W1-517	
283	建築材	檻板	弥生 SP170	板目								W1-457	
284	農具	田下鉢	四穴田下鉢	弥生 SP165	板目	スギ	6374	19.70	23.80	2.60			W1-615
285	建築材	檻板	弥生 SP165	板目								W1-515	
400	用途不明木製品	棒状木製品	弥生 V層	板目								W1-400	
401	用途不明木製品	棒状木製品	弥生 II~III層	板目								W1-585	
402	用途不明木製品	棒状木製品	弥生 V層	板目								W1-475	
403	用途不明木製品	棒状木製品	弥生 V層	板目								W1-477	
404	農具	鉗	弥生 V層	板目								W1-474	
405	農具	曲柄平鉗	弥生 V層	板目								W1-303	
406	農具	田下鉢	弥生 V層	板目								W1-389	
407	農具	鉗	直筋又鉗	弥生 SR03	板目	カシ	6370	12.40	6.90	1.80			W1-588
408	骨器	鉗	直筋又鉗	弥生 SR03	板目	カシ	6371	4.00	3.40	6.90	春暮口櫛部		W1-485
409	漆器	漆	弥生 SR03	板目	サカキ	6368	57.70	12.20	1.90			W1-435	
410	骨器	鉗	弥生 SR03	板目	スギ	6372	48.40	10.80	4.90	炭化		W1-479	
411	建築材	檻板	弥生 SK04 SD10	板目								W1-308	
農具	鉗?	又鉗?	弥生 SK04 SD10	板目								W1-480	
骨器	鉗	漆	弥生 土上下 V層	板目								W1-480	
木木材	枕	枕	弥生 SK04	板目								W3-115	
木木材	枕	枕	弥生 SK04	板目								W3-137	
木木材	枕	枕	弥生 SK05	板目								W3-147	
木木材	枕板	枕板	弥生 SK05	板目								W3-161	
木木材	枕板	枕板	弥生 SK04	板目								W3-64	
木木材	枕板	枕板	弥生 SK04	板目								W3-67	
用途不明木製品	板状木製品	板状木製品	弥生 グリッドレンチ	板目								W1-384	
用途不明木製品	板状木製品	板状木製品	弥生 V層	板目								W1-488	
用途不明木製品	板状木製品	板状木製品	弥生 SK03	板目								W2-37	
用途不明木製品	板状木製品	板状木製品	弥生 SK03	板目								W3-7	

5 木製品

第51図はV~VI層及びSR03より出土した木製品をまとめた。

A 農具

404は膝柄鉗の身の緊縛部にあたる部分である。残存状態は極めて悪く、身の部分と軸の前主面側も欠損している。緊縛部分はややへこんでいるが緊縛痕は見られない。405は田下鉢と思われる板状木製品。穿孔痕は3ヶ所あり、両面から孔があけられている。孔の位置は左右非対称。表面には圧痕がある。

406・407は直柄又歛。柄孔は方形を呈する。いずれも三又の4本歛であったと推定される。406の残存する2本は歛先が鋭く、先端は摩滅して丸くなっている。

B 容器

408は例物の口縁部分と思われる破片である。樹種はケヤキで、木取りは横木取り柾目。410は表面の炭化が著しく原形を止めていないが、残存部分から槽と思われる。表面には容器の底と縁の一部が残っている。裏面にはちょうど縁の裏側に脚が作り出されている。幅約4cm、厚さは約2cmの脚は長軸に平行する方向に二列付くものと思われる。

C 運搬具

409はSR03より出土した一木式の櫂である。砂を含む覆土より中期後半期の土器と共に出土している(図版6-4)。サカキの板目材。柄の上部とオールの先端が欠損している。柄の断面形は楕円形を呈する。身は表面中央に稜線があり、ちょうど断面は山形を呈する。身幅は柄の付け根から緩やかに広がり、下方に向かってすぼまっていく紡錘形をしている。

D 建築・土木材

400は上下を欠損しているが、おそらく2mを超えるであろう大型建築材の一部と考えられる。幅約10cmに対して約6cmの厚みを持つ板材だが、左右両脇に切り込みが入っている。両脇の切り込みには全面に加工痕も残っている。横板をはめ込むための柱として用いられたものと思われる。411はほぼ全面炭化している。1区東側の排水溝より出土したため、掘りかたは確認できなかったが、おそらく建物の基礎板として使われていたものと思われる。それぞれやや離れたところから出土したが接合した。中央に切断時の刃物痕が残り、両面から工具を入れ、最後は折り取ったような痕跡がある。切断痕は炭化面より新しいことから、火を受けた後に分割されたものであろう。

F 用途不明木製品

401は通称「有頭杭」と呼ばれる木製品で、この静清地区の水田跡で杭材に転用されたかたちで出土するものが多い。上端部は抉りを持ち、頭部は両端から切り込まれていている。頭部は全面に割り面を残している。下端部は火を受け炭化している。本品は包含層より出土したもので用途は不明である。402・403は小型の有頭棒状木製品だが、いずれも用途は特定できない。402は針葉樹材で両端に頭を作り出している。403は広葉樹材で一端は欠損している。柄のような用途が考えられる。

6 石製品

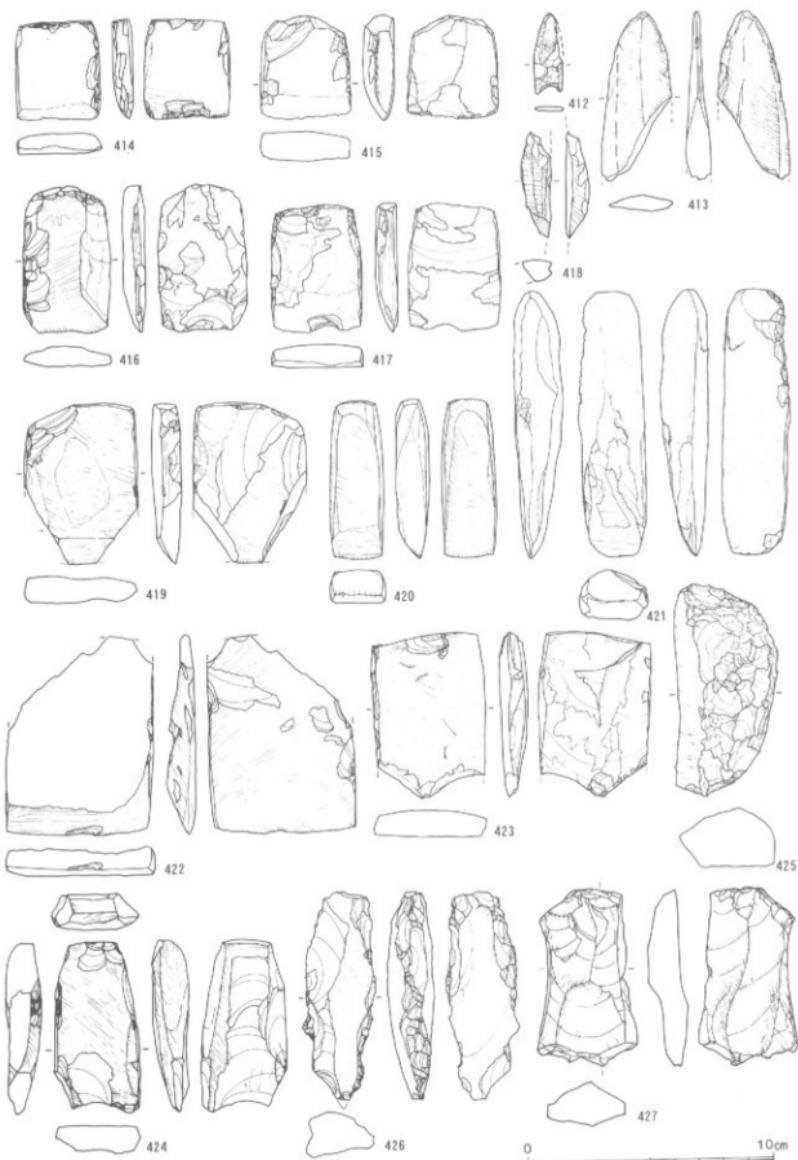
弥生時代の石器は第3遺構面を被覆する遺物包含層より合計158点出土した。石器の種類は、磨製石鎌1点、磨製石剣1点、扁平片刃石斧9点、ノミ型の柱状片刃石斧2点、石斧未製品15点、敲打石44点、剥片30点、砥石・台石10点、その他用途不明品が46点ある。特に遺構に関わる資料は見られなかつたため、器種ごとに分類して掲載し、個別に解説することとした。

A 石鎌 (第52図412)

非常に小型の磨製石鎌が1点出土している。形態は無茎凹基式で全体に身幅が狭く細身である。素材は黒色粘板岩製。成形が粗いことから未製品と考えられる。表裏両面の平坦面には剥離面が残り、あまり丁寧に磨かれていない。左右に刃部を研ぎ出し始めているが刃にはなっておらず、左右は面になって残っている。基部には抉りが入り研磨されているが、左右の形状は非対象になっている。

B 石剣 (第52図413)

磨製石剣が1点出土している。413は石剣の先端部分で基部から下は折損している。素材は黒色粘板岩製。全体に成形が未完成で未製品とも考えられる。材質も細かい気泡があり良質ではないように見える。中央に鏽状の弱い稜線が通っているが明瞭ではない。しかし横断面形は中央が厚く菱形状を呈する。刃部は研磨によりつくり出され、やや磨滅しているように見えるが、刃として実用に耐えうる



第52図 弥生時代出土石製品1

ものであったか疑わしい。また刃部は所々に細かい剥離があり先端部分も欠けている。

C 石斧（第52図414～424）

磨製石斧は11点出土した。このうち扁平片刃石斧は9点、ノミ型の柱状片刃石斧は2点である。今回の調査では、大型蛤刃石斧や大型の柱状片刃石斧は発見されず、扁平片刃石斧やノミ型の柱状片刃石斧などのような小型の加工斧が見つかっている。出土した扁平片刃石斧の刃部幅は3.5cm前後のものが多く、最大5.8cm幅まである。一方、ノミ型の柱状片刃石斧の刃部幅は約2cmほどである。瀬名川遺跡から出土した石斧は必ずしも丁寧に研磨されておらず、どれも成形時の剥離面を残したまま製品として使われているのが特徴である。

414～417は刃部が研ぎ出されている製品であるが、かなり大きな刃こぼれを起こしている。いずれも全長が6cm以下と短いのは、使い込まれた結果、膝柄装着が不可能になり廃棄されたものと考えられる。414の後主面側には刃縁に対して直交する方向の使用痕が残っている。415はかなり使い込まれ、擦り減っている。全長が身幅よりも短くなっている。416・417は研磨面下に成形時の剥離痕が顕著に残っている。419は刃部の左右が大きく刃欠けしている。僅かに残存している刃縁には使用痕が残っているのが観察できる。使用痕は刃縁に対して直交する方向で筋状に入っている。422は基部全体が大きく欠損している。しかしほば完全に残っている刃部幅からかなり大型の加工斧であったことがわかる。次の423・424ともに刃部が欠損しているが、刃部を研ぎ出したと思われる稜線があることから製品として分類した。423は419とほぼ同じサイズの石斧で、前主面側は自然面上に直接研磨されている。側面は丁寧に成形し研磨されているが、後主面は僅かに研磨してあるだけで完成品として使用されている。424の刃部は推定3.4cm幅と思われる。右側面の一部に自然面が残っている。身幅は刃部に行くほど幅広になる。

420は小型のノミ型柱状片刃石斧である。刃部幅は1.95cm。頭部には一部自然面が残っているから、原石は石斧に極めて近い形状のものを選択して、剥離調整を施さず直接研磨した核石器であろう。刃縁には刃縁に直交する使用痕が顕著に残っている。また非常に丁寧に作られている。421も自然礫面が全体に残る核石器である。左右側面に剥離調整と敲打痕がある。基部全体に自然面を残したまま先端のみ研磨して刃部をつくり出している。刃部幅は2.1cmと狭く、ノミ型の柱状片刃石斧と同様の用途も考えられる。

D 石斧未製品（第52図426・427、第53図428～440）

石斧未製品は剥片段階から研磨工程までの刃部がつくり出されていない未完成品をいう。未製品には概ね、原石→荒削り（粗割り）→剥離調整→成形・敲打→研磨にいたる製作工程をたどることができる。原石をⅠ段階として、以下剥片・粗削り・荒削りをⅡ段階、剥離調整・敲打などの成形をⅢ段階、Ⅳ段階を研磨とする。

今回、Ⅰ段階に該当する未製品は出土しなかった。

427・429・437・439・440はⅡ段階に属する。一部剥離調整の施されたものもあるが不定形である。また、いずれも器面の一部に自然面が残っている。437は小型のノミ型石斧の未製品と思われる。

Ⅲ段階は426・428・430・432～436・435・438など完成品の形状に近く剥離調整も進んでいる。428は敲打成形の段階に入っている。436・438は厚みを持つことから小形の柱状片刃石斧の未製品であろう。

431は既に研磨段階（Ⅳ段階）に入っている。表裏に一部研磨の痕跡がある。

この他にも図版上に掲載しなかったが、V～VI層中より暗赤紫色珪質粘板岩・頁岩の小剥片が数点出土している。

E 敲打石（第54図441～450、第55図451～457、第56図458～460）

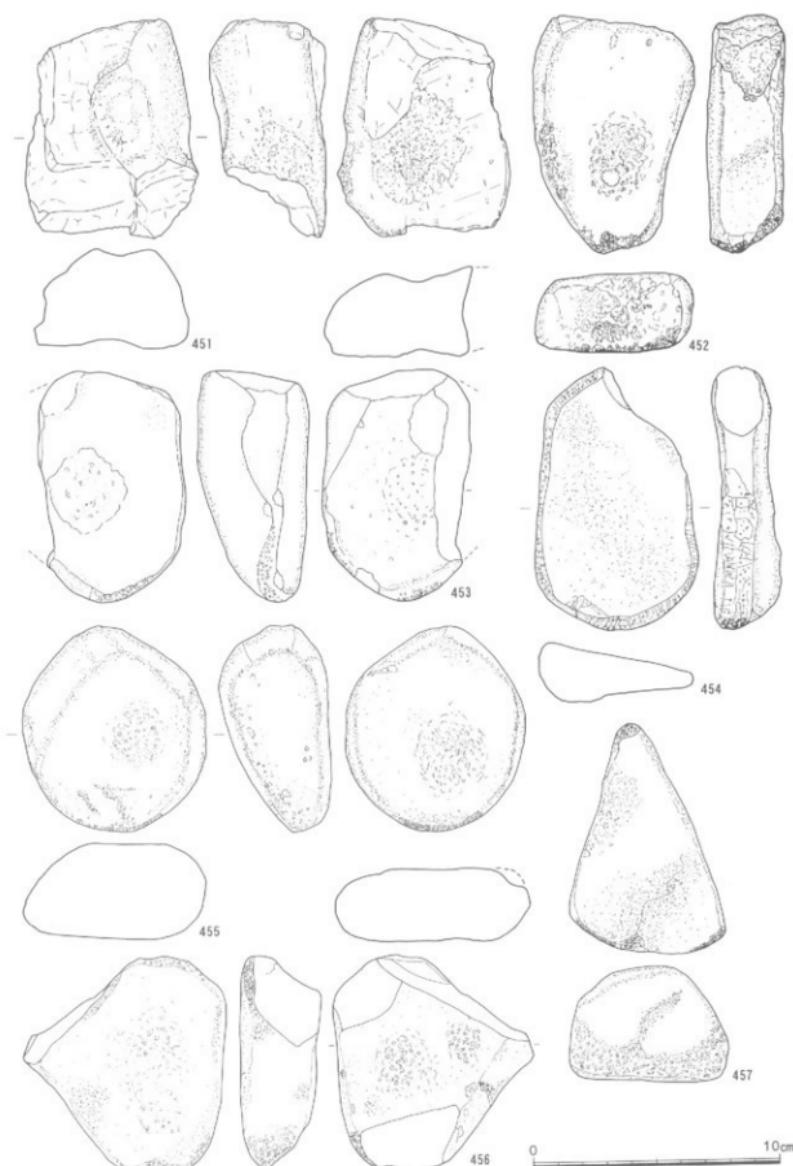
敲打石に使われている石材は細粒～粗粒砂岩で、ほとんどが河原石に見られるような自然の転疊であ



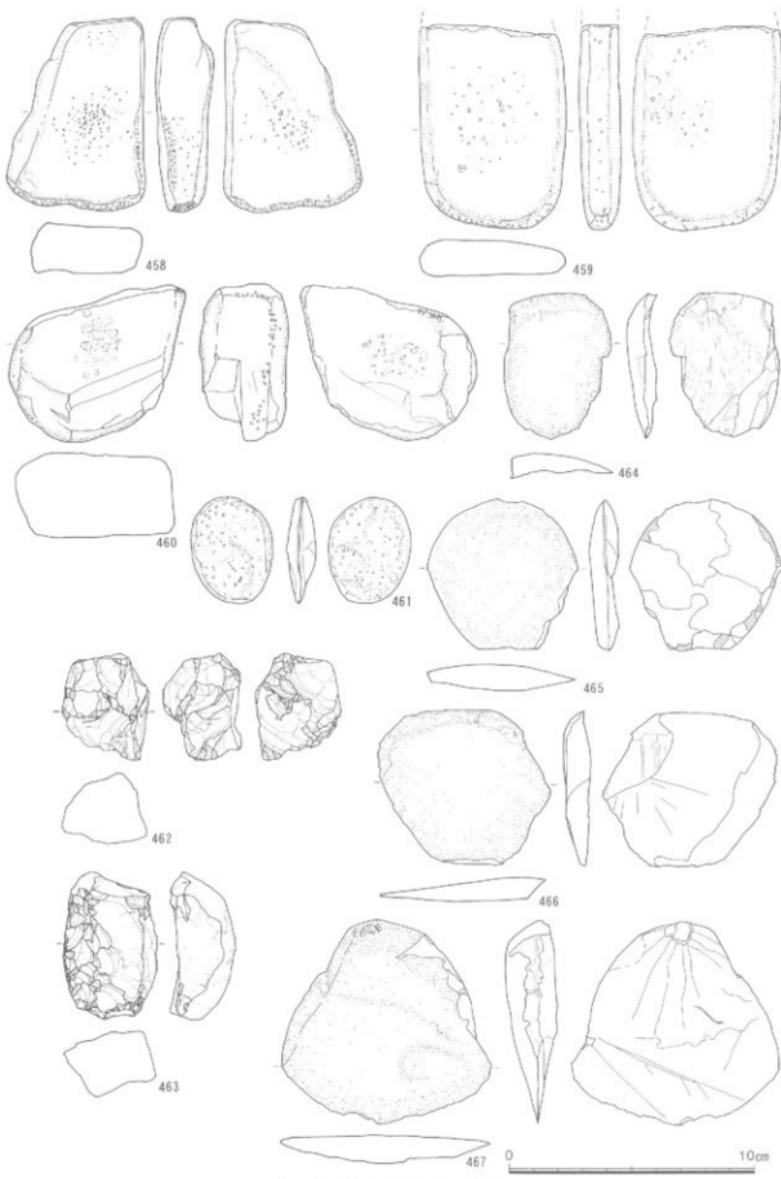
第53図 弥生時代出土石製品2



第54図 弥生時代出土石製品3



第55図 弥生時代出土石製品4



第56図 弥生時代出土石製品5



第57図 弥生時代出土石製品6

る。大きさもちょうど手の中に握れるほどのものが多い。敲打痕は主に礫の端部を集中して使用している例が多いが、平坦面が使われている例も半数以上見られる。

441～443は比較的大きめな扁平礫を使っている。使用痕も一端に限らず周縁部全体にある。特に細くなかった下端部の使用痕が顕著である。444・445はこうした端部が少ない礫だが上下端部や側縁部等が潰れている。446～450は手中に収まる小型の敲打石である。446は棒状の敲打石で欠損部にも敲打痕がある。449の石材は玄武岩で竜爪山脈から長尾川へ流れ込んだ転礫であろう。450は端部を使用せず、平坦面のみ使用している例である。451～460は円礫に近い又は扁平な形状の敲打石である。451・453・454・456は使用時の衝撃で欠損したものと考えられる。敲打石は図化したもの以外にも25点ある。

F 剥片（第56図464～467）

一次剥片は5点出土している。一次剥片とは、片面が自然石の表皮面で縁辺部に鋭いエッジを持ち、いずれも母岩より一撃で割り落とされた石器である。石斧製作時に排出される破片とは石材が異なる上、明らかに意図的に割り落とされている。用途は明らかになっていないが、なかには465のように縁辺部に使用痕がある剥片も見られることから、縁辺部の鋭いエッジ部分を利用した用途が考えられる。465は縁辺部が摩滅している。肉眼観察では研磨痕や擦痕に近い。表皮面側には付着物の痕跡がある。

一次剥片は静清平野の弥生時代の石器を伴う遺跡では普遍的に出土する石器の一つである。近隣の遺跡では静岡市有東遺跡、同川合遺跡などで多量に出土している。当初、静岡県内で欠如している硃刈り具などの用途も考えられたが、使用痕分析の結果では特徴的な痕跡は見つかっていない（註3）。

G 砧石・台石（第57図468～470、472～478）

出土した砧石は大型品と小型品に分けられる。石材は中粒～粗粒砂岩を中心とする。近くの長尾川にある転礫を使っていると考えられる。468～470は小型の砧石である。小型の砧石は手中に持つことの出来る携帯用としての用途が中心であろう。469はかなり薄くなり下縁辺は刃器のようになっている。470は全面研磨され蒲鉾形の形状を呈する。火を受けて焼けている。472～478は大型の砧石である。いずれも平坦面を持つ大型の自然礫が使われている。大型の砧石は基本的には地面に置き、固定して使う置き砥石としての用途が中心であろう。また砧石に限らず、作業台の機能も兼ねている製品（台石）も見られる。472は砧石と台石を兼ねている。473・475は台石。礫の平坦面中央に潰れた痕跡が集中している。475は四面に見られる。474は約1/4ほどの残存率だが、平坦面がかなりすり減って窪んでいる。また全体に被熱している。476～478は3kgを超える大型品である。476・477は砥面と敲打面を合わせ持つ。478は各面に砥面が見られ著しくすり減って窪んでいる。

H その他

第52図425は用途不明の石製品である。研磨面を持つことから石斧の欠損品とも考えられる。かなり剥離調整と敲打調整をした痕跡がある。裏面は欠損。

第56図461は用途不明の石製品。二枚貝のように中央に脈らみを持つ。全面風化したようなザラつい面となっている。462・463は石核と思われる。462は黒色チャートで全面剥離面である。463は黒色珪質頁岩。裏は自然面がある。なにか製品をつくる意図があったようには見られない。

第57図471は軽石。非常に脆い。貫通していない穿孔のような痕があるが、人為的なものかは判断できない。

瀬名川遺跡から出土した弥生時代の石器は、磨製石斧とその未製品、及び敲打石・砧石・台石等の工具類が中心であった。一部、石礫や石剣などの武器も出土しているが、全体の1%にも満たない。今回、磨製石斧は出土したもの、木製品のなかに石斧の膝柄と思われる製品は見られなかった。

第24表 弥生時代出土石製品一覧表

図番	登録番号	器種	出土地点	法量 [cm]			石 材	備考
				長さ	幅	厚さ		
419	SI-136	漆製石瓶	II-V層	3.30	1.15	0.21	黒色砂岩	美品
413	SI-93	石劍	II-V層	(6.90)	(2.61)	(0.68)	黒色砂岩	
414	SI-155	馬平片刃石斧	V層	4.10	3.50	0.75	暗褐色灰色斑状砂岩	刃部鋒 3.30
418	SI-189	馬平片刃石斧	V層	4.20	3.70	1.20	暗褐色灰色斑状砂岩	刃部鋒 3.70
415	SI-87	馬平片刃石斧	V層	6.00	3.55	0.85	暗褐色灰色斑状砂岩	刃部鋒 (3.45)
417	SI-148	馬平片刃石斧	V層	5.20	3.75	0.80	暗褐色灰色斑状砂岩	刃部鋒 3.55
418	SI-117	馬平片刃石斧	V層	4.30	1.20	0.90	暗褐色灰色斑状砂岩	
415	SI-149	馬平片刃石斧	V層	6.60	4.70	1.10	暗褐色灰色斑状砂岩	刃部鋒 (4.40)
420	SI-85	小型漆製片刃石斧	IV層	6.60	2.25	1.30	41.70	暗褐色灰色斑状砂岩 万能錠 1.95
421	SI-54	漆製石斧	東側トレンチ最南端	10.90	2.80	1.90	85.90 暗褐色灰色斑状砂岩	万能錠 2.10
422	SI-153	馬平片刃石斧	V層	8.16	6.10	1.10	70.20 赤褐色灰色斑状砂岩	万能錠 5.80
423	SI-48	馬平片刃石斧	東側トレンチ	6.80	4.55	1.05	55.50 赤褐色灰色斑状砂岩	万能錠 (4.30)
424	SI-19	馬平片刃石斧	V層	7.00	3.85	1.40	47.70 暗褐色灰色斑状砂岩	万能錠 (3.40)
425	SI-98	用漆不明石製品	V層	8.70	4.20	2.35	105.80 黑色灰質頁岩	石外再加工品?
426	SI-11	石斧	東側トレンチ枕内より南 I~II層	8.80	3.00	1.90	88.90 漆赤褐色灰色斑状砂岩	未製品
427	SI-1	石斧	I層 (漆製賽金TPS)	7.30	4.10	1.80	51.90 赤褐色灰色斑状砂岩	未製品
428	SI-17	石斧	28ライントレンチ 漆色粘土層	8.90	7.18	2.60	271.50 赤褐色灰色斑状砂岩	未製品
429	SI-47	石斧	東側トレンチ	8.25	6.50	2.30	129.10 黑色灰質頁岩	未製品
430	SI-81	石斧	グリッドトレンチ	2.95	2.90	1.25	12.80 黑色灰質頁岩	未製品
431	SI-24	石斧	東側トレンチ	6.70	3.35	1.65	45.60 黑色灰質頁岩	未製品
432	SI-158	石斧	SP175 地上層	9.20	4.20	1.33	68.00 赤褐色灰色斑状砂岩	未製品
433	SI-18	石斧	28ライントレンチ 黑色粘土層	7.55	3.70	1.65	71.50 赤褐色灰色斑状砂岩	未製品
434	SI-121	石斧	II層	5.75	4.00	0.90	28.60 暗褐色灰色斑状砂岩	未製品
435	SI-128	石斧	西北トレンチ柱北東 北側排水溝 III~V層	6.65	3.25	1.00	28.40 赤褐色灰色斑状砂岩	未製品
436	SI-99	石斧	V層	7.45	3.45	2.55	75.10 黑色灰質頁岩	未製品
437	SI-147	石斧	V層	7.00	2.65	1.55	33.90 赤褐色灰色斑状砂岩	未製品
438	SI-155	石斧	SR03	5.50	3.20	2.00	61.50 赤褐色灰色斑状砂岩	未製品
439	SI-65	石斧	東側トレンチ	11.80	4.20	1.30	72.80 赤褐色灰色斑状砂岩	未製品
440	SI-157	石斧	SP170 地上層	10.80	8.25	2.38	163.3 赤褐色灰色斑状砂岩	未製品
441	SI-191	敲打石	V層	17.00	7.70	2.90	417.10 暗褐色角砾點一粒砂岩	
442	SI-62	敲打石	東側トレンチ最南端	14.10	7.15	3.60	427.50 暗褐色角砾點砂岩	
443	SI-63	敲打石	東側トレンチ最南端	12.80	6.60	2.70	299.60 暗褐色角砾點砂岩	
444	SI-126	敲打石	IV層	10.80	5.80	5.40	469.60 暗褐色角砾點砂岩	
445	SI-76	敲打石	グリッドトレンチ	11.60	6.10	4.90	444.70 暗褐色角砾點砂岩	
446	SI-165	敲打石	V層	8.80	3.80	3.40	171.00 暗褐色中粒砂岩	
447	SI-79	敲打石	27ライングリッドトレンチ	(7.30)	4.60	2.60	181.40 暗褐色中粒砂岩	
448	SI-200	敲打石	V層	(4.40)	5.20	2.40	132.50 暗褐色中粒砂岩	
449	SI-63	敲打石	東側トレンチ	(6.30)	5.20	4.10	184.80 玄武岩	
450	SI-110	敲打石	II層	8.00	4.20	3.90	190.20 暗褐色中粒砂岩	
451	SI-102	敲打石	V層	9.00	7.00	4.70	337.80 暗褐色中粒砂岩	
452	SI-170	敲打石	V層	9.80	6.60	3.10	304.30 暗褐色中粒砂岩	
453	SI-51	敲打石	V層	9.80	(6.10)	3.70	316.40 暗褐色中粒砂岩	
454	SI-8	敲打石	東側トレンチ東北隅 II層	10.70	6.70	2.80	227.50 暗褐色中粒砂岩	
455	SI-205	敲打石	SR03	8.40	7.40	4.30	340.60 暗褐色中粒砂岩	
456	SI-174	敲打石	V層	8.70	8.20	3.00	259.40 暗褐色中粒砂岩	
457	SI-82	敲打石	グリッドトレンチ II~IV層	9.40	6.40	4.40	256.40 暗褐色中粒砂岩	
458	SI-198	敲打石	V層	7.80	8.70	2.00	124.70 暗褐色中粒砂岩	
459	SI-68	敲打石	東側排水溝	8.40	6.05	1.80	128.60 暗褐色中粒砂岩	
460	SI-111	敲打石	V層	6.40	7.20	3.40	181.80 暗褐色中粒砂岩	
461	SI-58	用漆不明石製品	西側排水溝	4.35	3.35	1.15	21.30 黑色灰質頁岩	
462	SI-42	用漆不明石製品	V層	4.40	3.50	2.65	41.00 黑色灰質頁岩	石核?
453	SI-197	用漆不明石製品	V層	6.00	3.80	2.40	65.00 黑色灰質頁岩	石核?
454	SI-41	剥片	V層	5.90	4.25	1.10	33.40 黑色灰質頁岩	使用痕あり
465	SI-92	剥片	V層	6.20	6.15	1.15	42.80 黑色灰質頁岩	
466	SI-49	剥片	東側トレンチ	6.30	6.75	1.10	47.80 黑色灰質頁岩	
467	SI-204	剥片	SR03	8.25	8.53	2.00	148.30 黑色灰質頁岩	
468	SI-180	砾石	東側トレンチ	13.18	6.75	2.30	269.70 暗褐色中粒砂岩	
459	SI-140	砾石	II層	4.40	6.50	0.40	15.60 暗褐色中粒砂岩	
470	SI-104	砾石	V層?	8.55	7.70	1.10	74.80 暗褐色中粒砂岩	
471	SI-159	用漆不明石製品	V層	11.30	10.20	8.00	205.30 黑色灰質頁岩	
472	SI-202	黒色砾石	SK02 SK-1地No.3	18.10	10.00	8.10	1143.40 暗褐色中粒砂岩	
473	SI-166	台石	SP167	16.70	11.50	4.90	1581.70 暗褐色中粒砂岩	
474	SI-128	黒色砾石	IV層	(9.70) (11.60)	5.40	4.07 40.70	暗褐色中粒砂岩	
475	SI-129	台石	V層	18.60	8.10	6.60	1786.00 暗褐色中粒砂岩	
476	SI-98	黒色砾石	V層	22.60	14.70	6.10	3586.00 暗褐色中粒砂岩	
477	SI-161	黒色砾石	V層	20.20	16.20	6.65	2841.60 暗褐色中粒砂岩	
478	SI-50	黒色砾石	東側トレンチ	25.80	17.10	9.10	4960.20 暗褐色中粒砂岩	
SI-201	黒色砾石	SK02 SK-1地No.2		12.40	8.20	3.00	323.70 暗褐色中粒砂岩	

磨製石斧は扁平片刃石斧や小型のノミ形石斧が若干出土しているが、太型蛤刃石斧や大型の柱状片刃石斧が1点も見られない。これらの磨製石斧は通常、弥生時代中期後半期では太型蛤刃石斧・扁平片刃石斧・柱状片刃石斧が揃って出土する場合が多い（註4）。これに対し瀬名川遺跡から出土した石器の組成はこれまでの組成とは著しく異なる点が注目される。

石斧材の供給地は、他の磨製石斧を持つ遺跡と同様に、安倍川下流域と考えられる（註5）。全体にあまり珪質ではない材が多い。また頁岩も安倍川から採取されたと考えられる。敲打石・砥石は庵原山系の転石がある長尾川から運ばれているであろう。未製品と思われる石器の他に、石斧と同じ材質の剥片やチップも出土している点や、敲打石・砥石などの工具類があることから、この集落内で石斧等が製作されていた可能性が高い。

註1 粉の形状は膨らみを持つことからジャボニカ品種と考えられる。粉の先端にはノゲの跡も見られる。

註2 ウレタンによる取り上げ・解体から復元処理まで当研究所の保存処理担当である主任調査研究員西尾太加二が行った。

註3 県内13ヶ所81点の石器について使用痕分析が行われているが（山田・山田1992）、典型的な石包丁の形状を持つ石器以外でコーングロスが観察出来たものはない。

註4 大陸系磨製石斧が盛行する時期は静清平野の場合、弥生時代中期後半期（有束式）の時期と言われている。

註5 出土した石製品は静岡大学名誉教授 伊藤通玄氏に石材鑑定をしていただいた。また石材の供給地についての御教示もいただいた。

〈参考文献〉

- 平野吾郎「東海地方における弥生時代の石器について」『静岡県埋蔵文化財調査研究所研究紀要Ⅰ』（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所 1986.3.31
『池子遺跡群だより9』神奈川県立埋蔵文化財センター 1990.12
春成秀爾「絵画から記号へ-弥生時代における農耕儀礼の盛衰-」『国立歴史民俗博物館研究報告第35集』
国立歴史民俗博物館 1991.11.11
『静岡県史 資料編3 考古三』静岡県 1992.3.21
山田しょう・山田成洋「静岡県内出土の「石包丁」の使用痕分析」『川合遺跡 遺物編2（石製品・金属製品本文編）』（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所 1992.3.30
伊藤淳史「大平洋沿岸における弥生文化の展開-駿河湾岸中期弥生土器からの検討-」『YAY!』弥生土器を語る会 1996.5.5
岩本 貴他『角江遺跡Ⅱ 遺物編1（土器・土製品）』財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所 1996.3.31
藤田三郎「土器に描かれた弥生人物像-唐古・鍵遺跡と清水風遺跡を中心に-」『月刊考古学ジャーナル5月号 416』ニューサイエンス社 1997.5.30

第25表 自然遺物一覧表1

遺物番号 (N)	種類 グリッド	出 土 地 点 層位・遺構	計 測 値(cm)			備 考
			長さ	幅	厚さ	
1	モモ	青灰色粘土層	3.00	1.65	1.40	トレンチ内
2	モモ		2.70	2.10	1.65	
3	モモ	Z-27N 淡黄褐色粘土層	3.10	1.98	1.35	一部欠損
4	モモ	A-26S 淡黄褐色粘土層	3.23	2.28	2.30	
5	モモ	A-26N 淡黄褐色粘土層	3.18	2.50	1.90	
6	モモ	Z-28S 淡黄褐色粘土層	3.00	2.58	2.00	
7	モモ	Y-28N 淡黄褐色粘土層	2.85	2.23	1.72	
8①	モモ	A-27S 青灰色粘土層上層	2.60	1.75	1.23	
8②	モモ	A-27S 青灰色粘土層上層	1.60	(1.65)	(1.32)	1/4残存
9	モモ	Z-28N 淡黄褐色粘土層	2.70	2.16	1.70	
10	モモ	B-26S 淡黄褐色粘土層	2.95	2.28	1.90	一部欠損
11	モモ	B-27S 淡黄褐色粘土層	5.60	3.50	2.50	
12	モモ	C-25N 淡黄褐色粘土層	3.00	1.96	1.50	
13	モモ	C-25N 淡黄褐色粘土層	2.45	1.75	1.65	
14	モモ	Y-27S 淡黄褐色粘土層	(1.65)	(1.55)	(0.55)	1/4残存
15	モモ	C-25S 淡黄褐色粘土層	2.70	1.90	1.60	一部欠損
16	モモ	Y-28N 淡黄褐色粘土層	2.70	2.10	1.65	
17	モモ	Y-28S 淡黄褐色粘土層	3.05	2.30	1.95	一部欠損
18	モモ	Y-27N 淡黄褐色粘土層	2.10	1.20	1.22	
19	モモ	A-27N 淡黄褐色粘土層	2.50	2.10	1.60	
20	モモ	Z-27N 淡黄褐色粘土層	2.70	1.80	(0.80)	1/2残存
21	モモ	B-26N 淡黄褐色粘土層	2.95	2.30	(0.90)	1/2残存
22①	モモ	B-25S 淡黄褐色粘土層	1.80	1.90	(0.90)	1/2残存
22②	?	B-25S 淡黄褐色粘土層	1.60	1.40	1.00	
22③	?	B-25S 淡黄褐色粘土層	1.35	1.40	1.00	
23	モモ	Y-28N 淡黄褐色粘土層	2.90	1.95	1.75	
24	モモ	Y-28N 淡黄褐色粘土層	2.75	2.05	1.60	暗灰色粘土層上層、2/3残存
25	モモ	Y-27N 淡黄褐色粘土層上層	2.45	1.88	1.50	暗(青)灰色粘土層上層
26	モモ	Y-28S 淡黄褐色粘土層上層	2.60	1.85	1.65	暗(青)灰色粘土層上層、一部欠損
27	モモ	Z-28S 淡黄褐色粘土層上層	2.95	2.40	1.75	暗(青)灰色粘土層上層
28	モモ	Y-27S 淡黄褐色粘土層上層	2.80	1.70	1.10	暗(青)灰色粘土層上層、2/3残存
29	モモ	Z-28N 淡黄褐色粘土層上層	3.20	2.18	1.75	
30	モモ	Z-27N 噴灰色粘土	2.63	2.20	(1.70)	一部欠損
31	モモ	Z-27N 噴灰色粘土	2.65	2.45	1.70	一部欠損
32	モモ	Y-27S 噴灰色粘土	2.80	1.80	1.45	一部欠損
33	モモ	Y-27S 噴灰色粘土	2.65	2.10	1.60	
34	モモ	Z-27S 淡黄褐色シルト	3.20	2.20	1.70	
35	モモ	Y-27N 淡黄褐色粘土	2.50	1.90	(0.80)	1/2残存
36	モモ	Y-27N 噴灰色粘土	2.75	2.10	1.65	
37	モモ	Y-27N 噴灰色粘土	2.60	2.20	1.60	一部欠損
38	モモ	Y-27S 噴灰色粘土	2.80	2.20	1.80	
39	モモ	Y-27N 噴灰色粘土	(2.60)	2.00	1.50	一部欠損
40	モモ	Y-27S 噴灰色粘土	2.50	2.10	(0.80)	1/2残存
41	モモ	Y-28N 混じり、暗灰色粘土	2.40	2.20	1.60	
42	モモ		2.90	2.10	1.50	
43	マツ	Y-27S	3.80	2.05	1.75	
44	モモ	Y-27S	3.35	(2.20)	1.70	一部欠損
45	モモ	Y-27S	2.60	1.75	1.35	一部欠損
46	モモ	Y-27S	2.70	2.10	1.50	一部欠損
47	?	Y-27S	1.60	1.25	1.10	一部欠損
48	モモ	Y-27N	2.40	1.95	1.45	
49	モモ	Y-27S 混じり、暗灰色粘土	2.85	2.20	1.80	
50	モモ	Y-27S	3.60	2.60	1.90	
51	クルミ	Y-27N 混じり、暗灰色粘土	3.00	2.50	2.70	2/3残存
52	モモ	Y-27N	2.80	1.80	1.60	
53	モモ	Y-27N 暗青灰色粘土	3.80	2.80	1.90	
54	モモ	Y-28N	2.60	2.20	1.60	
55	モモ	Y-27N	3.00	2.35	1.75	
56	マツ	Z-27S	3.30	2.00	(1.60)	一部欠損
57	マツ	A-27S 噴灰色シルト上層	3.15	1.85	(1.90)	1/2残存

第26表 自然遺物一覧表2

遺物番号 (N)	種類	出土地点	層位・遺構	計測値(cm)			備考
				長さ	幅	厚さ	
58①	モモ	Z-27N	暗灰色粘土	2.80	2.20	1.70	グリッド一括上げ
58②	モモ	Z-27N	暗灰色粘土	3.00	2.20	1.80	グリッド一括上げ
58③	モモ	Z-27N	暗灰色粘土	2.86	1.95	1.70	グリッド一括上げ
58④	モモ	Z-27N	暗灰色粘土	2.75	2.10	1.60	グリッド一括上げ
59	モモ	A-26N	淡黄褐色粘土	3.20	2.35	1.75	グリッド一括上げ
60	モモ	B-26N	淡黄褐色粘土	2.50	2.15	1.60	グリッド一括上げ
61	モモ	Z-27S	暗灰褐色粘土	2.60	2.00	1.50	グリッド一括上げ
62①	モモ	Z-27	疊混じり、暗灰色粘土	3.00	2.40	1.90	グリッド上げ
62②	モモ	Z-27	疊混じり、暗灰色粘土	2.90	2.10	1.60	一部欠損、グリッド上げ
62③	モモ	Z-27	疊混じり、暗灰色粘土	3.10	2.10	1.60	一部欠損、グリッド上げ
63	モモ	Z-27N	炭化物層の下の暗(青)灰色粘土	2.15	1.85	(0.75)	1/2残存、グリッド上げ
64①	モモ	Y-27N	疊混じり暗灰色土	2.75	2.10	1.70	一部欠損、グリッド一括上げ
64②	モモ	Y-27N	疊混じり暗灰色土	2.50	1.90	1.50	一部欠損、グリッド一括上げ
64③	モモ	Y-27N	疊混じり暗灰色土	2.45	2.00	(0.85)	1/2残存、グリッド一括上げ
65	モモ		淡黄褐色粘土(シルト)	3.15	2.20	1.75	
66	モモ	C-26S	淡黄褐色粘土下面	2.60	2.10	1.60	ポイントなし
67①	モモ	Z-28S	灰色粘土	3.70	2.35	1.60	グリッド上げ
67②	モモ	Z-28S	灰色粘土	2.45	1.70	(0.65)	1/2残存、グリッド上げ
68	モモ	Y-28N	疊集中地、疊混じり暗灰色土	2.65	2.15	1.75	グリッド上げ
69①	モモ	Z-27S	集石上面	2.80	2.50	1.90	グリッド一括
69②	モモ	Z-27S	集石上面	2.80	2.40	1.90	グリッド一括
70	モモ	Y-27N	集石上面	2.10	2.00	1.60	
71	マツ	Z-27N	集石上面	4.20	2.00	2.00	グリッド上げ
72	モモ	Z-27N	集石上面	2.80	2.20	1.65	グリッド上げ
73	モモ	Z-27N	集石下の落ち込み	2.70	2.30	1.65	グリッド上げ
74①	モモ	Y-28N	集石下層	3.25	2.50	1.95	グリッド上げ
74②	モモ	Y-28N	集石下層	2.80	1.80	1.30	グリッド上げ
75	マツ	Z-27	集石下層	5.40	2.80	2.80	一部欠損、グリッド上げ
76①	モモ	Z-28	集石下層	3.25	2.40	2.00	グリッド上げ
76②	マツ	Z-28	集石下層	4.00	1.80	1.80	一部欠損、グリッド上げ
76③	モモ	Z-28	集石下層	3.15	2.25	1.70	グリッド上げ
77	モモ	A-27S	集石下層	2.75	2.45	1.95	グリッド上げ
78①	モモ	Z-27	集石下層	2.70	1.75	1.35	グリッド一括、一部欠損
78②	モモ	Z-27	集石下層	2.90	2.00	(0.80)	グリッド一括、半欠
78③	マツ	Z-27	集石下層	(2.65)	(2.00)	(1.40)	グリッド一括、2/3残存
78④	モモ	Z-27	集石下層	2.95	2.10	(0.8)	グリッド一括、半欠
78⑤	モモ	Z-27	集石下層	2.75	2.00	1.40	グリッド一括、一部欠損
78⑥	モモ	Z-27	集石下層	2.65	2.10	1.65	グリッド一括、完形
78⑦	マツ	Z-27	集石下層	(2.70)	(1.60)	(1.55)	グリッド一括、1/2残存
78⑧	マツ	Z-27	集石下層	(3.25)	(2.40)	(1.65)	グリッド一括、1/2残存
78⑨	モモ	Z-27	集石下層	(2.75)	(2.00)	(1.45)	グリッド一括、2/3残存
78⑩	ドングリ	Z-27	集石下層	2.60	1.20	1.20	グリッド一括、完形
78⑪	モモ	Z-27	集石下層	(2.00)	(1.70)	(0.80)	グリッド一括、1/4残存
78⑫	モモ	Z-27	集石下層	2.80	2.10	(0.90)	グリッド一括、半欠
78⑬	モモ	Z-27	集石下層	2.30	1.70	1.50	グリッド一括、一部欠損
79①	クルミ	Y-27	集石下	3.20	2.45	2.40	完形
79②	モモ	Y-27	集石下	3.25	(1.90)	1.50	一部欠損
79③	モモ	Y-27	集石下	2.70	2.20	(0.90)	2/5残存
79④	モモ	Y-27	集石下	(2.15)	1.90	0.70	半欠一部欠損
79⑤	モモ	Y-27	集石下	(2.20)	2.10	(0.80)	1/3残存
79⑥	モモ	Y-27	集石下	(2.50)	2.15	1.60	一部欠損
79⑦	モモ	Y-27	集石下	2.95	2.00	1.40	完形
79⑧	モモ	Y-27	集石下	(2.10)	1.90	(0.70)	1/3残存
79⑨	モモ	Y-27	集石下	3.05	2.05	1.45	完形
79⑩	モモ	Y-27	集石下	2.70	2.20	1.70	完形
79⑪	モモ	Y-27	集石下	(2.80)	2.10	1.65	一部欠損
79⑫	モモ	Y-27	集石下	(2.70)	2.05	0.70	半欠一部欠損
79⑬	モモ	Y-27	集石下	2.60	(1.70)	(0.80)	1/4残存
79⑭	モモ	Y-27	集石下	(2.50)	1.90	(0.70)	2/5残存
79⑮	モモ	Y-27	集石下	2.40	1.80	(0.70)	半欠一部欠損

第27表 自然遺物一覽表3

遺物番号 (N)	種類 グリッド	出土地点 層位・構造	計測値(cm)			備考
			長さ	幅	厚さ	
79-⑨	クルミ	Y-2 7 集石下	(3.10)	2.25	(1.05)	半欠一部欠損
79-⑩	モモ	Y-2 7 集石下	2.60	(1.90)	(0.80)	半欠一部欠損
80-①	マツ	Y-2 8 集石下	4.10	2.35	2.35	完形
80-②	モモ	Y-2 8 集石下	(2.30)	1.85	1.60	一部欠損
80-③	モモ	Y-2 8 集石下	(3.15)	2.20	1.75	一部欠損
80-④	?	Y-2 8 集石下	1.85	1.40	1.00	完形
80-⑤	モモ	Y-2 8 集石下	3.05	(2.10)	1.60	一部欠損
80-⑥	モモ	Y-2 8 集石下	(3.00)	2.20	1.75	一部欠損
81-①	モモ	Z-2 8 集石下	2.95	2.20	1.70	グリッド一括、完形
81-②	モモ	Z-2 8 集石下	(2.85)	(2.15)	0.90	グリッド一括、2/5残存
82-①	モモ	Y-2 7 S S P 4 5	(3.20)	2.25	1.65	一部欠損
82-②	モモ	Y-2 7 S S P 4 5	2.75	(2.05)	1.80	一部欠損
83	モモ	Z-2 6 N 暗灰色粘土	(2.30)	(1.50)	(0.80)	1/3残存
84	モモ	Z-2 6 集石下	(2.75)	2.20	1.70	グリッド一括、一部欠損
85-①	モモ	A-2 6 集石下	(1.70)	(1.95)	(0.90)	グリッド一括、1/4残存
85-②	モモ	A-2 6 集石下	(1.95)	(1.80)	(1.00)	グリッド一括、2/6残存
86-①	モモ	Z-2 7 集石下層	(2.90)	(1.90)	(1.65)	グリッド一括、一部欠損
86-②	モモ	Z-2 7 集石下層	(2.65)	(1.85)	(1.55)	グリッド一括、一部欠損
86-③	モモ	Z-2 7 集石下層	(2.20)	(1.80)	1.50	グリッド一括、一部欠損
86-④	モモ	Z-2 7 集石下層	(2.50)	(1.55)	(1.30)	グリッド一括、2/3残存
86-⑤	モモ	Z-2 7 集石下層				グリッド一括、1/3残存、計測不能
87	マツ	Z-2 7 N 集石下、S P 1 7	4.30	2.50	2.40	完形
88-①	モモ	Y-2 7 N 集石下、S P 1 0 5	(2.85)	1.95	(0.85)	半欠一部欠損
88-②	モモ	Y-2 7 N 集石下、S P 1 0 5	(2.70)	2.30	1.85	一部欠損
89	?	Y-2 7 集石下	1.80	(1.45)	1.10	一部欠損
90-①	モモ	Z-2 6 集石下層	(2.70)	2.30	1.85	一部欠損
90-②	?	Z-2 6 集石下層	1.80	(1.25)	0.60	半欠一部欠損
91-①	モモ	Z-2 7 集石下	(1.95)	(1.90)	(1.00)	1/2残存
91-②	モモ	Z-2 7 集石下	(2.25)	(1.55)	(1.50)	2/3残存
91-③	モモ	Z-2 7 集石下	(3.05)	(2.10)	1.60	一部欠損
92	モモ	Z-2 7 N S 集石下	(2.80)	(1.80)	1.40	4/5残存
93-①	モモ	Z-2 7 S 集石下	2.65	(2.00)	1.70	一部欠損
93-②	モモ	Z-2 7 S 集石下	(2.85)	2.00	1.40	一部欠損
94	モモ	Z-2 7 N 集石下、S P 9 9	2.65	2.00	1.50	一部欠損
95	?	Y-2 7 N 集石下、S P 1 0 5	(2.25)	1.90	1.55	一部欠損
96-①	モモ	Y-2 7 集石下	2.45	(1.70)	1.50	一部欠損
96-②	モモ	Y-2 7 集石下	(2.20)	1.60	1.30	一部欠損
98	モモ	Z-28N 集石下、S P 1 2 4	2.65	1.85	1.50	完形
99-①	モモ	Z-2 7 青灰色シルト～暗灰色砂	2.20	1.65	1.30	完形
99-②	?	Z-2 7 青灰色シルト～暗灰色砂	0.80	0.40	0.10	
99-③	?	Z-2 7 青灰色シルト～暗灰色砂	0.80	0.40	0.10	
99-④	?	Z-2 7 青灰色シルト～暗灰色砂	0.80	0.40	0.10	
99-⑤	?	Z-2 7 青灰色シルト～暗灰色砂	0.80	0.40	0.10	
99-⑥	?	Z-2 7 青灰色シルト～暗灰色砂	0.80	0.40	0.10	
99-⑦	?	Z-2 7 青灰色シルト～暗灰色砂	0.80	0.40	0.10	
99-⑧	?	Z-2 7 青灰色シルト～暗灰色砂	0.80	0.40	0.10	
100	マツ	A-26S 青灰色シルト～暗灰色砂	(3.00)	1.90	(1.55)	グリッド一括、3/4残存
101	モモ	Z-2 8 -括 青灰色シルト～暗灰色砂	2.40	1.65	1.35	一括、完形
102-①	モモ	Y-2 7 N 青灰色シルト～暗灰色砂	3.20	2.20	1.90	一括、一部欠損
102-②	モモ	Y-2 7 N 青灰色シルト～暗灰色砂	2.15	1.85	1.90	一括、一部欠損
103	モモ	Y-2 7 S 青灰色シルト～暗灰色砂	2.60	2.15	(0.75)	一括、半欠
104-①	モモ	Y-2 8 N 青灰色シルト～暗灰色砂	3.35	2.30	(0.85)	一括、半欠
104-②	モモ	Y-2 8 N 青灰色シルト～暗灰色砂	3.10	2.25	(0.85)	一括、半欠
105	モモ	Y-2 7 S S P 4 5	2.75	2.00	(0.95)	一括、完形
106-①	モモ	A-2 6 S S X 0 7	2.95	2.30	(1.60)	一括、半欠
106-②	モモ	A-2 6 S S X 0 7	2.30	1.85	(0.80)	一括、半欠
106-③	モモ	A-2 6 S S X 0 7	(2.10)	(2.00)	(1.10)	一括、2/3残存
107	モモ	Y-2 8 S S P 2 4	2.85	2.30	(0.95)	半欠
108	モモ	Z-2 7 S S P 5 8	3.20	2.30	(1.70)	完形
109-①	マツ	A-2 6 S S X 0 9	4.60	2.50	(2.05)	一括、3/4残存

第28表 自然遺物一覧表4

遺物番号 (N)	種類	グリッド	出 土 地 点	層位・構造	計 測 値(cm)			備 考
					長さ	幅	厚さ	
109-②	モモ	A-2 6 S	S X 0 9		3.10	2.20	(0.90)	一括、半欠
109-③	モモ	A-2 6 S	S X 0 9		3.05	2.10	(0.90)	一括、半欠
109-④	?	A-2 6 S	S X 0 9		1.70	1.30	(1.05)	一括、完形
110-①	クルミ	A-2 7 N	東側トレンチ駐畔北		(3.05)	2.70	(1.30)	半欠
110-②	クルミ	A-2 7 N	東側トレンチ駐畔北		(2.50)	(2.40)	(0.95)	1/4残存
110-③	クルミ	A-2 7 N	東側トレンチ駐畔北		(1.60)	(2.90)	(1.30)	1/6残存
111-①	?	B-2 7 S	東側トレンチ		(3.25)	(3.20)	(1.10)	破片
111-②	?	B-2 7 S	東側トレンチ		(2.60)	(3.05)	(0.60)	破片
111-③	?	B-2 7 S	東側トレンチ					破片、計測不能
112	クルミ	C-2 5 N	北側トレンチ		3.15	(1.70)	(1.30)	1/3残存
113-①	クルミ	A-2 7 N	大駐畔		3.30	2.75	(1.40)	半欠
113-②	クルミ	A-2 7 N	大駐畔		2.65	2.70	2.75	完形
114-①	クルミ	A-2 6 N	27ライングリッドトレンチ		(3.00)	(2.50)	(1.10)	1/2残存
114-②	クルミ	A-2 6 N	27ライングリッドトレンチ		(2.20)	(2.60)	(0.90)	1/3残存
115	クルミ	A-2 7 N	淡黄灰赤粘土乳白色粘土混じり層		(2.85)	(2.15)	(1.25)	1/3残存
116	?	A-2 7	Ⅲ層		1.90	1.20	1.00	完形
117-①	クルミ	B-2 6	Cライン		3.90	(2.40)	0.95	1/3残存
117-②	クルミ	B-2 6	Cライン		3.75	(2.55)	(1.30)	1/3残存
118	クルミ	A-2 6 N	V層		(2.65)	2.55	(0.80)	半欠
119	クルミ	A-2 7 N	V層		(2.55)	(2.35)	(1.25)	半欠
120	クルミ	B-2 7 S	3面下層		(3.85)	3.15	(1.50)	半欠
121	モモ	B-2 6	Ⅱ層		2.65	2.50	1.90	完形
122	クルミ	A-2 6 N	柱穴周辺土器散在域		4.25	(2.75)	(2.75)	一部欠損
123-①	クルミ	B-2 6	オリーブ黒砂粒子混じり粘土層		3.15	(2.80)	2.85	一部欠損
123-②	モモ	B-2 6	オリーブ黒砂粒子混じり粘土層		2.25	1.95	1.65	完形
123-③	モモ	B-2 6	オリーブ黒砂粒子混じり粘土層		2.30	2.05	1.55	完形
124-①	クルミ	B-2 6 S	V層		4.65	2.95	2.90	完形
124-②	クルミ	B-2 6 S	V層		(2.50)	2.50	(1.40)	約1/2残存
124-③	クルミ	B-2 6 S	V層		4.40	(2.90)	(2.30)	一部欠損
124-④	クルミ	B-2 6 S	V層		(3.15)	3.00	(1.20)	半欠
124-⑤	クルミ	B-2 6 S	V層		3.15	2.55	(1.30)	半欠
124-⑥	クルミ	B-2 6 S	V層		(2.90)	2.90	(1.55)	約1/2残存
124-⑦	クルミ	B-2 6 S	V層		(3.00)	(2.90)	(1.30)	約1/2残存
124-⑧	クルミ	B-2 6 S	V層		(3.40)	(2.50)	(1.30)	約1/2残存
124-⑨	クルミ	B-2 6 S	V層		(3.25)	(2.70)	(1.30)	約1/2残存
124-⑩	クルミ	B-2 6 S	V層		(3.10)	(2.70)	(1.50)	約1/2残存
124-⑪	クルミ	B-2 6 S	V層		(3.20)	2.95	(1.20)	約1/2残存
124-⑫	クルミ	B-2 6 S	V層		(2.90)	(2.55)	(1.10)	約1/2残存
124-⑬	クルミ	B-2 6 S	V層		(3.25)	(2.80)	(1.50)	半欠
124-⑭	クルミ	B-2 6 S	V層		(2.35)	2.50	(1.10)	約1/2残存
124-⑮	クルミ	B-2 6 S	V層		(2.50)	(2.50)	(1.15)	約1/2残存
124-⑯	クルミ	B-2 6 S	V層		(3.30)	(2.00)	(0.70)	約1/4残存
124-⑰	クルミ	B-2 6 S	V層		(2.40)	(2.00)	(1.30)	約1/4残存
124-⑱	モモ	B-2 6 S	V層		2.50	2.10	1.60	完形
125-①	クルミ	B-2 6 S	V層		(3.40)	2.90	(1.35)	半欠
125-②	クルミ	B-2 6 S	V層		2.90	(2.20)	(1.95)	2/3残存
125-③	クルミ	B-2 6 S	V層		3.10	2.70	(1.25)	半欠
126-①	クルミ	B-2 6 S	V層		3.80	3.10	(1.15)	半欠
126-②	クルミ	B-2 6 S	V層		(3.10)	2.90	(1.25)	約1/2残存
126-③	クルミ	B-2 6 S	V層		(3.45)	(2.90)	(1.45)	1/4残存
128-①	クルミ	B-2 6 S	V層		(3.05)	3.10	(1.80)	約1/2残存
128-②	クルミ	B-2 6 S	V層		(3.50)	2.70	(1.30)	半欠
128-③	クルミ	B-2 6 S	V層		(3.00)	2.80	(1.20)	半欠
128-④	クルミ	B-2 6 S	V層		(3.00)	(2.80)	(1.40)	約1/2残存
128-⑤	クルミ	B-2 6 S	V層		(3.10)	(2.90)	(1.30)	約1/2残存
128-⑥	クルミ	B-2 6 S	V層		(3.05)	(2.70)	(1.40)	約1/2残存
128-⑦	クルミ	B-2 6 S	V層		(2.80)	(2.60)	(1.30)	約1/2残存
128-⑧	クルミ	B-2 6 S	V層		(2.70)	2.30	(1.00)	約1/2残存
128-⑨	クルミ	B-2 6 S	V層		(2.60)	(2.50)	(1.10)	約1/2残存
129-①	クルミ	B-2 6	V層		3.45	(2.45)	(1.70)	2/5残存

第29表 自然遺物一覧表5

遺物番号 (N)	種類 グリッド	出土地点 層位・遺構	計測値(cm)			備考
			長さ	幅	厚さ	
129-④	クルミ	B-2 6 V層	3.35	(2.60)	2.75	4/6残存
129-③	クルミ	B-2 6 V層	4.00	(2.30)	2.70	4/5残存
129-④	クルミ	B-2 6 V層	3.30	(2.35)	2.70	5/6残存、穿孔
129-⑤	クルミ	B-2 6 V層	3.00	(2.40)	2.20	5/6残存、穿孔
129-⑥	クルミ	B-2 6 V層	(3.15)	2.40	(1.20)	半欠一部欠損
130	クルミ	B-2 6 S V層	3.20	2.50	(1.15)	半欠
131-①	クルミ	B-2 6 V層	4.50	3.20	2.95	完形
131-②	モモ	B-2 6 V層	2.10	1.80	1.40	完形
133-①	クルミ	B-2 6 S	(3.20)	2.65	(1.30)	半欠一部欠損
133-②	クルミ	B-2 6 S	(3.15)	3.00	(1.10)	1/3残存
133-③	クルミ	B-2 6 S	(2.95)	(2.85)	(1.30)	半欠一部欠損
134-①	クルミ	C-2 6 V層	(3.00)	(2.75)	(0.85)	1/3残存
134-②	クルミ	C-2 6 V層	(3.10)	(2.85)	(0.80)	1/2残存
135	クルミ	B-2 5 V層	4.05	(2.70)	2.55	一部欠損
136	モモ	B-2 6 V層	2.60	(2.30)	2.00	一部欠損
137-①	クルミ	B-2 6 S V層	3.40	(2.60)	(2.30)	1/2残存
137-②	クルミ	B-2 6 S V層	(2.80)	(2.65)	(1.30)	約1/2残存
138	クルミ	B-2 5 N V層	(3.10)	3.15	(1.25)	半欠
139-①	モモ	B-2 6 S SR03	2.50	2.20	1.75	完形
139-②	クルミ	B-2 6 S SR03	3.65	3.05	(1.45)	半欠
139-③	モモ	B-2 6 S SR03	2.50	2.05	1.80	完形
139-④	クルミ	B-2 6 S SR03	(2.80)	2.85	(1.40)	約1/2残存
139-⑤	モモ	B-2 6 S SR03	(1.35)	(1.85)	(0.70)	破片
140	クルミ	B-2 6 S SR03	(3.25)	(2.55)	(1.50)	約1/2残存
141	クルミ	C-2 5 V層	(3.25)	(2.75)	(1.50)	約1/2残存
142	クルミ	B-2 6 S SR03	(3.10)	(3.00)	(1.40)	約1/2残存
143	クルミ	B-2 6 S SR03	(3.00)	3.05	(1.50)	約1/2残存
144	クルミ	B-2 6 V層	(3.20)	2.50	(1.35)	約1/2残存
145	クルミ	A-2 7 N 3面解体	(2.70)	(2.50)	(1.30)	1/3残存
146-①	クルミ	C-2 6 S V層	2.95	(2.10)	2.35	一部欠損
146-②	モモ	C-2 6 S V層	1.60	1.40	(1.00)	1/2残存
147	クルミ	B-2 5 N V層	(2.40)	(2.30)	(2.20)	1/3残存
148-①	クルミ	B-2 6 N V層	(3.00)	(2.40)	(1.10)	1/4残存、土壌下
148-②	クルミ	B-2 6 N V層	(3.40)	(1.60)	(0.90)	破片、土壌下
148-③	クルミ	B-2 6 N V層	3.45	2.50	(1.35)	1/2残存、土壌下
148-④	クルミ	B-2 6 N V層	(3.55)	(1.35)	(0.80)	破片、土壌下
148-⑤	クルミ	B-2 6 N V層	3.65	(2.45)	2.55	一部欠損、土壌下
148-⑥	クルミ	B-2 6 N V層	(3.20)	(1.95)	(0.75)	破片、土壌下
148-⑦	クルミ	B-2 6 N V層	(2.65)	2.65	(1.25)	半欠、土壌下
148-⑧	クルミ	B-2 6 N V層	(3.30)	2.90	(1.30)	半欠、土壌下
148-⑨	クルミ	B-2 6 N V層	(3.10)	3.00	(1.60)	半欠、土壌下
149-①	クルミ	B-2 6 S SR03	(2.70)	2.85	(1.30)	約1/2残存
149-②	クルミ	B-2 6 S SR03	(2.00)	(2.20)	(1.25)	1/4残存
149-③	クルミ	B-2 6 S SR03	(3.10)	(2.15)	(1.40)	約1/2残存
149-④	クルミ	B-2 6 S SR03	(2.50)	(2.40)	(1.20)	約1/2残存
149-⑤	クルミ	B-2 6 S SR03	(2.50)	(2.30)	(1.10)	約1/2残存
149-⑥	クルミ	B-2 6 S SR03	4.90	3.20	3.00	完形

第V章 考 察

瀬名川遺跡の調査成果のなかで、特に中世の遺構面に関する考察を幾つかまとめた（註1）。

1 呪符木簡について

中世の土坑SX07より出土した第18図60の木簡は、「鬼」の字が四方向に書かれた呪符として機能した木簡であろう。「鬼」の字については、奈良大学の水野正好氏が「七鬼神の信仰とその呪符」（『どるめんNo.18』S53.8.1）のなかで、「却疫病札」の性格を持つことを指摘している。集落近くより出土したことから、これもその性格を持つものであろう。両面の四方向に「鬼」の字が書かれているのは、四方八方から入ってこないようにという意味で「鬼」の字を配置しているのであろう。さらに中央には「鬼」の字とは関係のない墨書きがある。凡字とも考えられるが、それにしてはあまり丁寧に書かれていない感がある。この墨書きの意味するところは不明である。

出土した遺構の用途も特定できていないことから、遺構との関連性も不明である。

2 瀬名川遺跡の中世遺構について

掘立柱建物の規模や出土した遺物の種類から見ても、一般庶民のものではないと考えられる。出土土器の年代（13世紀後半～14世紀）より、遺跡の存続時期も瀬名川宿の登場してくる時期とはほぼ同時期と思われることから、当時、瀬名川の地に置かれていたと言われる宿駅との関連性が期待された。とはいえ、直接この遺構を瀬名川宿に結びつける決定的な根拠に欠ける。現在の段階では、瀬名川宿の可能性は止めておいたほうよいのではないかと思われる。

ただ、土坑（SX09）から出土した3000点を超える箸状木製品については非常に興味深い。この大量の箸状木製品から、食事を供給する施設、もしくは賓客をもてなす場所であったなどの可能性が想定できる。いずれにしてもこの土地の有力者の施設と考えて間違いないだろう。

第58図に示した明治期の地籍図に見られる調査区内（網かけ部分）の表層地割は、中世遺構面で検出された杭列の位置と方向性がほぼ一致する（出典：矢田 勝1997）。

3 瀬名川宿が登場する文献について

瀬名川宿初見の文献は、弘長二年（1262年）2月23日に西大寺の叡尊が鎌倉に下向する際、「瀬名川宿」で中食（昼食）をとったことが、『関東往還記』にある。

「廿三日、渡蘿階河、於同国（駿河国庵原郡）瀬無河宿中食、於同国清見関（庵原郡）儲茶、及夜陰着同国神原宿（庵原郡）、」

また『遺塵と歌集』には弘安年間に高階宗成によって詠まれた長歌に「弘安のころ、あつまへまかりて侍けるに、みちのほとの宿をよみつゝけけるなかうた、・・・てこしせなかは・・・」と出ている。戦国期にも『大乘院記録』や『実曉記』に瀬名川宿の名称が出てくるが、これ以降、瀬名川宿が文献上登場してくることはない。瀬名川宿について書かれている現存する文献は非常に数少ない。宿の名称が出てきたとしても断片的にしか出てこない。瀬名川宿については正確な所在地や宿の性格のわかるものは全く残っていないのが現状である（註2）。

4 瀬名川宿と中世東海道について

現在では、瀬名川宿のあった正確な場所はわかっていないが、現在でも地名が残っている瀬名川地内である可能性は高い。宿の位置的に見て、駿河国府から清美ヶ関までは1日あれば歩くことができる距



第58図 遺跡周辺の表層地割（明治期地籍図）と旧小字名（出典：矢田 勝 1997）

離であり、途中の瀬名川宿ではせいぜい昼食か休憩をとる程度であったとも考えられる。つまり滞在する宿ではなく通過的な性格で、場所がら瀬名川宿の機能はそれほど重要な拠点ではなかったと思われる。宿が文献上に登場するのは13世紀後半～14世紀で、15～16世紀には文献上にも全く登場しなくなる。

中世の東海道については、中世以前の東海道のことも考慮しなければならないだろう。現在のところ、最近の調査結果から古代東海道は谷津山より南に位置していることが解っている。また谷津山より北側を通るルート、つまり現在の北街道もある。これまでにもいくつかのルートが想定されているが、古代以降もおそらく基本的な東海道の位置は変わっていないと思われる。

調査区の南側を通る道路は、古くから鎌倉道とも呼ばれている。源頼朝により1212年に駅路法が制定され、鎌倉・京都間に六十三次の宿駅を設けている。瀬名川にも宿場のあったことが記録に残っている。しかし、鎌倉期になっていきなり大規模に新しい道路をつくったということは時代的な背景からして考えにくい。とすれば、いままでにある既存の道路を使ったことも考えられることから、鎌倉時代に東海道として使われていた可能性もある。しかし街道であれば、道路幅や側溝、砂利などの敷き込みがあると考えられる。この調査区南側を通る道路は迂回路的な道路であった可能性もある。

地籍図では調査区南側の旧小字名が「海道下（かいどうした・かいどーした）」となっている点が興味深い。また、現在の南側の道路は昭和6年以降に整備されたもので、それ以前の道路は旧地形図（註3）と重ねると第59図のようになる。旧道は付近で除々に南下する（註4）。今回の調査で見つかった遺構はこの推定ラインにほぼ直交する方向に並んでいることから、道路沿いに建っていた建物の可能性が高い。しかし、今回の調査では道路状の遺構やこれに附随する施設などは確認されていないことから、あくまでも推定の域を出ない。

これまでの資料から宿と東海道の可能性を検証してみたが、現段階では、中世東海道の可能性やこれらの遺構が瀬名川宿であるという結論は止めておき、今後の調査成果を待ちたい。

註1 中世の遺構面や呪符木簡、瀬名川宿のことについては静岡大学教授 湯之上 隆氏に御指導・御教示をいただいた。

註2 瀬名川の地名は、永禄9年（1566）の『今川氏真判物』（清見寺文書）に、「一横屋但馬入道知行瀬名河（庵原郡）之内山之鼻・溝越両所之事、任借状之旨、…」にも見える。

註3 大日本帝国陸地測量部による明治21～25年製版の二万五一尺地形図。

註4 以前の長尾川は調査区の50mほど西側を通り、矢射タム橋は第59図に示した位置にあったと言われている。この畑の持ち主である桜井弥作さんのお話では、この辺りから橋の跡らしき木が出たとのことであった。またここから大きな石が出て、それが現在の石碑の土台になっているものということである。現在でも旧道のあった場所を耕作すると、かなり硬く、耕耘機でも歯がたたないという。

〈引用・参考文献〉

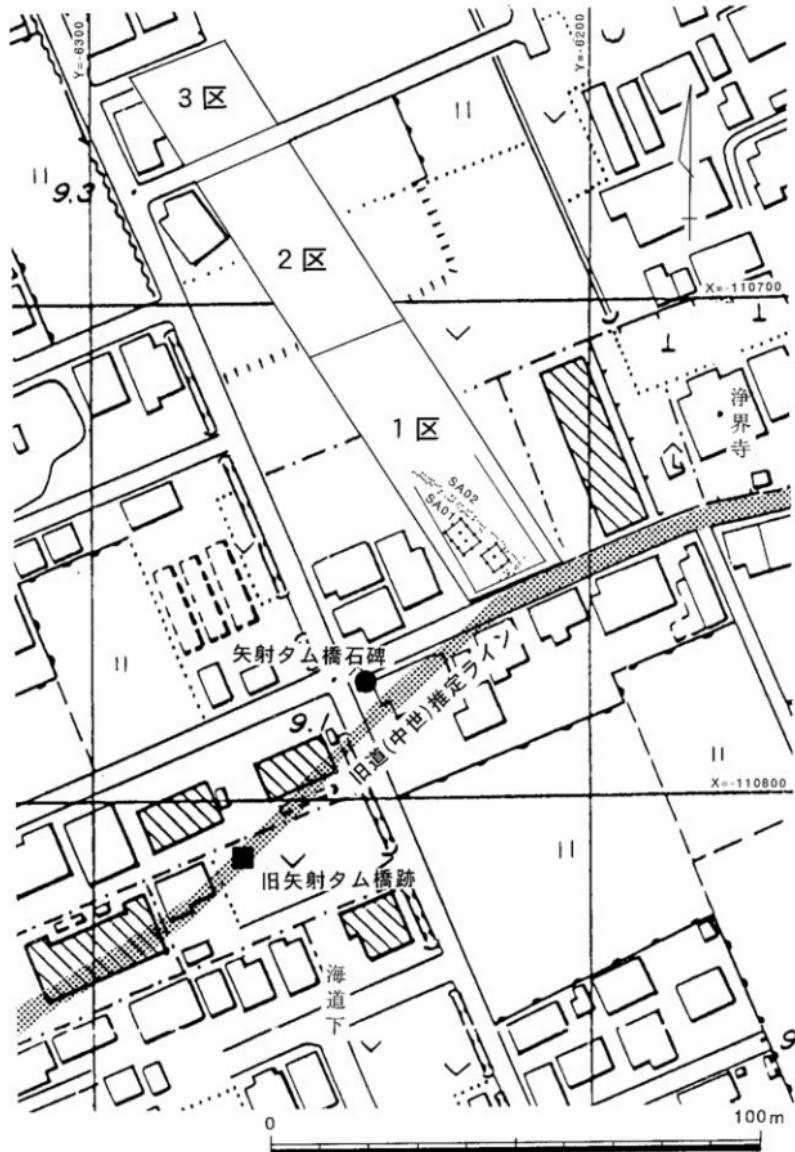
水野正好「七鬼神の信仰とその呪符」『どるめん』No.18 1978.8.1

『静岡県史』資料編5 中世一 静岡県 1989.3.20

『静岡県史』資料編7 中世三 静岡県 1994.3.25

静岡県教育委員会文化課『静岡県歴史の道 東海道』 静岡県教育委員会 1994.3.31

矢田 勝「条里の広域施行時期と変遷過程についての試論-静清平野における律令期統一条里遺構の調査が投げかける諸問題-」『研究紀要』第5号 （財）静岡県埋蔵文化財調査研究所 1997.3.25



第59図 中世遺構と旧道（中世）推定ライン

謝 辞

最後に、瀬名川遺跡の現地調査・報告書作成のなかで、多くの方々から御教示・御助言を賜った。末尾ながらここで御芳名を挙げさせていただき、深く感謝を申し上げたい。また、静岡県静岡土木事務所の方々には、文化財調査に対する御理解と御協力をいただき、静岡市教育委員会の方々には、多くの有益な御助言・御協力をいただいた。併せて感謝申し上げる。

指導・助言をいただいた方々

伊藤寿夫

発掘調査参加者

石田志満 伊藤梨香 内野幸子 漆畠博義 漆畠三夫 漆畠 實 太田辰男 笠井信孝 加藤百合子
川名桃江 菊田智里 甲田俊樹 佐藤和代 佐野貴紀 生子和江 神林正新 杉山太逸 杉山 敬
杉山ち江子 杉山 衛 瀬川真理 龍 桂子 竹下寿之 富永定男 渡辺常生 西ヶ谷安俊 松下保代
村松奈緒 望月貴之 森田豊治 渡辺ひろ子

資料整理参加者

岩石文江 遠藤幸子 笠井昌枝 加藤百合子 佐々木富士子 鎌原瞳美 早瀬容子 平井豊子

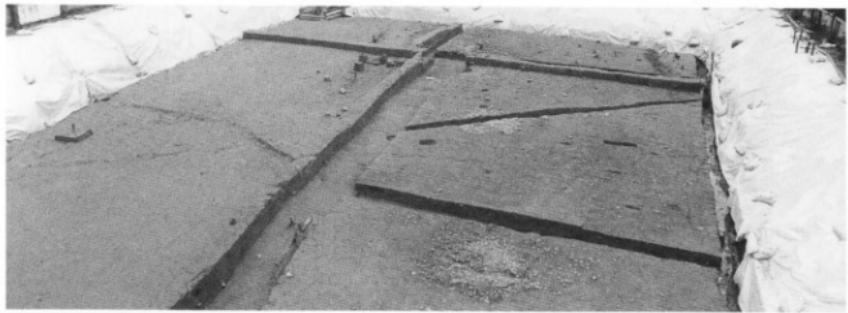
(五十音順、敬称略)

写真図版

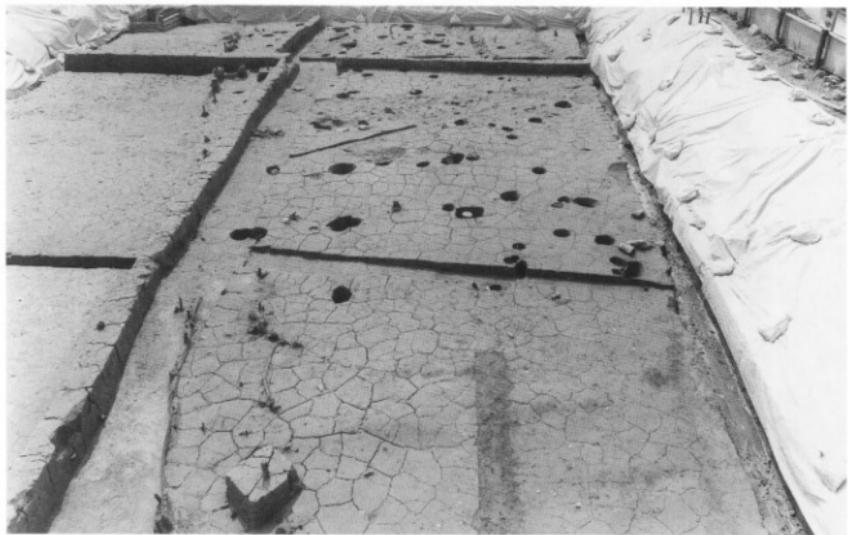


遺跡遠景

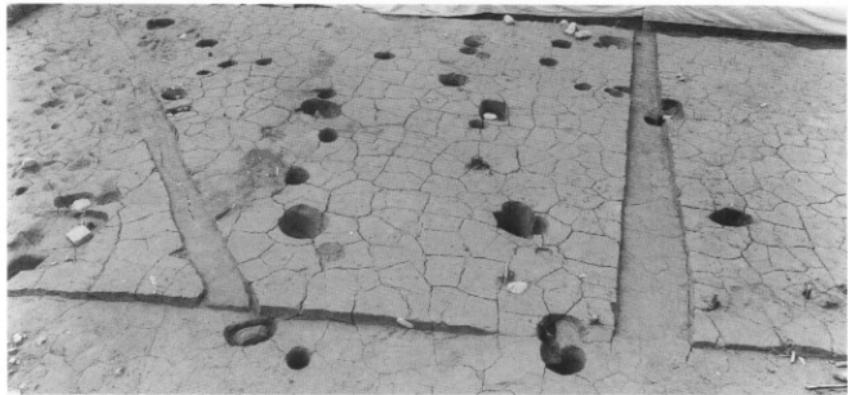
図版2



1.1区中世上面検出状況（北西より）



2.1区中世下面全景（北西より）



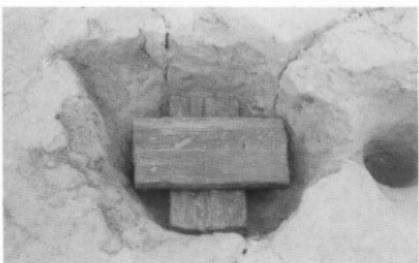
3.1区掘立柱建物SH01検出状況（東より）



1.1 区SP96～98完掘（南より）



2.1 区SP87完掘（西より）



3.1 区SP53礎板出土状況（西より）



4.1 区SP124完掘（東より）



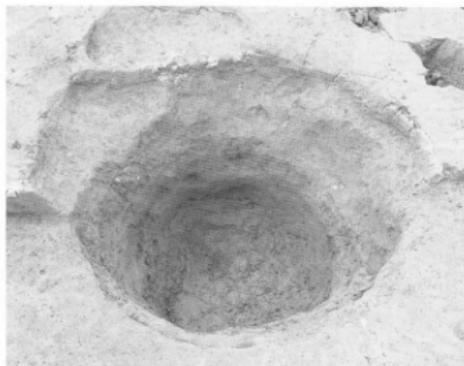
5.1 区SX06内 柄杓
出土状況（南西より）



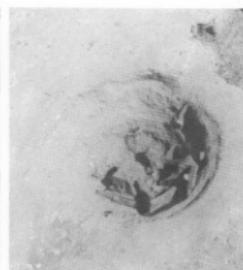
6.1 区SX06完掘（西より）



1.1 区SX07覆土内呪符木簡出土状況（南より）



2.1 区SX07完掘（南より）



3.1 区SX07遺物出土状況
(南より)



4.1 区SX08遺物、礫出土状況（北より）

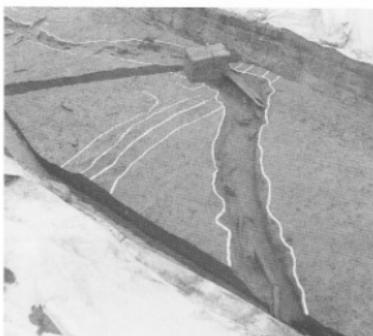


1.2区SK03・SD08・小畦畔検出状況（南西より） 2.1区Ⅱ層水田SK01内ねずみ返し出土状況（北西より）



3.3区大畦畔SK04・05検出状況（南東より）

4.3区Ⅱ層水田全景（南東より）



5.6区SD13・畦畔検出状況（北東より）



6.6区Ⅱ層水田全景（南東より）

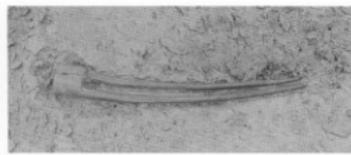
図版6

2.1区VI層集落面全景
(南東より)

1.1区大畦畔SK02検出状況 (南西より)



3.1区弥生時代掘立柱建物SH03・04検出状況 (南西より)



5.1区装飾品(替)出土状況 (南より)

4.1区木製品(櫛)出土状況 (西より)



89



20



86



19



80



18



79



21



106



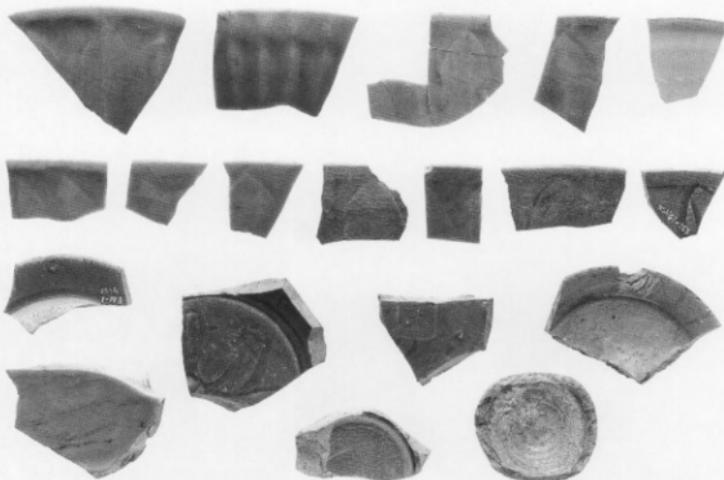
16



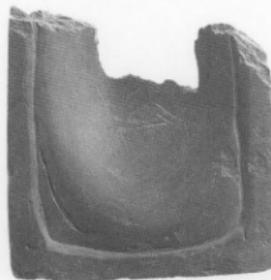
105



17



90~99



151



152



147



146



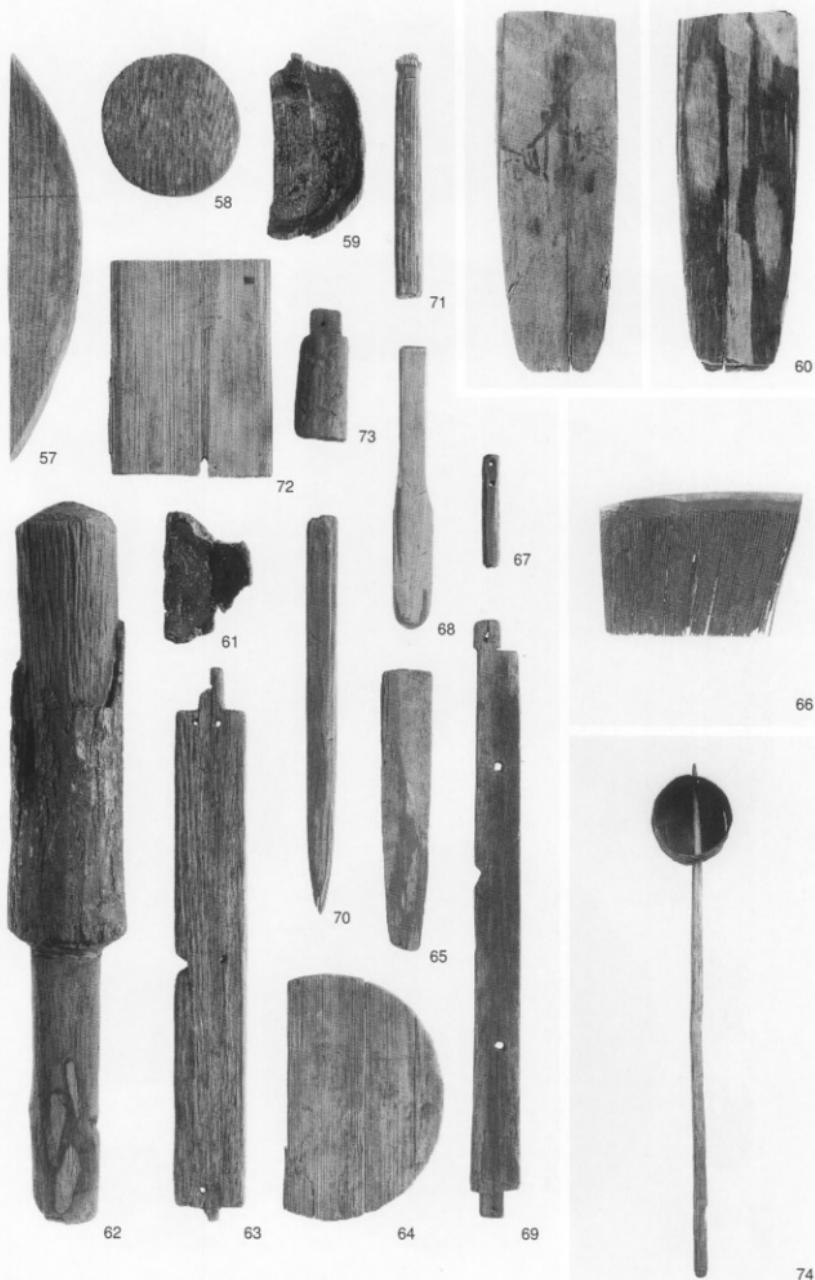
148



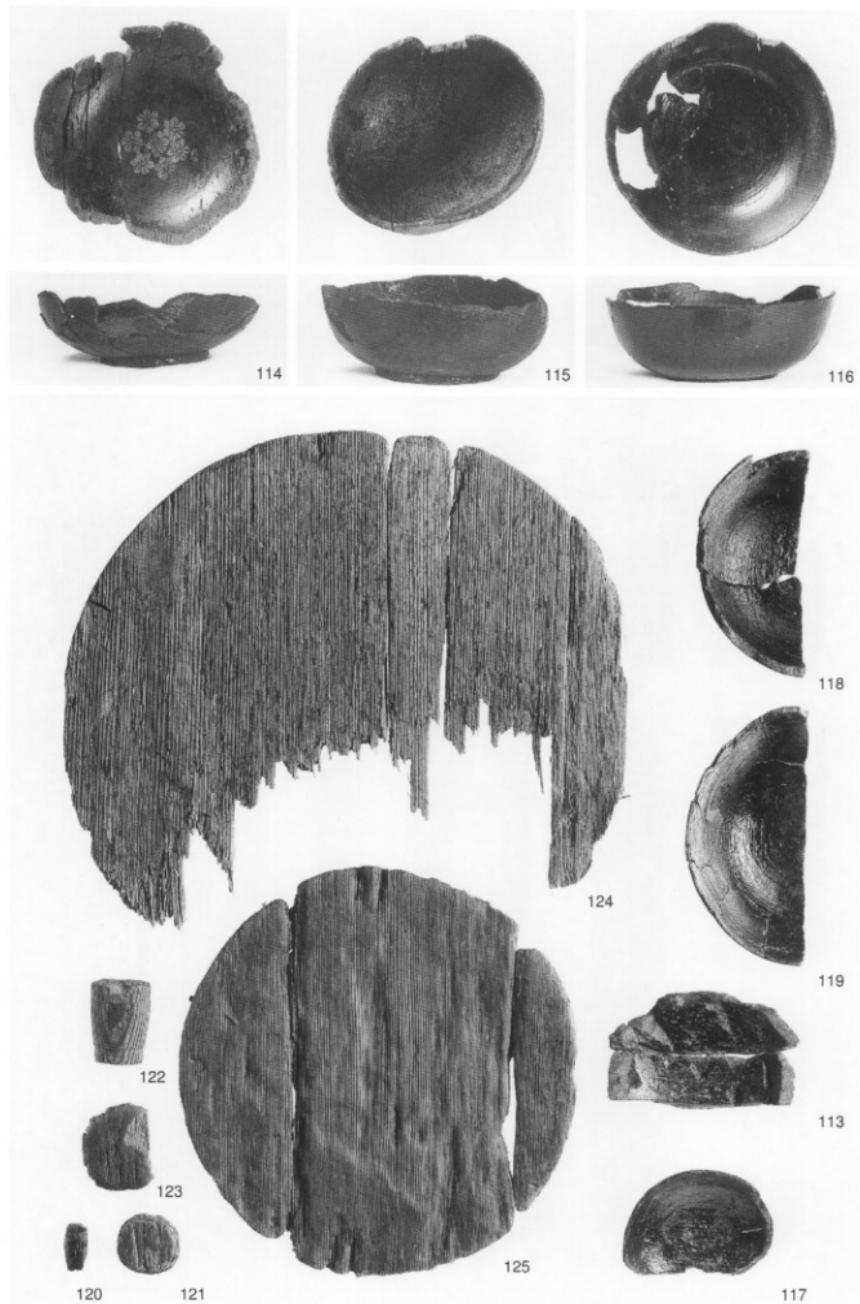
149

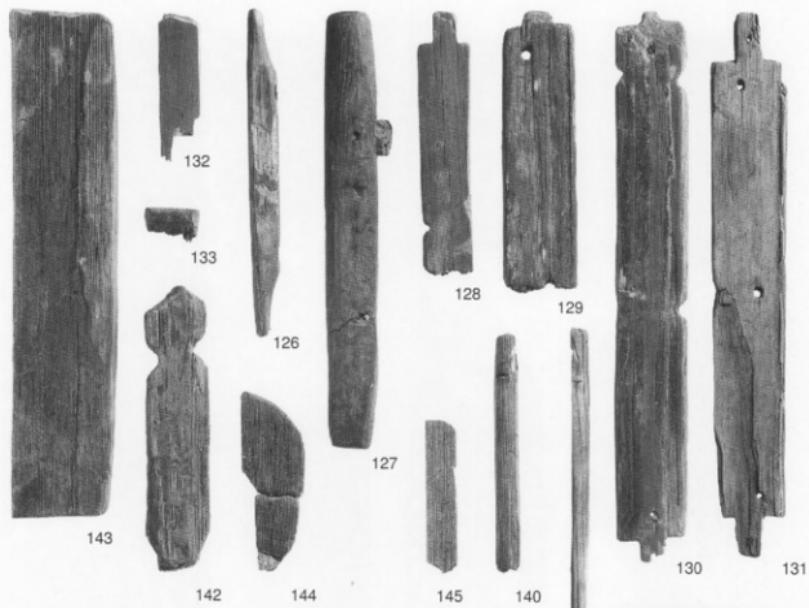


150



中世木製品 1 (SX05・SX09)

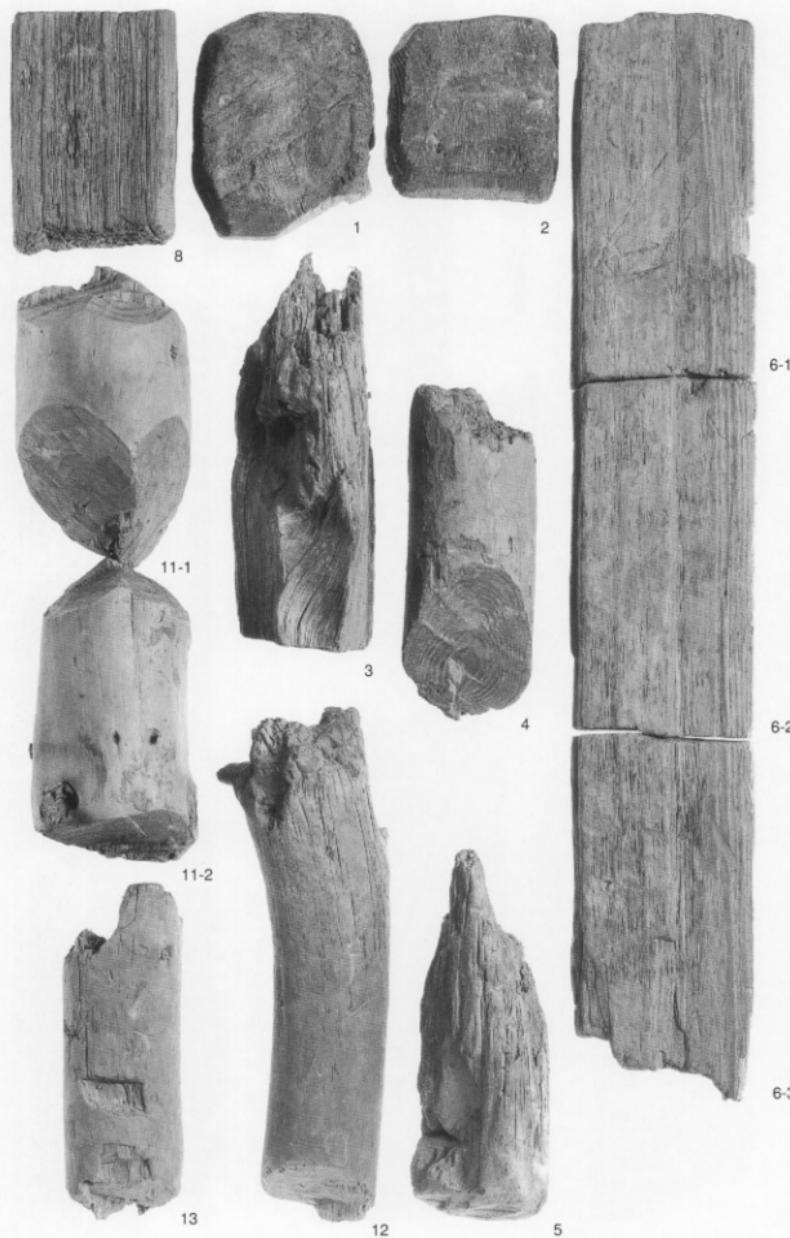




136

135

134



中世木製品 4 (SH01・SH02・SH03)



9



7



14



15



10



153



154



155



156



157



158



159



160



161



162



163



164



165



166



167



168



169



170



171



172



173



174



175



176



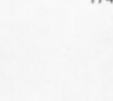
177



178



179



180



181



182



183



184



185



186



187



294



288



297



289



307



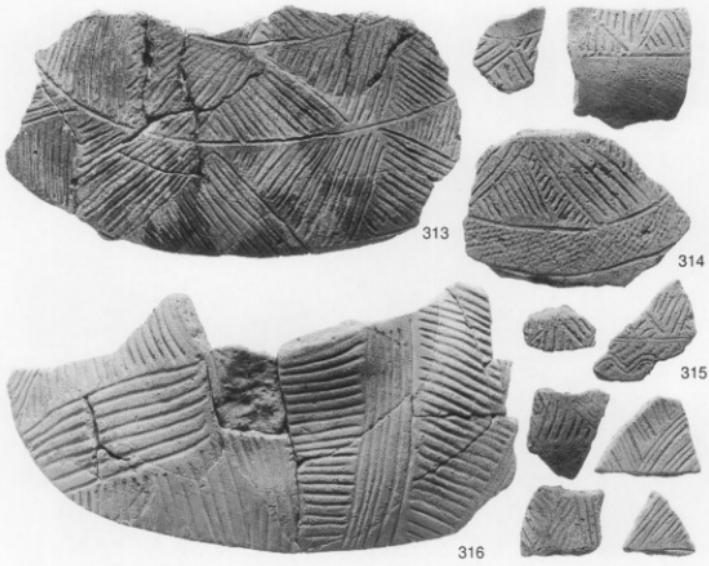
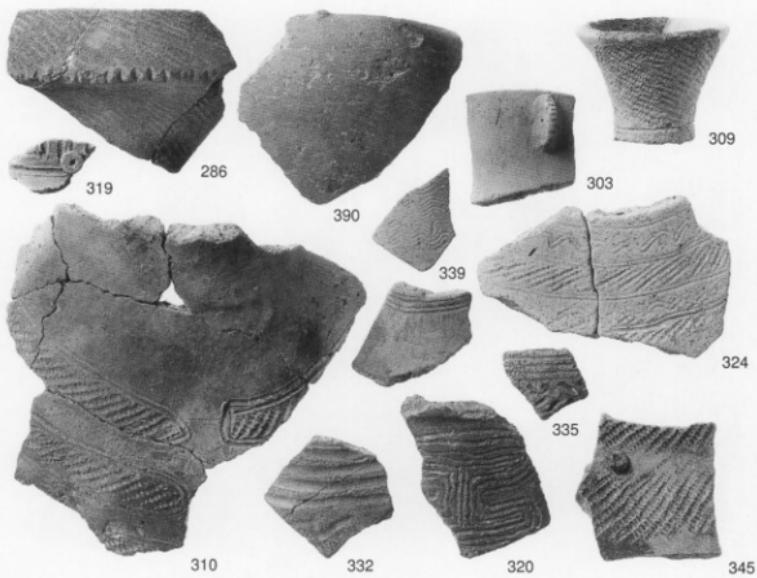
290

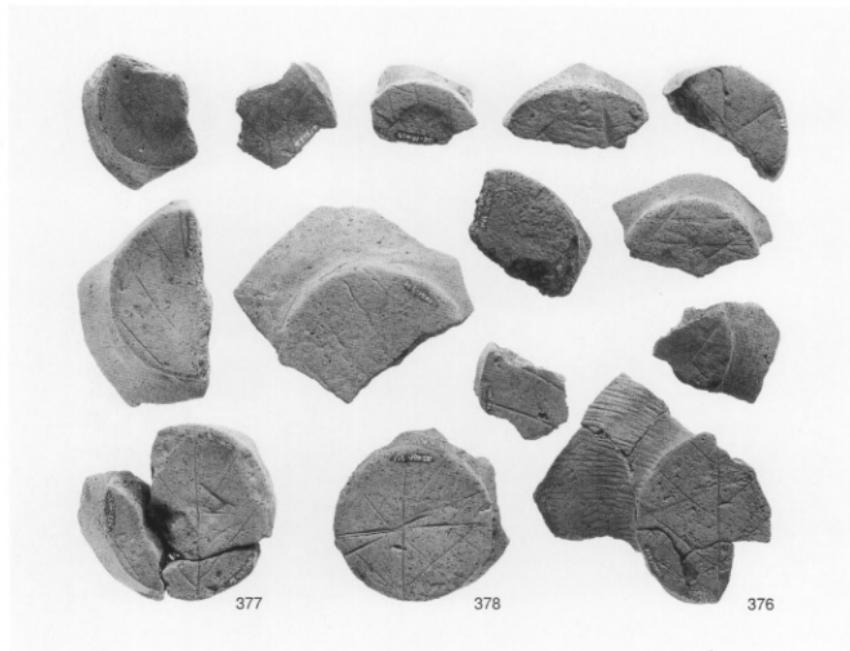
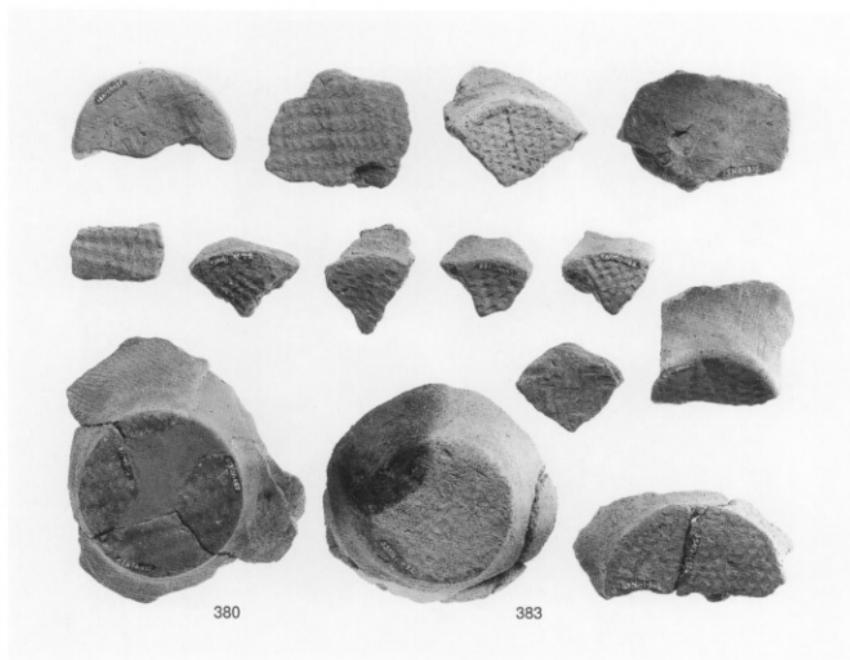


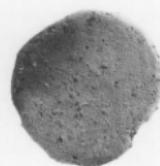
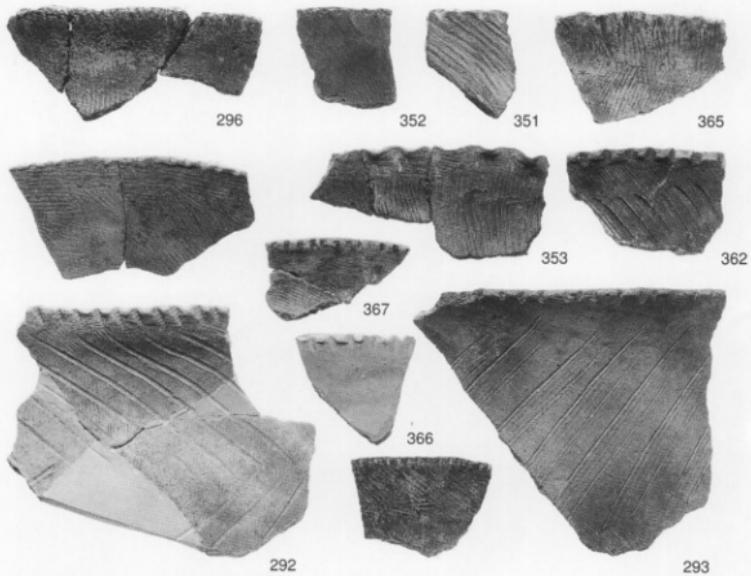
287



291







弥生時代土器4・土製品・金属製品・骨角製品



188



189



190



191

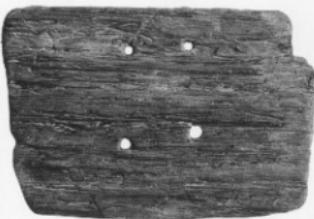


192

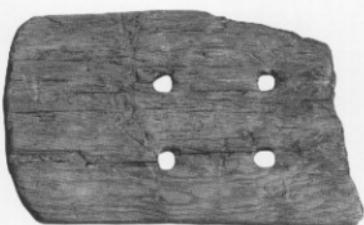
弥生～古墳時代木製品



241-1



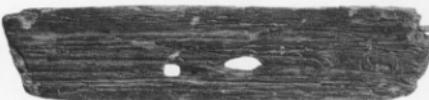
240



193



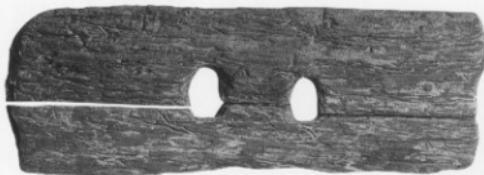
405



239



275



238



276



208



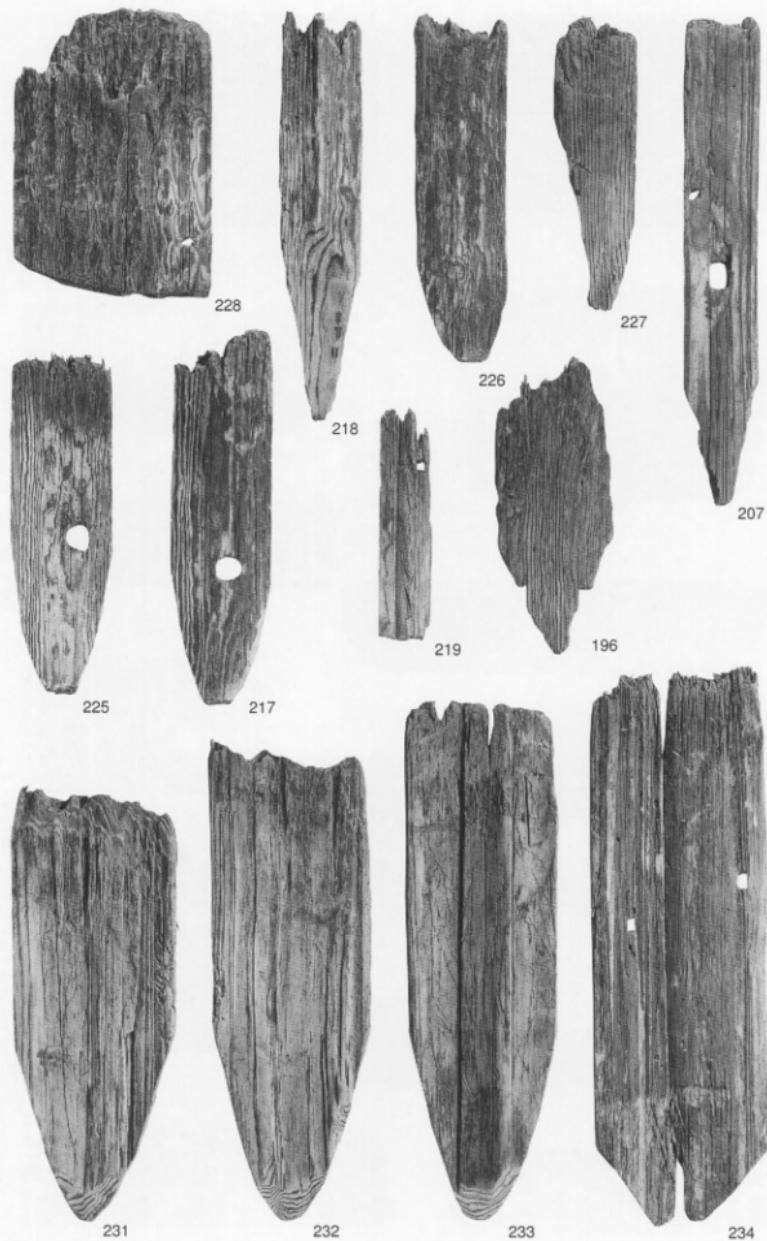
284

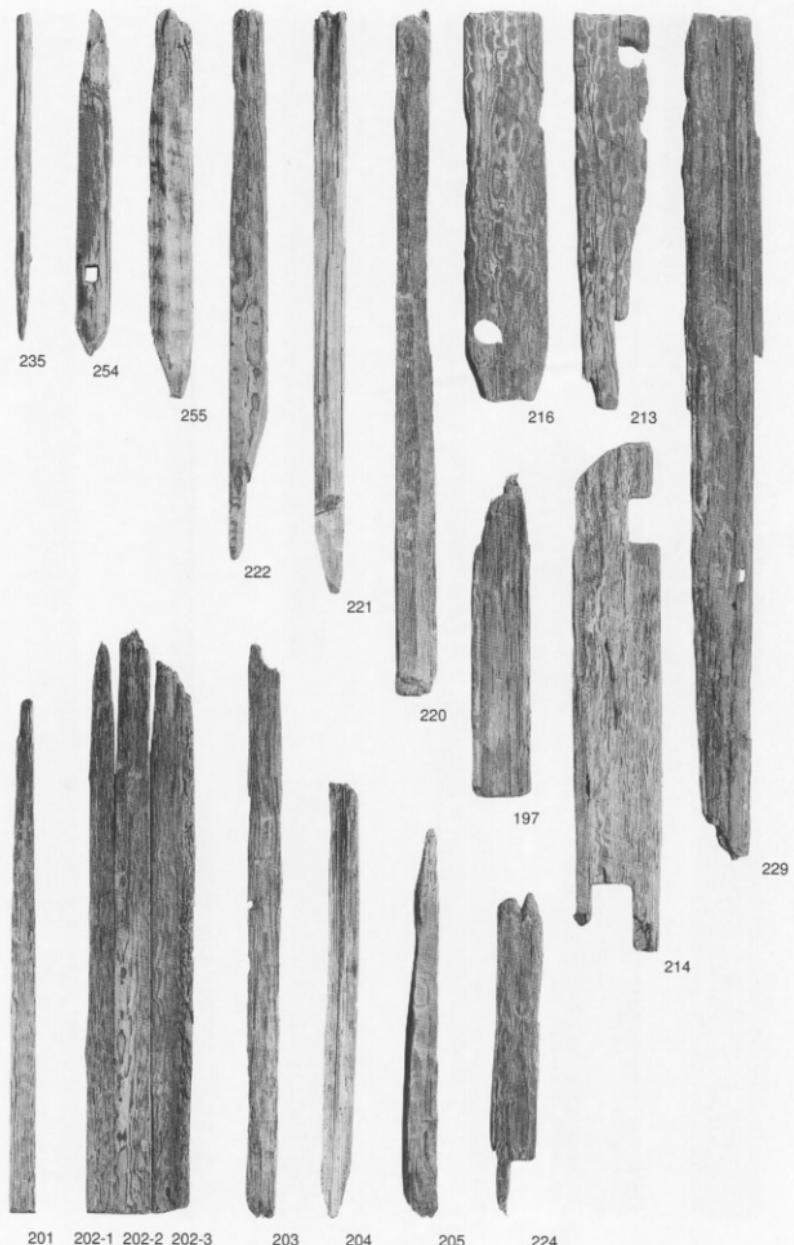


249

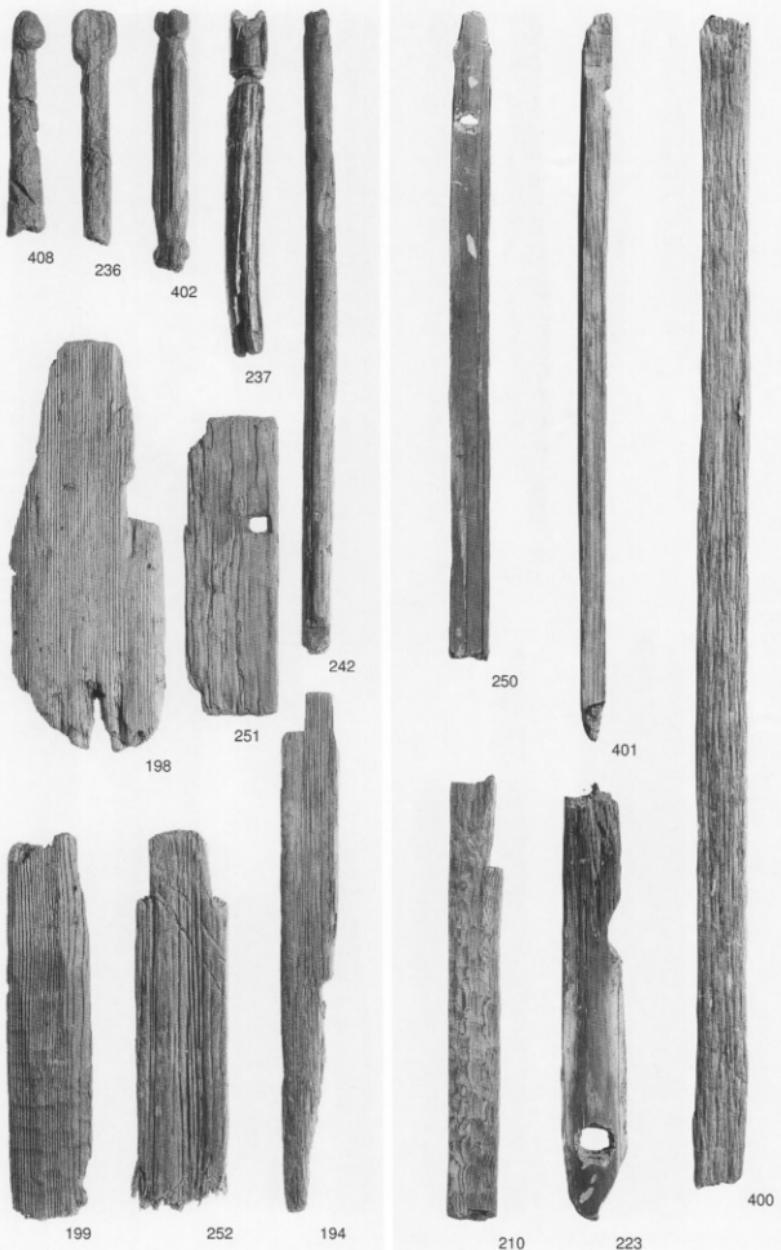


248





弥生時代木製品 3





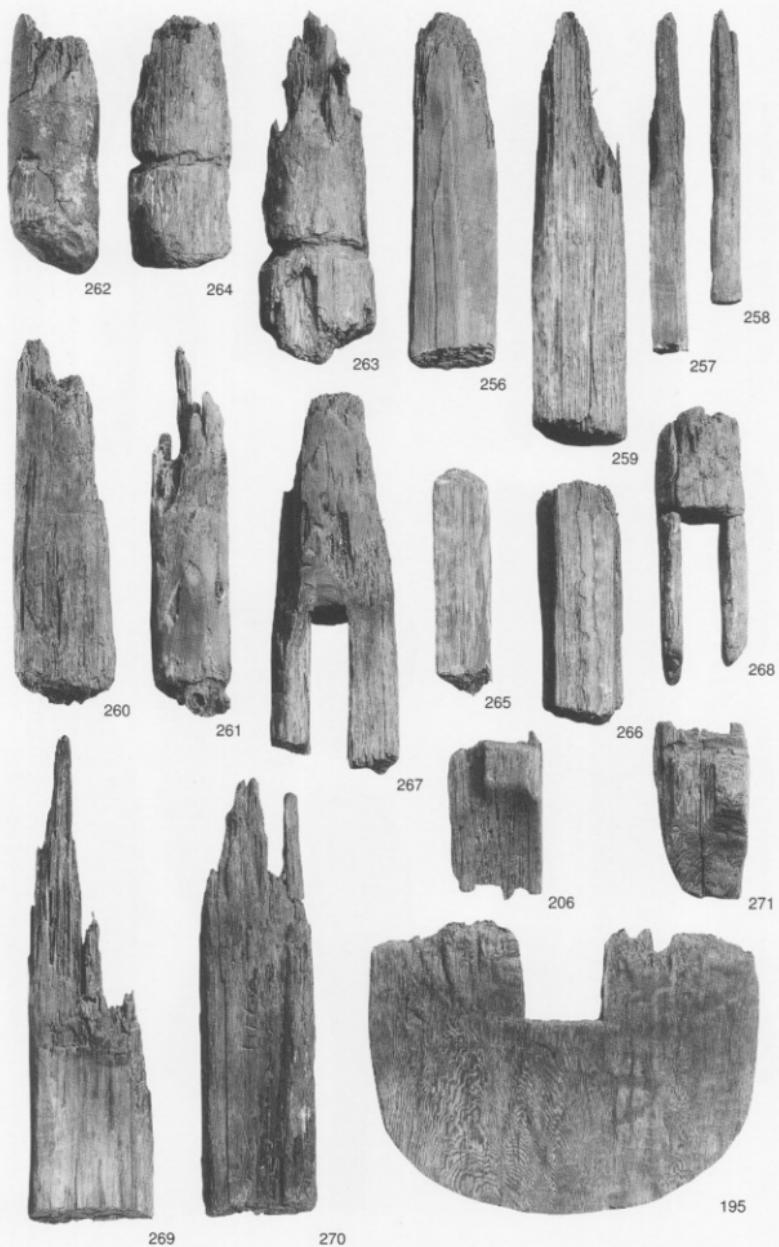
弥生時代木製品 5

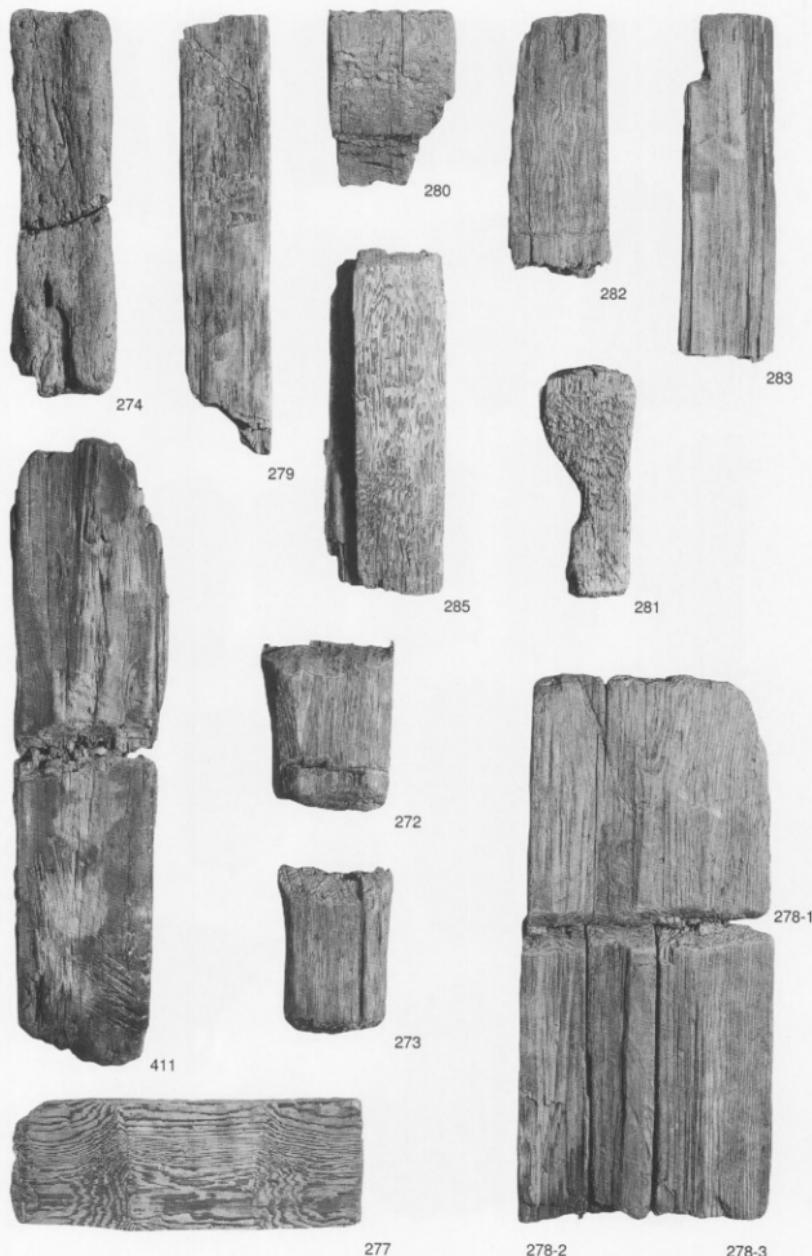


253

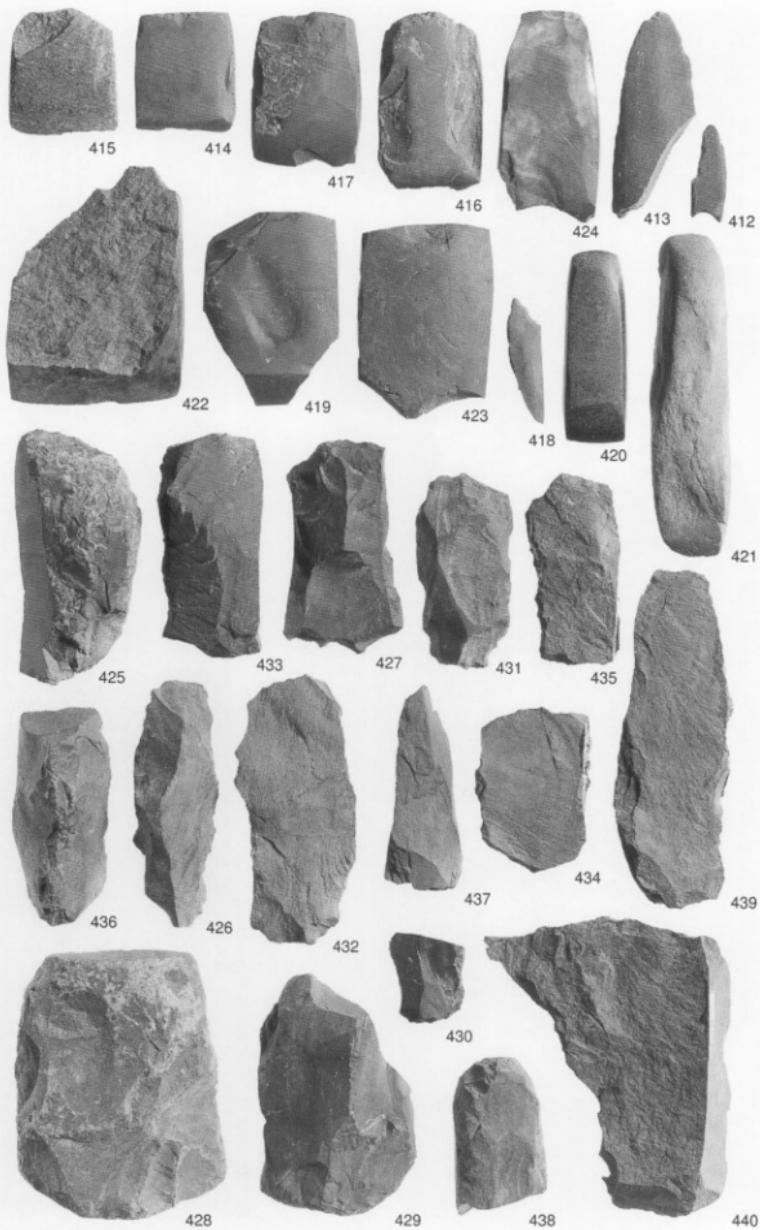


200

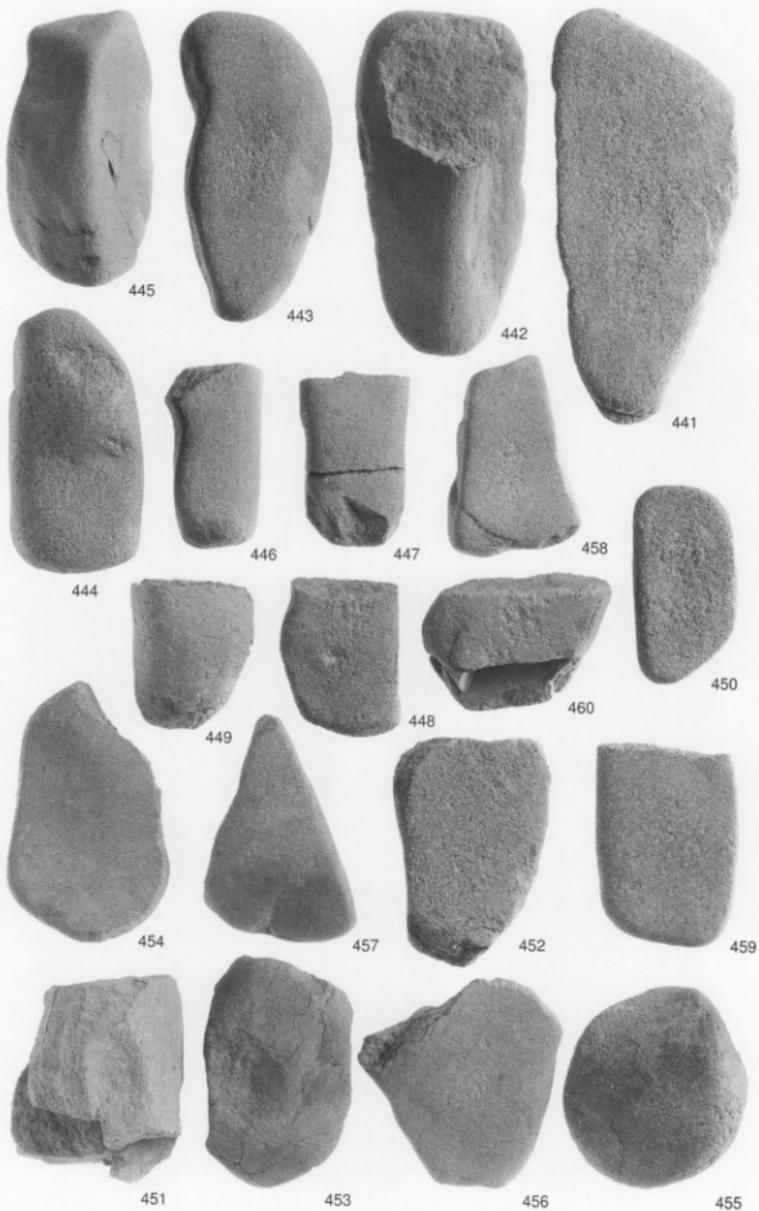


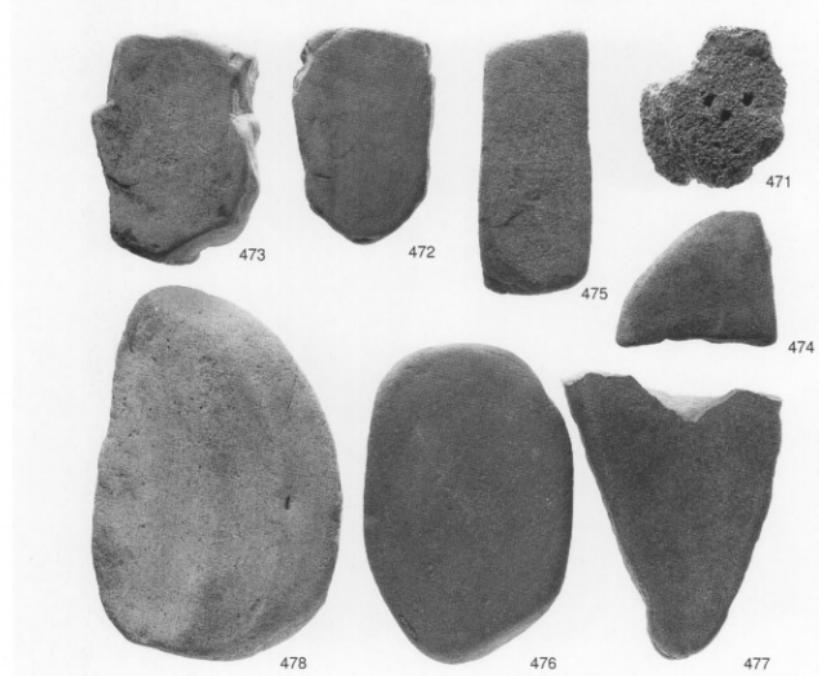
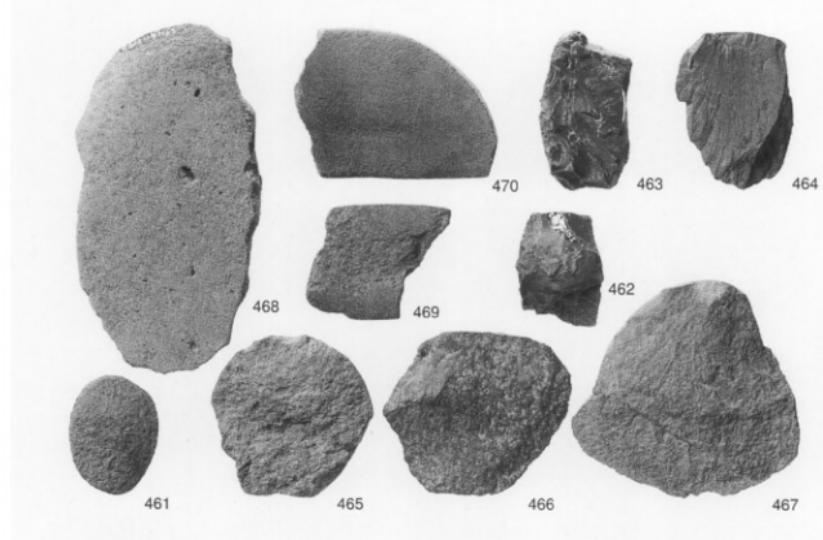


弥生時代木製品 7

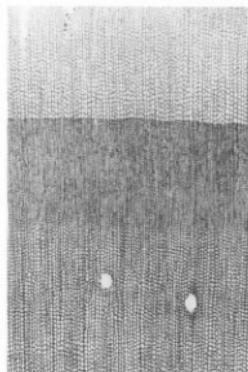


弥生時代石製品 1

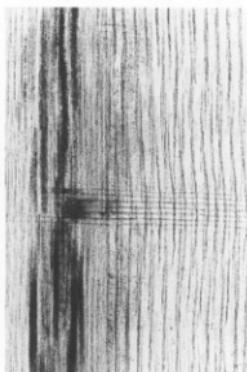




瀬名川遺跡出土木製品顕微鏡写真



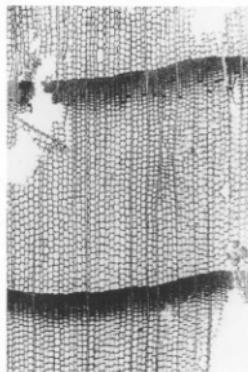
1.アカマツ(No.6337)木口 20×



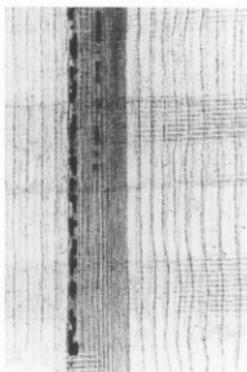
柾目 50×



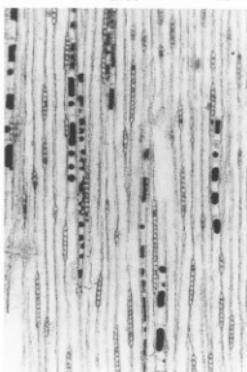
板目 50×



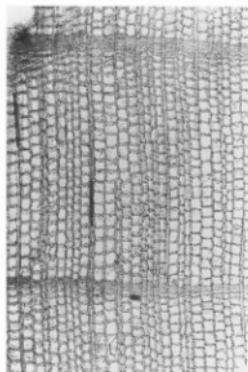
2.スギ(No.6388)木口 20×



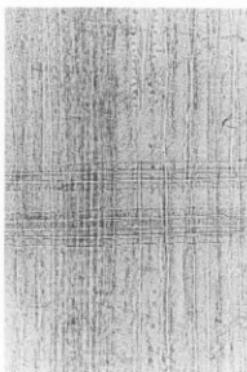
柾目 50×



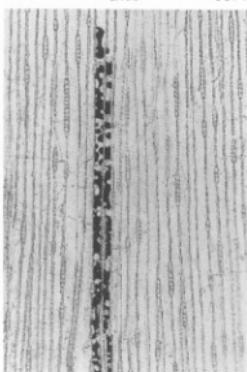
板目 50×



3.ヒノキ(No.6359)木口 50×

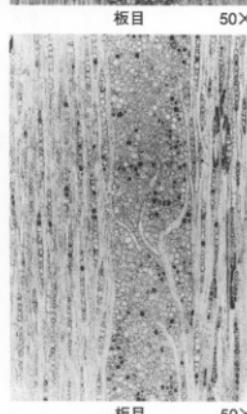
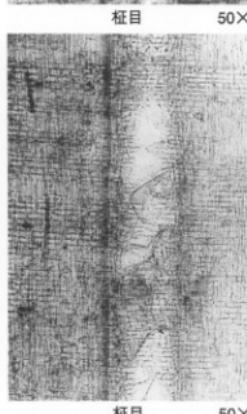
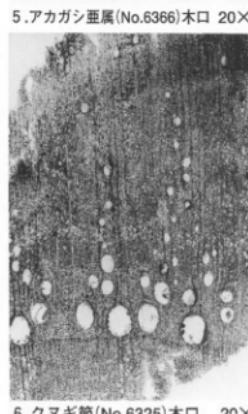
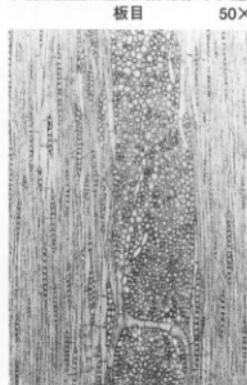
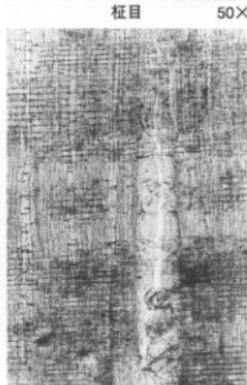
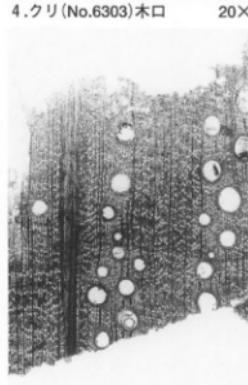
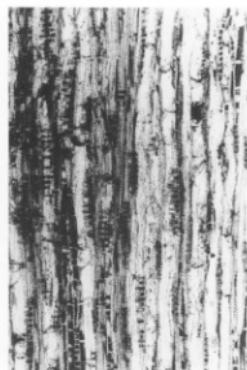
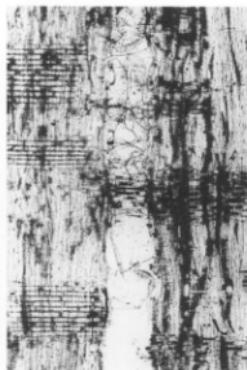
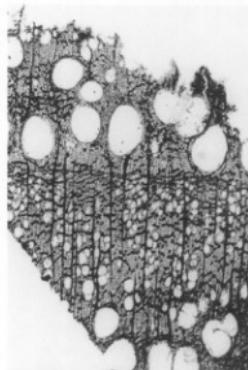


柾目 100×

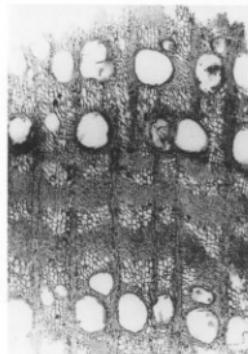


板目 50%

瀬名川遺跡出土木製品顕微鏡写真



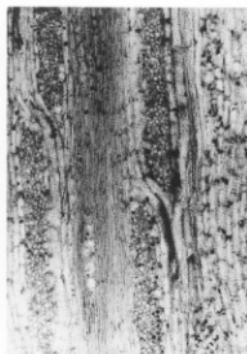
瀬名川遺跡出土木製品顕微鏡写真



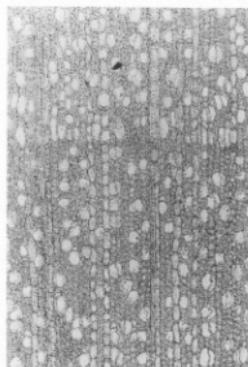
7. ケヤキ (No.6371) 木口 20×



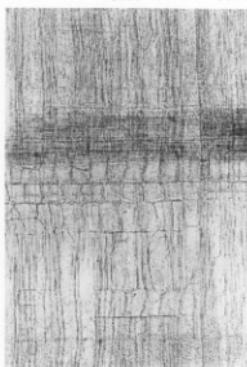
柱目 50×



板目 50×



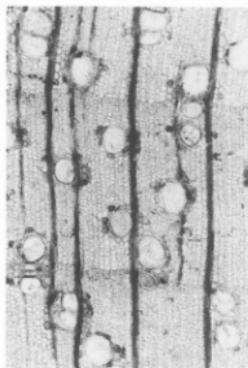
8. カツラ (No.6328) 木口 50×



柱目 50×



板目 50×



9. タブノキ (No.6418) 木口 50×

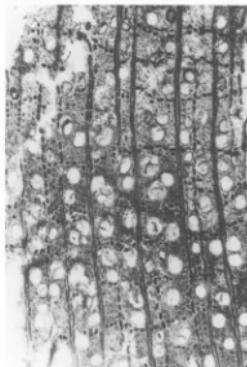


柱目 50×

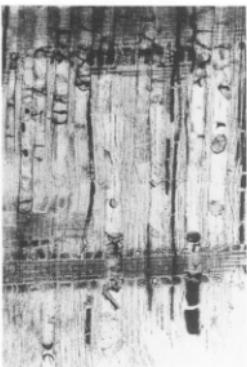


板目 50%

瀬名川遺跡出土木製品顕微鏡写真



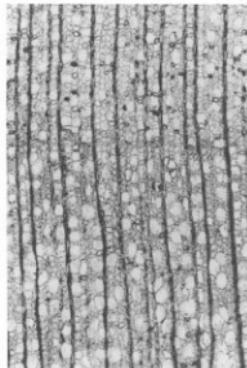
10.イスノキ (No.6313) 木口 50×



柾目 50×



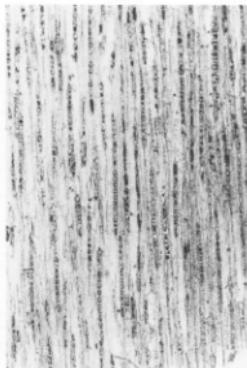
板目 50×



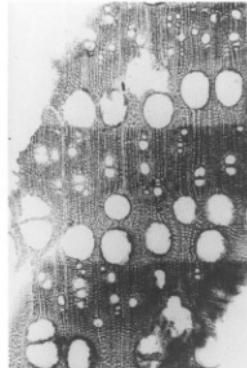
11.サカキ (No.6368) 木口 50×



柾目 50×



板目 50×



12.シオジ (No.6296) 木口 20×



柾目 50×



板目 50×

報告書抄録

ふりがな	せながわいせき						
書名	瀬名川遺跡						
副書名	平成9・10年度中吉田瀬名線重点街路整備事業（地方特定）工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書						
巻次							
シリーズ名	静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告書						
シリーズ番号	第115集						
編著者名	中川律子						
編集機関	静岡県埋蔵文化財調査研究所						
所在地	〒422-8002	静岡県静岡市谷田23-20		TEL 054-262-4261 (代)			
発行年月日	西暦 1999年 3月 15日						
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °' "	東經 °' "	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
せながわいせき 瀬名川遺跡	しづおかん 静岡県 しづおかし 静岡市 せながわ 瀬名川306-4他	22201	35度 0分 12秒	138度 26分 11秒	19970401～ 19980529	2.671.6m ² (1.610.83m ²)	中吉田瀬名線重点 街路整備事業（地 方特定）工事に伴 う埋蔵文化財発掘 調査業務
所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項	
瀬名川遺跡	集落 生産遺跡	弥生時代 中期後半	掘立柱建物・柱穴	弥生土器・磨製石斧・石斧未製品 磨製石剣・磨製石鎌・敲打石・砥石・ 又歛・櫛・刮物（櫛）・柱根・襖板ほか	かんざし	包含層から多量の 土器出土	
		弥生時代 後期	水田 溝	弥生土器・銅鏡片 田下駄・横柾・梯子・駄返し・建築材・杭			
		中世 (鎌倉～ 室町時代)	掘立柱建物・柱穴 井戸状遺構・杭列	陶磁器・青磁器・灰釉陶器・山茶碗・ かわらけ・硯石・玉・銅鏡・鐵釘・鐵滓 瓦符木簡・箸状木製品・漆椀・曲物・柄杓 ・糸巻具・横柾・横柵・栓・礎板・柱根・ 枠型田下駄部材ほか			

静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第115集

瀬名川遺跡

平成9・10年度 中吉田瀬名線重点街路整備事業(地方特定)
工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

平成11年度 3月15日

編集発行 財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所
静岡市谷田23-20
TEL 054-262-4261

印刷所 日本レーベル印刷株式会社
静岡市国吉田三丁目1番1号
TEL 054-262-1111